

家族の為ならどこまでも

実茶

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何となくで毎日を過ごしていたオリ主。

ある日突然事故に遭い、転生！ということ、その人生が大きく変わる

あの自称天使……来世の果てのそのまた先まで呪ってやる覚悟しろ。

波乱万丈な壮絶人生に悶絶しつつも、転生先でできた大切な家族のために日々奮闘しながら一生懸命生きてく少女のお話。

2019／6／2

題名変更しました。

※1. 原作とはほぼ関わらないです。マリンフォードでエースを助けていただけです。アナザーストーリー的な感じですのでご理解をお願いします

※2. 設定は結構雑な部分がありますがご容赦を

※3. かなりご都合主義です。

※4. 話の展開が遅いです。焦れたい！という方はブラウザバックを推奨します。

※5. 残酷な描写とアンチ・ヘイトは保険です

目次

第1話	始めたくなかった第2の人生	1
第2話	はじめまして、さよならしたいです	9
第3話	わたしの名前	17
第4話	身長をください	23
番外編	迷子捜索大作戦	29
第5話	決意	35
第6話	百聞は一見にしかず	42
第7話	人間やればできるものだ	54
第8話	痛いものは痛い	65
第9話	会話する力を身に付けたい	74
第10話	不穏分子	82
第11話	勘違い：だと	90
第12話	はじめての外出	98
第13話	人はそれをストーカーと呼ぶ	106
番外編	敵を知ろう！の会	116
第14話	ちよつとすごい事件	121
番外編	未成年にお酒を飲ませてはいけません	130
第15話	風邪の大流行	137
第16話	開花	145
第17話	本音	156
第18話	拷問？いいえ、尋問です	167
第19話	拒絶の力	177
第20話	大仏さんは苦労人	186
第21話	馬鹿と天才はなんとやら	197

番外編	鬼畜×鬼畜	209
第22話	わたしの武器は銃と剣です	219
第23話	ケガは友達？	229
番外編	海軍にて	241
第24話	夢の中	250
第25話	しつこい人は嫌いです	263
第26話	火拳のエース	275
第27話	あなたも家族ですよ	286
第28話	ちよつとかなり無茶なこと	298
第29話	誘拐	309
第30話	逃走	321
第31話	心の闇	329
第32話	麦わらのルフィ	341
第33話	不穏な火花	351
第34話	サボとの出会い	359
第35話	開戦	370
第36話	再会	382
第37話	正義と悪	392
番外編	七夕	404
第38話	負の感情	412
第39話	壊心	428
第40話	終戦	444
第41話	癒し姫のニア	459
Episode	AEON	480
その後の彼らの日常*	ニア編*	498

第1話 始めたくなかった第2の人生

キキイイイイツツ!!

ある雨の日。

傘をさして学校から帰っている時だった。

目の前の信号が青に変わり歩道を渡っていると信号無視をしたトラックに轢かれ、体が宙に浮いた

全身を駆け巡る激痛とジェットコースターにでも乗ったような浮遊感に吐き気がする。

人の叫び声が聞こえるがやけに遠く、意識が薄れていくのを感じた。

「(あ、これ死んだな。)」

そんな呑気な事をぼんやりと考えてるうちにわたしの意識は途絶えた。

次に意識が覚醒した時、わたしは真っ白な空間に立っていた。

「(どこどこだ…?)」

『ようやく目覚めましたか。おはようございます』

ふと人の声がし、そつちを見ると金髪青眼の可愛い幼女がわたしの方を見てニコニコしていた。

「おはようございます」

挨拶をされたからとりあえず返すと彼女は「あら…」と、何やら目を丸くした

『騒がないんですか?』

「騒ぐ云々の前に現状を理解できずに思考を放棄したところです。」

『何この人!清々しい!!』

現状をまず説明して欲しいのだが。

落ち着いて記憶を振り返ってみよう。

……あれ?ぼんやりとしか思い出せない?

自分の名前すら思い出せない。断片的にしか思い出せず、はっきり分かるのは自分が轢かれたことだけ。

え、なにこれ。どういうこと？

『あ、ごめんなさい！まずここの説明からですね。』

わたしが密かに困惑していると少女が苦笑いでそう言った。

『ここは生と死の狭間の間です。人は死んだら輪廻の輪の中に入り揺蕩う水に流れるように次の生を受け持つんですけど、たまーに貴方のように輪から外れて墜ちてくる魂があるんです。そんな迷子の魂を拾って行き先を与えるのがこの場所です。分かりましたか？』

「つまりわたしは死んだけどその輪廻の輪って言うのから外れてここにきたってこと？」

『そうです！飲み込みが早くて助かります。普通は記憶も全てリセットされて次の生を与えられるんですけどここにきた人は同じ世界に送り出すことはできないんです…。そういう決まりなので』

「同じ世界に送り出せない……ってことは違う世界に行くってこと？」

『そうなります』

「ふーん。」

『興味なさげですね。自分の事なのに』

「あんまりないね。というかこのまま魂を浄化するとかできないの？」

テンプレとかでお馴染みの転生とか言うやつか。

死ぬほど興味が無い。あ、もう死んでるか。

『えーつとおお…、出来なくもないんですけど転生しませんか？』

「なんで？」

『わたくしが転生させたいからです！』

『どう言う理由だ、それ…』

親指を立てドヤ顔で言う少女に若干引いた。

『だってだって、人が1日に死ぬ人数は何十万人といるんですよ??そんなにたくさんの方が死んでるんですから輪廻の輪から溢れる人だって沢山います。そんな中、貴方は選ばれてここに来たんですよ?』

「選ばれて……?というか、聞き捨てならないことを聞いたんだけど。」

輪廻の輪がそんなに魂こぼしていいの?」

『いやー、もう何億年と毎日動いてるからだいぶガタが来てますね。溢れる人増えてるんですよ。そろそろ新しくしないと』

「おいおいおいおい…。毎日動いてるからガタが来てるって何!? 輪廻の輪って機械なの?! 神秘的なイメージぶっ壊れたんだけど!!?」

しかも選ばれてって何!?

人選されてるの!?

『うーんと、細かい説明はめんどくさいので端折ります!』

「いやそれ、結構大事な部分。まあいいや、わたしも説明聞くのめんどくさいし。」

『えええええつ!! 聞いてくださいよ、そこは!』

「かまちよか! もういいからさっさと話進めて!」

夢かこれ。

そうできつと夢だ。

思わず現実逃避に入ってしまったが、わたしは悪くないと思う

『じゃあ、ちよつと空いてる世界確認してきますね』

わたしはもうなにも突っ込まない。

”空いてる世界” ってなんだ。

会社の人員配置みたいなやり方で次の人生が決まるとかあの世もこの世とそう変わらないな

『ここは……千年前に入れたな。…ここは、5千年前か。えつとじゃあここは……あ、5百年前に送ったばかりですね。』

単位おかしくない!?

500年前が「ばかり」って何!?

その世界の平均寿命がすごい気になる!!

『あーありました!! ここなら貴方の前に転生した人が10万3千年前なので大丈夫です! ここにしましょう!』

「ここにしましょうって何!? 突っ込むものかって思ってたけど無理だ!! 単位がおかしくない!」

『おかしくないですよ! 転生者同士のいざこざが起こらないように前回送った転生者が確実に居なくなってから次の転生者を送るのが決

「まりなんです!」

「だからって万単位もあける!」

『最低でも7万年は開けるようにしてますね。万が一を考えて』

「万が一も億が一もある!?!平均寿命何年だよ!!」

思わず彼女の説明に食い下がると彼女は堪えきれないというように笑った。

『ふふふっ!は、ははは!!億が一ってなんですか!面白いですがあなた。やっぱりあなた選んで正解です!』

「どういう理由!?!」

面白さで選んでるの!?!この人!いや、人なのか!?

『あ、そう言えば自己紹介がまだでしたね。わたくしは人々が”天使”と呼ぶ存在です。よろしくお願ひしますね』

「何をよろしくするの?!」

『んー?自己紹介とよろしくお願ひしますってセットじゃないんですか?』

「なんで天使が人の型に嵌ったような挨拶してんの!?!」

『まあまあ、細かいことは気にしない!それでっただけ異能をつけようと思うんですがどんな力がいいですか?』

「異能:~?」

『はい。転生者には特典としてっただけ特別な力をつけるんです。どんな世界に行ってもすぐに死なないように』

「ああ、なるほど。……急にそんなこと言われてもなあ」

『まあそうなりますよね。ちよつと貴方の頭を覗かせてもらいますね』

「え?」

天使さんがわたしに近づくと掌をわたしに向け、目を瞑り何やら唱える

彼女の手から淡い光が放たれ、それがわたしを包む

しばらくすると光は収まり彼女は目をあけた

『…友達少な!あと結構壮絶な人生送りすぎでしょ、あなた!!前世のこと覚えてないでしょうけど!』

「覚えてないね。なんかモヤがかかっているような…」

『死んだ瞬間にその魂の全てがリセットされるけどここに来た人は中途半端にリセットされるので曖昧に残っているんですよね。ぼんやりと分かるんだけど思い出せない… みたいな』

「そうそう。そんな感じ」

『簡単に言うと、あなたが生まれる前に父親は他界。母親は厳しくて勉強でも運動でも求められてたのは1番のみ。テストで認められているのは100点のみ。……よく自殺しなかったですね』

天使に同情されるってどんな人生送ってたんだわたし

まあいいや。もう死んでるし

『ううっ。可哀想。』

「なんであなたが泣くの!?!」

ふざけてるの!?!真面目なの!?!どっち?!!

『次の世界ではとことん自分を出してくださいね!さて、話は戻って異能についてです。貴方の希望通りの力をあげます!なんでも言うてください。言うのはタダですよ!』

と、言われましても。

パツと思いつかないし……

「というか、転生以外の道はないの?」

『残念ながら無いんですよ。ここに来た魂は【転生】か【浄化】以外にできないんです。あと、わたくしがどうしても転生させてあげたいんです!だからおねがいます!ね?ねっ!』

彼女がわたしの両手を握り懇願してくる

天使さん本当に天使なの?

自称じゃないの?わたし騙されてない?大丈夫かな…

「うーん、じゃあ一つ聞いてもいい?」

『はい!なんなりと!』

いや、威厳もクソもないな。この自称天使

「わたしを選んだっていったよね?なんで?何十万人と輪廻の輪とか言うのから溢れてる魂があるなら他の人でも良かったんじゃない?」

『…………それは。』

「それは？」

『面白そうだったからです!!』

キラキラとした目でわたしを見つめて勢いよく言う彼女に多少の殺意を覚えたわたしは悪くない。

なんか誤魔化された感が否めないけど話してくれなさそうだな。

まあいいか。知ったところで死んでることには変わらないし

「はあ。異能はそっちで適当につけていってもらっていいよ」

『ええっ!? な、なんでもいいんですよ!?! 神スペック(劣化版)とか、チート能力とか!!』

「別にいいかな。人を傷つける力なんて要らないし。」

『そういえばあなた、自分はどれだけ怪我しても平気な顔してますけど人が怪我をすると凄く焦りますよね。自分に関心なさすぎませんか?』

「と、言われても覚えてないからなんとも言えない」

『なにその「覚えてないからどうでもいい」みたいな…。うーん、なら…回復とかそっち系がいいですかね。』

「つける前提なの?」

『当然です!』

…なんかもうめんどくさくなってきた。

全部適当に決めてもらおうかな。どうせわたしやりたいこともなにもないし

「とくにやりたいことも使いたい力とかないから適当に決めちゃってください、自称天使さん」

『自称!?! わたくし本物ですよ!!?! ほら翼あるよ!!?! 天使の翼!!』

そう言っただけで彼女は純白の翼を背に広げた。

……コスプレかな?

『コスプレ!?! 急に現実逃避しないでください!!』

「おっと。心の声が漏れてしまったか。」

転生という道以外選べないのならいかに目立たずにひっそりと生き延びるか。

「この世もあの世も地獄だな。うん

『よし！わかりました!!なら貴方には「万物を拒絶する」力を与えましょう!』

「なにそれ」

『全ての物事を“否定”して“拒絶”する力です！全部説明してしまつては面白くないので自分で頑張つて力を見出しちゃってください。一つヒントを与えるなら貴方の“否定”したことは全てなかったことになります!』

「それだいぶやばくない?」

『今のでわかつたんですか!?あなた頭良すぎでしょ!!』

「いや、わかるくない?まあいいや。考えるの面倒だから向こう行つてからゆつくり考えるわ」

『そうしてください。そして!今なら出血大サービス!!特別にもう一つおまけで異能を差し上げます!』

「いらない」

『あつはい。ごめんなさい』

真顔で少し声を低くして言う。と華麗に土下座を決め込んだ

……本当に天使なの?」

『さっきの話ですけど貴方の性格を考えて力を調整したので自分に対する拒絶はあんまりできないから気をつけてくださいね!』

「…ちよつと待て。そこは詳しく説明して」

『えつと。自分以外の人に起こつたことは“全否定”できるんですけど、自分に起こつた事は“全否定”できないんです。どうしても、バランスを考えると…』

「つまり、自分以外の人に起こつた出来事は全てなかったことにできるけどその代償として自分に起こつた出来事は全てをなかったことにできないって事?」

『はい。自身に対する否定はせいぜい感覚に携わる機能くらいです』

感覚に携わる機能って……どういう……

『あ!もうこんな時間だ!そろそろお時間が来ましたので転生の儀に入ります!』

「え？急すぎない!？」

『はいーごめんなさい!では、2度目の人生に幸あらんことを』
半ば強引に話を切り上げられるとわたしの真下に穴が開く。

『ではお元気で!』

ばいばーい!という軽快な声を最後にわたしは闇の中へと落ちていった。

「おぎやー!」

赤ん坊の泣き声で目が覚める。そこは病院だった。

…えっ!!病院?!なんで!?

「あうー!。うう?!」

声を上げようとすると喃語しか出ない

「……何、この子……」

綺麗な女の人が憎々しげにわたしを見る。

えっ…。もしかしてわたし赤子になってる!?!じゃあこの人はお

母さん?!

めちやくちや怖いんですけど!なんでそんなに睨むの?!

母親と思われる人物は病院にいる間わたしを1度も見なかった。

退院するとその人はわたしを箱に入れ森の奥に連れて行き、そこに置いてどこかにいつてしまった。

…:えっ!?!わたしもしかして捨てられた?!

始まったばかりなのに終わった気がする。

波乱万丈の幕開けですか。

早速すぎるだろ!!!あのくそ天使!ふざけんなっ!

第2話 はじめまして、さよならしたいです

『富・名声・力、この世のすべてを手に入れた男、海賊王・ゴールドロジャール。彼の死に際に放った一言は人々を海に駆り立てた。

「俺の財宝か？ 欲しけりやくれてやる。探せ！ この世の全てをそこに置いてきた！」

男達はグランドラインを目指し夢を追いつづける。世はまさに大海賊時代！』

ー？：サイドー

「…よし。しばらく自由時間だよ。集合時間までには戻ってこい、遅れたら罰則な。」

「了解！！」

俺たちは縄張りの中の一角で休憩に入る。

物資や燃料の補充。食料の確保。船のメンテナンス。

やることは沢山あるけど、人が多いから暇な人も沢山出る。

俺もその1人だ

「サッチー、暇だったら一緒に散歩しない？」

「ん？おお、いいぜ。マルコ！俺たちちよつくら森の方に行ってくるな！」

「わかったよ。時間までには戻ってこいよ」

サッチーとともに森の方へと散策に出かける。なにか見つかるかなー？と、いつてもここいらはナワバリの範囲だし何か変化があったらすぐ気付くか…

気づかないうちに荒らされてるってことがあっても嫌だな。

散歩っていうより見回りかな？

オヤジのためなら頑張るけどね！

けど、なんか物足りない。なんだろうな

知らず知らずのうちにため息がでる

「ふーっ」

「おいおい。なんだ？そんな盛大なため息ついて」

「あれ？声に出た？うーん、なんて言ったらいいのかなあ…。何か物足りないんだよ。なんか面白いことないかなーって」

いや、航海は楽しいんだけどね?!

「はははっ！まだまだ子どもだな、ハルター！」

「うるさい！」

カラカラと笑うサッチを置いてスタスタと1人で先に行く

「おいおい。そんな怒るなって！茶化したただけだろ？」

「怒ってない」

「怒ってるだろ」

なんかお見通しでムカつく。

まあ、それも楽しいんだけど

「…ん？」

ふとサッチが足を止め、何かに気づいたかのように声をあげた

「どうしたの？」

「なあハルタ。もし捨て子を見つけたらお前は どうする？」

「捨て子？うーん、そうだなあ。拾ってあげたいけど…俺たち海賊だし、どこか送るにしても独断じゃうごけないから…って、いきなり何？」

「いや…あれ。」

サッチが指をさした先を見るとダンボール箱が置かれていてその中から子どもの泣き声がしていた。

—サイドエンド—

あの自称天使、本当に覚えてろよ

転生はいいけどなんで赤子からだよ！というか、生まれた瞬間に捨てられるって何!?何にもできないじゃん!!これ完全に孤児状態でしょ!箱に入れられて放置とか悲しすぎかよ!!育児放棄状態か!これこのまま餓死して死ぬんじゃないの?!

なにがしたかったんだよ、あの自称天使野郎!殴る!絶対ぶん殴る!!

「ふえええん!!」

色々文句をぶつけてみるが泣き声しか出ない
まあ当たり前か…これで喋れてもアウトだな

詰んだよ。詰みだよ、詰み

苦しいのは嫌だなあ…。死ぬなら安楽死がいい

「うーん。どうしよう、サッチ」

「どうしような。」

ほんと、どうしようだよ！

どうもできないけど…って、えっ!?

今、人の声した?!

「うっ?」

声の主を確かめるために一旦落ち着くと目の前に絵本の中の王子様の様な格好の華やかなお兄さんとリーゼントヘアーが特徴的なお兄さんが腰をかがめてわたしを覗き込んでいた。

「あっ、泣き止んだね。…って、わぁ…」

「これは…」

2人はわたしと目が合うと顔を歪める。

人の顔見てあからさまに顔歪めるの酷くない?!そんなブサイクだった!?!ごめんね!?!泣くよ!?!泣くことしかできないこの体で盛大に泣くよ!!?

「完全に捨て子だな。可哀想に」

「すっごい…綺麗」

違った。ブサイクだから顔歪めた訳じゃなかった。

捨て子を見つけて憐れみと同情から顔を歪めたみたいだ。

こんな状態じゃわたしなにもできないなあ。

この人たちどうにかしてくれるかな?

「…見つけちゃったもんはしようがねえよなあ…。放っておくのもバツが悪いし、連れて帰るか」

「そうだね。俺たち海賊だから乗せることはできないだろうけど」

か、か、か、海賊う?!?!

海賊に見つかっちゃった!?!わたし!!

どどどどうしよう!!

売り飛ばされる?!それとも殺される!!?

痛いのは嫌なので殺すなら一思いにお願いします!!

「あうー!」

「ん?どうした?よしよし」

リーゼントヘアーのお兄さんが微笑んで優しく撫でてくる。

何この人、見かけによらずイケメン。って、じゃなくて!!

「よいしょっと。あ、軽い。」

王子様のな格好をしたお兄さんがわたしを持ち上げて呟く

赤ん坊の状態から重くてたまるか

って、まってえええ!!連れてかないでえええ!!

「うえええー!」

わたしを抱いたまま歩き出す彼らに思わず叫ぶと「よしよし」とあやす様に軽く揺らす。

「大丈夫、怖くないよ!」

ニコツと笑いかける王子服

海賊と聞いて怖くないわけないでしょう!?!?

必死の抵抗も虚しく海賊船へと連行されました

―サツチサイド―

ハルタと森へ散歩に行くとき森の奥で子どもを見つけた。

子どもってより赤子だな。生まれてどのくらいだろう?1年は

経ってなさそうだが……なんせ子育てしたことなんてないから正直

わからん

箱を覗き込むと、俺たちに気づき赤子は泣き止んだ。

…まさか人が認識できるのか?こんな小さな子が…

目が合うと俺は驚きを隠せなかった。

「完全に捨て子だな…」

俺は無意識にそう呟いていた

溶かした氷をそのまま映したかのような透き通る白銀の髪に、右が月のように輝く黄金、左が青空のような鮮やかな水色の目をしてい

なんとも珍しいオッドアイか…。

その綺麗な瞳でこちらをじーっと見つめてきた

「すっごくいい…綺麗」

ハルタがつぶやく。うん、その意見には同意見だ

このままここに放置しといても野垂れ死ぬか、猛獣に襲われるかな。それもそれで可哀想だ。

見つけといて放置しておくのもバツが悪い

……………連れてくか。

マルコあたりにどやされそうだなあ…

—サイドエンド—

どうしようどうしようどうしようどうしよう

海賊に拾われるとかいろいろ危険すぎてこわい

さらばわたしの短かい第2の人生…。3度目は無いことを大いに期待します。

「ううー…」

何を伝えようにも呻き声にしかならない

くそう…意思疎通がしたい

「どうしたの？お腹すいた？もうすぐ船に着くから待っててね」

優しく声をかけてくる王子服

その優しさはありがたいけどそうじゃない

「マルコーー！」

リーゼントヘアがそう言つて手を振る

その先にはバナナアップル…もとい、南国果実みたいな頭をした男の人がいた

「サッチ、ハルタ。どうしたんだよいい？まだ時間は……………なんだよいい、そのガキ」

わたしを見るなり顔を顰めるパイナップルさん。

ごもつともな反応ありがとうございます…この人が船長さんかな?! そうだといいな!

「拾った！」

ちよっ!!合ってるけど!拾われましたけど!!簡潔すぎない?!
もう少し説明してあげよ?!

そしてパイナツプルさん、眉間のシワ消してください!こわいです!

「拾っただア??ガキの面倒見てる暇なんてねえだろい。置いてこい」
放置プレイですかさうですか。

まあ、またあそこに置いてかれたら今度こそ野垂れ死ぬだろうね
あんな森の奥に人が来るなんて奇跡そう起きないでしょ

「えっ?!酷くない?!こんなに小さい子ども森に放置しろっつて?!」

「わー、マルコ、鬼だ!鬼の所業だ!!」

リーゼントへアーさん、あなたこの状況楽しんでませんか?

「うるせえよい!じゃあ何か?!このガキの面倒見ながら航海しろっつてか?!」

ビクツ!!

いきなりの大声に体が反応する

精神は体に引きずられるっつていいますもんね!

泣いてやろうかな!

「う……ふえ……」

泣き出しそうになるとわたしを抱っこしている王子服の人があや
しだした

「あ、よしよし。泣かないでー。この人こう見えていい人なんだよ!

マルコ、こんな小さな子泣かせちゃダメでしょ」

「俺のせいかよい?!」

「やーい。マルコが子ども泣かせたー!」

挑発好きか、この人!

仲間じゃないの?!ふざけてるの?!

「サツチ!!殺す!」

南国果実頭の人が拳を握りしめるとリーゼントへアーさんに殴り
かかる

それをリーゼントへアーさんは後ろに軽く飛んで躲す。

「よけんなよい!」

「避けなかつたら痛いだろ!!」

「当たり前だよ!」

「理不尽!」

早い!!この人たち動きが早いし言ってる事が滅茶苦茶すぎる!!

「船に乗せるなんて言ってるねえだろ!?!どつかの孤児院にでも預けようかなと思ってる連れてきたんだよ!森に放置じゃ可哀想だろ!」

「俺たちはボランティアじゃねえんだ!んな悠長なことやってる暇ないよ!」

「森の奥で箱の中に入れて捨てられてたんだぞ!?!それを見つけていて放置しとけて?!悪魔か、お前は!」

「それは可哀想だと思うがどうしろってんだよ!大体、どこかに預けるにせよ、その間は俺らが世話しなきゃいけねえだろ?!赤ん坊の面倒の見方とかしらねえよ!」

だんだんとヒートアップしていく2人の喧嘩

何これこわいよ

こんなところに少しでも世話になるの?恐怖で死ぬる自信がある

がアン!

「!?!」

じゅ、銃声?!

喧嘩してる2人の背後から和服の似合う男の人が歩いてきた

さっきの銃声はこの人が撃つたらしい。

上空に向けて1発撃ち未だ煙の出ている銃を体の前に構え、こっちに歩いてくる。

「お前ら……何喧嘩してんだ?うるさいぞ」

「イゾウ!!」

「聞いてくれよ、イゾウ!南国^{マル}果実^コがさ、捨て子を森に放置しとけて鬼みたいなこというんだ!」

「誰が南国^{サツ}果実^チだ、フランスパン!!その間の世話はどうすんだよ!誰もガキの面倒なんて見れねえっていつてんだ!つか、イゾウもどさくさに紛れて一発撃ってんじやねえよ!」

「捨て子?ガキ?」

パイナツプルさんの後半の言葉を華麗にスルーして話を促す。

この人凄い

「この子！可愛いでしょ？森の奥でサッチが見つけたんだ。森の中にこんな小さな子が1人って危ないでしょ？だから放っておけなくさ…」

王子服がそんな風にわたしを紹介する

すっつごいいい人！えっ?!海賊だよね？海賊って言っていましたよね!!?

和服の人がわたしを見ると目を見開いた後、興味深そうに細めた。

「ほお…こりゃあ、珍しい容姿をしてるな。オッドアイなんて初めてみたぜ。それにこの状況下で、泣きもしないか…。肝の座った奴だな」

「な？な？…こんな子ども放置ってひでえよな!?!」

いや、あなた挑発の方が酷いです。

パイナツプルさんの苦労がわかる気がする。わかりたくないけど

「とりあえずオヤジに相談くらいしたらどうだ？どこかに送るにしろ一言言っておくべきだろう。それで無理だと言われたら別の方法を考えればいい。いつまでもここで喧嘩しても何も変わらないぞ?」

「……………それもそうかよい」

オヤジって…船長さんは別にいましたかそうですか

すごくいい人そうなんだけど、めっちゃくちゃ怖い!!

みんな個性が強すぎるんだけど!!海賊だから!?

果実へアーにリーゼントへアーって何！髪型にこだわり持ちすぎでしょ!?

怖すぎる！なんとかして逃げださなければ……………!

第3話 わたしの名前

そうこうして「オヤジ」と呼ばれる人のところへ行く事になった。さつきまで壮絶な喧嘩をしたのにいつのまにか仲直りしてる。この人たちにとってあれは喧嘩じゃないのかな？

そもそも仲悪そうには見えないからきつとみんな仲良しなんだろうけど…

喧嘩辞めさせるために1発威嚇射撃ってどうなの…

物理主義か、さすが海賊

「オヤジ〜！」

と、どうやら着いたみたいだな

わたしはどうせ何もできないので黙ってるより他ないけど！

「グラララー！どうしたア？マルコ、ハルタ、サッチ、イゾウ！揃いも揃って…：…なんかあったのか？」

この方がオヤジさんか。でかいなあ…

何メートルあるんだろ？

そして隣にいるハットかぶったダンディなおひとはどちら様？

「あったといえばあったな。ハルタとサッチが用なんだってよ。とりあえず話だけでも聞いてやってくれないか？」

和服の人がそう言うと、リーゼントヘアーが喋り出した

「えつとよ、森の奥で赤子を拾ったんだ。見つけちゃった以上放置できなくて連れてきたんだが、こいつをどつか安全な場所に連れてこうと思うんだ。だからしばらく船を開けてもいいか？」

この船の船員さんでしょ!?

子ども1人送り届けるために船を空けるの!!?

いい人すぎかよ！実は海賊じゃないでしょ!!

「ガキを拾っただア？グラララー!!ハルタの持つてるちんまいのか！見せてみなア！」

…：…いや、あなたから見たら誰だってちんまいよ？

象VS蟻だよ？

一瞬で勝負つくよ？

わたしなんてプチって潰されて終わりだよ？

「この子！可愛いでしょ？森に置いておくのは可哀相かと思つて連れてきたんだ」

なぜあなたはわたしを紹介するたびに可愛いというんだ…。

ほらほら、オヤジさんも微妙な顔してるじゃん。

どーセブサイクですよーだっ！

自分がどんな容姿してるか知らないけど!!

ごめんね?!ほんと!!

ていうか、そんな珍獣見るかのような目で見ないで！怖いから!!

と、とりあえず笑えばいいか！笑顔は大事！よね？

—白ひげサイド—

「オヤジ〜」

休憩中にビスタと話していると他の息子達がおれを呼びに来た。

ハルタにサツチにイゾウにマルコだ。そいつらはおれの船の大勢いる息子たちを纏める隊長をやっている。

その隊長が四人も揃つておれの所に来るとは何かあったのか？

そう心配したがどうやら違う意味で何かあったらしい

なんでも森の奥で赤子を拾つて安全な所に送りたいから船を開け

てもいいか？ということ。

グラララ：おれの息子達は真面目だなあ

赤子つてーのはあのハルタが持つてるちっこいのか。

見せてみると言うとハルタがガキの両脇を持ちおれに見えるように前に突き出す。

そのガキと目が合うとおれは言葉を失った。

銀色の髪に黄金と空色のオツドアイ、真雪のように白い肌…。

…こんなのも引き受けてくれないだろ。

むしろこれを引き受けてくれる奴を探す方が大変つてもんじやねえか!?

———にぱっ！———

「っ!!」

じーっとおれを見ていたガキは笑った。

これはこのガキなりの挨拶か？

グラララ！グラララララ！人懐っこいじゃねえか!!可愛いな！

こりやあ：金になるって考える海賊や、攫い屋に狙われるような容姿してやがるし：クソみてえな世界貴族にも目えつけられるだろうな、完璧に。

「ガキが1匹か2匹増えたところでかわらねえよなあ

おれの船で面倒見るか。

細かい世話はナースにでもさせておけばなんとかなるだろ!!

グララララ!

—サイドエンド—

つつつつ!!オヤジさんこえええ!!

威厳が半端ない!どうしよう!

笑って見たはいいけどもつと怪訝な顔された!?

酷い!そんなお気に召さなかった?!誰だ、笑顔は最大の化粧とか

言ったやつ!!ちつとも効果ないじゃないか!!

「グラララララ!安全な所に送るのはいい案だと思うが……そのガキに安全なところが存在すると思うか?」

「…思わないな。」

どう言うこと!?

わたしに安全地帯が存在しないと?!

「そもそも、そのガキを引き受けてくれる所を探す方が大変ろうなあ」

「た、確かにそうだろうけど……海賊船は危険だし」

えっ?!えっ!!?

わたしを引き受けてくれる所を探す方が大変ってなんで!?

孤児院とか託児所とかなら引き受けてくれるでしょ!!?

「そんな歩く宝石、どこで見つけてきやがったんだ……。まあ、いいぜエ?この船で面倒見なア!」

「オヤジ!!」

「オヤジ?!」

「細かい世話はナースにでも任せりやなんとかなるだろ！何事も経験だ！グラララー！」

ちよつと待てええええいつ!!

話を整理させろ!!

まず、歩く宝石つて何だ?!

次に、こんなまだ自分の足で歩けもしないくらいの子ども海賊船に乗せるなよ!

それから、ナースさんがいるんですねこの船!!

「本気かよい！オヤジ!!」

『本気か?』じゃなくて『正気か?』の間違いだろおおおつ!!

こんなガキ乗せちゃダメだよー!!!

「めえええ！」

ダメだ！言葉にならない!

「あははっ！うん、いいって！よかったね!!」

あなたは何を悟ったの?!わたしは全力で拒否してるのだが!!

「ははっ！マルコの負けだな！」

「うるせえよい!……つたく、オヤジがいいってんなら仕方ねえな」

そこー！そこ折れたらダメです！パイナップルさん!!

「ふむ……。つまり、ハルタ達が連れてきたその赤子が俺たちの新しい妹というわけか?」

ハットかぶったダンディな方がようやく話に入ってきた。ずっと

静観決められてたからそれはそれで怖かったよ、うん。

「居たのか、ビスタ！静かだったから気付かなかつたぜ」

「そういうことだね。仲良くしてあげてよ?」

「仲良くも何も……もうすこし大きくならないと俺たちのこと識別できんだろう……。まだ赤子なんだから。」

「……だが、さつきから思ってたが……こいつ、俺たちの会話理解してないか?」

バッチリしてます!

でも、わたしがあなた方の会話を理解できてもあなた達がわたしの言葉を理解できないからどうしようもないんだよ!!

一方通行って奴なんだよっ!!

「それはいいとして…名前はあるのか？」

………。

え、なにこの沈黙。さっきまでの騒がしさどこ行った。

「ない」

「ないな」

「……………お前らなあ。」

はつきりという王子服とリーゼントヘアに呆れる南国果実さん

ここはなんだ、個性の塊の溜まり場か！

「グラララー！じゃあ、つけてやるか!!」

うーん、…と、頭を悩ます大人たち

本当に海賊かよこの人たち。

こんないい人たちを賊というならこの世界の賊は賊じゃない!!

「うーん、シロとかどうかな？銀髪だし」

「そうだなあ、アイでもいいんじゃないか？オッドアイだし」

「……………こいつら、ネーミングセンスが壊滅的だよい」

それは激しく同意します。

アイはまあ許せるけど由来がオッドアイだからって……

「じゃあ、マルコならなんてつけるんだ？」

「俺か？そうだなあ…。チビとかかよい？」

この人もあんまり変わらなかった

今は小さいけどちやんと成長するから!!

「はははっ!!かわらねえじゃねえか!!」

和服の人がパイナップルさんの発言に笑い出すとパイナップルさんが怒る

「ああ?!だったらイゾウはなんてつけんだよい！」

「俺だったら……か。そうだなあ……………ニア、とか…ベル、後は…ルナ…かな？」

和服の人がわたしをじっと見てから候補をあげる。

凄いこの人！めちやくちやまとも!!

「ニアは『光り輝く』、ベルは『可愛い』、ルナは『月』って意味があ

る。どれもこいつにぴったりだろ？それに短いからすぐに覚えられるし……他に候補がないならこの中から選んでもいいんじゃないか？」

「名前は一生ものだからよい、真面目に考えてやらないとな。」

「それもそうか。」

さつきまで散々言ってた癖に!!

「それならニアがいい!この子キラキラしてるし」

「グラララ!そいつがいいならいいんじゃないか?」

「ニアでいいか?」

みんなが顔を覗き込んでくる。

その前に拒否権あるの?!ここまで勝手に話進めといて今更確認取る?!というか、取ったところで「あー」とか「うー」とかくらいしか言えないよ?!頑張ればなんか喋れるかな?!!

「いあー!あいつー!」

自分でも何言ってるかわからないな、これ

因みに「ニアですね、はーい」と言いたかった。

「可愛いつ!!よろしくね、ニア!」

ここで大きな問題が1つ湧き上がる。

死亡フラグを回避せねば!

第4話 身長をください

そうこうして、海賊たちの子育てLifeが始まりましたとき。
めでたしめでたし！

…え？終わるの早いって？うるせー！こちとら羞恥プレイに耐えてんだよ！もう慣れたよ！

…ふっ、慣れてって怖い（遠い目

ジタバタと悶えてると体が傾き、ふわつと宙に放り出される
…今、柵の上にいるの忘れてた。

なんで柵の上にいるのかって？

下にいたら潰されそうだったから登ったんだよ！それで登ったはいいけど降りられなくなっただよ！

みんな背高いから床歩いてたら踏まれそうになるんだよ!!

アリンコの気持ちがよくわかる…

「あ…」

落ちて頭打ったら「夢でした☆」ってならないかな

そんなことを考えながら目を瞑り体を縮こまらせる

…が、くるはずの痛みがいつまでたってもこない。

恐る恐る目を開けると誰かがわたしを受け止めていた。

「…お、前は!!自分の身長より高いところに登るなよ!!危ねえだろ
!」

おお！ナイスタイミング、マルコさん！

危うく人生の幕を閉じるところだった。

それはともかく、色々と苦労人だなー、この人。そのうち血管切れるんじゃ…

その前に胃に穴開くかも。。。

「マルコ、何騒いで…あつ、ニア！見つけたのか!」

「この柵の上にあった。どうやって登ったんだよ!…。つか、降りれねえなら登るなよ!」

「あはは…、マルコ最後まで反対してたくせに意外と世話焼いてるよね。」

あ、ハルタさん。そんな微妙な顔しなくても…

「う、うるせえよー！」

マルコさんが軽く頬を染めながらハルタさんに言う。

ツンデレですか、そうですか。

「まったく…探したぞ、ニア。ここは広いからあまりちよろちよろするなよ？迷子になったら大変だ」

優しすぎか。ちよつとでも脱走を考えてたことを反省したい。

「わかったかよい。はあ…。子どもにしちゃ大人しいから楽だが時々消えるのは勘弁してほしいよ…。心臓に悪い」

「まあ…あながち間違いではないが、これ以上行動を制限するのも可哀想だろ。ただでさえ甲板にすらだしてあげられないというのに」

「マルコ、そこは譲らないもんね」

そう、わたし拾われた後から甲板に出たことがないんです。

マルコさんが猛反対してるんだとか

「甲板なんかに入れてって外の海賊やら海軍やらに見られでもしたらそれこそ危険だろい。こんなのが無防備に歩いてたら攫ってくれて言ってるようなものじゃねえか」

結構な心配性なんだね。

その気遣いはありがたい！まだまともに歩くことすらままならないからね

いや、頑張れば歩けるけど二、三メートルくらいいくところける

それはそうと、いつまで放置？

そろそろ会話にはいつてもいいかな？

「よー」

「「ん」」

「…よー、よー」

マルコさんの口ぐせを言ってみるとみんなの視線が向く。

ふふん！わたしを放置して3人で話し込んでたんだからこれくらいの茶番には付き合っつてよね

「…はっ！ははっ!!これ、マルコのこと呼んでるんじゃないか？」

「…お、俺?!俺はマルコだよー！マ・ル・コー！」

「…よ、よ、い？」

「一文字もあつてねえよい！」

「あははっ！あはははっ!!」

「笑うな、ハルター！」

いやー、面白いね。これ

あんまりからかうと後が怖いからこの辺で勘弁しておいてあげよう！

……ごめんなさいかまって欲しかっただけですほっぺたつねらないでマルコさん!!

—マルコサイド—

少し前に俺らの船で面倒をみることになったガキ。

俺は反対したがオヤジがいいっていうなら仕方ねえよなあ

まあ、あのガキが可愛いのは認めよう。

うん、すげえかわいいよ。なんというか小動物みたいだ。

だが、普段は大人しいけど時々突然ふらつと消えるんだよ

みんなで探し回ってすげえ変なところから出てくる事が多い。

ある時は医療室のベッドのあいだに挟まっていたり

ある時はロビーのソファの下から出てきたり：

どうやってそんなところに入ったんだよ!! って、突っ込みたくなると

ころにいることもあるよい…

そんな訳で、今も捜索中だ。

つたく、あのガキ……どこ行きやがった。

「あ…」

ん？なんか声が聞こえ…って、はああああ?!?!?

なんであいつ棚の上に乗ってんだ?! どうやって乗ったんだ!!

ーやべっ！落ちる!!

間に合えっ!!

ポスッ!

俺は駆け出し、スライディングするとニアを受け止める。

ふー…危機一髪。

なんとかキャッチしたよい。危ない危ない

降りられねえなら登るなよい！猫か、お前は！！

「お、前は！自分の身長より高いところに登るなよい！！」
思わず叱ってしまった。

けど、こいついくら叱つても泣かねえんだよなあ…

泣かねえから叱つちまうのかもな。

こいつといると心臓がいくつあっても足りねえ気がするよい。

ニアを見ると俺の腕の中で目を瞬かせしてる。自分でも驚いてやんの

いっつも驚かされてるのはこつちだがな！

「マルコ、何騒いで…あつ、ニア！見つけたのか！」

イズウが歩いてくる。俺が騒いでたからきたのか

「この棚の上にあった。どうやって登ったんだよい…。つか、降りられねえなら登るなよい！」

こんなチビが転落死とか洒落になんねえぞ？

つて、なんでガキ一匹相手にここまで焦らなきゃならねんだよい
「あはは…。最後まで反対してたくせに意外と世話焼いてるよね。」

ハルタが苦笑いしながら歩いてきた。

俺は照れを隠すように憎まれ口を叩く。

否定はしないがそう言われると恥ずかしい気もするよい。

俺らが話しているとニアが喋った。

「よいー！」

「「ん？」」

「…よい、よいー！」

これ、俺の真似してんのかよい？

「ははっ！！マルコのこと呼んでるんじゃないか？」

か、可愛いって思ったら負けな気がするよい！可愛いけど！

「俺はマルコだ！マ・ル・コ！」

「よ、よ、い？」

一文字もあつてねえ！！

…はあ。楽しいじゃねえかよい、ちくしょう

—サイドエンド—

「おー、こんなところに集まってどうし…あ、ニア。見つかったのか！よかったよかった」

サツチさんとビスタさんが一緒に歩いてきた。

…：本当にみんなで捜索してるんだね、毎回

なんか申し訳ない気もするけど、地面にいたら潰されるからね?!仕方ないんだよ！

くそう…早く成長したいぜ…。

「知らない間に消えてるのは心臓に悪いが、これ以上行動の制限をするのも可愛そうだ。そうだなあ…一回だけでも甲板に連れてってやったらどうだ」

ビスタさんがそう言う。

マルコさんといい、知らない間に消えてるって別にあなた方の目を盗んでるわけじゃないんだけどな…

「それ俺らも言ってるんだけど、マルコが譲らないんだよ」

「連れてってやりたいとは思うが…風に飛ばされたり、たまたま襲撃にあって敵船の誰かに見られたらしたら危ねえだろい。もう少し大きくなってからでもよくねえか？」

「『過保護!!』」

「俺が過保護なのかよ!?!普通だろ?!」

一番常識持つてるのはマルコさんです、間違いないです。

けどさすがに風に飛ばされはしないかな? 風船じゃないんだからそんな簡単に飛ばないと思うよ?

甲板かあ…。外の空気は吸いたいと思うし、いざとなった時の逃走ルートも確保したい。

言ってみたら案外いけるかな?

「まーくんーおしよと、でちやいー」

舌がうまく回らん。まあ、しょうがないんだけど

もう少し成長すればまともに喋れるようになるでしょ、多分

「『ぶほっ!!』」

「びよっ?!?!」

みんなが一齐に吹き出した。なぜ?!わたしなんかおかしなこと
言った?!

「まーくん…、まーくんて!!可愛いな、おい!」

「お願いされてるぞ、まーくん」

「こんな可愛くおねだりされたら断れないなあ…まーくん?」

「みんなでいけば怖くない!連れてってあげよ!まーくん!」

そんな風にからかうほど面白いこと言った?!わたし!

「てめえら…」

わたしを抱きかかえてるからか手が出せないみたいで、からかって
くるほかの隊長を睨んでるマルコさん。

恥ずかしいのかその頬は少し紅くなっていた。

なんかごめんなさい!けど、三文字って呼びにくいんだよ!この舌
がうまく回るようになるまで我慢してください、お願いします!

番外編 迷子捜索大作戦

「ニアーーーー！どこだーーーー！」

森の奥で子どもを拾い、育て始めた海賊たち。

しかし、その子どもものせいで気苦労が絶えない日々が始まった。その子どもは時々迷子になるのだ。

船の中とはいえ、モビー・ディック号はかなり広い。

子どもが迷子になるには十分な大きさだ。

大人たちがコミュニケーションを取り合いながら小さな子どもを探す。

「あ、ナミユール！居たか?!」

「こつちはいない。ラクヨウは？」

「こつちにも居なかつたな。他はどうだ？」

「だめだ、見つからねえ…。どこ行きやがった！あいつ!!」

必死に迷子にの子ども捜す姿はまさに『兄』だった。

しかし、彼らは世間から見たら《悪》。

なんといったって、海賊なのだから。

「俺、もう1度医療室を見てくる。もしかしたら戻ってきてるかもしれないからな」

「俺もいくよい」

船の長男のマルコと和服の男イゾウが医療室へと向かい扉を乱暴に開ける。

……が、子どもの姿はなかった。

「……居ないな。本当にどこに行ったんだ……？まさか、甲板に!？」

「それはねえよい。甲板に行ったんなら見張り組が見つけてるはずだ。それにあいつはまだ上手いこと歩けないだろう？ここから甲板まで距離がある。はいはいしてたとしても誰かが見つけてるはずだよい。……つか、あのガキっ！ここに居ろって言ったのにどこほっつき歩いてんだ!!誰だ！ここのドア開けっ放しにした奴…っ!!」

怒りと心配が入り混じった声をあげるのはマルコ

「……………いや…あのっ。ちゃんと部屋にいます。というかこれ、見つ

「かつたら殺されるんじゃないね？」

「あいつなあ…。なんか知らないが見聞色に引つかからないんだよなあ…」

「彼らは探している子どもが部屋から一歩も出ていないことに気づかなかった。」

「子どもは子どもで葛藤していた為に声を上げられなかった。」

「……（どうしよう。この体勢いい加減辛いからみつけて欲しいんだけど、声を上げるべきかな？いやでも、ここで見つかったら確実にお説教コースだろ。というかわたしも器用だな。なんでこんなところに嵌ったんだ？……あ。落ちる…。）」

「彼らが探していた子どもは壁とベッドの間に挟まっていた。」

「少し隙間が空いていて寝返りを打ったら嵌ってしまったらしい」

「……ポトツ……」

「[G:]」

「何かが落ちる音が聞こえ、2人は音のした方に顔を向ける。」

「するとベッドの下から匍匐前進で子どもが出てきた。」

「子どもは大人達を見上げると『てへっ』という感じで笑った。」

「……おまつ!!何してんだよい!まさか挟まってたのか!?!どうやって挟まったんだ!!」

「ははははっ!器用な奴だな!」

「怪我はねえのかよい!」

「マルコが慌ててニアに近づき怪我がないか確かめる。」

「マルコ、心配しすぎだ」

「そんな長男の姿にイゾウは面を喰らっていた。」

「*****」

「ニア、ちよつと待ってるな。」

「……」（コクコク）

「コック帽をかぶったリーゼントの男、サッチがロビーでニアの面倒を見ていると隊員に呼ばれたのでそう言って席を離れる。」

「……（サッチさん行っちゃった。あー。暇だなあ。誰もいないし…、誰か遊んでくれないかなあ。）」

2人はさつきまであやとりをしていた。彼はその紐をテーブルに置いていった。

「……（1人あやとりでもしてようかな。……ってあれ？……とっ……届かないっ!!）」

1人で遊ぼうと机にある紐に手を伸ばすがなんせ幼い体では目一杯伸ばしても腕が届かなかった。

「……（もうすこ……あっ）」（ズルツ

もう少しで届く！と言うところでソファから落ちてしまった。

そして再び登ろうとするが……案の定、登れなかった。

「……（……）。上がだめなら下だな。ここにいて誰か座ったとき気づかれなかったら確実に蹴られる）」

そうしてニアはソファの下に潜り込んだ。

「……（意外と綺麗だな。それにあったかいここ……）」（スヤア

その後、サッチが戻ってくる

「待たせたな、ニ……あれ？ニア？」

いるはずのニアがいなくなっていて首を傾げる。

その顔色は見る見るうちに青くなっていった。

「マルコー……ニアが迷子だ!!」

「はあっ?!またかよい!!」

また迷子の搜索が始まる。

だがどこを探しても見つからず、居なくなったのは昼時だったが既に日が傾いていた。

「どうしたの？みんなしてそんなに慌てて……」

「ハルタ！ちようどいいときに帰ってきた!!ニアが迷子だ！」

「え？また？」

絵本の中の王子様のような格好のハルタと呼ばれた人は先程まで遠征に出ていて丁度帰ってきた所だった。

「……最後にニアを見たのはどこ？」

「……ここだ。ロビーのソファの上に座らせて待ってけって」

サッチが彼の質問に答えると彼は「ふうん……」と顎に手を当てて何かを考える。

「あ、俺分かったかもしれねえよい」

「俺も多分分かった。」

ニアはよく居なくなるが言いつけを破ったことはない。

この前の迷子事件だって医療室で大人しくしてろと言われ部屋からはでていなかった。

この前のことを思い出した2人は「せーの」と、ソファを持ち上げてどかす。

彼らの思惑通りニアはソファの下にいた。

「居た!!」

「やっぱり…」

「こいつどうやってこんなところ入り込んだんだよい…」

ソファから落ちて登れなくなり、上がダメなら下にしよう。という結論に至り潜り込んだことを彼らは知る術もなかった。

「半日近く探したのに…こんなにあっさり…」

「悪りい、俺がもっと早く気づくべきだったよい」

「いや、マルコは悪くはないか？」

「つかこいつよくこんな狭いところで寝てやがるな」

ソファの下で丸くなって眠っているニアを見ながら口々に言うと彼女が起きる。

「ん……。あ、おはよ、にいちゃ」

眠たそうに目を擦りながらそう言う彼女に彼らは許してしまったそう。

また明るる日の昼過ぎ、みんなで干した布団を片付けていた。

ニアも彼女なりに手伝おうとしていたが隊員が「大丈夫」と諭す。

「ニアはまだ小さいから、こんな重たいもの持たなくていいぞ。俺たちに任せとけ！」

そう言うのと布団を次々に仕舞う。

「おーい、ちよつと手伝ってくれ！」

「あ、わかった！ニア、ちよつと待っていてくれな？」

その隊員は別の隊員に呼ばれ席を外す。

「……………(布団って重たいの?…いや、敷布団は重たいか。大きいし、重いよね。甲板からみんな運んでるのにわたしだけ何もできないって歯痒いな…せめて仕舞うくらいしたい。)」

布団の入っている押し入れを見つめながら彼女はそんなことを考える。

試しに敷布団より軽いであろう毛布を畳み、押し入れの中にしまう。

彼女は小さいので自分ごと入らなければ奥まで仕舞い込めない為、布団と一緒に押し入れに入ってズルズルと毛布を引っ張る。

「あれ?…こんなんで開けっ放しなんだ?……つたくよオ…。開けたら閉めろよな」

別の隊員がそこを通りかかり、襖を閉められ真っ暗になり何も見えなくなった。

出ようとしたが右も左も分からず手詰まり状態だった。

「……………(閉められちゃった。どうしよう)」

どうやって出ようか考えていると外が騒がしくなる。

どうやらまたニアが消えていることに気づいたらしい。

「つたく、なんなんだあいつは!!凝りもせず!今度はどこ行きやがったよ!!」

「…………マルコっていつもニアに振り回されてるよね。なんか面白い」

「うるせえよ!言ってる暇あるならお前らも探せ!」

「はいはい。…と、言ってもなあ……………ここ、入り込めるところなく無い?」

「確かになあ…………。だが、この部屋にいるのは間違い無いだろうよ。勘だけどな!つか、この部屋にいなかったらうろちよろできねえように縛りつけてやる!」

「いや、それはさすがに可愛そうでしょ。あの子たしかにフラツと消えること多いけど大人しいよ?」

「…………(マルコさんが怒ってる大半の理由ってわたしよね…。あの人の胃に穴空いたらわたしのせいかな?)」

彼女は「ここにいるよー。」と、知らせたいが下手に動いて頭でも

ぶつけたら痛いから見つけてもらいうまでじっとしていることにした。
「(ふかふか)。眠くなってきた。)」

布団が気持ちよく、眠たくなるとき押し入れの扉が勢いよく開いた。

突然の光に彼女は目を細める。

視力が戻ってくる、マルコと目が合う

彼は「見つけたぞ」と言わんばかりな雰囲気醸し出す。

「お、前はく!!どうやってそんなところ入ったんだ!!」

「……マルコはよくそこを開けようと思ったな。」

誰も押入れの中にいるとは思わないだろう。長男の行動にクルー達は驚いていた。

「手エ伸ばせ!ほら!出てこい!!」

怒りながらも手を伸ばす長男にクルー達は生暖かい目を向けていたのを彼が知ることはなかった。

子どもが素直に手を伸ばすと、マルコがその腕を掴んで引き出した。

「何をどうしたらこんな押入れの中に閉じ込められるんだよい!!迷子になるならもっとわかりやすいように迷子になれ!」

「それは…迷子っていわないよ、マルコ」

ハルタが少し呆れたように呟いた。

隊員達は船の長男が子どもに振り回されてる姿に笑いをこらえたそうなの…

海賊船は、今日も平和です

第5話 決意

「ったく…。てめえらなあ…。はあ、仕方ねえな。わかったよ、少しだけだぞ？」

「おお！マルコさんが折れた！」

「言ってみるものだね！」

「さて…と、とりあえず道順を覚えなないと。」

「もしもの時の逃走ルートを確認しなければ！」

「…わたしってほとんど逃げることにしか考えてないような…」

「いや、逃げるのも大事だよ！逃げるが勝ちって言葉があるくらいだもの」

「グラララ！見つかったか。それより甲板に連れてきて大丈夫かア？マルコ。お前外に出すの心配してただろ」

「こいつらがどうしてもって言うから連れてきた」

「甲板に出るとオヤジさんが大きな椅子に座っていた。」

「堂々としててカッコいい。」

「マルコさんが無表情でオヤジさんの質問に返したらほかのメンバーが密かに笑っていた」

「てめえら！言いたいことあるなら言えよ！」

「あ、無表情が崩れた。なにこれ面白い（真顔）」

「そんなに嫌だったかな？まーくん」

「オヤジに言っただいのか？さっきの…つくくっ」

「だって…マルコツ…嬉しそうだったから面白くて、つい！」

「ああああ、マルコさんの額に青筋が…」

「この人本当にその内胃に穴あくって！もう少しリラックスしよ??」

「まーくん！おこる、めっ！」

「マルコさんのほっぺたをペシッと軽くはたく」

「イライラはお肌の敵よ?!」

「…ってのは冗談であなただの胃が心配です、いや本気で」

「「ぶっはっ!!」「」」

「甲板にいた人たち全員に聞こえてたみたいで、みんなが大笑いし始

めた

そんなに面白いこと言っていないと思うんだけどなあ
オヤジさんもグラグラ笑い出したし…
なんなんだ、笑い上戸か！

「だめっ!!くくっ!もう我慢できない!あつははは!マルコに説教するとか、ニア強い!」

「不死鳥マルコもガキには弱いんだな!はははっ!」
「おまえらなあ…。」

呆れ顔をした後にマルコさんも「くくっ」と笑い出した。

あ、よかったよかった。ストレスは溜めちゃいけませんよー!
え?わたしがストレスの原因だって?

……ほっとけ。(遠い目)

「馬鹿どもはほっというて甲板を案内するよい、ニア。なんかあった時にすぐ逃げられるようにどこに何があるかを把握しとけ」

コクコクと首を縦に振る

なんだかんだ言つて優しいな、この人。

場所の把握も大事だけど少しくらいは戦えたほうがいいよね。逃げる隙を作るにも戦術は必要になる

そしたら体力が欲しい…。

ああもう!やることがいっぱいなのにできないのがじれったい!!
見てたらいつのまにか覚えてるとかそんな奇跡おこらないかな?!

”わかる”と”できる”は違うけど!

「ここが見張り台、お前はもう少し成長するまで登るなよい。確実に落ちるから…:…んで、こつちが武器庫。迂闊に触ると怪我するから気をつけろい。で、ここが物置。色んなものが置いてあるからあんま近づくなよ?倒れてきたら下敷きになるぞ」

わたしを抱いて歩きながら説明してくれるが一言言わせてもらおう。

…危険しかない!!この船、危険しかない!!

「……………とまあ、こんなもんかよい。わかったか?」

首を縦に振る。

めちやくちや危ないところでした。よし、戻ろう。一刻も早く船内へ!!

「よいよい。いい子だ。」

かすかに笑うと、片腕にわたしを抱え直し空いた方の手でくしやりと頭を撫でる

：ツンデレ。間違いなくツンデレだこの人!

あ、眠い。急に眠気が…

子どもの体って不便!

「……………じゃあ、こいつ船内に戻してくるよい」

「えっ?!もう?!」

「眠そうだから寝かしてくるよい」

「あ、そうゆうこと? わかった! 俺もいく!」

ハルタさんとマルコさんがわたしを連れて船内へと戻る。

わたしいつまでここにいられるのかなあ…

普通に考えてわたしがこの船にいるのはおかしいよね?

オヤジさんは”白ひげ”って呼ばれてて”四皇”っていうすごい人らしい。

そんな人の船にわたしがいるのはどう考えても場違いだよな

まだ拾われてから1年経ってないけどみんなで必死に世話してくれたり話しかけてきてくれたりするのが嬉しくて、楽しくて

この人たちが拾った責任から育ててくれてるってだけだったらどうしよう…

自立できるくらいになったらわたしここに居られなくなるのかな?

ああくそっ! 考えすぎて眠気が増した

とりあえず寝るか。

わたしはマルコさんに体を預け襲ってくる睡魔に身を任せた。

—ハルタサイド—

「まーくんーおしよと、でちやい!」

ニアのその一言でマルコが折れてニアを甲板に連れてくことに

なった

マルコって意外に世話好きなのかな。それとも子どもが好きなのかな？

にしても、まーくんって!!ホント可愛いなあ、ニアは!

マルコも心なしか嬉しそうだし。ちえー、少し羨ましいい:

俺も愛称で呼んでくれる様に頼んでみようかなあ:?

ニアが来てからほかの隊長も隊員も棘が無くなったきがするし、何よりマルコがあんなに丸くなるとは思わなかった!

連れてきてよかったとはまだ一概に言えないけど

海賊船だからね。オヤジや俺らがいるとはいえなにが起ころかわからないのがこの海だ。

何があっても守るけど最低限自分の身を守るようになってもらわないと!

「グラララー!見つかったか。それより甲板に連れてきてよかったのかア?マルコ」

「こいつらがどうしてもつていうから連れてきた」

マルコが必死にポーカーフェイスを取り繕ってる!!

やばい!レアだ!あんなマルコ!

「てめえら、言いたいことあんなら言えよい!」

俺たちが密かに笑っているとポーカーフェイス崩れた。面白い

「まーくん!おこる、めっ!」

ニアがそう言ってマルコの頬を軽くはたく。

マルコが目を丸くしてニアを見た。何あの光景!写真撮りたい!!

甲板にいたクルー達は大笑。オヤジも笑ってる

そりやそうだ!1番隊の隊長が子どもにたじたじなんだもん!

お腹抱えて笑ってる俺たちを無視してニアに船の配置を教え出した。そんな一気に教えても覚えられるかな?多分恥ずかしくて思考が正常に回ってないのかも。

それはそれで面白いからいいか

あれ、俺って結構鬼畜?…だって、みんなの意外な一面が見れてすっごい楽しい!

ニアが眠そうだからマルコがニアを船内に戻すつて。俺も付いて行こー

ちやんと見てるんだね、俺気づかなかった。

ニアを見るとマルコの胸にもたれて力を抜いていた。ああー、安心しきつてるなあ

俺たち一応海賊なんだけど…。警戒心をもう少し持つて貰わないと…

マルコも同じこと考えてたのか複雑な表情でニアの頭を撫でていた。

ずるい…とか思ったのは心の中にしまっておこう。

ーサイドエンドー

暗闇の中で意識が覚醒する。

ここは…どこ？

みんなは…どこ？

ーー怖いーー

ただ、そう思った。

終わりの見えない闇の中を1人彷徨い続ける

暗い、寒い、冷たい、寂しい

自分を守る様に自身の体を抱きしめ、その場に座り縮こまる。

暗闇の中で震えていると一瞬だけ光がさした気がした。

思わず顔を上げると遠くに星の様な光が一筋見える

誰か…いるの？

…お願い!! 1人にしないで! 誰か…側に

ーーガバツ!! ーー

光を掴もうとする動作で体が起き上がった。

辺りを見回すと見慣れた部屋の布団の上

今のは…夢?

居てもたつても居られず部屋を飛び出して船内を走る。

船内も明かりがついていなくてとても暗く感じた。

誰か、誰か、誰か…。

誰か…いないの？

足がもつれ、うまく走れずなんども転ぶ。摩擦で擦りむいて膝がジンジンと痛むけど、止まってる余裕なかった

1人はいやだ。わたしはこんなにも寂しがり屋だっただろうか？

この世界に来る前の記憶はあまりない。

覚えているのはごく普通の一般人として生きていたということと、自称天使とのやりとりくらいだ

親の顔も自分の名前も居たであろう友達もそこらへんは何も覚えていない。

覚えていないからこそこんなにも不安なのかもしれない…

全部夢だったらどうしよう。夢だったら届かない…！

「あつ…！」

自分の足に躓いて盛大に転ぶ。

その場に鈍い音が響き、痛みでしばらく動けなかった。

「……………ニア？」

人の声!?

バツ！と顔を上げると目の前にイズウさんがたっていた。

いつもの格好とは違い、髪を下ろして肩にタオルをかけているお風呂から上がったばかりかな？

「お前、こんな時間にどうし……………つ?!……………ニア？震えてるのか？」

わたしは彼が喋っている最中に彼に抱きつく

存在を確かめるかの様に腕に力を込め、彼にしがみついた

「ゆめ、みた。こわい」

言葉にすると自然と涙が出てきた。彼はそんなわたしの頭を撫でると抱き上げてロビーの電気をつけ、ソファに座るとわたしを膝の上に座らせた

「どんな夢を見たんだ？悪い夢ってのはな、人に話すと現実にはならないんだぜ？」

そんなものは迷信に過ぎない。

確証も証拠もないし、そんな論理が証明されているわけでもないけれどわたしが落ち着くには十分すぎる言葉だった。

「くらい…。ひとり、さみしい。こわい」

「暗い所に1人置き去りにされる夢を見たのか？…それは怖かったな…。でも、今は暗くもないし1人でもないな？ほら、やつぱり夢は夢だ」

ふわっと笑いかけてくるイゾウさんにわたしは安心感を覚える。

こくん…と、一回だけ頷くとまた眠気が襲ってきた。

ああ、わたしにとってここはこんなにも大切な居場所になったのか。

強くないと…彼らの隣で戦えるように…

わたしは密かに決意し、襲ってくる睡魔に身を任せた。

—イゾウサイド—

「…こいつ、泣くんだな」

俺の膝の上で安心しきったように眠る少女を撫でながら呟く。

その目尻に光る水滴をそっと拭う

こいつを拾ってからこいつが泣くところを見たことがなかった。

うまく歩けずに転んでも、マルコにどれだけ叱られてもヘラッと笑っているから勝手に強いやつで怖いものなんてないんじゃないかと思っていた。

けどこの子は今「こわかった」と泣いた

「俺もまだまだだなあ…」

なんだかんだ言ってもまだガキもいいところ。

船の上の生活だって、刀とか銃だって怖くないわけないんだ。

俺たちに余計な心配をかけないように気丈に振る舞ってるだけなのかはわからないが安心しろ

「1人にしないから…泣くな、ニア」

ニアの意外一面が見れて嬉しい反面、いつも一緒にいるのにこいつが何かを隠していることに気づけなかった不甲斐なさを噛みしめる

「何を隠してるか知らないが…もっと頼っていいんだぞ？」

俺はニアの頭を撫でながらそう言った

—サイドエンド—

第6話 百聞は一見にしかず

ーチユンチユン

ああー、鳥の囀りが聞こえる

今何時かなー

「きいてんのかよいい！」

ただ今、説教中でございます。

：マルコさんの

朝わたしが部屋に居なかったから船内探し回った挙句、やっと見つけたと思ったらロビーでイズウさんの膝の上で寝てたから大層お怒りらしい。

ちなみに、わたしとイズウさんがソファに座っていてマルコさんの説教の声に何事かとビスタさんとハルタさんがやってきた状態です。「なんとも言わせるなよ。ニアが夜中に船内をふらふら歩いてたからとっ捕まえて一緒に居たんだって」

「夜中になんでニアがふらふら歩いてんだよいい！」

「そんなカリカリすんなって。ハゲるぞ？」

「余計なお世話だよいい！」

わたしの前だからかイズウさんは昨夜の出来事を話そうとしない。気を使ってくれてるのかな？…優しい。

「まあまあ…その辺にしときなよ。船の中にいたんだし、無事なんだからさ。」

「そりやそうだが…。はあ、心臓にわりいな…ほんとに心底心配したって顔してる。

ほんとに船中探したんだろうね、ごめんなさい。

そしてビスタさんは相変わらず静観決め込むんですねわかります。

「うう…。まーくん、ごめんなしやい」

謝ると目をそらして「わかればいいよいい」って言ってどっか行っちゃった

本気で怒らせたかな？

「あはは…。マルコ多分やりすぎたって思ってるね」

「ああ、ありや立ち直るのに時間かかりそうだな。今のあいつの気分的にはきつとペットに逃げられてシヨックを受ける飼い主つて所だろう。」

え、そうなの？

というか、随分と繊細ですね?!マルコさん!!

わたし叱りつけただけでそんなこの世の地獄を見たかの様な絶望するの!?

「まあなんとかなるだろ。南国果実^{マルコ}はほつといて、ちよつと練習でもさせてみるか」

ビスタさん：やつと喋ったと思つたら南国果実つて、本人聞いたら怒るよ?確実に

…ん?練習??なんの?

「それ賛成!いつ何が起こるかわからないもんね」

ん?んん?なんの話?

「ニア!少し前に話してたんだけどね?ニアは使うなら刀か銃どっちがいい?」

なんの話してんだこいつら!!

1、2歳のガキに武器持たせようとしてるのか?!

馬鹿なの!?!死ぬの!?!殺したいの!?!

「…それはもう少し後ででもいいだろう。とりあえず武器の使い方と特徴を教えよう」

イズウさんがわたしを見て頭を撫でると難しい顔をしていった。

「イズウが止めるのは珍しいね。ほんとに夜中にニアがふらふら歩いてただけなの?」

鋭い。

なんていうか、察しがよすぎるこの人。

「まあな。その話はまた今度だ」

刀か銃かってよりも、武器を持たせる持たせないに悩んでる気がするのは気のせいかな?そりゃ、持ったことないし使ったこともないから怖くないっていったら嘘だけど護身用としてくらいなら持つてもいい気がするんだけどな

なんだってここわたしからしたら異世界だし?!

「ふーん…ま、いいや。じゃあとりあえず刀の種類と使い方と…覚え
てもらうことはたくさんあるから頑張ってね、ニア!」

「あいー」

元気よく返事をするところにいるみんなは微笑んだ。

やってやるさ!

ーハルタサイドー

ある日の朝マルコの怒った声で目が覚める

何があったのかと見に行くとニアとイズウがマルコに叱られてい
た。

ニアが謝るとマルコは目を逸らして何処かに行く。

…あれかなりシヨック受けてそうだな、立ち直れるといいけど

まあいいか。

そんなことよりニアに戦術を教えないとね!

そう思っ武器の扱いの練習をさせようとするといズウが止める

…いズウが止めるのは珍しいな。何かあったのかな?

3人で話あった結果、先に「知識」を教えることになった

「ねえ、昨夜何かあったの?」

その夜、ニアを寝かしつけた後ロビーに行くとイズウがいたから聞
いてみた

「…昨日、俺が風呂から上がった後部屋に向かおうとしたらすごい音
が聞こえたんだ」

「すごい音?」

「ああ。見に行ったらニアが廊下で派手に転んでて何やってんだと
思っ声をかけたら…泣いてたんだよ」

「泣いてた?!」

いつのまにか隊長が集まっていた。

…みんな初めからいたっけ?

「お前ら…いつからいたんだ。」

「今」

「今だよい」

「今だな」

…俺も人のこと言えないけど、ニアが関わるとみんな団結するよね。

「真つ暗な所に1人取り残される夢を見て、怖くなって部屋を飛び出したんだと」

「そう言うことかよい。…なおさら、叱って悪いことしたな」

「マルコに叱られる分にはいいんじゃないかねえの？むしろ面白がってる気もするけどな」

間違いない

マルコもニアを叱ってるときはなんかいきいきしてるし、ニアも楽しそうだ

「武器は人を殺す為のものだ。あいつ、何も言わねえけど実際は怖いんじゃないかって思ってたな」

「それでイズウ、戦闘訓練を反対したんだ？たしかにニアの前じゃ言い辛いかな」

「悪いな」

「いや、賢明な判断だろう。ニアはまだガキだと言うのに遠慮深い。本人の前で言ったら気を遣って『大丈夫』と言うはずだ」

たしかに。

そんな話聞くと、あの子…あの笑顔の裏に沢山の隠し事してるみたいに思えてくるね

「イズウ、確かに武器は人を傷つける。だが、反対に身を守ることもできる。護身用として暗器をいくつか忍ばせて置くくらいは許してくれないか？」

「…そう…だな。」

俺たちはそれぞれに思うことがあり、その後は誰も口を開かずに眠りについた。

ーサイドエンドー

ぷしゅーーー

ただ今、わたしの脳みそがオーバーヒート中です

何故かって？いくら覚えて欲しいことがたくさんあるからって4時間休憩なしで詰め込むのはどうかと思うよ?!

というかまず！こんなガキが理解してるって思うのがおかしいよね!?

とりあえず説明してるだけなのかな?!

記憶の隅にあればいいや程度かな!!?

だとしても！休憩くらいいれろや、鬼畜かよー!!

「……ア！ニア！」

「……？」

「ニアだ、大丈夫？」

ボーっとしてたかな？正直休憩したいです。

脳みそ休ませてください。

「っ、かれちゃ」

「あー、まあ仕方ないな。息抜きがてら俺とハルタの手合わせでもみるか？」

息抜き?!

あなたたちにとっての息抜きは手合わせなの?!おかしくない!!?

「そうだなあ……。ついでに俺の銃の腕も見てもらおうか。戦闘に出せない分かつこいとこ見せてやりたいし」

あ、それは見たいかも

わたしが首を縦に振ると、ビスタさんがわたしを抱き上げる

みんなで仲良く道場に向かうことになった。

ービスタサイドー

朝起きるとマルコの怒号が響いていた。

今日も平和だな……。ん？怒号？

何があったのかと思いい見に行くといゾウとニアがソファの上で座っていて、マルコが叱り付けていた。なるほどな、だいたい察した

大変だな、うちの長男は……

ニアが謝るとマルコが目をそらして去っていった。

ありや、やりすぎたって思ってるな絶対。

それは置いといて、ニアに護身術を教えないとな

まずは武器を知ることからだ！

ハルタも乗り気だし、いいだろう。イゾウはなんか微妙な顔してるが…

こりやなんかあつたな。だからニアと居たのだろう

今のイゾウの表情を見ればマルコも何か察せられるだろうに…間の悪い

まあ、いいか。そのうちなんとかなるだろう

その夜、隊長数人で昨夜から今朝の出来事を話し、ニアがイゾウの膝の上で寝ていた理由を知る

1人が怖いと泣いていた…か。

そんな素振り一切見せなかったのに、あいつ寂しがりだったのか。全く…そんなこと隠さなくてもいいだろう。

目を改めてニアに武器や戦闘のイロハを教える

ハルタが興奮し始めて色々と言出し早4時間

おいおい、そろそろ休ませてやれよ。いくら賢くて物分かりがいいからといってもニアはまだガキだぞ？そんなに集中力が持つわけないだろ

「ニア…ニア!!」

ニアがボーっとし出した。そりやそうだ。寧ろ今までよく話を聞いていたなと褒めてやりたい

「休憩がてらに俺とハルタの手合わせでもみるか？」

百聞は一見にしかずっていうからな。見せた方が早い

イゾウも自分の腕を見せたいみたいだしちようどいいだろう。

迷いなく首を縦に振る。

ノーと言わないニアに対してちよつと不安を覚えるのは俺だけじゃないと思いたい

—サイドエンド—

カン!!カン!キイイン!!

どうも、みなさん。休憩という名の実践見学をしているニアです
いや、異世界常識って凄いな。普通子どもにこんなの見せないよ
ね

「ニア！いいか？よく見ておけよ！」

ビスタさんが喋りながらハルタさんと剣をぶつけた後、互いに距離
をとり動きを止める

しばらく睨み合うと先に動き出したのはハルタさん。

間合いを詰め、剣を左斜め下から振り上げる。それをビスタさんは
左手の剣で受け止め、右手でもった剣を上から振り下ろす。

それを見たハルタさんは飛びのいて躲し、また地面を蹴って間合い
を詰め斬りかかる。ビスタさんはハルタさんの刀を受け止めるとハ
ルタさんは自らの勢いを利用して宙を舞い、ビスタさんの背後を取り
ながら剣を振る。

その動きを予想していたかのように頭の後ろに刀を置いてハルタ
さんの一撃を受け止めた後、ビスタさんは体をすぐに反転させて構え
た。

…いや、目が追いつかないから普通。

こんな攻防見せられてもどうしようもないんだが?!なんとか見え
ただけど限界があるだろ!!

「しゅーい…」

「……今のが肉眼で見えたのか？」

わたしの呟きか聞こえてたらしく、イズウさんが隣で驚いた顔をし
ていた

頷くと彼はわたしの頭を撫でる

「そうか、すごいニアは！初めてであの2人の動きがちゃんと見え
るとは、さすが俺たちの妹だな！」

常識はずれだということがわかりました。とても真似できない
誰も真似しろとは言っていないけど

2人の手合わせが終わりこちらにくるとイズウさんが張り切って
上着を脱ぐ

「次は俺か。よくみておけよ…」

イゾウさんが二丁銃を構えて人型的にむかって発砲する
耳がいたい!! 耳栓プリーズ!!

しかも今の人間業か?! 1秒で4発撃ったぞ!?
しかも頭と胸に2発ずつ! 殺意高すぎかよ!

「ニア、今何発撃ったようにみえた?」

ビスタさんとハルタさんがいつのまにかわたしの後ろにいて話しかけてきた。

気配消して近づくなし! 忍者か、おのれ!!

「よんはちゆ」

「えっ?」

ビスタとハルタの驚いた声がかぶる。

「?」

あれ、違った? 4発撃ったように見えただけど…
的に空いた穴も…あれ、いっぱいある?

あ、そうか! あの的、新品じゃないから穴がいっぱい空いてるのか

!!

じゃあ、どこに何発撃ったか確認できないな。

「どこに何発撃ったか見えた?」

「ここ…にはちゆ、と、ここ…にはちゆ」

自分の体でどこに何発撃ったか身振り手振りで伝えると彼らは驚きつつも褒めてくれた。

「…ははっ!! いい目をしてるな、ニア!!」

「ああ、さすが俺たちの妹だな!」

「すごいね! ニア!」

しばらく褒めると気が済んだのかイゾウさんがさっきの説明をする

「今のはコロラド撃ちついていつてな、最も致死率の高い撃ち方だ。」
ガキに何教えてるのおお!!

海賊だからか?! 海賊だから殺さなきゃ殺されるぞっていうアレか
?!

「まあ、まだ使うことはないだろうけど知識として覚えておけばいい

か役に立つ時が来るかもしてないからな」

ああ、そういうことですか。そんな日が来ないことを切実に願います！

「おーい。盛り上がってるそこ悪いがそろそろ飯だぞ。あとあんまり物騒なこと教えるとまたマルコに怒られるんじゃないかねえの？」

サツチさあああん!!

神！ナイスタイミング!!そろそろわたしも逃げ出したいところでした！剣と弾が飛び交ってて恐怖心でいっぱいだったよおおお!!

「さつちゃん！」

「さ、さつちゃん?!?!」

さつちゃんの方がいいやすいんですもん！許して！さつちゃん！

「くくつ！ほんとにいちいち笑わせてくれるな、ニア！よし、飯にするか！いくぞ、さつちゃん！」

「さつちゃんなんてあだ名可愛すぎて勿体ないな。なあ？さつちゃん？」

「さつちゃん、お腹すいたー」

わたしの言葉に彼らが便乗しサツチさんをからかい出す。

「よしてめえらそこにならべ、叩き斬る!!」

サツチさんが刀を二本取り出して笑顔で殺気立った。

わあ、素敵な笑顔ですこと！でも、その殺気怖いからしまってください!!

「ぼうりよく、めー！」

「……はい。」

あ、大人しくなった。よかつた。

毎日毎日殺意に当てられてわたしの肝も座ってきたかな

さすが海賊船

「ははっ！俺もマルコのこと言えねえな！」

サツチさんが頭を掻きながら無邪気に笑った。

—サツチサイド—

数日前、朝っぱらからマルコの怒号が響いていた。

ニアが来てからマルコは振り回されっぱなしだな。
まあ、おもしろいからいいけどよ！

その時間はちょうど朝飯作ってたから何があったのかはしらねえが昼前にマルコがロビーの椅子で頭を抱えて座ってた。

なんつーか：目が素通りできないくらいに落ち込んだ。

激レアだな、写真撮りてえ：けど、そんなことしたら殺されそうだからやめておこう。

「マルコッ！どうしたんだ？そんな落ち込んでよお！」

マルコの隣にさりげなく座り肩に腕を回す

「サツチか……。：叱りすぎた。ニアに嫌われたかもしれねえよい」

「は？」

何言ってるんだ、こいつ

?!
どんなけ叱られてもニコニコしてるようなアイツが今更堪えるか

何があったのか聞くと朝、ニアの部屋の扉が開いててアイツがいなかったから誰かに攫われたのかと思つて焦つて探し回つたらイゾウとロビー（ロビー）のソファで寝てて俺の心配返せよ！ってことらしい

わりかし毎回じゃね？それ

「ははははっ！なんだそれ、今更じゃねえかそんなの！お前今まで何回ニア叱ってきたんだよ！そんなことでアイツが人を嫌うかよ！」

「表情がいつもと違ったんだよ。うまく言えねえけど、いつもより暗かったというか……。」

「なんかあったんだろ。イゾウにでも聞いてみたらどうだ？アイツが意味もなくソファの上でニアを寝かすなんてするわけねえよ。」

「だよなあ……。俺も思ったんだが、いたたまれなくなつてつい逃げちまった」

「はははははっ！ほんとお前つてニアに弱いのがいいぜ！俺が聞いといてやるよ！だから元気だせ！……。な？今のお前、キノコが生えそできそつて見てらんねえぜ」

「どういう意味だよい!!」

マルコが立ち上がり拳を握りしめて俺を見下ろす。

あ、元気になった。

「そのまんまだ！さあて、今日も一日頑張ろう！」

「白々しいよい!! 誤魔化すならもつとちゃんと誤魔化せやい!!」
「ははっ! やっぱこのくらい騒がしくねえとな!!」

「んじゃ、俺は昼飯の準備でもしてくるな！」

コックという立場を利用してさりげなく逃げる。さすが俺!

「……………ありがとな、サツチ」

「デレた?! マルコが改まってお礼言うとか気持ち悪い!!」

「マルコ?! どうしたお前、熱でもあんのか!!?」

「うるせえよい!! さっさといけ!!」

ええっ!? 何それ理不尽!!

ま、いいや。元気になったみたいだしよ!

別の日、昼時が近くなったら船にいるやつら呼びに行こうとしたら道場から声が聞こえた。

覗くと、イズウが人型的にむかって引き金を引いてた。

…あいかかわらず、あいつの銃の腕はすごいな。

1秒に4発か…。とてもじゃないが真似できねえ

ま、適材適所ってやつだろうけど

ニアにもあれが見えていたみたいで三人は感心していた。

初めてだよな? 今まで戦闘にも出したことないし……

よく見えたな、どうなってんだあいつの目は……

「今のはコロラド撃ちって言って、最も致死率の高い撃ち方だ」

…って、ガキに何教えてんだよ! イズウ!!

余計なこと教えるとマルコの雷が落ちるぞ!?

俺が声をかけるとニアが笑顔で「さっちゃん!」って言った

…さ、さっちゃん!?

間違いではないが!!

っ!! そうか、マルコの時の「まーくん」もこんな感じだったのか!

からかって悪かったマルコ! これは恥ずかしい!!

三人は俺の心情もいざ知らずにからかい出した。

とびっきりの笑顔で殺意を振り撒いたらニアに止められ、言うこと

を聞いてしまった。

ははっ、俺もマルコのこと言えないぜ。

この場を和ます能力には素直に感心する

ニアにはこのまま育てほしいものだ。

—サイドエンド—

第7話 人間やればできるものだ

わたしが海賊に拾われてから数年が経ちました。大きな出来事もなく平和に暮らしようやく喋れるようになりました

とは言うものの言葉の発達が少し遅れてるのか単語を繋げる程度にしか喋れないけど

相変わらずみなさん過保護で武器はまだ持たせてもらったことないけどあんまり強い敵じゃなかったら陰からこっそり戦闘の光景を見せてくれるようにはなったのだ。

ふっ、恐ろしい。無理無理、あんなの怖すぎて一瞬で逃げ出す自信がある。刀向けられたら恐怖で身が竦んで動けないよ、普通。

こんな平和な毎日が続けばいいのになあ

…これをフラグって言うんだろうな。あーあ。人生ってほんと、何が起こるかかわからないなー

時は数刻前まで遡る。

今日は隊長じゃなくて隊員と一緒にいた。

「カルにい、ひま？」

「ん？おおー暇だぜ？なんだ、遊びたいのか？」

隊長がいないときでも誰かが必ずがわたしのそばにいる。

隊員の中で一番一緒にいるのはカルガンとルーカスだ。

カルガンは茶髪に藍色の目をした比較的小柄な武闘派のお兄さんで、ルーカスは紺色の髪に黒色の目をした長身のイケメンなお兄さんだ。

「隊長達から今日は会議だから大人しくしとけって言われてんだろ？あんまちよろちよろさせると俺が怒られるから、そうだなあ…トランプでもするか」

コクコクと首を縦に振るとカルガンがトランプを用意する。

ちよろちよろさせるとって、わたしそんなちよろちよろしないよ！

しばらくカルガンと遊んでいると聞き覚えのない声がロビーに響いた。

「なんだあ？白ひげはこんな小せえガキを船に乗せてんのか？」

「誰だっ…っ!!なっ!!ルーカス!!」

見知らぬ大男に襟を掴まれ引き摺られている血塗れのルーカス。彼は気を失っているのかピクリとも動かずぐったりしている。

「ルカ…にいい？」

「まてーニア!!俺の後ろにいろ!!」

わたしが思わずルーカスに近づこうとするとカルガンに腕を引つ張られ下がらされる

「はーっはっは、ガキ!いいか?海賊つてのは弱肉強食…。殺し、殺され、そのスリルを味わうものさ!…ん?ガキ…ちよつと顔見せてみる」

大男はルーカスを引き摺ったままわたしの方に歩いてくるが、恐怖で身が竦み動けなかった。

「ニアに近づくな!!」

「テメエにようはねえんだよ!どきやがれ!」

「ぐあっ!」

カルガンがわたしの前に立ち刀を構えるが大男が平手を飛ばすと彼は防げずに壁まで飛ばされる。

「カルに…っ!!いたいっ!」

カルガンに意識を向けると腕を掴まれ、引き寄せられる

「銀髪にオツドアイ、か…。珍しい容姿してんじやねえか。気が変わった。ガキ、お前を試してやる」

「試すって何？」

「そんなことよりもはやくルーカスを離してよ！」

「なんでこんなに怒りが湧くの!？」

怖くて怖くて…逃げたいのに、ルーカスとカルガンを置いて1人で逃げる事ができない

わたしも馬鹿になったもんだよ、ほんと

「ほお…。怖気付かねエんだな。気に入ったぜ、おチビちゃん?」

大男がニヤリと笑うと仲間から剣を借りわたしの前に放った。

「剣を取れ。俺とタイマン張ってくれや」

「何言ってるんだ、てめえ!!ニアは剣を持ったことも使ったこともましてや人を斬ったことも無いんだぞ?!持たせたところで使えるわけないだろ!何をさせるつもりだ!!」

カルガンが体制を整え必死に止めようと喰らいつく。

「外野は黙ってやがれ。…おチビちゃん、お前にチャンスをやろ。5手、お前に与えてやるからそれ以内に俺を剣で斬ってみろ。なーに、掠っただけでも当たったことにしてやるよ。その間俺はなんの反撃もしねえ。これまでにないハンデだろ?お前が俺に剣を当てたらこれ以上は荒らさずに消えてやる。」

「ルカにい…はなす」

「ルカ…?…ああ、この兄ちゃんのことか?いいぜ。お前が俺に剣を当てられたら解放してやるよ」

つまりわたしが勝てばルーカスは解放されるということ。

なら、やってやろうじゃないか。地面に放りなげられた刀を拾い鞘から抜く。剣と鞘を構え、ビスタさんの真似をする。いわゆる二刀流もどき

「ん?お前、二刀流なのか?ならもう一本貸すぜ」

なんか、勘違いしてくれた。子どもだからって油断してるんだろう。二刀流の方が成功率は上がる。危険だけど

渡された2本目の刀も鞘から抜き、鞘を1つ口に咥える。

鞘を持つのは作戦があるからだ

「なんだ?鞘がそんなに大事か?...おもしれえ!きてみる、おチビちゃん!」

「だめだ!よせ、ニア!!」

カルガンが止めようとこっちにくるが敵の仲間に背中を斬られ止められた

「邪魔しないでもらおう!」

「しまっ!!」

「……っ! (カルにい!!)」

鞘を咥えているから声が出せない。

やらなきや…わたしが、こいつらを倒さなきや!!

「ドクンツ、ドクンツ！」

鼓動が早くなるのがわかる。心臓がうるさい。

落ち着け、焦ったら負けだ。

思い出せ……今まで教えてもらってきたこと

「二……ア。よせ、にげ……ろ」

ぐったりしていたルーカスが意識を取り戻した

「(ルカにい。いま、たすける)」

そう思うと、わたしは駆け出した。

力の限り地面を蹴って飛び上がり左手の剣で左上から右下に振り下ろす

それを大男は後ろに引いて避けた。

……そんなの想定済みだ。右手の剣を突き刺す

が、大男は体を右に傾けて避けた

「なかなかいい動きするじゃねえか！」

突きが躲された勢いで大男の背後に回ったわたしは体を反転させながら地面に着地する。その時に啞えていた鞘をそつと大男の足元に転がした。相手は油断しているからこつちを見ていない為、気づいていない。

「つーやあつ!!」

着地して鞘を転がすまで0.1秒。すぐさま地面を蹴り背後から突きの攻撃を仕掛ける。

それを躲したとき大男は足元の鞘を踏み、体勢を崩して尻餅をついた。

「つてえ!!」

「(しめた!)」

また体を反転させ、すかさず刀を振るったとき大男はニヤリと笑いルーカスを盾にした。

「……っ!!!」

とつさに反対の刀の柄を動いている方の手首に当てる

となるのもちろん体が開いてしまう為ガラ空きになる。

……それを人は“隙”という。

「くくくつ……。いい子だ、おチビちゃん。」
ズサツ!!!

大男は自分の腰に差していた刀でわたしの腹部を貫いた。

「ニアーーーーツツ!!!」

カルガンとルーカスが同時に叫ぶ。

「ーーーーっ!!!」

痛い、痛い痛い痛いっ!!

なんだこれ、ちくしょう!!痛い!!

「気が変わった。ちよつと一緒に来てもらおうか」

カラン…。

全身が脱力し右手に持っていた方の刀を地面に落とした

「なんの騒ぎだ……。……。ニア?!ど、どういう状況だよい!これ!!」

…あれ?マルコさんの声が聞こえる…。気のせいかな?だって隊長達はいま会議のはず…。ああ、意識が飛びそう

でも、まだ気絶するわけにはいかない

「くくくくつ…遅かったなあ。まあ、お前たち隊長がいなかったおかげでここまで入り込めたんだけどな。さておチビちゃん、もう一回顔を見せてくれ。綺麗なオツドアイの目を」

今わたしは串刺しにされてる状態だ。

大男は刀を引き寄せわたしを自分に近づける。

…この距離ならルーカスにも手が届く。

わたしは精一杯うつむき顔を見せないようにした。

大男がそれを見てルーカスの襟から手を離しわたしの顔を持ち上げようと顎に手をかけた

「(いまだっ!!)」

わたしは意識を覚醒させ、ルーカスの襟やしを掴み後ろに引いた。

彼は突然の動きについて行けず自分の足にひっかかり尻餅をつく。

その時、ガチャン!と、何かが落ちた音がしたが気にしている余裕は無かった。

大男がわたしの突然の行動に驚いている

「5てめー!」

そう言つて左手に持つていた刀を左上から右下に振り下ろした。
ズサアアアツ!!!

その刀は大男の胸を切り裂いた

ー！ー！やつた！

ドサツ！

「うゝ あっ!!」

「ニアアツ!!!」

大男を斬り、彼は剣の柄から手を離した。

そのせいでわたしの体は無抵抗に地面に落ち、打ち付けられた

くそつ、痛いじゃないかこのやろう、呪つてやるー！

「ニアー大丈夫か?!」

ルーカスが体を引きずつてこつちにくるがすぐに弾き飛ばされた。

大男がまだ倒れていなかったのだ。

近づいてきたルーカスを張り倒し、遠退きかけたわたしの意識を今

の痛みを数倍上回る苦しみが引き戻した

大男はわたしの腹部に刺さつた刀を抜き、わたしの首を地面に押さ

えつけたのだ。

「っはっ!!はあっ!!」

苦しい、痛い！呼吸ができないっ！

だれかつ…たすけて!!

「このガキ…殺してやる!!」

苦しみに悶え、手足をばたつかせていると右手になにか硬いものが

触れた。これは…触感でしかないけどわかる。銃だ。

多分さっきの音だろう。ルーカスが落としたものだと思う。

わたしを冷静にさせるには十分だった。

周りの音は聞こえない。なにか騒いでるが意識を向ける余裕が無

かった。

触感だけで形を把握し、安全レバーを引いた。

「しねえええええ!!」

「(これならっ!!)」

パン！パン！パン！パン！

わたしを上から押さえつけ、刀を突き刺そうとしてきた大男の額と心臓部に2発ずつ打ち込んだ

いつか教えてもらった撃ち方だ。致死率の高い撃ち方。手加減してる余裕なんてない、殺さなきゃ殺される！

わたしの頭にはそれしかなかった。

次の瞬間大男の力が抜けるのがわかった。体重がグラリと前へ傾く

あ、これ潰されるやつ。

間抜けな事を考えると無抵抗に体が動き温もりに包まれる。

ルーカスがわたしの腕を引き、抱え込むようにして抱きしめていたドサツ

大男が倒れた。

危なっ。あそこにいたら完全に窒息死してたわ。斬首じゃなくて窒息だ窒息。

…どっちも苦しいじゃないか、ばかやろう

「船長!!」

「このガキっ！よくも！」

周りの敵たちが一斉に襲いかかってくるがそれは騒ぎを聞いて駆けつけた隊長たちの手によって一瞬で鎮圧された。

「つつつニア!!無事かつ!!」

今度は聞き覚えのある声が駆け寄ってくる。意識は朦朧としていて視界がぼやけてきたけど、声の主を知りたかった。

「ニア、ニアッ!!」

わたしを抱いているルーカスも必死に名前を呼ぶ。

ああ、ルーカスもボロボロじゃん。

「ルカ…にい。ケガ…。しんじゃ、や」

治って。ルーカスの痛みをどうか取り除いてください

そう強く念じたのも束の間。わたしの意識は限界でゆっくりと闇に落ちていった

—ルーカスサイド—

甲板で見張りをしていたら他の海賊が乗り込んできた。

「はっはっは！なんだあ？隊長たちは今いねえのか。ラツキーだぜ！」

こいつ…見覚えがある。確か手配書があつたよな。

「ブレイク船長！白ひげなんて恐るる足りねえです！やつちまいますよう！」

ブレイク？ブレイク…ブレイクってまさかっ!!

「3億3000万ベリ、”破壊王”ブレイクか！」

「俺を知ってるのか。光栄だな。さあて…殺すか」

俺はそいつにあっさり負け、しばらく気を失っていた。

意識を取り戻すとニアがそいつと戦おうとしていた。よせ、ニア…破壊王がいくら油断してるからって言ってお前の敵う相手じゃない！

それでもニアは背を向けなかった。

逃げてくれ…頼むっ!!

そんな俺の心中が伝わるはずもなくニアは破壊王が出した条件を飲み戦い始めた。

はつきり言つて俺は感嘆した。戦闘は初めてで刀を扱う事だつて今までなかったはず。なのに目の前の子どもは自分の身長より長い剣を二本、軽々と振り回してる

ザクツ！

ニアが4手目を振り下ろした時、破壊王が俺を盾に使いそれを見たニアは振り下ろしていた方と反対の剣の柄を手首に当て、攻撃をそらした

それを見た破壊王はニヤリとわらい約束を違え、ニアを刺した

「ニア…ツツツ!!」

カルガンと叫び声が被る。俺らの悲鳴にも近い叫びを聞いて人が集まってきた。その中には隊長たちもちらほらいて安心した時、俺の体が後ろに引かれた。ニアが俺の安全を確保しようと襟やしを掴み引っ張ったようだ。だが突然の動きについて行けず受け身を取れずに尻餅をつく。

驚いてる破壊王の隙をつき、ニアは破壊王を斬った。

串刺しにされてるニアは無抵抗で地面に叩きつけられ苦しそうな声を上げる。俺は体を引きずってニアに近づこうとするが破壊王の手によって弾き飛ばされた。

こいつつ…まだ動けたのか！大人しくやられとけよ！

「しねえええええ!!」

破壊王が逆上し、ニアを押さえつけて剣を突き刺そうとした時…

耳を刺すような発砲音が響き渡った。

ニアが破壊王の頭と胸を撃つたのだ。

コ…コロラド撃ち?!

しかもあれは…俺の銃?!

見覚えのある銃を破壊王に向けているのを見て俺は無意識に銃を入れてるホルダーを触った。そこにはあるはずのものが無い。

…間違いない、俺の銃だ。

さつき尻餅をついた時に落としたのか…。

つ!!そんな事より!あの状況だと倒れる破壊王にニアが潰されてしまう!!

俺は必死に手を伸ばしニアの腕を掴むと力一杯抱き寄せ、守るように抱きしめた。

ドサツ…

破壊王が倒れ、周囲の敵の仲間たちが騒ぎ出すがその場にいた他のクルーや隊長たちによりすぐに騒動は収まった。

「ルカ…にい。ケガ…、しんじゃ、や」

俺に甘えるように頭を擦り付けてくるニア。

普段なら可愛いと思うところだが、この状況だとどうしても笑えない。

ガクツとニアの力が唐突に抜け、俺は慌ててニアの体を支える…と
「「え?」」

その場にいた全員が信じられない光景を見たかのように驚きの声をあげた。

それもそうだ。満身創痍だった俺の怪我が嘘だったかのように消

えたのだから

「…何が…おきた？」

誰かがみんなの気持ちを代弁するかのようにはやく。静寂が訪れた空間で一番最初に我に帰ったのは長男のマルコ隊長だった。

「考えるのは後だよ！まずニアの手当てを！！ハルタ！船医とナースを呼んでくれよ！ビスタ！この片付けを頼む！サツチ！ニアを運べ！」

「「わかった！！」」

さすが隊長、行動が早い。

俺は素直にニアをサツチ隊長に渡すと立ち上がって自分の銃を拾い見つめる

…守られた。戦いの、た、の字も知らないような子どもに身を挺して守られた。

「ばかやろう…」

銃を握りしめて呟く。俺たちなんて置いてさっさと逃げればよかつたものを…

自分の弱さが不甲斐なくて悔しい。なのにニアが俺たちの為に戦ってくれたのが嬉しい。

「コロラド撃ちはな、だいぶ前だが俺が教えた」

ふと見るとイズウ隊長が俺の近くにいた。

イズウ隊長もさっきの一部始終を見てみたいだ。二丁銃を両手に持っているからきつと破壊王を撃つ準備をしていたのだろう。

「当時はまだ言葉も上手く喋れないガキに教えたところで覚えてないだろうと思ってたがニアがちゃんと話しを聞いてくれるから嬉しくて色々戦い方についてみんなで教えていたんだ。あいつは、それらをちゃんと覚えていた。だから今日、戦えたんだ」

隊長たちに教え込まれたことを生かしたって事か。

「分かる」と「できる」は違う。なのに、初めての実戦にも関わらずあいつはやったのけた。凄いやつだな。俺たちの妹は」

「イズウ隊長…。俺…」

「悔しがってる暇があるなら鍛えたらどうだ？で、ニアが起きたら説

教でもなんでもすればいい。お前だつて言いたいことが山ほどある
だろ？」

「……っ!!はいっ!!」

そうだ。ニアはまだ死んで無い。

絶対に戻つてこい、バカニア!

起きなかつたら許さねえからな!!

―サイドエンド―

第8話 痛いものは痛い

「ほらニア！今日はいい天気だよ！」

「ニア、林檎剥いてきてやったよ！」

「……………なんか騒がしいな。」

「おっ。この林檎甘いな！」

「なんでお前が食べてんだよ、イゾウ！」

「はははっ！いいじゃねえか、すこしくらいよ！」

楽しそう。

わたしも混ぜてー！

「……………いちゃ。……………」

「元氣よく『混ぜてー！』と言ったつもりだったけど、声がうまく出せなかった。」

「!!!」

「ニアっ!?目が覚めた?!」

「んんんん？目が覚めた？つて……………わたし寝てたの？」

「まーくん、はるにいい、いーちゃん？」

「なんでそんなに心配そうな顔してるんだ？」

「体を起こそうとするとマルコさんが人差し指でおでこを突き強制的に横にする。」

「いでででで！指の力強すぎかよ！」

「まだねてろよい。血が足りてないから休んでろ。」

「無茶をするな、ニア。今回ほど肝を冷やしたことはないぞ。話はルーカスとカルガンから聞いた。…よく頑張ったな」

「ニア、一週間寝てたんだよ！もう起きないかと……………おもっ…」

「あっ！思い出した。そう言えばわたし大男と戦って刺されたわ！」

「そういうことか！すっごい心配かけたみたいですねごめんなさい！」

「というか1週間も寝てたのわたし!?よく生きてたな!!」

「今生きてるのは奇跡です、ほんと!!自称天使野郎の陰謀じゃないの?!つてくらいの奇跡です！」

「ごめんなしやい。」

よし、謝罪タイムは終わりっ！

「にいちゃー！おみず、ちよーだい」

甘えてやりましょう、ええー！とことん甘えてやりますとも！

怪我の功名つてやつ。あれ？なんか使い方違う？まあ、いいか

「……………ふっ、わかったよい。ちよつとまってる」

マルコさんが席を立つと部屋を後にする。

「お腹空いてないか？マルコが剥いてきてくれた林檎ならあるぞ、食べるか？」

「うん」

頷くとイズウさんがわたしの体を起こし林檎をフォークで刺すとわたしの口元に持つてくる

「じぶん、できる」

「俺がやりたいんだ。素直に甘えておけ」

…恥ずかしいけど、逆らったら殺されそうな気がするから素直にいうこと聞いておこう。

大人しく食べさせてもらおうとハルタさんが身を乗り出した。

「ちよつとーイズウずるい!!俺もやる!」

そこ張り合う所?!

「わかった、わかった!わかったから殺気を振りまくな!」

いや、これで殺気振りまくって何!?どうしたの、ハルタさん!!

イズウさんとハルタさんが交代で林檎を食べさせてくれる。

わたしは要介護者か!

「食欲はあるみたいだな、なら大丈夫か。怪我の具合は？」

「……………ズキズキ」

「だろうな。思いつきり奴の刀が貫通してたもんな。よく生きててくれた」

イズウさんが頭を撫でると涙腺が緩む

…すごく怖かった。

ボロボロで動かないルーカスを見たとき放心しかけた。

カルガンが背中を斬られるところを見たときかなり頭にきた。

でも恐怖で身が竦んですぐに動けなかった。

震える体をなんとか動かして力の限り戦ったけどわたしはまだ力不足だ。

「ニア……。」

ポロポロと涙が溢れる姿を見てイゾウさんとハルタさんが手を止め、食器をテーブルに置き、イゾウさんがわたしを抱きしめる

「大丈夫だ、誰も死んじやいない。カルガンもルーカスも無事だ。お前も生きてる。だから泣くな」

「ちがう……。」

「違う?」

この想いはどうやって伝えればいいんだろうか

弱い自分が嫌いだ。子どもだからしょうがないなんて言葉で諦め切れる程簡単な問題じゃない。

こんなふうに関心と迷惑かけちゃいけないのに……

今、この時間だってそう。

隊長が2人もわたしのところにおいて1人は水を取りに行ってくれている。

みんなの時間をたくさん奪ってしまっているんだ。

どうしよう、わたし……

このままここにいてもいいのか? 迷惑じゃないかな? 足手まといじゃないかな?

……でも、きつとこの疑問を言ったらまたみんなに気を遣わせる。

自分で答えを見つけられない。

「違うって……どういうこと?」

だめだ。誤魔化さなきゃ

どうやって話を変えようか考えていると医療室のドアが開いた。

—イゾウサイド—

ニアが大怪我を負って一週間近くが経つ。

なんでも船医が言うにはニアの血液型は珍しく、ストックがないらしい。輸血ができないからニアの生命力に任せる他ない。と

なんとか一命はとりとめたが目が覚めるのは時間の問題。

俺たちは血の気が引いた。海賊をやっているのだからこんなことは初めてじゃない。けれど、自分の半分も生きていないような子どもを守れなかった悔しさはなによりも大きい。

ルーカスもカルガンも同じ気持ちだったのだろう。ここずっと道場がむしやらに修行している。ヤケになっても身に付かない事くらい本人たちもわかっているはずだ。けれど、どうしても自分が許せないんだろうな…

近くにいながらみすみす怪我をさせて、身を挺して庇われた自分自身の弱さが

「ほらニアー！今日はいい天気だよー！」

そう言つてハルタが医療室のカーテンを開ける。

ニアが目を覚ました時に俺たちが暗い顔をしていたらニアが自分を責めてしまうかもしれないからとあいつは元気に振る舞っているらしい。

ハルタもついこの間まではまだまだ子どもだったのにニアが船にのつてから立派な“兄貴”なったもんだ。

「ニア、林檎剥いてきてやったよーい」

マルコが部屋に入ってくると林檎の乗った皿をテーブルに置く。

未だに目が覚めないニアに対し、もう起きないのではないかという恐怖を抱く。

「……………いちゃ……………」

俺たちがいつものノリでバカやってると小さな呟きが聞こえ一斉にニアの方を見ると彼女は顔をこちらに向け俺たちを見ていた。

やっと目を覚ましたか！この馬鹿！！

ニアが体を起こそうとするがそれをマルコが止める。

まあまだ寝ていないといけないうな。なんせ血がたりてないんだから。

俺たちが心配したことを伝えると『ごめんなしい』と舌足らずに謝る。

だが、すぐにコロツと表情を変え無邪気に笑った

「おみず、ちよーだい」

…そうか。こいつがいつも笑顔なのは俺たちに心配をかけないためか。

子どもの割に大人しくしているのも俺たちに出来るだけ迷惑をかけたいため。

…：今頃気づくとは情けない。

こんなチビに気を使わせていたのか、俺たちは

マルコも俺と同じ思いだったのか一瞬間をしかめたがすぐに微笑みに変わり「まつてろ」と部屋を出た。

…マルコが戻ってくるまで気を紛らわせてやろうと俺はあいつが剥いて来た林檎を食べさせてやることにした。

…：そうだ！ニアに「あーん」ができるいいチャンスだ!!

ニアの体を起こすとフォークで林檎を刺し、彼女の口元に持つていくと恥ずかしそうに「じぶんでできる」と言ったが、こんな機会を逃すわけがないだろう！

「俺がやりたいんだ。素直に甘えておけ」

そういうと林檎をシャリつとすこしかじる。

…：小動物か！可愛すぎる!!

内心でそんなことを思っているとハルタが殺気立つものだから交代でやることにした。

まったく、すこしは大人になったと思ったが…：変なところで子どもっぽいな。

…：…：そう思う俺は大人気ない…：か？

傷の具合を聞くとズキズキすると言った。まあ、思いつきり貫通してたもんな。そりやそうだろう…：。

俺が頭を撫でてやると彼女はポロポロと泣き出した。

…：…：怖かったんだろうな。

「大丈夫だ、誰も死んじやいない。カルガンもルーカスも無事だ。お前も生きてる。だから泣くな」

俺は彼女を抱きしめそう言う「ちがう」と小さく呟いた。

…：違う？

殺されかけて怖かった訳じゃないのか？

どう言う意味か聞こうとしたら医療室のドアが開く。

マルコが戻ってきたか。

…さっきの意味を知りたかったが…まあ、後でいいか

―サイドエンド―

「ニアーイー!!」

マルコさんが戻ってきて、その後ろからぞろぞろと人が入ってきた。

「グラララ!ようやく起きたか、寝坊助。心配かけやがって!」

オヤジさんが自ら?!?!

やばい、それはやばい!!

死刑?わたしもしかして死刑?!むしろ私刑?!何それこわい!!

「とーさん、おはよー!」

とりあえず挨拶!挨拶するときやなんとかなる!…と、思いたい

「……………おはよう、寝坊助。怪我の具合はどうだ?」

「なおる、した!」

「治るか!!馬鹿!!」

あるえ?一気に騒がしくなったなあ…

まあでも、このくらい騒がしい方が落ち着くなー

慣れっこわい

「まだしばらくは絶対安静だ。血をだいぶ失っている。船医として言うべきじゃないが言いたいから言う。よく生きてたな、ニア」

船医さんが真顔で言った。

それ、奇跡の生還を遂げた人に言うセリフ!?

しかも言うべきじゃないけど言いたいから言うってどんな理由?!

自由か!

「ニア…。お前あの時…俺に…なにかしたか?」

あ、ルーカス!!カルガンもいる!よかった無事だった!!

「ルカにい、カルにい!けが、へいき?」

「……っ!!なんで、お前は人の心配してんだ!!」

「自分の心配しとけ、バカニア！ーっ、」
怒られた?!なんで!?

わたしを叱りつけた時、カルガンの表情が少し歪んだ。
そういえば、背中を斬られてたような…。

わたしのせいで怪我をしたんだ。どうしよう…。

ん? そういえばわたしあの自称天使さんに何か力をもらったよな?
?

拒絶がどうか言ってた気がするけどなんだったっけ?

…とりあえずやってみよう

”カルガン”の”受けた傷”を”拒絶”する!

「ーっ!?!」

カルガンの表情が一瞬にして驚きに変わる。

…: 成功したのかな??

「ニア。」

ビクッ!

いつもより低い声で短く呼ばれ思わず跳ね上がってしまった。

「お前は能力者…なのか?…いや、そんなはずはない。だって赤ん坊の時からこの船にいて、隊長や俺たちがずっとそばに居て…悪魔の实がお前のところに渡るわけ…」

なんか1人で自問自答してる。

能力があるのなら能力者であってほしいと遠回しに言われている気分だ。

「なんでもない。ゆっくり休んでくれ」

そういうと、カルガンは背を向けて部屋を後にした。

その後、微妙な空気が流れたがマルコさんが持ってきた水をわたしに飲ませると「解散!」と、人払いをしてくれた。

さすが隊長。助かりました

—白ひげサイド—

ニアが怪我してそろそろ一週間か。

ニアをぶっ刺したやつはニア自身が倒しちまったしそいつの仲間

も殲滅しちまったし…これでニアが死んだらおれはどうしたらいいんだ？

平静を取り繕ってはいるものの正直腹わた煮えくり返ってる。

悩んでるおれの隣をマルコが横切った

その時、マルコがこそつとおれに耳打ちしたのを聞き逃しはしなかった。

『ニアが目を覚ました。』

たしかにそういった。

グラララ…！ようやく起きたか、馬鹿娘！

マルコが水を持って戻ってきた時、その後ろにはニアを心配してた馬鹿息子共が付いてきていた。

マルコがニアが目を覚ましたことを知らせたんだろうな

こんな時になんだが…カルガモみてえだ…。

「グラララ！ようやく起きたか、寝坊助！心配かけやがって！」

おれが診療室に入り声をかけるとニアは驚いた顔をした。

「とーさん、おはよー！」

無邪気な笑顔で挨拶をする。

とーさん……

そうか、こいつにとつておれはちゃんと”父親”なんだな。

嬉しいじゃねえか！グララララ！

「おはよう、寝坊助。体の具合はどうだ？」

「なおる、した！」

「二治るか！馬鹿！！二」

元気いっぱいにわかりやすい嘘つきやがったなこいつ…

おれの代わりに息子たちが叱りつける。

そりやそんなすぐに治るわけねえだろ

だが、ルーカスの怪我が治ったのは間違いなくこいつの仕業だろう。自覚があるかは知らないがおれは今それを聞くことはできなかった。

カルガンがニアと話し何かいいかけて止めて部屋を出た。

マルコがニアに水を飲ませると「解散だよ、ニアを休ませろ」と

いい遠回しに人払いをした。

そこに残ってるのは、おれとマルコとハルタとビスタとサツチとイゾウ。

比較的ニアといつも一緒にいる隊長たちだ。

グラララ、さすがマルコ。言わなくてもおれがいたいことがわかるみてえだなあ！

休ませてやりたいが色々と書きたいことがありすぎる。

悪いが少し付き合ってくれな、ニア

―サイドエンド―

第9話 会話する力を身に付けたい

人がいなくなっただのはいいけど、残ってるメンバーがわたしを逃がしてくれそうにない!

だって、マルコさんに、サッチさん、ビスタさん、ハルタさん、イゾウさん、オヤジさんだよ?!

尋問する気満々でしょこれ!!やっぱり私刑?!

「なあ、ニア…。お前あの時、ルーカスに何かしたか?」

オヤジさんがわたしの寝てるベッドに腰をかけてわたしの方を見ながら言った。

あの時って、あの時だよなあ。わたしがルーカスに抱きしめられて気を失った時。さつきルーカスいたけど、怪我してなかったから「ルーカスの怪我治したのはお前か?」ってことだろう。

というか、視線が怖いです、本当に

うーん、隠しても仕方ないし、言うか…?

でもなあ……。いや、隊長とオヤジさんしかここにいないから大丈夫、か?

その前に信じてくれるかな?無理がある気がするんだが…

能力者じゃないことは彼らもよく知ってるはず。

だってわたしがこの船に乗ってからわたしが1人になることなんてなかったんだもの。

悪魔の実なんて見たことすらないし、食べた記憶もない。

異能者です(テヘツ☆)なんて言ったところで子どもの戯言程度にしか受け取ってもらえないんじゃないか…

「いいたくないのか?」

色々と悩んで答えないとイゾウさんが聞いてきた。

仕方がない、腹括って話すか。

簡潔に!

「なのおれ、ねんじた」

「は?」

うん、予想通りの反応ありがとう!

え？お前の説明が悪いって？うるせー！これ以外にどう説明しろってんだ!!だいたい合ってるからいいんだよ!

「ニア、クソまずい果物悪魔の実食べた記憶はあるかよい?」

その質問に対し首を横に振ると全員に微妙な顔をされた。：解せぬ

次に質問してきたのはサツチさん。

「質問を変えるぞ。なんで賞金首を前にして逃げなかったんだ?」

「にげる、する。カルにい、ルカにい、あぶない」

そう答えるとマルコさんが険しい表情をする

「相手は億超えだぞ?!まずは自分の身を守ることを考えろよい!!どう考えてもお前のが危ないだろー!」

「おくごえ、まいにち、みる。いまさら」

「そ、そうだけど!そうだけど、そうじゃねえ!!」

わあく。マルコさんの久々の怒号だー

ありがたやー。：つて、怒られ慣れてるわたしもどうなの…

そのあと痛いくらいの沈黙が訪れ、オヤジさんがくしやりとわたしの頭を撫でると「あと頼む」と言つて部屋を出た。

え、えっ!?!わたし悪いことした!?

何!!? 処刑の準備??!

「はあ…。」

隊長たちが揃つてため息を漏らす。

何なの本当に!!わたしのせい?!やっぱ言わない方がよかった!?

「ぐ、ごめつ、なさ…!あの!…あしでまとい、なる。しない…がんばる…から」

ああつ、もう!!

思ったように喋れない!なぜだ?!どうしてもカタコトっぽくなる!

発達か遅れてるわけじゃないのかな?

言葉の練習しよう、そうしよう

きつと今まで脳内ツツコミでしか騒いでなかったからだ!きつとそうだ!練習あるのみ。やればできるはず!!

…つてあれ？何故みなさんそんな驚いた顔でこつちを見るんですか？

何かまずいこといった!?

「…いや、ニアが悪いわけじゃない。…もう少し成長してからにしようと思ったがどうやら時間は待っててくれないようだな」

「そうだな、怪我が治ったら覚悟しとけよい」

え？えっ!?!それってわたしクビですか?!

もうこの船にいるなってことですか!?!危険すぎるから船を降りろと?!そう言うことか!?

いやいやいやいや!たしかにこんな怪我毎回されてたんじゃ、たまったもんじゃやないだろうけど!ここで放り出されたらわたしどうすればいいの!?!生きていけないきがする!

やばい、本気で泣きそう!

「ニア…?…:…:…ツ!!ど、どうしたの!?!」

「傷が痛むか?そろそろ休ませよ…」わた、し!」…?」

嫌だよ!1人にしないでよ!

つて、何てつたつてこんな悔しいんだ!

やっぱり弱いやつなんて必要ないんだ!なら、必要とされるために強くなるしかない!

強くなるから…:見捨てないで!!

「いまっ、つよい、しない。でもっ!つよい、する!だからっ…:ここ、いたい!みんな、わたし…:きずに、せきにん、かんじる。しないで!これ…:は、わたしの、きずだから!」

「わたしが選んだ道だから…」

…:ガラじゃないぜ、ホントに

「どうしたニア?…:とりあえず落ち着け!ほら、涙拭いてやるからこつち向け」

サッチさんの優しさが痛い

涙を拭いてくれるサッチさんをみながら話を続ける

「つよい、する、からっ…:いらないうって、いう。しないでっ!」

「「ん?」」」

なんかすつとぼけた声がきこえたきがしたのは気のせいだと思いたい。

あ、たくさん喋ったせいかな。すごい疲れた。横になると眠気が襲ってきた。

もう子どもの体嫌だな。成長したい

まあ、とりあえず怪我が治るまではここにいさせてもらえるっばいから、それまでに策をかんがえよう、そうしよう。

……よし、寝よう

「おい、ニア？今のどういう………つて」

「二二寝てるし!!!」

夢の中でコントのような突っ込みが聞こえた気がする。うん、きつと疲れたんだな。

じゃあ、おやすみなさい

—マルコサイド—

ニアに水を飲ませ、人払いをした。

休ませてやりたいが今は情報が欲しい。

ルーカスの怪我が一瞬にして治った理由

ニアは能力者なのかとか……いろいろ聞きたいことがあるすぎる

オヤジがまず「ルーカスに何かしたか？」と聞いた。

……ニアは考える素振りを見せるものの答えようとはしなかった。答えたくない……のか？

まあ、そうだよなあ……

仮にニアが何かしたとしてそれが能力じゃないってんなら結構な大ごとだ。

しばらくの沈黙の後、ニアが口を開いた。

「なおい、ねんじた」

……うん。言ってる意味がわからねえよ。

ニアの言動にいちいち突っ込んでたら埒があかねえが、本当のことだとして、こいつが治れて念じて怪我が治るんだったら相当な問題だよ。

これからますます外に出すのが難しくなる。

……また過保護とか言われそうだよい…。

悪魔の実を食べた覚えはあるかと聞いたら、首を横に振った。

俺たちも与えてないし、ニアが船に乗ってから誰かが手に入れた記憶もない。

……おいおいおい……まじかよい。

非能力者で一瞬で人の怪我が治せるって外部に知られたら相当ま
ずいぞ!?

「質問を変える。なんで賞金首を相手に逃げなかつたんだ？」

サツチがきいた

逃げ切れるかは別としてこいつは背中を向けずに立ち向かったと、
カルガンが言っていた。無茶するやつだよ

「にげる。カルにいい、ルカにいい、あぶない。」

仲間の…家族のために戦ったのか。

自分が死ぬかもしれないのに

「相手は億超えだぞ?!まず自分の身を守ることを考えろよ!!どう考
えてもお前のが危ないだろ!!」

今のニアが億超えの賞金首と戦うなんて、リスが熊に挑むようなも
のだよ

まあ、勝つちまつたけど……

まだ戦闘に関する事や武器の使い方とかの”知識”を教えるだ
けで実践はおろか武器すら持たせたことねえってのに……

こいつは天才かよい。

「おぐぐえ…まいにち、みる。いまさら」

……それは俺たちのことかよい?!いや、間違いではないが!!

あつてるけどなんか違う!!

その後また沈黙が流れる。

何か思ったのかオヤジが席を立ち部屋を後にした。

「「はあ……」」

全員のため息が重なる。

ニアが思ったより元気だという安堵とこれからの不安と守り切れ

るかという心配の入り混じったものだ。

…それが良くなかったのか、ニアが泣いてしまった。

”わたしの傷に責任なんて感じなくていい”

そう言った。

無茶言うなあ…。ガキが背伸びしてんじゃねえよ

……いや、させてるのは俺たちか。

その小さい体にどれだけの重荷を抱えてるんだか…。もう少し頼って欲しいもんだよ

「つよい、する、からっ…いらぬ、いう。しないでっ！」

うまく回らない舌で一生懸命喋るニア。…ニアがこんなに取り乱すのは初めて見たよ………ん？こいつ今、なんて言った？

「それってどういう………って寝てるし!!」

みんな同じことを思ったんだろうよ。ポカンとした顔してるサッチが聞こうとしたらすでにニアは寝息を立てていた。

「俺、ニアがものすごいよろしくない勘違いしてる気がするんだけど気のせいかな？」

「奇遇だなハルタ。俺もだ」

満場一致ってやつか。

これで知らない間に消えてたらどうしてくれようか、このガキ「ニアが船を降りるって言い出したらどうする？」

ハルタが真剣な顔をして俺たちに聞いた。

「ほっぺたつねる」

「デコピンする」

答えたのはサッチとビスタだ。

真顔で言うんだからおもしろえもんだよ

「なんでおまえらそんな優しいんだよ……」

まあ、多分俺もおでこ小突くくらいだろうけど
ははっ！みんなニアに弱いんだな！

とりあえずここに布団敷いて雑魚寝でもするかよ。

ニアが心配でこの一週間ろくに寝てなかったからな

—サイドエンド—

「ん……」

みなさんおはようございます。1つ質問があります

Q. これは一体どう言う状況でしょうか。

A. みんなで雑魚寝

修学旅行じゃないんだから自分の部屋でねればいいのに。

心配してくれるのは嬉しいけど足の踏み場がないぞ、これ
というか、布団をかぶれおまえら

風邪引くぞ。

わたしはみんなを踏まないように、起こさないようにゆつくりベツ

ドから…

ドテツ

「いたい…。」

落ちました。

このベッド高いよ！これからわたしも床で寝ようかな
んなことしたら怒られるかも。。。

ああでも、みんな相当疲れてるのかな。今の音で起きないなんて
結構すごい音したけどなあ。おでこ打った…。赤くなつてなきや
いいけど

そつと蹴飛ばされてる布団を5人にかぶせる。

「カルに…いる、する。かな？」

そうだ、カルガンの背中具合がすつごい気になる

ちゃんと治せたかな？本人に聞いてみよ

昨日すつごい気まずそうな顔してたけどまあ大丈夫でしょ。

寝ているみんなを置いて、部屋から出た

ドアノブ自分で回せるようになったんだよ!?成長だよね！

—イゾウサイド—

「…なんでベッドから落ちるんだあいつは」

ニアが部屋を出た後、ドアを見つめて俺は眩いた。

「そつと布団かけていったね。優しいなあ」

ハルタ、なぜお前はそんなに呑気なんだ。

ニアが起きた気配で俺たちも起きた。あいつは俺たちが寝てると思っただのかそつと布団をかけて部屋を後にした。

：つたく、怪我人がちよろちよろするなよ

カルガンのことを言っていたからきつと探しに行っただろう

それはいいとしてあいつ落ちるの好きだな。

「俺、思わず声出しそうになっただぜ。すごい音したけど大丈夫かな？」

「傷が開いてないならいいだろう。さて、今日は誰がニアを見張る？」

言葉が物騒だぞ、マルコ

間違いではないが……。目を離れた隙に無茶して傷が開いたなんて言ったら、たまったもんじゃないからな

「俺が出来る限り一緒にいよう。非番だしな」

「了解。頼んだよい、ビスタ」

俺たちは布団を片付けそれぞれの仕事に戻ることにした。

—サイドエンド—

第10話 不穏分子

部屋を後にしカルガンを探して廊下を歩く。

どこにいるのかな？

もしかしたら甲板かも：

一旦戻ってみんなにカルガンの居場所聞いた方が早いかな？

なんせ外に出してもらえない。箱入りか、わたしは

仕方のないことなんだけどね。

初めて鏡見た時、自分で「誰だこれ」って言いたくなるくらいの衝撃を受けたのはよく覚えてる

髪サラツサラだし、肌はツルツルしてるし。

鏡の前に「鳴花ミ〇ト」ちゃん似の可愛い子がいた時は、えっ?!まさか自分?!ってなった。ツノは無いけど

銀髪に黄金と空色ってどんなチョイス。

まあ、とりあえずよくわたしあんなに迷子になれたなってくらい目立つ容姿してたのにはびっくり

なんていうの？自分で言うのもなんだけど、生きてるだけで目立つって感じ

そんなことを考えながらカルガンを探していると笑い声が聞こえた。

「ゼハハハハ！ニア！怪我はもういいのか？」

こ、の、こ、え、は…

「……………っ、ティーチ…にいちや？」

「おう！長いこと寝てたなあ。もう歩いて大丈夫なのか？」

一見すると妹を心配する良い兄だろう。

けど、わたしはなんとなくこの人が苦手だった。苦手だったから極力避けてきた。

「へいき」

一言だけ返すとその場をさろうとするが彼がわたしに近づき乱暴に頭を撫でてきたため離れることができなかった。

「そうか、そうか！ゼハハハハ！そりやよかった。…なあニア。この

間、破壊王を殺しただろ？なんとも思わなかったのか？」

破壊王を殺した……………

【人を殺した】

それはわたしが考えないようにしていた事実。

わたしが、この手で、撃ち殺した。

突然胸が苦しくなる。

まだ考えたくなくなった、認めたくなかった。

けど、紛れもない…現実。

自覚した途端に吐き気がこみ上げてくる。

ぐらりと視界が歪み膝をついた。呼吸が浅くなり苦しくなる

「おいおい、大丈夫か？ニア」

彼の言葉はとても乾いていて心配されてる気がしなかった。

「はっ…はっ…はっ」

苦しい…息ができない。

「ゼハハハ…。悪いな、まだ受け止めれる事実じゃなかったか。じゃあ、話を変えよう。ルーカスのあの満身創痍だった怪我と、カルガンの背中での大きな傷を治したのはお前らしいな。ニアは能力者なのか？」

カルガンの背中での大きな傷…。ああ、よかった…治っていたのか。なんでこいつが知ってるのかしらないけど今はいいや。

……………なら、早く部屋に戻ろう。

今は何も話したくない、早く消えて欲しい

胸を押さえて乱れる呼吸を必死に整える。

会話ができないことに焦れたのかティーチはわたしの背中をさす

り、落ち着け。と促す

「落ち着け、ゆっくり息をしろ。」

一見優しいように感じる。けどわたしにはその行動がどうしても優しさには思えない。

例えるなら道具を手入れしているような…そんな感覚。

この人の目に、わたしは“人”として映っていない…そんな気がしてならなかった。

「ニア!!?」

ビスタさんの声が聞こえた。

わたしがうずくまってるのを見て「どうした?!」と心配そうに駆け寄ってきた時、ティーチが小さく舌打ちをしたのを聞き逃さなかった「どうしたんだ、ニア…。ティーチ、何か知ってるか?」

「わからねえが…多分過呼吸だろうよ。ちいせえ体に色々背負い過ぎたんじゃねえか?」

ビスタさんがティーチと代わってわたしの背中をゆっくりさする「ゆつくり息をしろ。大丈夫だ、俺がいる。……………そう、良い子だ」わたしが落ち着くとビスタさんが頭を撫でる。わたしはビスタさんを見てからティーチをみた

————怖い————

純粹にそう思った。

嫌だ、嫌な目をしてる。何が嫌なのかわからないけど、何かがとても嫌だと思った。目の奥に潜む獰猛で野心に溢れるギラリとした光。その目をわたしに向けたいで欲しい。切実にそう思った

確かな恐怖心と背筋が凍るような寒気がわたしを襲った。

思わずビスタさんに抱きつき顔を埋めた。

ティーチに早く消えて欲しかった

「ニア?どうしたんだ本当に。……………震えてるのか?」

「ゼハハハハ!ビスタ隊長がいるんなら大丈夫だな。俺は用事を思い出したから失礼するぜ」

「……………う?ああ」

そう言い残してティーチは去っていき、ホツとしたがわたしの震えはしばらく止まらなかった。

——ティーチサイド——

ロビーを歩いてると前から俺らの可愛い妹が歩いてきた。

声をかけると少し怯えた表情をした。そういや、こいつ事あるごとに俺を避けてたなあ。…なにか勘付かれたか?

こんなガキがまさかなあ…。

そういや、こいつ破壊王を殺したんだっけか？

平気そうな顔してるがこの歳で人を殺すことに抵抗はねえのか？

その事実を突きつけるとニアは膝から崩れ落ち呼吸を乱した

…考えねえようにしてたのか。

まだこいつには重すぎる話題だったみてえだな

まあいい。ルーカスとカルガンを治したこいつの力は使える。

能力者なのかどうか、それが知りたかったがこいつは呼吸をするの

に精一杯で俺の質問に答えられる余裕がなさそうだった

ゼハハハハ：これは人を殺した事実を受け止めきれないのか、はたまた別の理由か。どっちにしろこいつを手懐けるのは骨が折れそう
だ。

落ち着くように促してるときビスタ隊長がきた。

チィ：。隊長様のお出ましか

こいつが1人でいることなんて滅多にねえからいろいろ聞きた
かったが時間切れだな。

ビスタ隊長にニアを任せて俺はその場を後にした

俺の野心はまだ知られるわけにはいかねえんだ

…ニアは気づいてるかもしれないねえが…………

さて、どうやって手懐けてやろうかな！ゼハハハハ！

―サイドエンド―

―……っはあっ!!

怖かった！なにがともあれビスタさんのおかげで助かったぜ、グツ
ジョブ、ビスタさん！

まだ、悪寒が止まらないけどなんとか動けるようになった

ふうっ。

わたしが平静を取り繕っているとビスタさんが怪訝な顔をした。

「……………ニア。何か隠してないか？」

ドキッ！

なんでわかるんだ!!エスパーか！

わたしそんな顔に出てないと思うけど（思うだけ）

「なにもー」

「…………お前が隠し事したり嘘をつく時、オッドアイのその目が同じ色になる」

ええええええ?! そんな事ってある?! 目の色が物理的に変わるって普通に考えておかしくない?! わたしそんな厨二じゃないよ!?

「え……。ほん、と? いま、いつしよ?」

「…………な訳ないだろ、物理的にありえんぞ。あんなに怯えてたのになにもないわけないだろう。で、なにを隠してる?」

……………騙された!!!

ひどい!! なんてお人だ!!

え? そんなわかりやすい手に引つかかるお前もどうかって?!

素直で悪かったな!!

「ここ、いや。だれ、いるか…わかる、しない」

「わかった。話してくれるんだな? じゃあ、移動しよう。よつと…」

ビスタさんに抱きあげられ、大人しく連行されました。

—ビスタサイド—

マルコに今日のニアの見張りは任せておけと言ってニアを追いかけた俺。

ロビーに行くとニアが膝をついて呼吸を乱していた。

ティーチがニアの背中をさすっている。何があったんだ?

「ニア!?!」

俺が駆け寄るとティーチは場所を譲り、何があったのかと聞くと「わからないが、多分過呼吸だ」と、言った。

過呼吸か、ほんとに何があったんだ…

しばらく背中をさすってやるとニアは落ち着きを取り戻したようだ。

ニアがこんなに取り乱すことはあまりない。いや、昨夜も結構取り乱してたな。だが、あれは例外だろ。なんせこいつは盛大な勘違いをしてやがるからな

俺を見た後にティーチをみるとニアは怯えた顔をし、俺に抱きつい

てきた。

心なしか震えていて、顔を隠すように俺の胸に頭を押し付ける。
何回目かしらんがもう一度言うぞ、ほんとにどうした?! 様子がおかしいぞ!?

「ビスタ隊長がいるんならもう大丈夫だな。俺は用事を思い出したから失礼するぜ」

そう言つてティーチは去つて行つた。

それを確認するとニアはホツとしたような表情をした

…まさか、ティーチが何か……?!

「ニア、お前何か隠してないか?」

その質問に対し、ピクツと少しだけ反応したがいつもみたいに無邪気に笑つて「なにも!」と答えた。

あれだけ怯えてて、なにもないわけない。

………こいつが引つかかるかわからんがカマかけてみるか

「お前が隠し事や嘘をつく時、オッドアイのその目が同じ色になる」

「え……? ほんと? いま、いつしよ?」

………引つかかったぞ!

何故だ!? 普通に考えてありえないだろ!! 色彩がそんな簡単に変わつてたまるか!!

こいつ、頭いいのか馬鹿なのかどっちだ?! いや、天然なのか!?

「な訳ないだろ。物理的にありえんぞ。あんなに怯えてたのになにもないわけないだろう。」

そういうとニアは「なんで引つかかった!? 自分!!」といたげな顔をした。

…こんな表情もするんだな

「……、いや。だれ、いるか……わかる、しない」

つまり、場所を変えれば話してくれる。と。

そう取つた俺はニアを抱き上げ人のいないところまで移動する事にした

—サイドエンド—

ああー、まずったなあ…

なんでわたしあんなわかりやすい手に引つかかったんだろ？

マルコさんがいたら「お前は馬鹿なのかよい?!」とか言われそうなくらいだよ

目の色彩が同じになるって…ビスタさんもよく思いついたな

「ついでぞ」

誰かの部屋の前につくとビスタさんがわたしを片腕に抱え直し空いた方の手でドアを開け、中に入りわたしを降ろすとドアを閉めた。

中には誰もいなくて少しホツとした。

「ここは隊長たちの寝室だ。だから安心しろ、誰か入ってきたとしても隊長かオヤジくらいだ。隊員は滅多なことがない限りここには来ない」

それはありがたい。

隊員を信じてない訳じゃないけどやっぱり信用と信頼ができるのは隊長格だ。

ニアという異端児イレギュラーがもたらす影響は計り知れないだろう。こんな子ども1人に四皇とその隊長達が動くなんて世の中からしたらありえないことだと思う。

だからこそ、わたしの存在は知られちゃいけない気がする。

それを1番わかっているのはまぎれもないわたし自身…

隊長たちもそれを考えてくれている。だから甲板にすら出してもられないのだと思う。誰がどこで見ているかわからないから…

「とりあえず座れ。お前はまだ怪我が治ってないだろう?」

……なんでもお見通しで悔しい

部屋の真ん中あたりで素直に座る。

「それでさっきはどうしたんだ?なんであんなに怯えていた?」

ティーチの事は言うべきか否か悩むところだ。

彼の目の奥にある獐猛で野心に溢れるギラリとした光もの。

それはただ、わたしがそう思うのであって明確な理由がない憶測だけでものをいうのは正直気がひける。

「ティーチにいちや、こわい」

「ティーチが怖い？」

でもここまで親身になってくれる彼に隠し事をしたくない。
わたしは全てを話すことにした

第11話 勘違い…だと

「……ティーチが怖いって、どういう事だ？」

真剣な表情で聞いてくる。

うう…。今のビスタさんもちよつぱりこわい

まあ、「怖い」の種類がちがうからいいんだけど

ビスタさんはちよつとおこってるから「怖い」

ティーチは得体が知れないから「恐い」

ビスタさんの方には温もりがある。心配してるからこそ怒ってくれているのがわかるから安心できる。

けど、ティーチは違う。ティーチの言葉には温かさが無い。

「ティーチにいちや、」なにか、たくらむ。め…。ひそむ…やしん。こわい」

「何か」を企んだような目をしている、と言いたいのか？あいつに野心が潜んでいて…それが怖い。と？」

頷くと「ふむ…」と顎に手を当て考える素振りを見せる

「カルにいい、ルカにいい、けが。きえる。きく、した。わたし、どうぐ…。」

「カルガンとルーカスの怪我が治った理由をお前に聞いたんだな？その時、”人”ではなく”使えそうな道具”を見るような視線を送られたと。」

また頷く。

こんな単語繋げただけの言葉でよくわかるな、この人「さつき過呼吸になってた理由はそれか？」

「それ、は…」

その理由を話したらどんな反応をするだろうか。

ここは海賊船でわたしもこの船の一員だ

人を殺したのを自覚したら吐き気がこみ上げてきたなんて言ったら追い出されてしまうだろうか？

「話してみる、ニア。怒ったりしないから」

優しい。ほんとに優しい

この人たちの優しさに涙が出るぜ。

「ティーチにいちや、いう。ひどいところす。なにか、おもう、しない？ひと、ころす。じかく。きもちわるい」

「……………人を殺したことを自覚したら気分が悪くなったのか……
……そうか」

え?! 一言!!? それだけ!?

海賊やってる以上避けては通れない道だからそんな小さいこと気にするなボケええええ!! つてことか!!

はっ!! もしやこれも調査か?! やっぱりわたしクビ!!?

「ニア。あのな……お前に言っておきたいことがある」

なんかすごい難しい顔してる。

ほんとにわたし何かした!?

「ここは海賊船で、俺たちは海賊だ。だけど、家族でもあるんだ。お前もこの船にいる以上家族だ。家族が傷つくのは誰だって嫌だろう。お前が命をかけてカルガンとルーカスを守ったように俺らもお前を守りたいんだ。年長者として、兄貴としてお前を守ってやりたいんだ。ほかのやつらと同じことを思ってるだろう。今回の一件、お前にそんな大きな怪我をさせたこと、みんなが後悔してると思う。本当はお前がもう少し大きくなってからにしようと考えてたんだが予定を早めてすぐにでも稽古をつけようと思ってる。自分の身は自分で守れるようになってもらうぞ。その方が守る側としてもありがたいからな」

……………わつつ?

あれ? わたしクビじゃないの? この言い方、わたしに修行させるってことだよな?

「イズウが言ってた。お前、昔……と言っても数年前だが暗いのと一人が怖いって泣いていたと。それで、刀とか銃とかも怖くないわけがないって言って武器を持たせるのを反対していたんだ。だから今聞こう、ニア。お前は武器を持つのが怖いか?」

……怖いに決まってるだろそんなの。

わたしは小さくうなずいた。

「…そうか。」

「きずつける、こわい。でも、かぞく。きずつく、もつと…こわい。だったら、たたかう、する。みんな、まもる。」

「……………合格だ。」

ビスタさんがボソツと呟く

へ？合格？

なにが？なんの話？

「つたく。ガキのくせに決意はいつちよまえかよい。これからかなりハードになるぞ。覚悟しとけよい」

どつから出てきた、マルコバイナツプルさん！

そういやこの人、よく船の中でいなくなつたわたしをいつも一番に見つけてくれてたよな?!

何?!リーダーか何かついてるの!?!なんで場所がわかるんだ!!

「…どこから入ってきた、マルコ。」

「ドア以外にどこがあるってんだよい?」

真顔で言うな!!

というか全然気づかなかつた!

「たまたま、お前がニア抱えて部屋に入っていくのが見えたんだよい。気になつたからすこし聞き耳たててただけだ。」

堂々と盗聴宣言!!

ここまですると清々しい!

「この船一番のシスコンだな、お前…。ニアの居場所がわかるリーダーか何かついてるのか?」

「そんなリーダー付いてたらあんなに肝冷やして探し回らねえよい。見聞色に引つかからねえから船内走り回って迷子のこいつ探してたつてのに…。それにシスコン具合ならみんなかわらねえと思うぜ。まあ、いいよい。ニア、とりあえずお前は怪我が治るまでにちやんと言葉を覚えろよい。それはそれで可愛いから放置してたが意思の疎通に時間がかかりすぎるよい」

けんぶんしよく?

なんだそれ

「うちの長男のシスコン具合が日に日に増していく…。これでいいのか、この船」

ビスタさんがなんかボヤいてる

可愛いから放置って…

そこは注意しろよ!!あなた兄でしょ!?

そして怪我が治るまでについて、身についてきた喋り方ってそんな簡単に矯正できるものなの?!

全治どのくらいか知らないけど!!要は船医さんの許可が出るまでについてことでしょ!?

ハードっていうか鬼畜だろ!

言うなればイージーからアンノウンにまで難易度跳ね上がったものだよ!!?

ちくしょう!やってやるー!やればいいんでしょ!?

「とりあえずティーチの件は厳重注意だよ。オヤジにも報告して様子見だな」

「…………初めから盗み聞きしてたなら入ってこればよかつたじゃないか。まあ、賞金首に立ち向かうくらいのニアがかなり怯えたんだ。何かあるのは間違いない」

本当にその通りです。全部聞いてたんかい!

そしてそんな簡単にわたしの話信じてくれるの!?!なんの確証も根拠もないのに!!

「で、誤解は解けたかよ!?ニア」

「ごかい…?」

ゴカイ?あ、それは魚釣る時のエサか。

「なにか勘違いしてただろう?俺たちが家族をいらさないなんていうわけがないじゃないか」

……………。

かんちがい……………だど!?

わたし一人でクビとか置いてけぼりとか考えてたってこと!?!なにそれすつごい恥ずかしい!!泣き損じゃん!

え、気づいてたなら早く言つてよ!!あれ?いうタイミングがなかつ

たか？

え？じゃあオヤジさんが難しい顔して途中ででてったのは別の理由?!わたし処刑じゃなかったの!!?

「ははは!!そんな表情かおもするんだな、ニア！」

人の顔見て笑うなよ！失礼だな!!そしてそんな表情かおとはどんな表情かおだ！

—マルコサイド—

廊下を歩いているとビスタがニアを抱っこして部屋に入っていた。

一瞬しか見えなかったけどニアの顔が少し陰っていた気がした。

「(：またなんかあったのかよい?)」

そう思った俺はビスタが入っていった部屋の近くまで行き、壁にもたれかかった。

「ティーチにいちゃ、こわい」

ニアの声は少し震えていた。

あの気丈な娘がここまで怯えるってことは相当怖かったのだろう。なにがあったのか知らないが…。あとでビスタから聞き出すかよい

「さっき過呼吸になつたのはそのせいかな？」

過呼吸？おいおい…。

あいつ相当参ってんじゃないやねえの？ちよつとケアしてやるか

次、停船したところで少しだけ外に出してやろう。もちろん十分注意はするが…

「ひと、ころす。じかく、きもちわるい」

えーつと、人を殺したって自覚したら気持ち悪くなったってことかよい。

それは海賊やつてる以上避けては通れない道だからな。仕方ねえ事だよい。

ニアの喋り方はたどたどしくて可愛いが理解がワントンポ遅れるな…。言葉もしっかり教えるかよい

あれ？俺ってやつぱり過保護かよい？

ビスタが俺らの気持ちを感じてニアに伝えてくれた。ニアも自分の思いを伝えてくれたよ。

「わたし、まもる…したい」

まだガキもいいところなのに意思が固いな。

嬉しいような、寂しいような…。

俺が部屋に入って声をかけると2人して驚いた顔をした。

そんなに驚かなくてもいいじゃねえかよ…

「どこから入ってきた、マルコ」

「ドアから以外にどこがあるってんだよ？」

ああ、ふつうに気づかなかったのか。

「で、誤解は解けたかよ？ニア」

ニアは最初、きよとん。としたあと、その意味を理解したのか顔を真っ赤にした

えっ…。こいつこんな顔するのかよ!?

「ははは！そんな表情もするんだな！ニア！」

ビスタがそう笑う。

俺も同意見だ。はじめはどうなる事かと思ったがこいつが来てくれてよかったかもしれねえよ

—サイドエンド—

色々話したら楽になった

頼れる大人がいるっていいね！

「さて、お前は早く怪我を治……………ちよつとまで」

「マルコ？どうしたんだ？」

「ニア、お前カルガンの怪我も治したかよ？数時間前、船医がカルガンの怪我の具合を見ようとしたら綺麗に無くなってたって」

あー。迂闊に使わなきゃよかったかな？

それでティーチも知ってたのか。どうやってかして情報を聞き出したんだろうな。その執念怖すぎる

喋るの疲れてきたから頷いところ。たしかにカルガンの怪我も拒絶したし

「自分の怪我は…治せねえのかよい？」

……………つ!!!

そうだ！そりゃそうだ！普通そこ疑問に思うところだよね！しくじった！やっぱり話すべきじゃなかったんだ!!

って、ちよつとまって。落ち着けわたし

あの自称天使はなんて言ってた？

『自分以外の人に起こった出来事は全否定できる』

『自分に起こった出来事は感覚に携わる程度にしか否定できない』

…それって……………それってまさか!!

うわあ……………。気づきたくなかった。

一度思考してしまったら止まらず、パズルのようにピースがハマっていく

つまり、だ。

例えば誰かが腕をなんらかの原因で無くしたとする。けどその事実を”拒絶”すると、腕がない事を無かったことにできるんだ。

つまり、腕を無くした”事実”を”無かったこと”にする

…人が目の前で死んでも”死んだ”という『事実』を”拒絶”することによって、死ななかつた事になる。

そして、自分に起こった出来事は感覚に携わる程度しか拒絶できないというのは感覚機能なら拒絶できるってことかな。

例えば、痛覚の拒絶。

痛覚を拒絶すればきつと痛みを感じなくなる

痛みを感じないってことは致命傷でも気づかない。下手したら死ぬ

怪我も病気も”人”は治せるけど”自分”は治せない。

そして、拒絶って言うのは、否定とほぼ同じ。

わたしが”否定”した事実は全てなかったことになる。

敵の攻撃も無機物ならなんでも生まれてこなかったことに出ると思う

けど、生き物は別だ。生命には記憶がある。

わたしが【一人の存在】を拒絶しても誰かの記憶に拒絶した人の存在

があれば矛盾が生まれる。

だから生命いのちがあるものは否定できない。それだけが救いか…
くそつ。なんて力渡してくれたんだ、あの自称天使!!

来世の果てのそのまた先まで呪うぞばかりやろう!!

「じぶん、けが。きよぜつ…できる。しない」

これはどうしても知られちゃいけない。マルコさんといえど、オヤジさんといえど、知られるわけにはいかない事だ

「拒絶…う…までニア。お前、自分の力がどういうものかわかってるのか?」

「これいじょう、はなす。できない。まだ、かくしよう…ない」

確証はない。わたしの考えが正しいかどうかを証明できる事実も物もなにもない

けど、その考えはほぼ確信に近かった

「……………わかったよ。じゃあ、お前の中で答えが出たらまた話してくれよ」

ちゃんと話せばわかってくれる人たち。

その優しさに時々胸が痛くなる……。

守ってみせる、この優しい人たちを

この力のせいだとえ嫌われても、恐れられても絶対に…

第12話 はじめての外出

わたしが自分の力の危険度に気づいてから数週間、怪我也治り言葉もだいたい矯正された。

されたというよりしたんだけどね!! ええ! 頑張りましたよ!?

もともと、舌がうまく回らないみたいでこれ以上を求めるのは不可能だった。

伝わればいいだろう! と、開き直ったのはそつと胸の奥に秘めておくなんて回復力だ。三ヶ月はかかるとおもっていたのに」

船医が舌を巻く程の回復力だったらしい。

何はともあれ、これからは怪我しないように気をつけないと。

「どうだ! すごいでしょ!」

ドヤ顔を決めるわたし。ああ、話せるって素敵…

「お前の言葉の発達もすげえよい。数週間であんな単語繋げたような話し方からよくそこまで直したな」

直せていったのあなたでしょ!?

そりや猛特訓しましたよ! 寝る時間を削って「あめんぼあかいなあいうえお」練習しましたよ!?

え? それは発声練習だつて? 結果オーライってことで!

「マルコにいちや! きょうはなにをするの?」

「ん? ……ああ、今日は城下町に行くよ!」

「じようかまち…。じゃあ、おるすばん?」

「お前も行くんだよ!」

………なんといた?

「ほえ?」

「くくくつ。驚いてるニアも可愛いな! 城下町に行くぞ。」

「イズウにいちや! おそとでいいの?!」

イズウさんが布みたいなのを持って後ろから歩いてきた。

「ああ、俺とマルコも一緒だから安心しろ! 親父の許可もとってある。

な? オヤジ!」

「グラララー! せっかく怪我也治ったんだ。たまには遊んでこい」

「やったー！とーさん、にいちや、だいすきー！」

はじめてのおつかいならぬはじめての外出にテンションがおかしくなっていた。これは後の、黒歴史にはいるやもしれぬ。

イズウさんに飛びつくど彼は器用にわたしを受け止めて片腕に乗せた。いつも思うけど腕の力すごいね

「ははは！そんな喜んでくれるところちも嬉しいな…つて、まてマルコ。これ、俺は悪くないぞ。そんなに殺気を振りまくな」

まずイズウさんに飛びついたのが気に入らなかつたらしい。マルコさんが不機嫌になった。

ぴよんっ、とイズウさんの腕から飛び降り、マルコさんにおねだりする

機嫌なおして！マルコさんの胃痛の原因を増やしたくない！

「マルコにいちや！だつこー！」

「!!!、仕方ねえな。ほらこいよい」

仕方ないと言いつつも抱き上げてくれた。ほんとにツンデレだな
この人

「はははは!!マルコっ!!どんなけニア好きなの！」

やりとりを見ていたハルタさんがお腹を抱えて笑いだした。

ほかの隊長も隊員もみんな爆笑していた。

うん、これは誰が見ても笑うだろうね。

この船の外の人でマルコさん知ってる人が見たらひっくり返るんじゃない？

だってこの人普段すごいクールだから

「ほら、ニア。お前のために用意しておいたパーカーだ。フードをしっかり被ってその髪と目は見られないように気をつけろ」

イズウさんが持ってた布を被せてきた。あ、それパーカーだったの。

「あいー！」

返事をしてパーカーを着る。

「よし、じゃあいくかよい。お前ら留守は頼んだよい」

みんなに見送られる中、わたしたちは城下町へと向かった。

―白ひげサイド―

ニアの回復力は船医が舌を巻くほどだった。みるみるうちに元気になりその辺を走り回っている

グラララ：元気なのはいいが転ぶなよ？

言葉をすらすらと喋れるようになったのが嬉しいのか一段と明るくなった気がするぜ！無邪気でかわいいなあ…

ティーチの話を聞いた時はまさかと思ったがあのでニアが怯えるほどなら警戒しておいたほうがいいだろう…。息子を疑いたくねえけど、仕方ねえな…。

「イゾウにいちや！おそとでていいの?!」

マルコとイゾウと一緒に城下に行くつて話をすると目が輝いた。

こいつ、結構表情豊かなんだな

今まで変に遠慮してたのかもなあ…

そう考えると自分が不甲斐ない。おれもまだまだだなあ…

イゾウがニアにパーカーをわたしニアが来たのを確認するとマルコが「いつてくる」と甲板に出た。

さて、ニアが居ないうちに快気祝いの準備だ！グラララ！

―サイドエンド―

「ニア、はぐれるなよい」

「風でフードが飛ばされない様にきをつけろ」

うちのお兄ちゃんズが過保護すぎてつらい。

心配してくれるのは嬉しいけどそこまで心配しなくても…

というか、貴方達こそ顔隠さなくていいの？手配書も回ってるし、

有名人もいいところだよね

わたしを真ん中に挟んで歩く大人たち。

はたから見たら変な3人組だろう。なんたって、子どものわたしがフードで顔隠してるんだから

おまわりさんに通報されなきゃいいけどね

「あそこが城下だ。結構賑わってるな」

「いろんな奴らが集まってるから俺たちが行っても浮くことはないと思ふよ」

前を見ると派手な門が構えてあって、門の向こうはわいわいと騒がしかった。

あ、わたしの心配は杞憂ですか？ならばいいんだけど。

外出にトラブルはつきものだと思っておかないとあとで痛い目みそうだな。

「おーい、そこの3人組さん！揚げ団子食べてかないか？」

屋台の前を通るとおじさんに呼び止められた。

売り込んでるなー

「揚げ団子か。ニアは少食だからなく。あんまり食べさすとサッチが怒りそうなんだよな…。『俺のご飯を食べてくれなくなる！』とか言つて」

「想像できるのがなんか悔しいよ。まあ、いいんじゃねえのかよ？少しくらいなら。せつかくの外なんだからよ。小遣いも持ってるし、こういう時しか遊ばせてやれねえから…。店主、一本くれよいい」

「まいどー」

マルコさんが頼むと店主さんが作り始めた。

あ、できたてくれるんだ。いい人

「はいよ！揚げたてだ！」

マルコさんが店主さんにお金を渡し串に刺さったお団子を受け取る。

わたしに「ほらよ。熱いから気をつけろよ」と言つて渡してきた。うちのお兄ちゃん優しい…。この光景誰も海賊とは思わないだろうな…。世の中にはそっくりさんが3人いるって言うから他人の空似か？つてくらい賊とは程遠いやりとりをしてると思うのはわたしだけか？

そんなことを考えながらお団子を受け取ると冷ましてから頬張る。

一口かじると餡の味が口一杯に広がった。

中に餡がはいってるんだこれ！すごい！

「おいしいー！」

「ははは！そうかそうか！嬉しいこと言ってくれるな、嬢ちゃん！……ほら！兄ちゃんたちもオマケだ、もってけ！」

そう言つて店主さんがマルコさんとイゾウさんにもお団子を渡した。

気前がいいな。

3人で仲良く同じものを食べて店主さんにお礼を言う。

「次行くか」とイゾウさんが仕切るとわたしたちはその場を後にした。

―？サイド―

ある城下町の一角。俺は仕事をサボつて町を徘徊していた。

あんまりサボると怒られるけど仕事したくねえんだよなあ…。

……………ん？

こんなところで会いたくないけどすげえ見たことある顔がいる気がする。するだけか？

子どもに揚げ団子なんか買ひ与えて…。

団子を一口かじつた子どもが「おいしい！」と嬉しそうな声をあげると2人の頬が緩む。

なんだあの光景……。ありやただの家族か？

いや…だがあいつら絶対あいつらだろ。

……………うん、他人の空似だと思つてえ…。

何度見ても白ひげんとこの隊長達にしか見えないんだよなあ。隊長達だけなら無視してたが…あのフードの子どもは何者だ？なぜ隊長が2人もそばにいるんだ？

ああつ！くそつ！気になつて仕方がない

デスクワークをサボる口実も兼ねて、あいつらをつけるか。

―サイドエンド―

……………？

「どうした？ニア。」

「なんかね、さつきからしせんをかんじるの」

団子屋を過ぎたあたりからすごい誰かに見られてるような気がする。

何度振り返っても誰もいないけど。なにこれすごいホラー

「視線……？安心しろよい、俺らがいるんだ。お前には指一本触れさせねえよい」

やだ、うちの長男がイケメン

「その意見には同意だが、お前シスコン度合いが日に日に増してっつてないか？」

それビスタさんも言ってた。

思うことはみんな一緒なんだね（遠い目

「おっ、ニア！射的ゲームだっつてよ！やっつていこうぜ！ゲームなら気楽にできるだろ？コツを教えてやるよ」

自分の得意分野だからかイゾウさんが射的の前で立ち止まった。

マルコさんにシスコン云々言っただけどあなたも大概だと思います！

「店主…この子にやらせてあげたい。1ゲームお願いできるか？」

その店主は軽快に笑い「おう！やっつてけ！」といって、なんと踏み台まで用意してくれた。優しい！

渡されたおもちゃのピストルを構える。

なにを取ろうかな

えーつと、脇差……と、小型のピストル……と、手榴弾……トン

ファー……棍

……物騒!!なんだここは!!武器博物館か!!

殺意高すぎるだろ!この射的屋!!

「…まるで武器博物館だな。まあ、無難に脇差でいいか。」

無難に?!無難って言葉知ってる?!イゾウさん!!

危険のない事だよ!!?

色々と危険すぎるだろおお!!

こんな殺意高い物がよく売りに出されてるな!!おかしくない!?

その前に、武器これを撃つピストルがおもちゃでいいの?!いや、おもちゃじゃなきや商品傷つけるだろうけど!!

「ここはグリップと言ってグリップの1番高い位置を持つのが基本だ。……………で、……………が、……………。」

なんか説明始まった!!

マルコさんも呆れてるよ!!?

しかもその説明わたしがもつと小さい頃に聞いたよ!?

武器講座とか言って武器の使い方とか種類とか教えてくれたよね

!!

何度でも教えたいのかな!!さすがお兄ちゃん!

「よしっ!やってみろ、ニア!」

「あ、あい」

説明聞いただけで疲れた気がする。

えっと、両目をちゃんと開いて利き目の前に…

集中、集中……………

よしっ、ここだ!

パン……………ボシュツ!

「……………当たったな」

「当たったよい」

まさか一回でうまくいくとは思ってなかったのか2人が冷静に驚いている。

「ははっ!こりやすげえ!!ほらよ、商品だ!」

店主さんいい人。最後まで軽快に笑ってたな

景品をマルコさんが受け取って、店を出る

普通に城下を楽しんでる兄妹もしくは家族だよね、この凶

自分が海賊だつて忘れそう

……………って、やっぱ視線を感じるなあ。

気のせいかなあ…

「…ニアの心配はまんざらでもないみたいだな。」

「ああ、誰かにつけられてるよい」

え、急に真面目になった!?

スイッチの切り替え早過ぎませんか!!?さすがというかなんというか

…

「まあ、さすがにこんな街中で暴れはしないだろ」

「どうだろうな。俺らを知らないのか、知っててつけてきてるのかで変わってくるよ。前者なら確実に狙いはニアだ。後者なら海軍の可能性が高い。まあニアに危険がなきゃほかつとけばいいんじゃないの？」

「それもそうか」と言って歩みを進める2人

わたしに危険がなければ……って！どれだけシスコンですか！俺様何様お兄様!!

すごい、この堂々っぷり！ある意味見習いたい!!

「さあさ！寄ってらっしゃい見えてらっしゃい！我ら愉快な旅芸人！」

なんかすごい賑やかだなあ。

旅芸人か。自分で愉快とか言っちゃうんだね

吟遊詩人とか踊り子さんとかいる。ほんとに旅芸人なんだ。

「へエ…旅芸人かあ。オレらは行くあてのない迷える仔羊たちをいい所に連れてってあげるお仕事してるんだ。」

すごい悪役っぽいセリフがきこえたから後ろを見ると、いかにもワルですって格好の人たちが刀持ってそろそろとあるいてきていた。

こういう人たちって、出落ち乙☆ってなりそうなの

なんていうか、噛ませ犬？

「大人しくしてれば怪我はしねえぜ？周りの奴らも騒ぐなよ？怖がることはねえ。すぐ終わるさ」

全然怖くないんだけどなんでかな？

ティーチの得体の知らなさの方が怖いからかも慣れてしまったからかイゾウさんとマルコさんが阿保を見るような目で攫い屋(仮)を見てるからか……

ああ、全部かも。

「さて、一緒に来てもらおうか。旅芸人アイスタイム「氷河時代……」
ピシピシピシ…

季節にそぐわない不自然な氷が攫い屋たちを氷漬けにし、そいつらの背後にはもじゃもじゃ頭のなんか「全てが怠いです」って言うような顔した長身の男がたっていた

第13話 人はそれをストーカーと呼ぶ

—？サイド—

団子屋で見つけた白ひげのこの隊長2人にフードの子ども。

3人の後をつけるが子どもが時折振り返り背後を警戒してるようだった

…あんな子どもが俺に気づいたってのか？

あんなにチビなのに見聞色でも使えるのか？

白ひげのこの船にいるのかたまたま隊長達とあの嬢ちゃんが会って意気投合したのか…

……：確実に前者だよなあ。

白ひげんとこの隊長があんな子どもと意気投合とか考えられねえ

…

あんなちっこいのが奴の船に居たら少なからず噂くらいはたつだろうに、なんの情報もない。

ってことは、あいつは大切に隠されてるってわけだ。

考えるほどに気になるな、あの嬢ちゃん

それに射的屋で1発で景品を落としたのには驚いた。

動きが素人っぽいから武器を持つのも使うのも経験が浅そうだ。

なのに簡単に説明を受けただけで、武器を使えるとは…

ある種の天才か

嬢ちゃんに気付かれないように、隊長どもにバレないように後をこつそりつけると今度は旅芸人達がいる所あたりで立ち止まり、芸を見だした。

……：あいつらほんとに白ひげのこの隊長なのか？

どっからどう見ても仲のいいただの家族にしか見えねえんだが…

いや、だが他人の空似にしては似すぎてるしなあ

「旅芸人か。オレたちは行くあてのない迷える仔羊たちをいい所に連れてってあげる仕事してんだ。」

いかにも頭悪そうな奴らがでてきたな

まあいいや。そろそろ声かけるか

えーつと、あれだ。なんだっけ？…………忘れた。まあいいや。

とりあえずこいつら邪魔だから凍らせとくか

「アイスタイム氷河時代……」

俺は能力を使ってそいつらを氷漬けにした。

—サイドエンド—

あたりが一瞬沈黙に包まれると一気に騒ぎだした。

人が一斉に逃げていくとまた静かになる。

……この人大将だ！「敵を知ろうの会」で聞いた覚えがある！

あの時は何のための講座だ、これ……。とか思ってたけど習つといてよかった！知ってるだけでも違う気がする！

いまここは海賊と海軍が一戦交えるなら十分な広さだ。

民衆もさっきの騒ぎでみんな逃げちやったし、うってつけだろう

どうしよう、大将とか足手まといになる自信しかない！

「ずっと俺たちをつけてたのはお前か、青雉」

イズウさんが彼の方を見ずに冷静にいう。

うちのお兄ちゃんがかつこいい

「あらら。バレてたの、まあいいけど」

いいのかよ!!

バレたくないからこそつけてたんじゃないの?!

バレていいならもつと堂々とでてこいよ!

「俺たちに何か用かよい?」

「俺がでてきた時点でなんとなくわかってんじゃないの? 不死鳥マルコ」

「さあな…俺はエスパージャやねえからわからねえよい。そんなことよ
りずつとつけてた理由を教えろよい」

「あらら…。釣れない奴だな。」

アフロの人を警戒しながらいつ攻撃が来てもわたしを守れるようにとゆっくり立ち位置を変えながら話すマルコさん

…さすが、戦い慣れしてる

「ニア、オレの後ろにいろ」

そんなマルコさんの行動を見て察したのか、マルコさんが溢してもイゾウさんが拾えるように彼はわたしを背に庇った

そのさりげない気遣い大好き！うちのお兄ちゃんイケメン！！

……って、あれ？わたしも結構ブラコン??

「その嬢ちゃんは何者だ？なんでお前ら程の奴らが子どものお守りしてんだ？」

「それを答える義理はねえよ。失せろ、青雉」

「あらら。随分とひどいじゃないの。俺今、仕事サボりすぎて怒られそうだから少し情報頂戴な。そしたら何もせずに帰るからさ」

情報をくれたら何もせずに帰る!?

あなた海兵じゃないの?!海賊を捕まえることがお仕事でしょう!!

というかその前に仕事サボりすぎて怒られそうって何！デスクワークの方の事？お仕事しなさいよ、大将でしょう!!自分はちゃんと机に向かって視察は部下に任せとけよ！

「しよ、しよくむほうき……」

あ、つい口を出してしまった。

だってこれが海兵だよ!?!ついでに大将だよ!?!海賊にとつては敵だけれど一般市民にとつては味方って教えてもらった存在だよ!?

こんな海兵、海兵じゃない!!

「…………ニア、言いたいことはわかる。けど、こいつはこういう奴なんだ。許してやれ」

何で同情してるの!?イゾウさん!!

敵だよね?!一応っていうか確実に敵だよね!?!

「えーっと、すげえ馬鹿にされた気がするが……。まあいいや。俺がお前らに声をかけたのはあれだ。えーっと……なんだっけ?……忘れた。もういいや」

諦めるの早い!!

それならそのままお帰りください!!

「しよくむしつもん?」

「そう!それだ。ちっちゃいのに難しい言葉知ってるんだな」
「えらいでしょ!」

「そうだなあ、偉い偉い……って、なんだこの嬢ちゃん、調子狂うじやないの」

頭を掻きながら怠そうにいう。

わたしだってオヤジさんの船にいるから実力者の見分け方くらいわかる。

この人、相当強いだろうになんてこんななやる気ないの…

いや、やる気出されても困るけど

「初対面で仲良くなるのは…さすがニアだと褒めてやりたいがこいつは大将だ。気を抜くなよ」

仲良く!?

あなたの言う仲良くってなに!!?

今の会話のどこに仲良さげな要素があった?!

「あららら…。仲良くなたならいい事じゃないの。ニアちゃんって言うんだ?顔みせてくんないかな?」

「誰が見せるか(よい)!!」

彼が腰をかがめわたしにそういうとマルコさんとイゾウさんがわたしの前に立ち隠す。

聞かれたのはわたしだけれどわたしが答える前に2人が即答した。

「俺、その嬢ちゃんに聞いたんだけど…。随分と過保護じゃないの。団子屋で見かけた時からつけてたけど、2人とも片時も離れなかつたな」

あの時感じた視線こいつか!

「つけてたけど」…じゃない!!

「す、すとーカー!?!」

「尾行っていつてくれ!ストーカーって言われたら犯罪者になるでしょ!俺、海兵だから!怪しいやつ見つけたら見張るでしょ?それと同じよ。」

「ひとはそれをストーカーっていうんだよ!かいへいだからとかかんけないの!それはしよっけんらんようってやつだよ!」

「職権濫用って……!なんでそんな難しい言葉知ってんだよ、嬢ちゃん!お前らもガキになんて言葉教えてんだ!」

「わたしおべんきようちゃんとしてるの！だからおにいさんもおしごとしようよ！ほら、つくえがあなたをまってるよ！」

「やめてくれ！デスクワーク飽きたからこうしてふらふらしてるのに、机に縛らせないで！つか、海賊を捕まえるのも俺の仕事だから！別に仕事してない訳じゃないぞ！お前らを捕まえなきゃダメなの！」

「さつきごとさぼりすぎておこられそうだからじょうほうがほしっていったよね?!つかまえるなんていってないよ!!うそつきだー！うそはだめなんだよ?」

「このっ……」

わたしの反論に対し言葉に詰まるアフロの人。

それを見てイゾウさんが笑い出しマルコさんが呆れたような表情を浮かべた。

「はははっ！はははははっ！完全にニアのペースだな。」

「呑気なこと言ってる場合かよい…イゾウ。つかニア、そんな人のおちよくり方どこで覚えたんだ…」

「うん?……どこだろう?」

顎に手を当てて首を傾げて考える。

そう言われてみればそうだな。自然とこうなってた

「今の仕草可愛かったから許す（よい）」

どういうこと!?

それでいいの!?!お兄ちゃん!!

「いや、なんでだよ!!そんな恐ろしく頭の回る子どもが居てたまるか!!つか、そこまで甘やかされてるのに何でその子わがまま言わないんだ!?!」

「ニアはいい子だからな」

「あと天才だから、していい事と悪いことがちゃんとわかってるんだよい」

「まあちよつと遠慮しすぎる部分もあるが」

「もつと頼っていいんだぞ?」

いや、何雑談にはいつてるんですか、お兄様ズ!!

マイペースにも程があるでしょ!!目の前にいるの大将ですよ?大

将!!

「に、にいちや!それよりにげよ?」

「そうだな、大将と戦う気はない。ニア、走れるか?」

そういうとアフロの人が片手の親指を上げドヤ顔をし「安心しろ」といった。

「その子に乗せられて色々言ったが俺もお前らと戦う気ないから大丈夫だ」

大将としてどうなのそれ!!?

そんなドヤ顔で自信たっぷりというセリフじゃないよね?!

立場的に大丈夫なの、この人!!

いやでも戦う気ないなら早く帰ってもらおう!!わたしの心の平穩のために!

「ならばいますぐかえりたまえ!」

「あらら。冷たいじゃないの、ニアちゃん?俺、今帰ったら元帥に殺されるかもしれないねえんだけど、助けてくれない?書類溜め込みすぎてさあ…」

「それじごくじとくつてやつでしょ!!ぶかにてつだつてもらえばいいんじゃないの!?!」

「俺の部下手伝つてくれないのよ。それどころか俺を椅子に縛りつけようとするからさあ…。鬼だよね」

「いやそれやっぱりじごくじとくでしょ!!じぶんでなんとかしなさい!あとあなたてきてでしょ!?!かいぐんがかいぞくにたすけをもとめていいの?!」

「あらら!!何々?俺の心配してくれてんの?優しいじゃないの、ニアちゃん!じゃあ…。海軍大将青雉”じゃなくて”クザン”って人のお願い事として聞いてくれないかな?嬢ちゃんは何者でどうして白ひげの船にいるんだ?あ、クザンってのは俺の名前ね」

「なにそのグダグダなじこしようかい!!」

しかもちやつかりわたしから聞き出そうとしてるよこの人!!

それに気づかないほど馬鹿じゃないよ!

彼の質問に一切答えない姿を見て彼は頭を掻いた

「あらら、気づかれちゃったか。なかなか手強いねー。」

わたしがアフロの人と言い争い(?)をしてしているとイズウさんが静かに殺気だつてきた

「おい、そこまでしてくれないか?青雉。お前がニアと長いこと喋るなんて勿体ないだろう?」

「ニアも知らない人に声をかけられたらすぐに逃げろよい。世の中にはロリコンっつー変態もいるからな。」

何気に馬鹿にしてる!!!?

お兄ちゃんズそんなにわたしがアフロの人と喋つてたのが気に入らなかつたの!?

「おいおいおいおい!!俺その嬢ちゃんとか喋つてただけでそんな殺気向けられるの!?!しかもロリコン扱い!?!お前ら過保護すぎねえか!?!」

焦り出したアフロヘアー

…この世界の人なんでこんなに髪の毛にこだわり持つてる人多いんだろう

どうやってこの状況を脱そうか考えているとアフロの人が盛大にため息をついた

「はぁーっ。なんか、めちゃくちゃ疲れた。俺帰るわ。じゃあな」

そう言つて踵を返すとわたし達し達しに背を向けて去つていった。

ええっ!?!本当に帰った!!

あの人が大将で大丈夫なの?!海軍は!

「…青雉の適当具合ってあそこまで酷かつたか?」

「どうだったか。だが、出会つたのが青雉だっただけまだよかつたかもしれないな。」

気を取り直して城下を十分堪能した後わたし達は帰路についた。

—クザンサイド—

「……顔、見たかつたな」

俺は帰り道を歩き、さっきの嬢ちゃんを思い出すとそう呟く。

フードを深くかぶっていたから顔は見えなかつたがおそらく可愛

いだろうと思う。

言動が小動物でしかも舌足らずに喋る姿が可愛くて構いたくなくてしまった。

白ひげ海賊団にまだ二桁にも言っていないような子どもが乗ってるなんて世界仰天ニュース、センゴクさんに報告したらあの人の胃に穴が空くかもな

なら黙っとくか。そしたら俺も怒られないで済む

それにしても随分過保護に育てられてるじゃないの。

白ひげの隊長達があんな子ども1人にデレデレとか面白すぎるでしよ

あいつらがあそこまで過保護になるって……あの嬢ちゃんは本当に何者だろうか。

白ひげ程の奴があんなチビを船に置くこと自体疑問がなんだよなあ

はあ、考えるの面倒になってきた。もういいや。

どつかで一眠りしてから帰ろ。

—サイドエンド—

「ただいま！」

「帰ったよい」

「帰ったぞ」

「グラララー！帰ってきたか！……なんか疲れた顔してんなあ。なんかあつたのか？」

マルコさんもイズウさんも顔に出てないと思うけどわかるんだ……。さすがというかなんというか。

それはそうと知らない人たちがいるんだけど……誰？

「ああ、町に青雫がいたんだ。向こうに敵意がなかったから難なくこたを終えたが、ニアの存在が海軍にバレたな。いつかは知られると思っていたが……。まあ、顔を見られてないだけマシか」

「その話はまた後で……それで、これはどういう状況だよい？」

「………見ての通りだ」

近くにいるガタイのいい人、ジョズさんがいう。

この人あんまり絡まないからよくわからないんだけどいい人なんだよね。この前も飴玉貰ったし。

わたしに極力近づいてこないんだけど、それは怖がらせるかもしれないからだと思ってるらしい。ガタイいいし、強面だからそう思うのも仕方ないのかも知れないけどなんか……不憫……

「おっ！お前！番隊のマルコか？どうだ、うちに来ないか？」

なにこの赤髪の人。しかも麦わら帽子かぶってるし……

さつきオヤジさんと睨み合ってたっぽいけど……。敵かな？けど、海軍ではなさそう。いや、それ以前にうちのお兄ちゃん勧誘しないで！

「だめ！マルコにいちゃ、つれてっちやいやー！」

思わずマルコさんの前に立って精一杯両手を広げる。

なにやってんのわたしいい！！

しよ、しょうがないよね?! なんとたってわたしブラコンだもん！自覚したの最近だけど!!

「……ニア、心配すんな。俺はどこにもいかねえよい。………つて、お前ら!! 笑ってねえで言いたいことあるなら言えよ!!」

わたしの頭を撫でながらクルーたちを怒鳴りつけるマルコさん

実にシユール………

「いやっ、だつてマルコっ………うれしそうで……っ！も、もうダメ、限界!! あっはははは!!」

ハルタさんて、いつも傍観しては笑ってるよね

あれ、赤髪のひとが驚いた顔してる

「……こりゃあ、驚いた。白ひげ、お前はこんな子どもを乗せてるのか？それにオレの覇気を受けても動じないとは……」

はき？ たまに聞くけど、なんですかそれは。

肌がすこしピリピリするけどこれが覇気？

つて、なんで皆さん「言われてみれば……」みたいな顔向けるの!?

「ニア、下がれ。こいつはオヤジと同じ、四皇の一人赤髪のシャンクスだ。」

ビスタさんがそういうと、チャキツ……という音がした。

これは聞き慣れている、鞘から剣を抜く音だ。わたしは反射的にその場から飛び退いた

なぜかはわからないけど、その行動には自分も驚いた。

はっ！これが自己防衛!?

「ほお…。なるほど、ただの子どもじゃないみたいだな。白ひげ、この子はなんだ？」

見ると赤髪が刀を抜いていた。

おいっ!!一戦やるのか?!わたし瞬殺される自信しかないよ!?!まだろくに武器すら持ったことないのに!!

「おいおい…。うちの娘いじめるなよ、はなたれ小僧」

『白ひげのところに乗りに乗らんだある海賊が姿を消した』と聞いた。仲間がやられない限り無駄な殺生はしないお前たちがたかが3億ちよつとの海賊を消すか?と思つてな。見たところだれか欠けてるわけでもない。まさか、その嬢ちゃんが一枚噛んでるのか?」

す、鋭いし……。あなたにとつて3億は、たかが、なんですか?常識の感覚が違いすぎてついていけない…

それとも挑発してるのかな?

それはともかくとして、四皇が接触して相当まずいんじゃないの?え、これってわたしのせい?わたしがなんとかした方がいいのかな?

できるか知らないけど

「グラララ…。そんなちいせえ事気にしてんじゃねえよ、鼻つたれ!それよりいまから宴だ。いるってんならついでに参加してつても構わねえがその覇気はしまいやがれ」

宴?なぜ?いきなり?

「ニアの快気祝いについて、みんなで用意したんだ!今日の主役はニアだよ!」

ハルタさんが素敵な笑顔でおっしゃったけど…

話の展開が急すぎてついていけない!!

誰か!わたしに!説明して!!

番外編 敵を知ろう!の会

ニアが大怪我を負い、目をさましてから数日

怪我が治るまでに彼女に知識を詰め込むそう。1秒でも時間が惜しいらしい

「じゃじゃーん!海賊の海軍講座!はっじまつるよ〜!」

唐突に変なテンションで喋り出したのは白ひげ海賊団の一番隊の隊員。名前はロキアス

「マルコ隊長にな、ニアに基本的な海軍の知識を教えといてくれって言われたから俺頑張っちゃおうよ!」

「ロキアス、頑張りすぎて倒れんなよ」

「ふっふっふ!心配はご無用なのだよ、ラーズ君!俺に不可能はない!」

「シースな。人の名前間違えんなバカロキ」

突然呼ばれたと思っただけ何かよくわからない会議が始まり首を傾げるニア

「ロキにい、しいちゃん。これ、なに?」

「ん?ああ、いいか?ニア。情報は武器だ。知っていて損はない。だから俺たちの敵…主に海軍について少し勉強してもらおうと思っただけな。」

「し、しいちゃん!?くそう、なんたってそんな可愛い愛称で呼ばれてんだ羨ましいぞバカー!」

「バカはお前だ!さっさとはじめろ!」

「(なんか意味あるのか?これ……)」

ニアの思いもいざ知らず、よくわからない講座が始まったそうなの

「簡単に言えば『敵を知ろうの会!』だ!じゃあ早速始めていくぞ!まずは元帥!今の海軍元帥はセンゴクっていう大仏みたいなやつだ。仏のセンゴクまたを智将センゴクって言われてるぜ。とりあえず名前と階級くらいは覚えて欲しいな!」

ロキアスは知的っぽい伊達眼鏡をかけて指し棒で黒板をコンコン

と叩く。

どっから持ってきたんだ、その眼鏡…

「その下に大将！またの名を総督という。今は、赤犬・黄猿・青雉って奴らがいる。こいつらは自然系ロギアの能力者で物理攻撃は効かない。覇気を使えば別だが、覇気についてはまた今度だ！」

「ろぎあ…。あくまのみ、のうりよく？（はき…か。時々聞くな。この間誰かが けんぶんしよく とかいつてたような…その類かな？）」

猿と雉と犬つて、どこの桃太郎伝説だよ…

「そう！悪魔の实の能力者だ！かなり強くてそして厄介！出会うことはないと思いたいがであつたらまず逃げることを優先して考えろ！次に中将。英雄ガープつてやつがいるんだが、そいつは中将の地位にいるが実力は大将に匹敵する。大砲の砲弾を素手で投げるとんでもない爺さんだ！」

砲弾つて素手で持てるの?!重いとかそういうレベルじゃないと思うんだけど!!

「中将の下は少将！ここの曲者揃いだ！みんなみんな曲者だ！」

みんなみんな曲者…。

みんなみんなお友達みたいなノリで言わんといってくださいな。

…友達になれる気はしないけど

「そして、准将、大佐、中佐、少佐、大尉、中尉、少尉、准尉という。まだ階級はあるがまあこの辺まででいいだろう。少尉以上が海軍将校と呼ばれていて、正義と書かれたものすごくダサイ羽織を着ているんだ！質問はあるか？」

えっへん！と、効果音がつきそうなくらいのドヤ顔を決めるロキアス

何気にデイスつてるように感じるのは気のせいかな？

「ロキにいい、くわしい。なんで？」

海賊なのになんでそこまで知ってるの？

「ああ…ロキアスこの馬鹿はな、もともと海軍に入ることが希望してたんだ。それで必死に勉強して1回入隊したんだが…。」

わたしの疑問に答えたのはシースだった。

「さて、ホース!!それは俺の黒歴史だ!!」

「シースだって言ってるんだろ!!まあ、こういう事だ。人の名前間違えまくって上の人怒らせてクビってことよ」

なにそれ。そんな簡単な理由でクビにしているの？

職権濫用もいいところじゃない？パワハラで訴えたら勝てるよきつと

「でもいいんだ！俺はオヤジにあってみんなに出会って変わった！変われたんだ!!」

「基本は変わってねえけどな」

シースさんすっごい毒舌…

「たいしよう、のうりよく。なに？」

「ん？ああ、赤犬はマグマグの実のマグマ人間で、黄猿がピカピカの実の光人間。青雫はヒエヒエの実の氷人間だ。」

赤がマグマで黄色が光で青が氷か。

分かり易い！けど、単純すぎない!?しかも赤と黄色と青ってどこの信号機だよ!!

「えいゆうさんは？」

「英雄ガープのことか？又の名を拳骨のガープ！そいつは非能力者だ。一番の怪物だぜ、本当に…。素手で投げる砲弾が大砲よりも威力あるって人間としておかしいだろ!!なんなんだ、あのじじいは!!」

なにか個人的な恨みでもあるんですか、ロキアスさん

ロキアスが突然地団駄を踏んで文句を言う。

わたしが若干引いたのを察したのかシースがすまし顔で言った。

「気にするな、こいつはたまにこうなる」

大丈夫なのそれ!!?

「ロキに、たいしよう、ちゆうじよう。あう。する…?」

「大将は見かけたくらいかな？会った事はない！何食ったらあんなでかくなるんだってくらいでかいのなんの。まあ、拳骨のガープは会ったことあるぜ？いや。迫力がすごいなんの！普段はちゃらんぽらんな癖して戦闘になるとまじで強えからビビるぜ…。戦闘狂かよ

ほんとー！」

「デイスってるのか褒めてるのかどっちなんだ…。」

「…つたく、もつとわかりやすく説明してやれよ。ロキアス。…：…つまりな、ニア。海軍の上層部は実力も性格もクセが強いんだ。うちでいうと隊長クラスに匹敵するかそれより強いか…：だ。顔写真がないのは悪いと思うが、特徴をしつかり覚えておけ。もし会ったら戦おうとせずに全力で逃げろ！いいな？」

「ロキアスとシースの説明に温度差がありすぎてついていけない」

「はじめからシースだけでよくない?!というかシースも地味詳しいよね!？」

「しいちゃんもくわしい？」

「オレは力がないからみんなみたいに戦えないんだ。だからせめて情報を集める役を率先してやっている。いわゆる情報屋だ。知りたいことがあつたらオレに言ってこい」

「あつ、なるほど。」

「非戦闘員というわけですか。」

「頼りになる」

「しいちゃん、たよるー！」

「そうか！ありがとな、ニア。あと何か海軍について知りたい事あるか？」

「知りたいこと…：か。」

「かいぞく…：かいぐん、みんなてき？かいぞく、みんな、つかまる？」

「みんな…：というわけではないな。七武海と言う奴らがいてな、正式には王下七武海。そいつらは特別に海賊行為が許されているんだ」

「つまり例外がいると」

「なんで？」

「世界政府が公認してるんだよ、7人の海賊をな。そいつらは政府に自分らの収穫の何割かを納めることで海賊行為を許されてる。いわば政府の狗さ。」

「シースが顔をしかめて言う。」

「政府の狗って、かなり刺のある言い方ですね」

海軍が海賊行為を認めるってことはかなり強いって事でいいのかな？

「七武海もかなり強い奴らが選ばれてる。この海は危険だらけだ」
なるほどな〜

やっぱ強くないと生き残れない、か

どのくらい強くなるか目標を決めておいた方がいいかも

大将とやりあえるくらい…の力は欲しいなあ。そしたら血のにじむ努力がいるな

「よーし、覚えたな？ニア！これで君も海軍マスターだ！」

「海賊が海軍の知識マスターしてどうすんだよ！」

「はーっはっは！俺に任せておけばなにも心配することはない！」

「意味わかんねえよ！」

…仲いいんだね、この2人

「俺は基本こんなんだけど、お前に危険が迫ったら俺だって助けに行くからあんまり一人で背負いこむなよ？ニア」

…ふわりとロキアスが笑う

え、なにその表情。ギャップがすごいんだけど！

「まっ、お前に危険が迫ることなんてないと思いたいけどな！」

「お、前は!!なんでそういつも一言余計なんだよ!!」

…びびりした。

ロキアスさんもある意味曲者かも知れない。

「敵を知ろうの会！」は賑やかなまま、幕を閉じた

第14話 ちよつとすごい事件

急に宴だ、とか主役だと言われて理解が追いつかずぼかんとしているとオヤジさんが説明してくれた。

「お前かこの船に来てから4年…。いろんなことがありすぎてろくに入団祝いもできなかつたからな。快気祝いも兼ねて宴を開いてやりたいと思つて前々から準備してたんだ！グラララー！」

「赤髪^{おまけ}たちがいるが、気にせずにしたのしんでくれよ、ニア！宴は初めてだろい？」

たしかに：初めてだし、甲板も久しぶりだ。

そう考えると楽しみ：かも

「おまけとは酷い言い草じゃないか不死鳥…。ニアというのか、脅かして悪かつたな。」

そう言つて赤髪さんがわたしに近づき手を伸ばすと鞘から刀を抜く不穏な音とともに赤髪さんの動きが止まった。

「おいおい、随分と過保護じゃないか。撫でようとしただけでそんなに殺気を向けるな」

マルコさんがわたしと赤髪さんの間に入り、ビスタさんとハルタさんとサツチさんが刀を構え、イズウさんが銃を抜いていた。

ジョズさんも体を半分くらいダイヤに変えていて他の隊長も隊員も武器に手をかけていた。

反対にそれを見て赤髪さんのところのクルーたちも武器に手をかけて警戒している。

え、いやいやいや、全くもつてその通りだよ！

他の船の人がわたしに近づいただけで刀向けられるってちよつとすごい事件だよね!?それだけのことで戦闘始まるって理由が随分と安いんだけど!!

そして殺意と敵意向けられといて動じない赤髪さん強い！

「に、にいちや！わたしだいたいじょうぶ！」

慌ててマルコさんの袖を引つ張つて言った

わたしのほうがビククリしてるってどうゆう事だよ!!少しは動じ

ろ、赤髪!!

— シャンクスサイド —

白ひげの船を襲おうとして姿を消した破壊王…。

白ひげがあんな小物を殺すか？ 一味が全滅したと聞く。だが、海軍が見つけた時、船だけは綺麗に残ってたそうだ。

船は傷1つなく破壊王とそのクルーの死体だけが転がっていたらしい。

知れば知るほど妙だ。奴ほどの男がそんな中途半端な事をするだろうか。

ある島の一角に着くと白ひげの船が見えた。

偶然とはいえこれは願っても無い好機だ。チャンス

乗り込んで真相を聞いてみるか。噂をかき集めるより本人に聞いたほうが早い。

「シャンクス、なんでそんなに気にするんだ？ 俺たちの縄張りで何かしたってわけでもないだろう？」

俺の仲間、ヤソツプが言う。

「そうだな…。まあ、長年の勘って奴だ。とてつもない何か絡んでいるような…そんな気がしてならないんだ」

そう言っただけオレたちは白ひげの船に乗り込んだ。

「おいおい、覇気撒き散らして乗り込んでくるんじゃないやねえよ。小僧…」

「それは失礼した。…ところで白ひげ、聞きたいことがあるんだが」

「聞きたいことだあ？ クルー引き連れておれに用とは…？ ついにおれの首でもとりにきたか？」

まあ、そう取られてもしょうがないか。

だがこんなところで一戦交えたらオレたちも白ひげたちも、近くの城下町もタダじゃ済まない

「戦闘の意思はない。ただ聞きたいことがあるだけだ」

「グラララー！ 生意気な…。聞くだけなら聞いてやるぜ？」

続きを言おうと口を開いた時だった。

「ただいまー！」

「帰ったよい」

「帰ったぞ」

…声を聞き振り向くと、1番隊の隊長と16番隊の隊長とフードを被った小さな子どもがいた。

オレが1番隊の隊長を勧誘すると子どもが両手を精一杯広げて「つれていっちゃいや！」と舌足らずにいった。

か、可愛い…。なんだこの子は

1番隊の隊長も心なしか嬉しそうだ。

この子はこの船に乗っているのか？こんな子どもを白ひげが船に乗せているだと？

疑問を投げかけると「そんなちいせえこと気にするんじゃねえよ」と返ってきた

…小さいこと…？

少しも小さくないと思うけどな。見たところ4、5歳だろう。

白ひげのところどころに子どもがいたら噂くらいたつに決まってる。なのに、オレはこの瞬間まで知らなかった。

子どもが四皇の船に乗ってて、その存在を隠されてるということは結構な大事だ。

オレは刀に手をかけ子どもの近くで抜くと子どもは危険を察知したのかオレの攻撃がギリギリ届かないところまで飛び退いた。

なるほどな、ただのガキじゃねえってことか…

「おいおい、うちの娘をいじめるんじゃねえよ。それより今から宴なんだ。いるってんなら参加してつても構わねえぜ？ただ、その覇気はしまえ」

話を逸らされたか。この子はかなり大事にされてるみたいだな

オレが頭を撫でようと近づいて手を伸ばすと武器と殺意を向けられた。

おいおい、過保護にも程があるんじゃないか？

本当になんなんだこの子は。

「に、にいちゃーわたしだいじょうぶ!!」

目に見えて狼狽えてたのは子どもだった。

…優しい子じゃないか。刀向けて悪いことしたな……

そうだな、宴には参加していくか。あわよくば情報を聞き出そう

—サイドエンド—

「別にとつて食うわけじゃない。そんなに警戒しなくてもいいだろ」

「ニアをこんな風に外に出して甲板に長く居させられる機会は少ないんだよ。どさくさに紛れてフードを外されたら困る」

「別にそんなつもりはなかったが…そんなにも素顔を見られたくないのか？」

2人の間に険悪な空気が流れる。

ああ、もうっ！仲悪いんなら一緒に宴するとかいうな!!

「マルコにいちや！あかがみさん！けんかしい!!」

「……………はい」

仁王立ちし、腕を組んで叱り付けると2人してしゅん…となった。

よしっ、おとなしくなった!

いい大人が子ども前で喧嘩するなよ

「どつちが子どもなんだか…。」

「ぎやはは!!シャンクス、子どもに説教されるとか情けねえ!」

赤髪さん、仲間からすごい言われよう…。船長……よね?

「くくっ!さすが、ニア強い!さて、始めよつか!」

ハルタさんの一言で宴が始まった。

さっきの険悪な空気は一変してみんな騒ぎに騒いでる

海賊の宴への執念ってすごい

「なあ、ニア。だっけ?隣いいか?」

「ん?うん、いいよ!あかがみさん」

赤髪さんがお酒を片手にわたしの隣に座る。

それを見たイズウさんとビスタさんとサッチさんが近くに座った。

「ははっ!そんな心配しなくてもなにもしねえって!ここで白ひげの反感買う様な馬鹿なことするわけないだろ。それとニア、赤髪さんってのやめねえか?シャンクスでいいぞ」

「わかった、シャンクスさん。えっと…なにかようだった?」

「用…というか、ふつうにお前と話してみたくてな」

話してみたいと言われましても話題がないぞ

「余計なこと吹き込んだら脳みそブチ抜くぞ」

「その後には斬るか」

「じゃあその後には刻もう」

おいっ!!殺意高すぎだろ!!

近づく奴は叩き斬るってか!?

うちのお兄ちゃん過激すぎる!

「それは俺に死ねってか…。お前の兄達はおつかないな」

「そんなことないよ!みんなやさしくていいひとだよ!にいちやたちみんなだいすき!にいちやたちはね、いつもまもってくれるの。だからわたしもいつかまもれるようにがんばるんだ!」

「二…三」

そう言うとお兄ちゃんズが固まった。

心なしか顔がにやけている気がする

「ははっ!こいつらのシスコンも相当だと思ったがお前のブラコン具合も負けてねえな!」

「ふふっ!そうかもね!」

「……………っ!お前…オツドアi…:」なんの話してんだよい?」不死鳥か…」

「ん?わたしがにいちやたちだいすきってはなし!」

「そりや嬉しいこと言ってくれるよい。ニア、さっきハルタが呼んでたよい。行っつてやれ」

「あい!」

わたしは席を立ちタタタ…とハルタさんのところにむかった。

—シヤンクスサイド—

宴が始まり少ししてニアのところへ行き話をしようと隣に座ったら隊長が3人俺を見張るように近くに座った。そんなに心配しなくても何もしねえっつて!

ニアが『なにかようだった?』と、首を傾げる

動作一つ一つが小動物みたいで可愛い。なんというか、庇護欲をそられる

こりや白ひげたちが可愛がるわけだ。

「用…というか、ふつうにお前と話してみたくてな」

そう言うのと隊長達が『余計なことを吹き込んだら殺す』と取れることを言ってきた。

「それは俺に死ねってか…。お前の兄達はおっかないな」

そう言うのとニアは『そんなことないよ！』と言う。

「みんなやさしくていいひとだよ！にいちやたちみんなだいすき！にいちやたちはね、いつもまもってくれるの。だからわたしもいつかまもれるようにがんばるんだ！」

彼女が嬉しそうに、楽しそうにそう言うのと近くにいた隊長と話を聞いていた隊員達が嬉しくてたまらないと言うようににやける顔を必死で取り繕っていた。

…物凄いレアな光景だと思うのは俺だけか？

白ひげの隊長や隊員たちのシスコン具合も相当だがこいつのブラコン具合も負けてないな…。

俺がそういうと、

「ふふっ！そうかもね！」

と、俺の方をみて無邪気に笑った。

そのときフードの隙間から色の違う目が覗いた。

オ、オツドアイ…だと!?

「お前…オツドアイ！なんの話してんだよい？」不死鳥か…」

なんてタイミングで話しかけてきやがるんだ。こいつずっと俺たちの話聞いてたんじゃないだろうな。

不死鳥がニアに声をかけるとニアが席を立ち12番隊の隊長のところへ向かった。

そして立ったまま、俺の方を見ずに話しかけてきた

「ニアの顔を見たかよい？」

「…だとしたら…殺すか？」

皮肉っぽく返すと、不死鳥は笑った

「ははっ！んなことするかよい。内密にしてくれればそれでいい」
「…あの子は何者なんだ？」

「さあな。俺たちも詳しくは知らねえんだ。ちよつと前にハルタとサッチが赤子のニアを拾ってきたんだよい。どこに預けるにしてもあのナリだ。受け入れてもらう方が難しいだろうってオヤジが言つてな、ここで面倒みることになったんだよい」

成る程な。確かにオッドアイならば受け入れてもらう方が難しいだろう。

あのパーカーは顔を隠すために被っていたのか。

「それであんな子どもがいるのか。破壊王を殺したのはニアなのか？」

「……教えられるのはここまでだよ。情けない話だが、俺たちはあいつを守りきれぬ自信がねえんだ。赤髪とはいえあまり情報を与えたくない」

不死鳥にここまで言わせるとは…かなりの爆弾らしいな、あの子はだから存在を大事に隠されてるのか。

これ以上は野暮つてもんだな…。仕方ねえか

切り替えて宴を楽しもう！

—サイドエンド—

「ハルにいいよんだ？」

「あ、ニア！呼んだ呼んだ！これ、プレゼント！」

小さめの箱を渡された。プレゼント…だと!?

大好きなお兄ちゃんからのプレゼント！喜ばないわけがない！

「え、いいの?!ありがとう！あけてもいい?」

「いいよー」

許可を貰ったので箱を開けると黒のチョーカーが入っていた。

ワンポイントにハート型の飾りがある

「それ、調整できるからニアが大きくなってもつけれるよー」

「うれしいーハルにいいや！つけてー！」

わたしとハルタさんがわいわいとしているのを遠くで微笑ましく

見ている人たちがいるのに気づいたのはわたしたちが一通り騒ぎ終
わったあとだった。

気がついたら朝になっていた。あれ…昨日の記憶がボンヤリとし
かない…。

ハルタさんからプレゼントもらった後、わたしはどうしたんだっけ？
ま、いつか！

シャンクスさんもいつのまにか帰ってみたいだし

というか、わたしちゃんと部屋で寝てただけど、本当に何があつ
たんだろ…。

トコトコとロビーまで歩くと隊長たちが集まっていた。何かあつ
たのかな？

「おはよーにいちやー！」

「ニア?!?!」

ほえ?!?!

?!?!

そんな驚かなくても…。え、わたしもしかして昨夜粗相したかな？

「えつと、わたし…:…:なにか、した？」

「あ、え…:…。いや、な、何もしてないよ。おはよう、ニア」

明らかなる挙動不審…。

「あつ、チョーカーちゃんとつけてくれてるんだ！」

「にいちやからのプレゼントだもん！まいにちつけるよ！」

ここにいるのはマルコさん、ジヨズさん、サツチさん、ビスタさん、
ハルタさん、イゾウさんだ。

この人たち結構いつも一緒にいるよね。たまにジヨズさんはいな
いけど…、

そして挙動不審なのがマルコさんとサツチさん。心なしか頬が赤
い。ハルタさんはニコニコしてて、イゾウさんとビスタさんはいつも
通り。ジヨズさんは苦笑いをしてる。

本当になんなんだ？そしてなぜ昨日の記憶がないのか…:…:

「ニア、昨日ハルタからそのチョーカーをもらった後のこと覚えてる
か？」

「……おぼえてない。わたし、なにかしちやった？ごめんなさい？」

「はははっ!!よかったじゃないか、マルコ、サッチー！覚えてないってよ

！ああ、ニア。気にするな！謝るような事はなにもしてないから」

ええっ！なにそれ！すごい気になる…けど、まあいつか。

その後、カルガンとルーカスが私を見つけるなり謝ってきた。

なんでも昨日ジュースと間違えてお酒をわたしに飲ませてしまっ
たらしく、隊員や隊長に甘えに甘えまくって失神者を続出させたらし
い

だからお酒は飲まないでくれと謝るついでに懇願された。

えっ……、それわたし悪くなくない!?

………解せぬ。

番外編 未成年にお酒を飲ませてはいけません

ハルタさんからプレゼントをもらって舞い上がったあと、ハルタさんとみんながいるところに戻った

「グラララ！楽しんでるか？ニア！」

「うん！たのしいよ！」

オヤジさんの問いに笑顔で答える。

「おー、ニア！元気か？」

唐突に声をかけてきたのはカルガンだ。

カルガンと話すの久しぶりかも：

「カルにい！げんきだよ！」

「そうか、そうか！よかった。あ、隊長たち！ちよつとニア借りてくぜ！」

カルガンがそういうとわたしを抱き上げて他の隊員たちの所に連れてった。

「隊長たちからニアを拉致ってきたぜ！」

「おお！よくやった、カルガン！」

拉致つて…物騒！

「ほら、ニアはいつも隊長かオヤジに囲まれてるからあんまり話す機会がないんだ。隊長たちが過保護だから仕方ないけどなあ」

「俺たちだつてニアと話したいんだよ！こんな癒される子が近くにいるのに!!」

みんな酔ってる？

「ほらニアも飲め！ああ、大丈夫！これただのジュースだから。ニアはまだ飲めないもんなく」

そう言つて、ルーカスがジュースの入ったグラスを差し出した。

わたしはそれを受け取ってちびちびと飲む

「全てにおいて動作が小動物…」

「かわいいなあ」

あれ、なんだろ…

クラクラしてきた？気のせいだよ、これジュースって言ったし。

雰囲気酔ったかな？

「おーい、こんなところで何してんだ？あれ？ここにおいてあったカクテルどこいった？」

「それならさつきニアに……えっ？カクテル？」

「「あっ……………」」

なんかふわふわするな。

ん？なんでみんなそんなに「やらかした！」って言いたげな目で見てるんだろ？

「…ニアがいないと盛り上がり欠けるよ」

「真顔で言うな、シスコン。」

「お前なあ……」

「この長男、なんでこんなにシスコンなんだ？」

ニアがカルガンに連れていかれたあとしばらく経つとマルコが少し不機嫌そうに言った。

「隊員たちも我慢してたんだろ。常に隊長がそばにいるから話しかけたくても遠慮してたとか」

「それだったら、カルガン勇気あるね」

「そうだな」

「グラララ！ニアは人気者だなあ！」

マルコ、サツチ、ビスタ、シャンクス、イゾウ、ハルタ、ジョズ、白ひげが話していた。

しばらくするとカルガンたちがいる辺りが騒がしくなる

「やばい！やばい！だれかニアを止めろ！」

「ちよっ!!無理無理!!あんなの止めれないって！標的にされたら確実に死ぬ！」

「あっ！また1人昇天したぞ!!」

「まずいつ！た、隊長たちのとこに!!」

急に騒がしくなったので何事かと彼らが見やると真っ赤になった

顔を両手で隠して悶えている隊員しかばねたちが倒れていた。

「おいおい、なんの騒ぎだよい?……:……:つうおつ!」

マルコが席を立つと突進するような勢いで彼の背中にニアが巻きつくように抱きついた。

「まーくん、おすわり!」

「「?!」」

テンションのおかしいニアに驚きつつもマルコは素直に座り直した。

ニアは今度はマルコを後ろから抱きしめる形で首に手を巻きつける

「ニ、ニア……。ど、ど、どうしたんだよい」

いつもと明らかに違うニアに狼狽えるマルコ。

「わたしね、にいちやたちだいすき!とーさんもだいすき!」

「「「お、おお?」」」

ニアはマルコの首に回していた腕を離し今度は膝の上に乗る。

じゃれ付くように甘えてくるニアにマルコはたじたじだった

フードの隙間から見える顔はほんのり赤く、目はとろんとしていた

「ーっ!!誰だ!ニアに酒飲ませたやつ!!」

((酔ってるのか、アレ))

マルコは甘えてくるニアに耐えきれず顔を上げ、恥ずかしさを隠すように怒鳴ると下から手が伸びてきて「だーめ。」と顔の位置を元に戻された

「だーめ、まーくん。おこっちやいやだよ?」

「つ……いや、だけどな。ニア……(やばい、これは悩殺的な可愛さ!)」

「ぎゅーっ!」

「ニ、ニア?!ちよっ、まっ!!」

突然ニアに抱きしめられ、焦るマルコ

顔を真っ赤にして硬直した。

「マルコ。ニアがせっかく甘えてるんだから固まってないで撫でるくらいしてあげなよ」

ハルタがそう言うとニアはマルコから離れハルタの方に向かった。

「ハルにい〜」

「あはは！おいで、ニア！」

ハルタはウエルカムのようで、両手を広げてニアが来るのを待った。ニアはそれが嬉しかったらしく勢いよく抱きついた。その勢いでフードが取れる。

ハルタは何事もなかったようにフードをかぶせ直したがシャンクスはバツチリ見ていた。だが、シャンクスも気づかないフリをしていた。

空気を壊したらマズイと、彼なりに気を遣ったようだ

「ハルにいちやく。チョーカーありがとう！だいじにする〜」

「いいのいいの！喜んでもらえてよかった！」

「にいちゃだいき〜」と、ハルタの首元に頭をぐりぐりと擦り付ける「ありがとう！俺も大好きだよ、ニア！（ニアがこんな風に甘えてくるってないから新鮮！）」

（（なんでそんなに慣れてるんだ、ハルタ……））

一同の声が重なったのを彼は知らない。

「えつと、つぎは…」

パチツと目があったのはサッチ。

「?!」

「さっちゃん！ぎゅー！」

今度はサッチに抱きついた。サッチはどうしたらいいかわからない模様

「二、二、な、に、に」

「おい、狼狽えすぎだろ。言葉になってないぞ」

隣で言葉を発したイゾウに標的が変わった。

すぐさまイゾウに飛びつく。イゾウは予想してましたと言わんばかりにニアを抱きとめた。

「いーちゃん！」

（（いーちゃん!?!））

「いーちゃん、イケメン！かっこいい！クール！」

「はははっ！ありがとうよ！（ニアがこんなにも褒めてくれるとは……！

「これからもたまに飲ませてみるか…?」

『酔ってるニアも悪くない』と考えている彼の思考もいざ知らず、イズウに撫でられご機嫌な様子のニア。イズウもまんざらでもないようだ。

「ベタ褒めだな、ちよつと妬くぞ。イズウ」

ビスタがそう言うと、ニアはイズウから離れビスタの方に歩き「ぎゅー」と言っけてビスタに抱きつく

「ビスにいかっこのいいよ！ビスに、いつもみまもってくれてるのしってるよ。ありがと〜」

「なんだ、バレてたのか！はははっ！（結構よく見てるんだな…）」

とーぜん！と誇らしげに言うニアに思わず頬が緩み小さく笑ったジヨズ。ニアは結構耳と目と鼻がいいことを彼らはまだ知らなかった。

「ジヨズにいい！」

ビスタから離れ、ジヨズの方に歩く。あまり絡まないからかジヨズは目に見えて狼狽えた

「お、オレ?!」

「ジヨズに、わたしがこわがらないようになってわたしをさけてたのしってるよ。だいじょうぶ！ジヨズにこわくないよ！」

「!!」

「えいつ！ぎゅーっ！」

「に、ニア?!ちよつ…よ、よしよし（気づいてたのか…少しキュンときた。落ち着け俺。ニアはまだ一桁のガキだ）」

隙を突かれニアに抱きつかれたジヨズはどうすればいいかわからずとりあえず頭を撫でた

それが正解だったようだ。

「!!ジヨズにいがよしよししてくれた！」

花と音符が見える…と思うくらいご機嫌なニアにみんな頬を緩ませていた。

「グラララ!!おれにはぎゅーってしないのか？」

（（オヤジ!!??））

自分たちの父親的存在である白ひげからまさかの言葉が出たことに隊長達は驚いていた。

「!!するっ!とーさんだいきー!ぎゅーっ!」

白ひげの言葉に喜び、飛びつく。

片腕で受け止めてもう片方の手でニアの頭を撫でる白ひげ

ニアは白ひげの撫でてくる手に猫のようにじやれついた。

「グラララー!可愛いじゃねえかニア!よしよし、そろそろ寝るか?」

騒ぎながらもニアが眠そうなことに白ひげは気づいていた。

だからこそ発した言葉だろう。

「うーん。ねむたい、けど。にいちゃともっといっしょにいたい」

「グラララー!明日になったら居ないとかねえから安心して寝ろ。ニア」

「……うん。みんなとあえてよかった。……これからもかぞくで……いて……ね……」

白ひげの腕の中で幸せそうに眠るニアに一同は うちの妹天使!

と、思ったとか思わなかったとか……

「俺、明日ちゃんとニアの顔見れるか心配だよ」

「シスコン拗らせてんなあ……。まあ、俺もだけど」

顔を赤らめて言うマルコとサッチ

「ニアって、酔うとああなるんだね、可愛いなあ」

「たまには酒飲ませてみてもいいかもな」

「やめとけ、イゾウ。ニアはまだガキだぞ?」

ニアに甘えられてご機嫌なハルタ、イゾウ、ビスタ

「お前ら3人はなんでそんなに平然としてるんだ……」

そんな3人に呆れるジヨズ

「なんというか……実に愉快だったぞ」

そしてその光景を微笑ましく見ていたシャンクスであった。

「「「あ……」」」

「おい、今、俺の存在を忘れていただろう。」

赤髪は1つため息をつくと気を取り直してから言った

「銀髪にオッドアイの娘か。これ以上は詳しく聞かないし、詮索もし

ない。だがもし、お前たちがその子を守りきれないと思っただら連絡をよこせ。俺たちも協力しよう」

「グラララー！余計なお世話だ、小僧！まあだが、頭の片隅にはいれておいてやる」

「そうか、ならいい。俺は帰るとする。世話になった」

赤髪は今日見た愉快な光景と幸せそうな子どもの笑顔が壊れないようにと、密かに願うのだった。

第15話 風邪の大流行

快気祝いと言う名の宴から数日、ハードなや筋トレや体力作りをする毎日が始まった。わたしも強くなりたいとは思ってから必死にメニューについていった。

「あいつ、根性あるな」

「ああ。だが、子どもにやらせるメニューじゃないよな、アレ。隊長たちも鬼だぜ」

「ニアを想って心を鬼にしてるんだ。そういつてやるな」

わたしのトレーニングを見ている隊員たちが口々に何か言っている。

同情されてるきがするのは気のせいだろうか…

「午前はこの辺までにしとくか。休憩だニア」

トレーニング中は結構厳しいビスタさん。

さすがと言うかオンとオフがしっかりしてるというか…

「あ、あい…」

午前は、腕立て・腹筋・背筋・スクワットを50回くらいずつやった。回数は日を重ねるごとに増やしていくらしい。

午後からは体力作りだそう。

…まだ時間はあるな。よし、図書室に行こう

この船なんでももあるな…無駄に広いわけじゃないんだ。

人が多いから大きいのは当たり前か

ーガラッ

図書室のドアを開けると柔らかい物腰で話して笑いかけてくる片眼鏡をした薄紫色の長い髪の男ひとが居た。

「イオンにいちやーきようもおべんきようしにきたよ」

「ふふっ…。よくきたね。おいで、ニア。」

イオンさんは非戦闘員で、主に薬の研究をしてる。

植物に詳しくてこうして時間があるときに色々教えてもらっているのだ。

この間は花の摘み方を教えてくれた。

「もしだれかがかぜをひいたりけがをしたらどうすの?」

「風邪と、怪我か。そうだね……。かぜにはサンシユユがきくね」

「さんしゅ……?」

わたしを膝に乗せて薬草図鑑を開きながら優しく教えてくれるイオンさん……

動作1つ1つがすごい優雅。ほんとに海賊!?

「サンシユユ。別名、ハルコガネバナ。花は黄色くて実は赤いんだ。解熱、滋養強壯、疲労回復の効果があるんだよ。」

イオンさんが図鑑を指しながら言う。

「怪我はオトギリソウかな。出血や腫れを抑える効果があるよ。あ、でも……煎じた汁を飲むと皮膚炎を起こすから気をつけようね」

ほうほう……

「それと、千年草と千寿草。これらは希少でかつ少々やつかないところに生息していてね、気温が低くて湿気の多いところじゃないと生えないんだ。」

「せんねんそう、せんじゅそう」

なんですか、その厨二感満載な名前は

「千年草は風邪薬で千寿草は傷薬になるんだ。この2つは他のどんな薬よりもよく効いてね万能薬として記されてるんだ。通常の3倍の速さで病気や怪我を直してしまふんだよ。生息地はここから1番近いところでも10キロは離れてるね。サルド山の頂上付近と地下層かな……。どちらも小さな白い花とギザギザした葉が特徴的だね。」

3倍……!?

そんなチートアイテムがあるの!?

「ぼしよがちがうの?みわけかたとかある?」

「千年草は花卉が上向きになっていて、千寿草は下向きなんだ。似た気候のところにあつて、見た目も花卉の向きくらいしか変わらないけど一緒に生えてるわけじゃないね。千年草が頂上付近で千寿草が地下層にあるんだ。ボクも実際に取りにいったことはないんだけどね。そこに生息してるのは確かだよ」

イオンさんの優しい喋り方癒されるなあ。

しばらくイオンさんの授業を受けているとサツチさんが図書室のドアを開けた

「あ、ニア。ここにいたのか！早く飯食いに来いよ！そのあと体力作りな！」

「あ、はい」

「ふふっ。お迎えがきちやったね。じゃあ、今日はここまでかな？また時間があるときにおいで」

「うん！ありがとう、イオンにいちや！」

イオンさんの膝から降りて笑顔で手を振って図書室を出る。
ふうっ、さてまた修行か

がんばろっ！

それからまた数日。道場でいつも通り筋トレを終えた頃…

「…………ニア、ちよつといいか？」

他の人がいなくなつたあとカルガンがふらふらとわたしの方に歩いてきた。

「カルにい？どうし……………っ!!カルにい?!カルにい!!」

わたしの前にくると脱力するように崩れ落ち、慌ててその体を受け止めた

「ど、どうしたの?!カルにい！」

驚いて思わず叫んでしまった。

「ははっ…、なんかちよつと体が怠くてよ。悪りいんだけど、部屋まで支えてつてくれねえか？」

「…カルにい…あつい。それにふるえてる？まさか、かぜ?!」

「わかんねえけど、少し休めば治るだろ」

…わたしが拒絶すれば早いんだらうけど、ダメだ。

そんなことしたら拒絶この力カのことを全部話さなきゃいけない。ほんとうに追い込まれた時以外は使わないって決めたんだ。

どうしよう…………。とりあえず、カルガンを寝かせないと!!

「心配かけてごめんな、ニア」

「いいっ！だいじょうぶ！そんなことときにしないで」

カルガンの体を支えながら道場を出るとちようどビスタさんと出会った。

「…どうしたんだ？」

「ビ、スタ隊長…。えっと…」

カルガンはわたしの肩を借りてるからか気まずそうにビスタさんから目をそらした

「カルにい、ねむいんだって！ちよつとねかせてくる」

カルガンが知られたくないようだったから咄嗟に嘘をついた。

「…ニア。お前が嘘をついたりする時「にどもおなじてにはのらないよ?!」…そんな泣きそうな顔してりやカルガンが眠たい訳じゃないってすぐわかる」

「…おみとおしでくやしい」

どうしても感情が顔に出てしまう！

くそう、ビスタさんに一回でいいから勝ってみたい！

…って、何の勝負してるんだ、わたし

「ははっ！よしよし。カルガンは任せろ。医療室にでも運んでくる。見たところ風邪か何かだろう」

ビスタさんはカルガンを軽々と担ぎ上げた。

すごっ…。その腕の筋力どうなってるの……。

心配してるように見えたのかビスタさんはわたしの頭をくしやりと撫でるとカルガンを医療室に運んでいった。

—ビスタサイド—

ニアの修行を始めて数日、あいつの根性と成長の早さには驚いた。

子どもには厳しすぎるだろうと自分でも思うがそんなメニューも弱音一つ吐かずに一生懸命にこなす。さすが俺たちの妹だ！

「……………ルにい！」

午前の部を終えて解散したあとなかなかニアが戻ってこないから様子を見に道場に行くとニアの必死な叫び声が聞こえた

急いで見に行くとちようど道場のドアが開き、カルガンがニアに支えられていた

「なにがあつた?」

そう聞くとカルガンは気まずそうに目をそらす。

顔が少し赤いな……。それにニアのあの心配そうな表情……。熱でもあるのか?

「カルにい、ねむいんだって!ちよつとねかせてくる!」

ニアがそう言う。カルガンが知られたくなさそうなのを悟ったんだろう。全く……。鋭いんだか鈍いんだかわからんな、こいつは

「ニア、お前が嘘をついたりする時「にどもおなじてにはのらないよ?!」……。そんな泣きそうな顔してりやカルガンが眠いわけじゃないつてすぐにわかる」

いつか使った手でニアの嘘を暴こうと思ったが2度目は引つかからなかった。そりやそうか……。

だがその後「おみとおしでくやしい」と、しよぼくれた。

……。かわいい……。けど、そんなこと言ってる場合じゃなさそうだな

ニアからカルガンを受け取ると俺はニアの頭をくしやりと撫でて医療室へと向かった。

―サイドエンド―

今風邪が流行っているらしくあれからも高熱で倒れる人が続出しているらしい。

……集団生活してるからこれって結構まずいんじゃない?

「ニア……」

ロビーにしているとふと後ろから呼ばれた。振り向かなくてもわかる。

この声はハルタさんだ

「ハルに……っ!!ハルにいちゃ!!」

振り向くとわたしに抱きつくようにして倒れてきた。

え、隊長まで……!?

「にいちゃー!だいじょうぶ?!」

「あ、はは。情けないなあ……。妹に心配かけるなんて……」

「そんなときにしない!いりようしつはこぶからつかまって」

彼は「ありがとう」と真つ赤な顔で力なく笑う。

わたしはハルタさんを支えながら医療室に向かう。そこには病人が結構いた。

うわあ…。大感染じゃん、どうしよう…。

えーつと、、そうだ！千年草！それがあればすぐにこの騒動も収まるはず!!

でも過保護なお兄ちゃんズに相談してもきつと反対されるだろうな…

なら、みんなの目を盗んでいくしかない。だったら夜中に動くしかない…か。

朝と昼は修行だし、常に誰かついてる。

風邪が流行してて、そつちで手一杯そうだから頑張れば抜け出せるはずだ

けど、1人じゃ抜け出せてもたどり着けないかな…？

うーん…

あつ、そうだ!!イオンさんなら…!

彼が協力してくれるならいけるかもしれない!

「おいおい、ハルタまで…。大丈夫かよい?」

「マルコ。頭痛い…」

「多熱病の類だな。ニア、ハルタを運んでくれてありがとうよい。あとは任せろ」

マルコさんが船医さんの手伝いしてる。この人って船医なの?副船長兼船医?それとも航海士?結構謎よね

まあ、今はいいか

わたしはマルコさんにハルタさんを任せ部屋を出る。

部屋の前でどうやって薬を取りに行くかしばらく悩んでいると船医さんとマルコさんの会話が聞こえた。

「薬が足りるかわからないな…」

「そうだな。思ったより患者が多いよい。多熱病は大人がかかるとめんどくせえんだよなあ…。なかなか治らない上に感染力だけは高い。こりや参ったぜ」

薬が足りないかもしれない：

その瞬間、わたしの視界が歪んだ。

なんとか壁にもたれかかり倒れずに済んだが悟ってしまった

——感染した——

——っ！！

ただえさえ、わたしのせいで隊長たちの時間を割いてるのにこれ以上負荷はかけれない。

：行くしかない。サルド山。

今日はちようど昼の部も終わってるし、夜までまだ時間がある。

この前の段階で10キロくらいは離れてるっていったから今はもう少し離れてるはずだ。構うものか、場所を把握して取りに行く。

夜のうちに行つて朝までに帰つてこれば大丈夫だ、きつと。

海図：は、マルコさんの部屋だっけ？

忍び込むのは気がひけるけどやるしかない。今から日没までに準備を全部終わらせてミツション開始だ

フードを深く被り顔を隠してふらつく足元を気力で動かし、マルコさんの部屋に忍び込み海図を見る

………ここか。距離、地形、標高全て頭に叩き込む。

船は：小船を1つ借りよう。

イオンさんならきつと協力してくれる！

あ、でもわたしの様子を見たら止めるかな？

とりあえずわたしはマルコさんの部屋を出て図書室へ向かいドアをゆっくり開けた。

「……るとおもってたよ、ニア。」

予想していたかのように本を読みながらイオンさんが言った。

イオンさんが顔を上げわたしを見ると「おや……」と何かに気づいた。

「ニア、君も熱を出してるね。そんな体で薬を取りに行くつもりかい？」

「どうやら全てお見通しらしい。」

「わたしの、せいでみんなのじかんをたくさんとってる。わたしも：

やくに、たちたいっ！」

「ふふっ。ニアはすごい子だね。いいよ、手伝ってあげる。但し、絶対に帰ってくるんだよ？戻ってこなかったらボクも怒るからね？」

「……うん。ありがとう、イオンにいちや。ぜったいぶじにかえる。やくそく」

「そうだね、約束だ。ニア、君に魔法をかけよう。君はこの船を出るまで誰の視界にも入らない。そんな魔法。けど、誰かにぶつかったりすると解けてしまうから気をつけるんだよ？」

イオンさんが謎なことを言ったけどとりあえず頷いておく。

甲板に出るためにロビーを通るが本当に誰もわたしに気付かなかった。

イオンさん、もしかして能力者なのかな？

まあ、それはあとでいいか

置き手紙を残し、わたしはサルド山へと向かった。

第16話 開花

甲板に出るとすでに小船が用意されていた。まさかイオンさんここまで予想して用意してくれた!?

あの人一体何者!!?

そんなことを思いながら小船に乗りサルド山へと向かうと途中で雨が降ってきた。

：運の悪い…。まあいいや、いまさら引き返す気もない。

気を抜いたらすぐに意識が飛びそう。なにこれ、なんのゲームだ。

無理ゲーか、クソゲーか…。なんでもいいや、無理だろうが無茶だろうがやってやる! わたしだって、やればできるんだ!!

サルド山つき、船が流されないように近くの木に結びつける。

：これで、よしっ! っと

さて、千年草は頂上付近だったな。：登るか。

船を出た時は小降りだったけど、いつのまにか本降りになってる。

こりや急がないとヤバいな

ひたひたと降り注ぐ雨の中わたしはひたすら山を登った。

すると山賊と思われる人たちと出会ってしまった。

「おっ! こんなところに子供がいる! へへっ。お嬢ちゃん、雨の山は危ないよ? おれらとおいで?」

構ってる暇はないから彼らを見殺しして歩を進める。

「おいおい、無視か? 結構優しく言ったんだけどなあ…。なら死ぬか?」

そう言っただけで彼らは刀を取り出す。ざっと10人ちよつとか。

熱と寒さとはつきりしない意識にわたしはイラついていたこともあり、山賊に対して「うざい!」くらいにしか思わなかった。

彼らはわたしの心中など知るわけもなく刀を振り下ろしてきた。

まだ体力づくりと、筋トレくらいしかしてないのに何故か彼らの動きがわかる。体調悪い時に限って勘がいいときってあるよね。

軽々と彼らの攻撃をかわすがわたしは武器をまだ持っていない。つまり素手でやるしかない。：ん? そうだ、武器なら奪えばいいん

だ。

なりふり構ってられるか。こっちは急いでるんだ。

「ツチーちよこまかと!!このっ!!………うおっ!!」

刀を振り下ろしてくる山賊の1人。

刀の側面に捻り切った拳を入れる、と同時に一気に捻りあげる

最速の払いと突きを同時にする技。

体術の本で読んだ覚えがある。これであってるのか知らないけど、攻撃が当たったから多分あってるだろう。

山賊が驚いて武器を落としたから相手より早くそれを拾い相手の方に向かう。

敵の前で飛び上がり頭上へと行く。体を捻り、旋回しながら相手の急所を確実に狙い剣を振るう。

相手の生死なんて気にしてる余裕はなかった

「いま、いそいでるんだ……。じゃまするな」

刃の先から滴る血。激しい動きをしたせいでフードが取れ姿があらわになる。

闇夜に光るオツドアイの瞳は彼らに恐怖を感じさせたようだ

「っ!!は、はいい!!ゆ、ゆるして!!」

戦意のなくなった彼らを見てわたしはフードをかぶり直し、血のついた刃を捨てて、残った山賊には見向きもせず先を急いだ。

登れば登るほど寒くなってきた。上着、1枚くらい持つてきといた方がよかつたかな…

頭痛いし、ぼーつとする…

足元もふわふわするし、これって結構まずいかな？

でもここで弱音を吐くわけにはいかない。諦めちやだめだ

船で高熱にうなされてる家族を助けるためにここまで来たんだ…。もう少し、あと少し頑張ろう

早く薬草とって帰って…マルコさんに見つかって怒られて…それをハルタさんが宥めて、ビスタさんが微笑ましく見せて…

そんな光景を想像する

ああ、幸せだなあ。いつのまにかこの生活に馴染んでたんだなあ。

目まぐるしく忙しい毎日だったから気づかなかったんだ。

「なっ……、こんなところに子どもがいるぞ!!お嬢ちゃん!ここは危ないよ!1人かい?!」

今度は白いコートを羽織った人たちが駆け寄ってきた。背中に正義と書かれている。海軍将校か……、厄介な

こんなところで足止めを食らいたくない

「か、まわないで。いそいでるの」

駆け寄ってくる人の手を払い頂上を目指して歩く。

「ふらふらしてるじゃないか!だれか手を貸せ!この子を保護するぞ」

保護?!冗談じゃない!そんなことされたらみんなが危ない!

「かまうなっていつてるだろ!どけっ!!」

わたしがそう叫ぶとコートの人たちが次々と気絶していった。わたしの1番近くにいた人は気絶はしなかったものの腰を抜かしてる。

なにが起きたのか自分でもわからないけど今のうちに……

わたしは駆け出し一気に山を登った。

「霸王色の……覇気……」

そう誰かが呟いた。

—?サイド—

最近山賊がうろついているからなんとかしてくれと市民に言われサルド山に派遣された。

山に着くと雨が降っていて、搜索は後日にしようと思った。派遣された兵は7人。中尉が3人、少佐が2人、大佐が1人、そしてわたし、少将が1人だ。

わたしはしばらく暇だから駆り出されただけで、今回の山賊はそんなに強くないらしい。だが、まあ、念には念をだな。

雨よけの場所を探していたら小さな影が見えた。よく見ると4、5歳くらいのフードをかぶった小さな子どもだった。

迷子か？それとも遭難したのか…

駆け寄って手を伸ばすと急いでるから構うなと払われた。

だが、目の前の子どもは明らかに様子がおかしかった。足元がおぼつかず呼吸も荒い。

だが、何か興奮しているようで大人しく保護されてはくれないと思いい、何人かに助けを求めろ。

「かまうなっついていつてるだろ！どけっ!!」

そう子どもが叫ぶと心臓を潰されるような圧力がかかり、わたしと大佐以外は気絶した。

わたしも大佐も気絶こそしなかったものの至近距離でその圧力を受け、腰を抜かしてしまった。

これは…霸王色の覇気!?

こんな子どもが…会得してるというのか?!

子どもは動かなくなったわたしたちを一瞥すると山頂を目指して消えていった。

しばらくの沈黙…。ようやく動けるようになった大佐が声をかけた。

「少将、今の子は…。」

「わからない…が、ただならぬものを感じた。アレが将来敵にならないきやいいな…」

心臓を…：全身を握りつぶされるような高圧的な圧力。

全身の血が見えない傷口から流れ出るような感覚に震え上がった。

わたしは気絶した部下を運びながら少女の消えていった方をしばらく見つめていた

—サイドエンド—

もうすぐ山頂だ。この辺りにあるはず

えっと、気温が低くて湿度の高いところ。だっけ?…あの岩陰とかどうだろう

そう思い岩の裏を覗き込むと小さな空洞があり、その下に隠れるようにして花が咲いていた。

白く小さな花に、ギザギザした葉。上を向いた花卉。特徴は全て一致する

…あつた！千年草…。

子どもであるわたしがやつと入れるくらいの小さな空洞…。そりや、なかなか見つからないわけだ。えっと、希少だから摘み取りすぎたらだめよね？…けど、こんなもんあれば十分だな。

優しく丁寧にいくつか摘み取ると、持ってきたオレンジ色の中着に入れ紐を縛り落ちないようにした。

よしっ。あとは戻るだけだ。あのコートの人たちまだいるかな？

いないといいなあ。なんかすごい驚いた顔してたけどわたしなんかしちやつたかな？何人か急に気絶したし、あれつてもしかしなくてもわたしのせい？誰かが、はおうしよく？とか言つてたような…

ああ、頭クラクラする。考えるのは後にしよ。なんにしろ早く戻らないと…。

今度は来た道に戻るためにひたすら坂を下る。

ガラガラガラ…

なんだろう、なんかすごい嫌な音が聞こえた気がする。

後ろを振り返ると土砂が流れてきていた。

ど、土砂崩れ!?やばい!

わたしは脇に逃げようとしたが限界が来たのか足が動かなかった。

「……っ!!(帰るって、絶対帰るって約束したのに…。ごめん、イオンにいちゃ…)」
アイスエイジ

「氷河時代!」

聞き覚えのある声と共に土砂が凍りついた。

これはまさか…

「あお…き…じ…」

「久しぶりじゃないの、ニアちゃん。1人かい?つて、ニアちゃん!?あらら…。随分と酷い熱じゃないの。ったく、白ひげは何やってんだ…」

顔見知りとあつたせいとか緊張の糸が切れ、簡単にわたしは倒れてしまった。ふわりと、体が宙に浮く感覚を覚える。青雫がわたしを担ぎ

上げたんだろう。もう抵抗する力もない…か。薄れゆく意識の中で青雫が「しぬなよ、ニアちゃん」とか言ってたのは聞かなかったことにしたい。海軍が海賊にしぬなよ、って馬鹿じゃないのか、こいつ…

ークザンサイドー

ープルプルプル：ガチャ

「もしもし？」

《クザン大将！こちらレモネードです！今どちらにおられますか？》

あー、少将か。サボってばかりいるから仕事しろってきたかな？

「今、、サルド山に向かう海域を抜けたところあたりかなー？どうしたの」

《!!なら、申し訳ありませんがサルド山に来ていただけませんか？山賊の討伐に派遣されたのですが謎の子どもにより部隊がほばやられてしまっ》

「謎の子ども？1人か？」

《はい。1人でした。フードをかぶっていて顔はわかりませんでした
が4、5歳の子供です》

フードをかぶった謎の子供も。

俺はいつかあった1人の少女を思い出す。だが、あいつなら1人で山をうろつくなんてできるはずがない

あの過保護な奴らがそばにいるからな。

《明らかに様子がおかしかったので保護しようとしたのですが…その、子どもの覇王色に隊員がほとんど気絶してしまっ、調査どころではなくなったのです。》

様子がおかしかった？

しかも、覇王色だと？

どう言うことだ？

…まあ、気になるし行ってみるか。

「わかった。子どもの方は任せてちょうだいよ。ただ、センゴクさんには報告するな。俺の現在地がバレたら説教じやすまねえのよ。あとはなんとかしとくからとりあえず一回撤退して頂戴な」

《あなたまたまた仕事サボったんですか…。仕方ないですね。今回ばかりは黙っておきます。…了解しました。お手数おかけします!》

ーガチャ

伝電虫が切れたのを確認するとため息をつく

…はあ、まじかよ。ニアちゃんだとするならほんとに何者よ…。

とりあえず行ってみるか…。

方向を変え海を凍らせながら自転車を漕ぐ

サルド山に着くと隠すように船が木に括り付けられていた。

まさかあんな小船できたってーのか？

どっからきたか知らねえがよく迷わずにこれたな

航海術も使えるのか？あの子…

考え事をしながら少し登ると山賊たちがガタガタと震えながら隅っこで縮こまっていた。中には怪我人もいるようだ。こいつらが少将の言ってた山賊か？

「おい？」

「ひっ！ひえっ!!ご、ごめんなさい！許してえええ!!」

なんだこいつら。

何かに襲われたのか？完全に戦意喪失してやがる

「おいおい、そんなに怯えることないじゃないの。俺何かしたかい？」

「え…。あ、大人？」

俺の声に反応し、命乞いをした奴が顔を上げるとそんなことを言っただ。

子どもと大人の違いくらい声でわかるでしょ

「ア、アニキたちが一瞬で血を流して倒れたんだ…。あんなにガキなのに…容赦も躊躇いもなく首を…喉を…あらゆるを急所を狙って一撃で!!」

両手で頭を抑えてガタガタと震える山賊。

「何人かがやられた。俺達は医学の知識を持ってねえからかろうじて生きてる奴らも死を待つばかりだ。…：…まだ二桁にもなっていないよ。うなガキが…全身が震え上がるような殺気を出したんだ…！あんなの…：…化け物っ、じゃねえか!!」

「ふーん。話は後でゆっくり聞いてやる。とりあえず捕まっとけ」
「?!まさか、かいへ…」(ピシピシピシ)

とりあえず氷漬けにしとけばだれか回収しに来るでしょ。

あとで本部に連絡入れとくか

そのあと山を登り続ける。

…これ、ガキが登りきれるような山じゃないぞ?ほんとにニアちゃんここ登ってったのかな?いや、まだニアちゃんだと決まったわけじゃけど

ガラガラガラ…

…この音は、どこかで土砂が崩れたか。……ん?

目の前を見ると黒いフードをした子どもが土砂を見ながら呆然と立っていた。

え、逃げるそぶりもしない?!ちよつと!!死ぬぞ!?

というか、俺も土砂に巻き込まれる!!

「氷河時代!」
アイスエイジ

土砂を凍らせると、フードの子がゆっくりこつちを向いた

「あお…き…じ…」

その声はとても弱々しくて確かに普通じゃなく、かなり弱っていることがすぐにわかった。

だが……間違いないな、ニアちゃんだ。

「久しぶりじゃないの、ニアちゃん。1人かい?って、ニアちゃん!あ
らら…。随分と酷い熱じゃないの。ったく、白ひげは何やってんだ
…」

ニアちゃんに話しかけると彼女は倒れてしまった。慌ててその体を受け止めるとかなり熱かった。

オイオイ、この高熱でこの雨の中でこの山を登ったのか!?

むしろこの熱でよくここまでできたな!!

無茶にもほどがあるだろ!!

「死ぬなよ、ニアちゃん。」

なぜかそう口走ってた。聞こえないといいな。こいつのことだから「かいぐんがかいぞくのしんぱいしていいの?!」とか言いそうだ。

俺はニアちゃんを抱き上げると雨をしのげるところを探した。

―サイドエンド―

……ハルにい、カルにい、早く良くなつて…

パチッ

目を覚ますと見慣れないところだった。

体は相変わらずだるくて頭も痛い。

体を起こすと氷の溶けた氷のうが落ちてきた。ん？氷のう??

「……??……??」

あたりを見渡すと、パチパチと火が焚かれていてわたしの隣には千年草の入った巾着が置かれていた。一瞬焦ったが中身は無事だった。

わたしのパーカーは干されていて見おろすと「正義」と書かれたコートがかけられていた。

「????」

何が起こったのかまるつきり記憶がない。

青雫とあつて……どうしたんだっけ？

「……濡れた服が体温を奪うからよ、とりあえずパーカーだけはと
思って脱がせたとき銀髪だったのには驚いたが、まさかオツドアイと
はな……。こりや、隊長たちが過保護にもなるわけだ」

対面で青雫が胡座をかいて座っていた。

「あお……きじゅー」

「あー、今はクザンでいいぜ？別にお前捕まえる気ないし。つか、お前
に手出したら確実に戦争が起こるから止めとくぜ、面倒くさい」

「なら、わたしかえる」

そう言つて立ち上がろうとするが視界が歪んでふらついてしまう。

対角に座つてたはずの青雫がいつのまにか私の隣にいて支えてく
れた。

「そんな体でどうやって帰るんだ？またどつかでぶっ倒れるだけだぜ
？せめて雨が上がるまで待て。」

「でも、あさままでにかえらないとみんなしんぱいする」

「あらら。何も言わずに出てきたの？ニアちゃん」

「おきてがみは…のこしてきた」

「…今頃船は大騒ぎだぞ、それ」

まあ、落ち着け。と、クザンさんに諭される。彼はわたしの腕を掴んで座るとわたしを膝の上に座らせた。

「こおらせる?」

「そのつもりなら介抱なんてしないだろ」

「なんでかたいれするの?てきなのに」

「お前を気に入ったからだ。それにお前の存在を海軍では俺しか知らない。お前助けたところで海賊を助けた、にはならねえのよ。いざとなったら揉み消せばいい」

「やっぱりしょっけんらんよう…。」

「あらら…相変わらず辛辣じゃないの」

心外な。と言う表情を浮かべる青雫だが間違いでは無いと思う

「どうしてそんな高熱で1人でここまできたんだ?」

「てきにおしえることはない」

「えー。いーじゃん。教えて頂戴よ」

「こどもか」

「俺は大人よ?どこからどうみても立派な大人よ?」

「みためはおとな、なかみはこども」

「酷いっ!!熱があつても毒舌は変わらねえのか?!ニアちゃん!じゃ

あ、教えてくれるまで離さないぞ!」

そう言っ彼はわたしを後ろから抱きしめる

…すつつつごい癩だけこの人冷たくて気持ちいい。

そんなことを思うのは熱があるからかな? いや、氷のうがわりに使つとこ

「あおきじさん…つめたくてきもちいい」

彼の体に身を預けると目に見えてうろたえた

バツ!と効果音がつきそうな勢いで手を離す

「ちよっ!!えっ?!なにこれ夢!?こんなところあいつらに見られたら俺確実に殺されるんだけど?!」

青雫の言葉でみんなのことを思い出す。

「そうだ、早く帰らなきゃ」

「にいちゃ……。いま、かえる」

彼の膝から降りると巾着を持つ。

だが、「待て待て待てー!」とすぐに止められた

彼はわたしが持った巾着の中身を見ると目を丸くする

「それ、千年草じゃねえか。……。なんだ?今、奴の船は風邪でも流行つてんのか?つか、よく見つけたな。その草希少なんだろ?」

「はなして」

「嫌だね。さつきもいったがそんな体でどうやって帰るつもりだ。今度こそ土砂崩れに巻き込まれて死ぬぞ?せつかくその草見つけたんなら生きて持つて帰ってやれ。」

「なんか…優しい?この人」

「凍えねえ程度に熱さまじしてやるから大人しく寝てろ」

「そう言つて彼はわたしを横にする。ちやつかり膝枕されてるんだけど」

「こんなところあいつらに見られたら俺確実に殺されるな」

「なら、やめれば」

「あらら、俺のこと心配してくれんの?」

「べつに」

「お前なら今どうするべきかわかるだろ?俺に敵意もお前を捕まえる気もない」

「……………」

「まあ、警戒する気持ちは分からんでもないがな。だが、今のお前を逃す気もない」

確かに逃げれない。

今の状況でこの人の目を盗むのは不可能だ。

でも…絶対無事に帰るつて約束したから何がなんでも帰るんだ。

…だから心配しないでね、イオンさん。

わたしもやればできることを証明しなきゃ!

第17話 本音

—マルコサイド—

思ったよりも風邪の感染力が強く高熱でうなされる隊員たちが続出した。

集団生活してるからな、流行するのは少しくらい仕方ねえと思うが

…

ここまで拡大するときすがにお手上げってもんだよい

「マルコく。ニアは大丈夫？」

ハルタが熱で顔を真っ赤にしてニアの心配をする。

自分がニアにもたれかかったからうつしてたらどうしよう…と
思ってるらしい

「あー、はいはい。ニアの様子も見てきてやるからお前は自分の風邪を治すことに専念しろよい」

「あ、はは…。ごめんごめん。ありがと、マルコ」

まったく、世話の焼ける兄弟達だよい。

えーつと、ニアの部屋は……

「おい、これって隊長に言った方が…」

「いや、ニアのイタズラかもしれないぞ？」

「あいつがこんなタチの悪いイタズラするかよ！」

「イタズラだと思いたいのはわかるが、それはニアを船で見つけてから言ってくれ」

ロビーでは元気な隊員たちが一枚の紙を見ながら騒いでいた。

「おい、お前ら…どうしたんだよい？」

「「ま、マルコ隊長!?!」「」

彼らはサツと紙を背後に隠し驚いた声を上げる。…隠されると気になるじゃねえかよい

「何を隠した？」

「な、なんでもないで……」「すこしふねをあげます。あさまではもどってきます。ニア」……び、ビスタ隊長!?!」

「なんだ？これは…」

「なんだよ、それは」

ビスタが隊員たちの後ろから歩いてきて紙を取り上げ書かれた内容を読見上げた。

……船をあけます…？だと?!

「なんの冗談だ？まさかこの雨の中一人でどこかに行ったというのか？」

「…その紙を見つけたのはどのくらい前だよ？」

俺たちの声のトーンが下がったのだろう。別に彼らに怒ってるわけじゃないが隊員たちが震え上がっていた。

「ひっ！え、えっと、さ、3時間くらい前だ！それで今他の隊員たちが船内を探してるんだけど見つからなくて…。」

グシヤツ

ビスタが紙を握りつぶす。なにかを考えてるようだった。

「マルコ」

短く俺を呼んだ。俺も多分同じことを考えてるだろうよ

「おーい、マルコ！ビスタ！さつき隊員が騒いでて何事か聞いたらニアがないって！」

サッチが騒ぎを聞いて走って俺らのところに来た。

「サッチか。ちようどいいいよ、お前もこい！」

「え？はっ？どこに?!つかマルコ！痛いぞ！骨折れるだろ!!」

サッチが来たからついでにこいつも連れて行こうと腕を掴むとサッチが抗議するがそんな簡単に骨は折れねえよ

「イオンのところだ!!」

こんなことできるのはイオンしかいねえよ

あいつなら誰にも気づかれずに行動するなんて事、息を吸うほどに簡単だ。

俺らの気迫に隊員たちが腰を抜かしていたのを謝るのはまた今度だよ。

バン！

図書室のドアを乱暴に開けるとイオンは優雅に本を読んでいた。

「おや、マルコ隊長じゃないですか。それにビスタ隊長にサッチ隊長

まで…。そんな乱暴に開けるとドアが泣きますよ？…。どうしたんですか？こんな夜中に。」

・・・ドアが泣くってなんだ。ドアって泣くのかよ？

…はっ！こいつと話してるとこいつのペースに乗せられるんだよな…。

そんな場合じゃないってのに…

「白々しい言い方はよせ。俺たちが何の用なのかわかってるだろう？

ニアはどこだ？」

「ニア…？まだ帰ってませんか…」

そう言つて懐から取り出した懐中時計を見る。

「ふむ…」と何か考えてるようだった。

……………いちいち動きが綺麗なんだよな、こいつ…。

「そろそろ半日経ちますね。たしかにさすがに心配かな…」

半日が経つ？

あいつがこの船を出て半日も経ってるのか！？

やっぱりこいつの仕業か！半日もニアがいないことに気づかねえなんてこいつの能力は侮れねえよ

「半日だと！？…おい！！ニアはどこにいるんだ！！無事なんだろうな?!」

ビスタがイオンの胸ぐらを掴み叫んだ。イオンは焦る様子もなく落ち着いて言った。

「ニアならサルド山に行っています。…ボクに絶対無事に帰るって約束したんです。必ず戻ってきますよ」

サルド山だと!?何キロあると思つてんだ!!

「ちよつと待て！サルド山だと!?こんな時間にこの雨の中、1人でそこまで行つたっていうのか!?ふざけるのも大概にしろ！一体何キロあると思つてんだ!!子どもが行ける距離じゃねえだろ!!」

そう言うと、イオンの雰囲気が変わつた。彼から微弱ながら殺気が漂う

俺は思わず戦闘の態勢に入り、いつでも反撃できるように準備した

イオンはビスタの手を払い服の形を整える。

乱暴な動作なのにやっぱり優雅だ。

「何もふざけていませんよ。ねえ…？隊長方。あなた達いい加減その中途半端な優しさがあの子を苦しめてる事に気づいたらどうですか？」

「何？」

俺とビスタと…：サッチもその言葉に反応した。

「いい機会ですね、あの子はきつとこれからも言わないだろうからボクから言っておあげます。ニアはあなた達が思ってるほど強くありませんよ？目立ってはいけない存在だということも、得体の知れない存在だということも、1番よく分かっているのはあの子自身です。普段は無邪気に笑ってますけど本当は自分自身の得体の知れなさが怖くていつも隠れて震えているんですよ？自分の力が怖いって泣いているんです。それなのに、強くあろうとするあの子を閉じ込めて縛るように行動を制限するあなたの方が残酷つてもものじゃないですか？それが優しさだと思ってるんですか？ふふふ…：ふざけるな？こちらの台詞ですね」

こいつほんつとにキレると怖エな!!

目の笑ってない笑顔と丁寧な口調でさらつと暴言吐きやがるから掴めねえぜ…

「ボクだってこんな状況でニアを1人行かせるのは心配だと思いましたが？でもきつと他の誰に言っても反対されるだろうからボクの所に来たんでしょね。自分も熱を出して真っ赤な顔で泣きそうに…：あんな健気にお願いされたら断れませんよ。ああ、けど…：雨が降ってきたのだけは予想外でしたね。ちよつとまずいかな？」

ニアが…：自分からイオンに頼みに行ったのか。

薬草を取りに行きたいから協力してほしいって…

まさか俺と船医が話してたこと聞いてたのか?!

…：だとしたら余計な心配かけちゃったのかもな

ん?!ちよつとまで、こいつ前半なんていった?!

「お前今、なんて言った!？」

「雨が降ってきたのだけは予想外でしたね…と。」

「その前だ！自分も熱を出して真っ赤な顔で…って言ったか?！」

「言いましたよ?」

「言いましたよ?…って…!何でそんなのんびりしてんだ!!それって、ニアも発症してることか!」

「そうですね。あの様子だと確実にかかっています。結構重度じゃないでしょうか?無茶だとは思いましたけど、止めても無駄だな、と」

「いやいやいやいや!!そこは止めろよ!!途中までいい話だったのに!結構重度じゃないでしょうか…じゃねえだろ!!お前って本当調子狂うな!!」

騒ぎを聞きつけイゾウが走ってきた。

「おい!ニアはどこだ、イオン!」

「これはこれは、今度はイゾウ隊長ですか。皆さん、ニアが船からいなくなっただことを真つ先にボクのせいにするのはどうかと思いますよ?」

イオンが心外だと言いたげな表情を浮かべるがお前の能力を知ってる奴なら誰だってお前を疑うよ!!

「二俺らに気付かれずにニアを外に出せるのはお前しかいないからだ(よい)!!」

みんな同じことを思っていたみたいで俺らの言葉がかぶる。

「そこは仲良くハモるんですね…。まあ、ボクも心配ですし…いいでしょう。ニアはサルド山の山頂付近にいますよ。何事もなかったどりで着けたのなら…ですが。この雨です、下手したら土砂崩れに巻き込まれてる可能性も考えられます。迎えに行くのならどうぞお気をつけて」

「…わかった。ビスタ、イゾウ、サッチ。先に向かってくれよ。俺はもう少しこいつと話をする。他の奴らもはけろ!」

俺は近くに居た隊長達に先に行くよう促すと騒ぎを聞きつけて集まってきた隊員を含めて人払いをする。

静かになったところでイオンを睨みつけた。

「何を考えてるんだよ、イオン。お前はニアをどうしたかったんだ?」

1600人程度いるんだ。

何人かはニアをよく思っていない奴がいても不思議じゃない

あいつは確かに無邪気で可愛くて裏表がなくていい子だが、だからこそみんなに可愛がられている

それをよく思わない奴がいてもおかしくないんだ。

後でしつかりその辺調査しとかねえとな。

「言っておきますけど、この船にニアを虐めてる人はいないから安心して下さいね。」

俺が思っていることを読み取ったかのように先手を打つ。

はあ……。ほんと、こいつだけは敵に回したくねえよ

「何を考えてるか…ですか。…ニアが図書室こに来るようになってからボクも楽しくなりましたよ？みんな本なんて読まないから図書室に誰も来ませんからね。でも、あの子は時間があるといつもきてくれたんです。笑顔で「きようもおべんきようしにきたよ！」って…」

あの笑顔で頼られたらそりゃ張り切るな。

気持ちはわかるから何にもいえねえよ

「けど、あの無邪気な笑顔が時折陰るんです。顔は笑ってるんだけど、どこか嘘っぽい笑顔をする時がある事に気づいたんです。はじめは聞いても理由を教えてくださいませんでした。「きのせいじゃない？」っていつも誤魔化されました。」

よく見てるんだなこいつ。

疑って悪いことしたよ

「隊長達にも誰にも言わないから教えてほしいって根気よくお願いしたら、ある日泣き出してしまったんです。自分が怖いって…。みんなは普通に接してくれるけどほんとにここが自分の居場所なのか時々わからなくなるって。そう、言うんです」

それはニアが絶対俺らには言わないようなこと。

余計な心配をかけないように疑問を全部飲み込んでいたらしい。

「自分の存在が隊長やオヤジさんの時間をたくさん取ってしまったって。もっとやりたいこともあると思うのに自分の世話をしなきゃいけないからできないのかと思うと苦しくなるって、そう言っていました。自分は邪魔な存在で拾った責任から育ててくれるだけなんじゃ

ないかって…。弱い自分がきらいだ、弱いならいい方がいいんじゃないかって…。そうやっていつも自分を責めてたんですよ。」

なんだよ、それ…。

溜め込みすぎだろ。つか、それ以前に考えすぎだろ、あのバカ！見つけたら説教だ!!

「だから今回の我儘を聞いてあげたんです。ニアだってやればできるって自信に繋がればいいなと思って。まあ、予想外なことが重なりすぎてお手上げですけどね。」

イオンが両手を軽く上げて首を軽く横に振る。

その眼差しから殺意は消え、いつもの優しい柔らかな笑みを浮かべた。

こいつもこいつでニアのことを想ってたんだな。

「あ、これボクが言ったって内緒ですよ？ニアとの約束、破ったことになっちゃいます」

イオンが口角を上げ、人差し指を口元で立てる。

だから動きがいちいち優雅なんだよ…。

「……………わかったよ。まあ、なんつーか、悪かったな。」

「ふふっ、いいんですよ。誤解されるような事をしたのはボクですからね」

柔らかい笑顔に見送られて俺も図書室を出ると甲板に向かった。

雨はすでに上がっていて、探しに行くにはちょうど良かった。

…無事でいろよ、ニア！

能力で鳥の姿になり一直線にサルド山に向かった。

—サイドエンド—

「だから、その体で俺の目を盗もうたって不可能だから！大人しく寝てろ！」

「くそ。またしつぱい。」

脱走を試みることに30回目、見事に捕まりました

「なんだってそんな逃げ出そうとするの！そんなに俺といるのが嫌なの!?!泣くぞ?!」

「そのくらいのごとでなかないの。わたしかえりたい、みんなのところに」

「あらら。それ、どこまで本音？」

…大将なだけあると言うべきかなんで気づくんだ馬鹿野郎と言うべきか…。

風邪なんて引くもんじゃない。体が弱つてると心まで弱くなる。せつかく気丈な娘で通ってるのに、ここで弱音を吐くわけにはいかない

「答えねえの？それって心から帰りたいって思っていないってことではないのか？」

「ちがうっ！」

「あらら。そんな風に声を荒げるなんてらしくないじゃないの」

「うるっ…さい！」

涙が溢れてくる。だめだ…こいつは敵で、弱味を握らせるわけにはいかない。

ただでさえ迷惑かけてるって言うのにわたしがこれ以上足引つ張るわけにはいかないんだ！

「うーん、そうだなあ。じゃあ俺今から丸太になるわ」

「…はっ！」

「だから丸太になる。丸太相手になら何言ってもいいでしょ？あ、別にお前の弱味を握ろうとかじゃねえぞ？そんな泣きそうな顔してりや誰だっって手を差し伸べたくなくなるに決まってるじゃないの。」

敵に氣を使われた

どんな顔してるんだろ、今…

というか、丸太に話しかけるってそれただの危ない人じゃない？

…けど、わたしは限界だった。

「わたしっ…、ひろわれてそだてられて、たくさんあいじょうもらってきた！けどっ、わたしのせいでみんなのじかんをたくさんうばってる…！もっとみんなにはやりたいことやってほしいのにいつもだれかわたしのそばにいる！それがすごく、くるしいっ！」

堰を切ったように思いが溢れ出す

「あいされてるの、すごくわかる！でもっ、ほんとはじやまなんじやないかってときどきおもうの！わたしがいなきや、みんなもつとじゆうにできたんじゃないかって！かいぞくは、じゆう、なんでしょ!?なのに、わたしのそんざいにふりまわされて、やりたいことやれないって、いやだ！」

自分でもなにをいつてるかわからなくなってきた。

頭がぐるぐるしてくらくらして、今わたしは地面に立っているのかすらわからない。

「じぶんがこわいの！じぶんのそんざいが…ちからが、こわいの！きつとみんなもそうおもってる！えたいのしれないそんざいだって！でも、やさしくしてくれるからっ、わたしも、かえしたいの！みんなの、やくにたちたいっ！」

「ニア……………」

「あっ…」

ビスタさんとサツチさんとイズウさんの声が聞こえた気がした。

気のせいだろう。熱のせいで幻聴が聞こえたんだ、きつと。

青雫が「やべっ」といったげな声を出したけどわたしは気にせず続けた。

「わたしが、あしをひっぱるわけには、いかないのっ！とーさんは、よんこうっていうすごいひとで、たいちようたちも、たいいんたちもみんなつよいからっ、わたしも、つよくならなきやいけないの！いつまでもまもられてたら、きつといつかみすてられる！だから…ひとりでもできるんだって！わたしもたたかえるんだってしようめいしなきや、だめなの！」

「ニアちゃん、ストップ!!丸太に話すのはそこまですて!!」

青雫がなんか焦ってる。けど、わたしは止まらなかった。

首を横に振ると涙が散る。

「よわかったら、だめなの！だからわたしはつよくなるべきだって、そう…いいきかせてっ…。よわねは、はいちや、だめなんだって!…ほんとは、こわいっ!たたかうのも、きずつけるのも、うしなうのも!けど、ぜんぶのみこんで、つよくなきやだめなんだっ!」

「ニアちゃん、わかったから!!俺の話聞いて!?わりかし俺の命が危ない!」

ポロポロと涙が落ちる。

「よわいじぶんがきらい!よわいままなら…、つよくないなら、わたしなんて…わたしなんて!いないほうがいいんだっ!!」

「ニアッ!!!」

「……っ!!!?」

ビスタさんとサッチさんとイズウさんが抱きついてきた。

え、あれ?幻聴じゃなかったの?!本物?!

「あちやー!」

青雩さんが片手を顔に当て「しまった」と言うような表情をする。

「おい、青雩…。これはどう言う状況だ…?」

イズウさんがすごい怒ってる?!

あ、だから焦ってたの?!青雩さん!

なんだろ、3人が来てすごい落ち着いたんだけど…

心細かったのかな?

「……に、にいちゃ??なんで、ここ…」

「話は後だ、とりあえず出ろ。サッチ、ニアのパーカーを持ってこい」

「あつ、きんちやく…」

「ん?あのオレンジのやつか?あ、そういや薬草がどうのってイオンが言ってたな。サッチ、それも頼む」

「ほいほい」

ビスタさんがわたしを抱き上げて、サッチさんがパーカーと巾着を持つ。

イズウさんが銃を抜いて青雩を警戒している。

…なにこの連携プレイ

「あらら…。シスコンのお兄ちゃんは怖いなあ。まあいいや。別に俺なにもする気ないから。お迎え来たんならもういいな、気をつけて帰んな、ニアちゃん。丸太は何も覚えてないから安心しなさいな」

青雩は戦意がないことを示すためか無防備に座り、そう言った。

…くそ、なんでそんな優しいんだよお前！

彼らは青雉を警戒をしながらも岩場を出る

外に出ると眩しい光がさした。もう日が昇ってたんだ…。

ああ、また心配かけたな…。わたしっつていつも空回りしてないだらうか…。

けど、この人たちが近くにいるだけで安心する。

わたしはビスタさんに体を預けて眠りについた。

第18話 拷問? いいえ、尋問です

—イゾウサイド—

マルコに指示され、サッチとビスタと一足先にサルド山に向かった。

雨は上がっていたから探しやすかったがなんせ山は広い。

どこにいるかなんて見当もつかなかった。とりあえず山頂付近まで登ったがどこにもいない。

…ん? 土砂が不自然に凍ってる…?

「おい、これって青雉の仕業じゃねえの?」

「可能性はあるな」

サッチとビスタがいう。

ニアはもしかしたら青雉と接触した可能性が出てきたな。

くそっ、どこだ、ニア!

少し奥まで行くと岩影に穴場があった。

「……!!…が、くるしいっ!」

この声…

まさか!!

「おい、ニアの声じゃないか?!」

「ああ、あの舌足らずな可愛い喋り方はニアだ!」

サッチ…気持ちはわかるが雰囲気ぶち壊しだな

俺たちは岩穴の中に入ると、青雉とニアが話していた。

青雉は片腕を地面につけ横になってニアの話の話を聞いている。

ニアは立っていて、手に力を入れているのか拳を握っている。

「あいされてるの、すぐわかる! でもっ、ほんとはじやまなんじやないかってときどきおもうの! わたしがいなきや、みんなもつとじゆうにできたんじゃないかって! かいぞくは、じゆう、なんでしょ!?! なのに、わたしのそんざいにふりまわされて、やりたいことやれないって、いやだ!」

…その叫びは俺たちには絶対に言わないような弱音

なんで青雉に…いや、多分あいつが催促したんだろうな。

詳しいことはあとで聞き出そう

「絶対俺らにはいわねえのに」

「青雉が催促したんだろうよ。ニアは熱があるんだろう？体が弱つてると心まで弱くなるっていうしな」

俺らはニアの普段は聞かない本音を聞き、思わず名を呼んだ。

けど、ニアは気付かなかったみたいだ。

気付かなかったのか、気づいてるんだけど余裕がないのか…

青雉が俺らに気づき、ニアを止めようとするがニアは止まらなかった。そんなにも溜め込んでいたのか…

「よわいじぶんがきらい！よわいままなら、つよくないなら、わたしなんて…わたしなんて！いないほうがいいんだっ!!」

「……………っ!!」

なんてことを言うんだ！

そんなわけないだろうっ!!

「ニアッ!!」

その言葉に俺らは思わず飛び出しニアに抱きついた。

ニアは驚いたような顔をしたあと安堵したように全身の力を抜いた。

「これはどう言う状況だ？」

俺が銃を抜いて青雉を警戒すると「別に何もしねえよ」と無防備に座り直した

その行動で、嘘じゃないと思った俺たちはニアを連れて外へと出た。

ニアが外の光に照らされ目を細める。悲しそうな顔をした後ビスタの胸に体を預けて眠りについた。

ビスタがニアを抱え直すと顔をしかめる。

「…かなり熱いな。こんな熱でよくここまでできたもんだ」

「無茶するなあ…ほんと」

俺たちが下山していると青い鳥がこっちに向かってきた。

…マルコか

青い鳥が人の形になる

「ニアッ！……いたのかよ、無事か？」

「ああ、寝てるだけだ。」

ニアの額に手をあてると「熱っ！」と驚いた声をあげた。

「……………思ったよりも熱が高いな。こんな体でよくここまでできたもんだよ。ある意味感心するぜ……。つたく、どれだけ俺らの寿命縮めりや気がすむんだよ！」

と、いいつつも無事だったことにホツとしてるマルコ。

またマルコは鳥の姿になり一足先に船に戻っていった。オヤジに報告に行つたんだろう。

さて、俺らも帰るか、モビー俺・テイックち号家に。

ーサイドエンドー

目を覚ますとベッドの上だった。

「こ、こは……」

「モビーの医療室だ。」

誰に言つたわけでもない眩きに返事が返ってきて顔を動かすとイゾウさんが隣に座っていた。

「ようやく起きたか、ニア。」

「イ、イゾウにい……」

すつごい怒ってる気がする。勝手に行動したのがまずかったかな？ いや、でも苦しんでるみんなを放って置けなかったし、なにより役にたちたかったし……

「お前の探つてきた薬のおかげで風邪引きどもはほとんど回復したぞ。よかったな」

あ、ほんと？ それはよかった。

わたしにもできたんだ。……いや、結局助けてもらっちゃったか

1人じゃできなかつた……

「……なのに当の本人が寝込んで意味ないだろう？ お前、3日眠ってたんだぞ？ 今はもう大丈夫みたいだがお前を見つけて船に連れて帰つたすぐの自分の容体聞きたいか？」

3日も寝てたの?!

容体？

ただ熱が高かったってだけじゃないの？

「過労に睡眠不足、おまけに40度近くの高熱だ。そんな状態で無理して雨に打たれて…馬鹿なのか？お前は」

初めてイゾウさんに罵られた!!

「よくもまあ、この船にいながら誰にも気付かれずにそこまで体を弱らせたな。ある意味感心するぞ。」

本気で怒ってる。……けど、なんだか嬉しい

怒られて嬉しいってわたしも相当おかしいのかな

「何を笑ってるんだ？俺は怒ってるんだぞ？」

「…うん。それが、すごくうれしい」

「怒られるのが嬉しいのか？変な奴だな」

そうやって言われるとDMみたいだな

「わたしはこどもで、まだなにもできないけど…みんなといたいものだからしつぼうされないようにがんばってきた。それでもいつか…いつかみはなされるんじゃないかってきつとこころのどこかでおもってた。」

自分を守るために心に壁を作って傷を最小限にするために…

「だからね、そういうふうにおこってもらえて、うれしいの。にいちや、しんぱいかけてごめんなさい。さがしにきてくれてありがとう！」

そう言っつていつものように笑うと、イゾウさんの表情が変わった。

悲しそうな顔をするわたしを抱きしめる。

「馬鹿っ！子どもだから何だと言うんだ！お前だつて…家族じゃないか！二度とこんな無茶するな！いや、これが2回目か。なら3度目はないぞ？次やったら縛り付けるからな！」

まさかの束縛宣言!?

縛りつけるってどこに!!?

「イゾウ、それは…」

「犯罪だよ」

「海賊だから犯罪とか今更だろい」

「そういう問題じゃない気がするが」

イズウさんの言葉にみんな微妙な顔しながら部屋に入る。

「あ、おはよう。にいちゃ」

「おはよう、寝坊助。体の具合はどうだよい？」

マルコさんがわたしのほうにくるとイズウさんが場所を譲った。

「うーん、あたみたいなのとだるいのはなおったよ」

そういうとマルコさんはわたしの額に手をあてた

「熱もだいぶ引いたかよい…。千年草恐るべし。すごい効き目だよ。だがまだ微熱があるな。今日は休んどけ」

額から手を離して、背を向けた。

「ん？わたし、もううぐけるよ？だいじょうぶ！」

思わず布団をどけてベッドから降りようとすると、マルコさんがこつちに向き直し両手で拳を作ってこめかみあたりをぐりぐりした。

意外子どもっぽいことするな、このひと

「やすんどけ！」

「いたい！」

痛くないけど痛いと言っておく。

「そうだな、治ったと言い張るならまずは12時間コースの説教でも…」「おやすみなさい！」…おやすみ。ちゃんと回復させろよ」

くそう、ビスタさんに勝てない!!

12時間て何?!拷問に近いでしょそれ!!

「ニア、素直!!」

「まあ、どうせ起きたら質問攻めだ。」

「そうだな、洗いざらい吐いてもらうぞ」

悪役のセリフなのに悪く見えないのが悔しい!!

5人がわたしを寝かせるために部屋を出ようとする。

……えっ、全員行っちゃうの？ど、どうしよう

せめて寝るまで誰か側にいて欲しい

「ま、まってー！」

「」「ん？」「」

「あ、の…な、なんでもない！おやすみなさい！」

こんなことで引き止めたらダメだよ。我慢我慢

自分のせいでこの人達の時間を取ってるのにわたしのわがままでこの人たちを困らせちゃだめだ。

「……………」

いつものように笑って誤魔化すとすごい微妙な顔された。

なんで!?

「今日、非番のやついるかよ?」

「あ、俺非番だよ!」

「俺もだ。」

「じゃあ、ハルタ、イゾウ…ニアを頼んだぜ?」

「俺たちはまた後でな」

なにその隊長ズのコミュニケーションの早さ

ハルタさんとイゾウさんが残り、他は今度こそ部屋を後にした。

「あ、そういえばハルに。びょうきよくなったの?」

「うん!ニアの薬のおかげでね!」

「そっか…よかった」

「あはは、ごめんね?やっぱうつしてたね」

うつされたのかかかったのか知らないけど無茶したのわたしだし、

ハルタさんが謝ることじゃないよね…

「いいの!わたしのじこせきにんだから!」

「まーたそうやって自分が悪いみたいに言う。ニア、お前はもつと俺

らに甘えるべきだよ」

「…あ、あい。」

甘える…って言われてもなあ

もう十分すぎるくらい甘えてる気がするんだけど…

あれ、そういえばなんでイゾウさんたちはわたしの場所がわかったんだろ

「ね、イゾウに?なんでばしよわかったの?」

「イオンから聞きだした」

「イ、イオンに?!!?どうしてイオンに?がしってるって…」

「ああ、お前は知らないのか。イオンは能力者だ。視覚に関する情報

を自在に操作する能力が使える。自分や対象の物を見えなくすることくらいあいつなら息を吸うほどに簡単なことだ。だから、船員が誰か1人気が付かないで目立つニアを船の外に出すなんて芸当できるのはあいつしかない」

イオンさんが言ってた魔法ってその事か！

やっぱりあの人能力者なんだ!!というか謎多すぎでしょ、イオンさん!なんてミステリアスなお方!

「…さて、今度は俺の質問に答えてもらおう」

ニヤリと効果音がつきそうなほどのあくどい笑みを浮かべる。

なんか、危険な気がする!

に、逃げる…か?

「よいしょつ。よしつ、イゾウ!確保完了!」

「?!?」

ハルタさんがわたしを膝の上に乗せ、後ろから抱きしめるようにして拘束した。

…い、いつのまに!!?

「は、ハルにい?」

「ん?なーに?ニア。素直に答えてね?」

ハルタさんの笑顔もこわい!!

お説教タイム!?!私刑!?

「なんで熱が出たことを言わなかった?」

「こ、これいじょう、めいわくかけたくなかったの」

「…いつ、誰が、お前に迷惑だと言った?」

「いわれてない、けど、なんとなく、そう…」

「…じゃあ、次。1人で薬を取りに行こうなんて無謀なことを考えた理由は?」

「くすり、とりにいくくらいなら、ひとりで行ける。と、おもって」

「高熱でもか?」

「うっ…」

並べられるとわたしほんとにしでかしてるなあ

そりやみなさん怒りますわ。わたしでも同じことやられたら怒る

「青雉にあんなこと言ったのは？」

「まるたになるっていうから…せきがきれたの」

「あの野郎、クロス…」

あ、イゾウさんの殺意が…

「ねえ、ニア。なんで過労と睡眠不足になったのかな？」

ハルタさんが地味にこわい!! その！笑顔が！痛い!!

そして、背後からの圧力!! 腰に回ってる手に地味に力入ってる!! その気になったら絞め殺されそう…。

「ハ、ハルにい…」

「ん？なーに？」

「ハルタ、怒る気持ちはわかるがお前今強烈にこわいぞ。俺が見てもニアに同情するくらいには恐ろしい笑顔をしている」

「え、酷くない!？」

あ、戻った。自覚なしですかそうですか

「うーん、そんなにむりしてないよ？ちゃんとねてるし、やすんでるからじぶんでもわかんない」

稽古の時間以外は勉強してるか手合わせ見てるか拒絶の力のコントロールしてるかこっそり特訓してるかくらいだからなあ

あれ、結構ハード？

だって、寝てる時間が惜しいんだよ!!

「…1日の平均睡眠時間は？」

「さ…：…ななじかん…」

「なんで言い直した。正直に」

「……………：…さんじかんくらい」

「二足りるわけないな（ね）」

ハモられた。

くそう…。こんな尋問、勝てるわけない!

「ニア、お前は頭が良く回る。そのせいかは知らんがなんでも難しく考えすぎなんだ。俺たちは好きでお前と一緒にいるんだぞ。だから俺らの時間を奪ってるなんて思うな。全部杞憂だ、このバカ」

「君を拾ったのは俺とサッチで、船に乗せてもいいって言ってくれた

のはオヤジで、主にマルコがニア探し回って、みんなで戦うためのイロハを教えて…ニアがあんな大怪我2度としないように俺らも頑張るんだって誓って。どの辺が迷惑かけてるって？俺らは好きでニアの世話してるの！だからもっと頼ってよね！平気そうな顔してたらわかんないだろ？」

この船にのってから毎回のように思うことがある。

海賊って…賊って何!?仲間だからって、家族だからってこんなに優しいの?!みなさん賊の意味知ってる?!

「傷つけること、損なうこと、また、わるもの」だよ?!

どこらへんが悪者?!悪者とは!!

悪者の定義を教えてください!

「お前青…あの丸太に言ってたな。」強くないなら、わたしなんていない方がいい”って。…ごめんな、そんな風に思わせてたことに気づいてやれなくてよ」

「どうしてにいちやがあやまるの?」

「思えば当然のことなんだ。ニア、お前は聡明な子だ。だからこの船のことを大体理解してるんだろ?オヤジは四皇で俺たちはその隊長で…自分が場違いだっと思ってたんじゃないのか?」

言い当てられてわたしは俯く。

「そうだよなあ。自分みたいいな子どもが俺たちに混ざってここにいていいのかって悩むのはごく普通のことなのにな…。お前の笑顔にすっかり騙されたぜ。我慢しなくていいんだ、言いたいことは言え。それが家族つてもんだろ?」

イズウさんが頭を撫でながらわたしの本心を次々と言い当てる。

この人実はエスパーだろ!!

「返事は?」

「…うん。ありがとう、にいちや」

「よろしい。じゃあもう寝ろ。1人じゃ寝れないって言うなら寝るまで側にいてやる」

妹に甘すぎませんか?シスコンのお兄ちゃんてすごい!

あ、でもちよつとまって。聞きたいことが…

「うん、けどそのまえに……。にいちや、”はき”ってなに？」

「覇気ってのはな全ての人間に存在する力のことだ。気配とか気合いとかそんな感じに近いが、その力を引き出すのは簡単なことじゃねえ」

「オヤジ!?!」

わたしの質問に答えたのはオヤジさんだった。マルコさん達からわたしが起きたってきいて様子を見にきたらしい

「グラララ……。お前はベッドの上が好きなのか？あんまり親に心配かけるもんじゃねえよ。無茶しやがる娘だな」

そういうと、オヤジさんは部屋の中に入り腰をかけた

「前も思ったがお前は小さい体に何を抱え込んでるんだ？お前が寝てる3日間、マルコたちから大体の話は聞いた。お前、自分の力とやらがなんなのかもう気づいてるだろ」

これは、逃げれないな。

絶対話したくなかったけど……

もとよりわたし嘘下手だし、仕方ない。か。

多分話さないとわたしも本当にみんなを信用しきれない。知られるのが、恐れられるのがこわくてきつと無意識に自分を隠してる。

吉と出るか凶と出るか……試してみるか。

「わかった。はなすよ……」

みんなのわたしへ向けるその目が変わらないことを願う。

第19話 拒絶の力

わたしは観念して自分の力についてオヤジさんたちに話すことにした。

これで恐ろしいものを見るような目をされたらこの楽しい生活もここで終わりにしようと思う。

自分の両手を見ながら静かに語り出す。

「このちからはね…」 けがをなおす” ちからじゃないの。” あらゆるものごとをきよぜつする” ちからなの」

そういうと、わたしを後ろから拘束しているハルタさんが「拒絶？」と呟く。

手を軽く握り膝に置くと頷いて続ける。

「そう、きよぜつ。きよぜつってひていとおなじでしょ？わたしがひていたことはすべてなかったことになるの。けどね、じぶんにかんしてはあんまりひていけないの。なんでかはわからないけど」

いや、本当は知ってるけどね。あの自称天使がそう設定したからだよ

ほんつつとふぎけんな。次うことがあったら殴ってやりたい

それだけでオヤジさんはわたしが言わんとすることを察したらしい。

目を見開いた後に難しい顔をした。

「おいおいおい…そりゃあ……なんの冗談だ？いや、冗談なわけねえか…。そんな爆弾ちからをお前は1人でずつと抱えてたのか？」

「オヤジ？どういう事だ？」

わたしが言いたいことを全部察したのはオヤジさんだけのようなだった。

イズウさんもハルタさんも言ってる意味がわからないらしい

うん、まあそうだろうね。むしろ理解したオヤジさんが凄いよ

「ちよつとまってる、イズウ、ハルタ。…ニア、お前がそれに気づいたのはいつだ？」

「カルにいとルカにいのけがをとりのぞいたあと。かくしようもしよ

うごもなかったけど、かくしんした」

「そんな前から…」

オヤジさんは1つため息をつくといゾウさんとハルタさんに説明した。

「つまりな、こいつの力とやらは対象に起こった事実を否定するってことだ。ニアはあの時、カルガンやルーカスの怪我を”治した”んじゃない。怪我をしたという事実を”否定”したんだ。ありとあらゆる物事を無かったことにする。そんな力だってことだ」

オヤジさんがそういうと2人は顔色を変えた。

驚愕する2人にわたしは顔を俯ける。

やっぱり不気味だよな、こんな力…

「……………それってまさか！し…「イゾウ！」…っ」

「それ以上は言うな、ニアが1番よくわかってる。だからこそ俺らに黙ってたんだらうよ」

「……………なんで、言わなかったの？ニア。その事!!気づいてたのに、なんで言わなかったの!?!相談くらいしてくれてもよかったじゃないか! そんなに俺たちが信用なかった!?!」

「落ち着けハルタ!……………お前がニアの立場だったら言えるか?」

「……………言えない…と、思う」

「だらう?ニアを責めるのはお門違いだ」

「うん…………。ごめん、ニア」

…恐れるどころか本気で心配してくれたことにわたしが驚く。

ハルタさんがわたしを抱く腕に力を込める。まるで「何があっても離さない」とでもいう様に…

まさか言わなかったことに対して怒られるとは思ってなかった

わたしは謝るハルタさんに首を横に振り気にしてないアピールをする。

そこでオヤジさんが話を続けた。

「ニア、自分はあまり否定できないってどういうことだ?」

「そのまんまだよ。じぶんにかんしてはあんまりこのちからをつかえないの。じぶんがいにおこったできごととははけがでもびょうきで

もなんでもきよぜつでできるけどね、じぶんにかんしてはかんかくきのうをきよぜつするくらいしかできないんだ。」

「感覚機能……。それはつまり、痛覚とかのことか?」

頷くとオヤジさんは考え込み、しばらく悩んだ末口を開いた。

「:イゾウ、ハルタ。マルコたちにも後で言っておく。ニアに覇気を教えろ。」

「それは!もう少し大きくなってからって……」

「そのつもりだったが、状況が変わった……。習得できないは別として覇気について教えておけ。知ってるだけでも違うだろう」

覇気……。あ、そうだ!一番聞きたかったことが

「ね、はおうしよくつてなに?」

「?!?!?!」

「あのね、せんねんそうをとりに行ったときかいぐんしようこうたちにあつたの。わたしをまいごかとおもったのか、ほごしようとしてきたからつい『どけ!』っていつちやったの。そしたらほとんどがぎぜつして、だれかがはおうしよくのはきつて。」

そう言うといゾウさんが「もってるのか……」と、呟いた。

「持ってる?…って、どう言うこと?…全ての人間に存在する力じゃないの?」

「覇気はね、大きく分けて3種類あるんだよ。1つが武装色。これは体の周りに見えない鎧を作り出すような覇気。武器に纏わせることもできるんだよ。もう1つが見聞色。相手の気配をより強く感じる事ができる覇気だ。視界に入らない敵の数や位置を知ったり、敵の動きを予想できるんだ」

ハルタさんが説明する。

すると別な方から声が飛んできた。

「そして、数百万人に1人しか身につけられないと言われている覇王色。これは相手を威圧する覇気だ。コントロールできないと敵味方関係なしに威圧しちまうから多用するのはお勧めしないよ。まあ、この船で使えるのはオヤジだけだけだな」

「マ、マルコ?!いつからいたんだ?!」

イゾウさんとハルタさんが見事なハモリでマルコさんに問いかける。

わたしもそう思う。部屋に入ってるし、ご丁寧にドアは閉まってるし…。ビスタさんの時もそうだったな、知らない間にスツと入ってきてたよなー。

「……………さつきだよ。ニアが拒絶云々言ってたあたりからだ。やっぱニアの様子が気になってな。見にきたら結構ヤバイ話してたから黙ってたんだよ」

いや、それほぼ最初からじゃない?! なんなの、貴方のその妹センサー!! イオンさんじゃないんだから気配消さないで?!

「は?! じゃあ最初から全部聞いてたのか?!」

「マルコのニアに対するその危機管理能力はなんなの?!」

「お前はニアのことになるとイオンみたいな力を発揮するな!」

わたしの心の声を全て代弁してくださいありがとうございます!

「ビスタの時もそうだったが俺そんなに気配消してるかよ? ……それよりニア、お前自分の力をわかっててなんで今回は使わなかった? カルガンが風邪引いた時にその事実を否定しちまえば早かったんじゃないのかよ?」

「…ほんととほね、ずっとはなすつもりなかったの。このことをしられたらこわがられるとおもったから、はなすゆうきがなかったの。そうとうなきけんがないかぎりぜったいつかわないってきめてた。しられるわけにはいかなかったの。だから、やくそうをとりにつたの。しんぱいかけてごめんささい」

「ん。それで正解」

マルコさんが俯いてるわたしの頭を撫でた。

思わず顔を上げるとマルコさんもイゾウさんもハルタさんもオヤジさんも複雑な表情をしていたけど、どこか安心したように微笑んでいた。

「ちゃんとわかっているようで安心したよ。迂闊に使っていいような力じゃねえな、そりゃ。ただ、高熱で雨の中1人で10キロ以上離れ

たところに行つたのは感心しねえよ」

「全くだ。だが、説教の時間は半分にしてやろう」

「することには変わりないんだね」

お説教タイムは必須なんですネイゾウさん…

けどなんだろう、すごく軽くなつた。

「グラララ…。よく話してくれた。ありがとうな、ニア。どれだけの葛藤と恐怖があったことだろうか。無邪気な笑顔の裏にそれだけの想いを隠してたんだな、気づいてやれなくて済まなかつた」

恐れられるかと、罵られるかと思つた。けど、この人たちは「話してくれてありがとう」と、「気づいてやれなくて済まなかつた」と言つた。

壁を作つてたのは、わたしだけだつたんだ。

なら、わたしのやることは1つだ。この人たちについていく。

彼らがわたしの名前を呼んでくれる限り！

—白ひげサイド—

風邪が流行りだして数日、バカ娘が相当な無茶してくれたおかげで騒動はすぐに収まつた。だが、当の本人が高熱を出して寝込んでしまつた。いや、高熱で無茶したんだっけか？自分をもつと大事にしるよ…

おまけに過労と睡眠不足らしい。なにやつてんだか、あいつは

おれや隊長、隊員たちの目を盗んでよくそこまでできたもんだ。逆に感心するぜ

「オヤジ、ニアが起きたよい」

マルコが甲板に来るなりそういつた。あいつはどうして無茶ばかりするんだ。まさかイオンの力を借りて船から出るとは思わなかつた。

自分は守られてばかりじゃいけないと焦つてたのか？

あいつが寝てた3日間、いろんな奴らから話を聞いて何があつたのか大体察した。

自分がおれの船にいるのはおかしいんじゃないか？とずっと悩んでみたいだなあ…。

聞かねえとなにも言ってくれないくせにこっちはことは知りたがる。

ニアが1番恐れてるのはニア自身らしい。この前はなんとなく聞きづらくて辞めたが、聞いてみるか。あいつの力のこと。

ニアが居る部屋の近くに行くとハルタとイズウとニアの話し声が聞こえた。

「ね、はきってなに？」

ニアがそう言う。

どこかで聞いたのか、おれらがたまに使ってるから疑問に思ったのか…。もう少しゆっくり教えたかったんだけどなあ

大きすぎる力は身を滅ぼす。こいつは才能に溢れているから今の小さいうちに教えすぎるのはよくねえと思つてわざと遅らせてたんだが：こりや、限界だな

腹括つて教えるか、その代わりお前のことも教えてもらうぜ？

「覇気つてのはな全ての人間に存在する力のことだ。気配とか気合いかそんな感じに近いが、その力を引き出すのは簡単なことじゃねえ」

「オヤジ?!」

おれが入るとイズウとハルタが驚きの声をあげた。

「グラララ…。お前はベッドの上が好きなのか？あんまり親に心配かけるもんじゃねえよ。無茶しやがる娘だな」

そう言った後におれは部屋の中に入り近くの椅子に腰掛けた。

ニアの力について聞くと少し悩むそぶりを見せ、自分の両手を見ながらポツリと語り出した。

ニアが言うには、自分が否定したことは全てなかったことになるらしい。

それはつまり：死んだ人間ですらその事実を否定すれば死ななかつたことになる。ということだと、おれは悟った。

それがどうやら正解だったみたいで、ニアが俯く

おいおい、そんな都合のいい力があつていいのか？

いや、だからこそこいつはそれを隠してたのか：

おまけにそれが悪魔の实の能力じゃないときた。

そりやだれにも言えるわけねえよなあ…。1人でずつと悩んでたのか

ハルタとイゾウは分からなかったみたいだ。おれが少しヒントをやるとうまく悟ったみたいで顔色を変えた。

「それってまさか…!し…「イゾウ!」…っ」

言葉にしたらいけねえよ。ニア自身がそれを1番恐れてやがるんだから

だが自分に関してあまり否定ができないと言ったな。

それはどういう意味かと聞くと驚くべき回答が返ってきた。

「そのまんまだよ。じぶんにかんしてはあんまりこのちからをつかえないの。じぶんがいにおこったできごととははげがでもびようきでもなんでもきよぜつできるけどね、じぶんにかんしてはかんかくきのうをきよぜつするくらいしかできないんだ。」

「感覚機能…。つまり痛覚とかのことか?」

そう聞くと頷く。

自身の痛覚を否定できる…:…だと?!

なんて危ねえ力だ。

例えるならおれの全力の能力を正面で何にも守られずモロにくらつても何にも感じねえって事だろう!?

んな力ホイホイ使ってたら…:…こいつ、いつか死ぬんじゃないか?

やっぱり覇気については教えたほうがよさそうだ。情けねえが守りきれぬ自信がねえ…:

「ね、はおうしよくってなに?」

どうやら山で海軍将校と出会って邪魔だったから思わず叫んだらほぼ全員が気絶したらしい。

霸王色まで持つてんのか、こいつ

…おれ達はとんでもない爆弾を拾っちゃったみたいだな…:

いや、拾ったのがおれ達だからまだ良かったのかもしれない

こいつを最初に見つけたのが欲に塗れた賊どもだったと考えるとゾツとするぜ…:

そんなことを考えてるとハルタがニアに覇気について説明し出した。

そしたらマルコがいつのまにか部屋にいて話に入ってきた。

…こいつ、ニアに何かあるとき大体近くにいるよなあ

マルコが「今回その力を使わなかったのはなぜか」と聞いた。

そりやそうだ。自分の力を理解してるなら危険を犯してまで千年草を取りに行く必要もなかっただろう

そしたらニアは「はなすつもりはなかったの」と、「しられるわけには、いかなかったの」と言った。

よくわかってるな。なら少しは安心だ

だが、無茶ばかりするのは勘弁して欲しいぜ…

ニア、お前もおれの家族だ。変な遠慮はするんじやねえよ

—サイドエンド—

それから数日

わたしの体も回復し、再び修行やらなんやらの日々が始まった。また自分の体を酷使して倒れるようなことがあったら今度は縛り付けるからな、とイゾウさんに釘を刺され、マルコさんがそれに便乗し繩を用意するところををハルタさんとビスタさんが面白そうに見ていた。

縛り付けるの確定なの?!いうこと聞かずに無茶しすぎたせい!?

「ふふっ、相変わらず過保護ですね。隊長方…」

「「イオン?!?!」」

道場で稽古をしてるとイオンさんが来た。

この人、図書室以外で見るの初めてかも!!

「お前が図書室から出てくるなんて珍しいじゃねえかよい」

「ああ、何かあったのか?」

マルコさん達がいうと、片手を口元に当てふふっと笑う。

ほんと、優雅だなあ

「いえ、元気なニアの姿を見に來ただけですよ。最近図書室に來ないから寂しくて」

「あ、ご、ごめん、イオンにいちや！またおべんきようしにいくね！」
「気にしなくていいよ、ニア。あ、そうだ、今度こつそり抜け出してお散歩にでも行こう。たまには外の空気吸いたいでしよう？」
「それを俺たちの前で堂々と言うな!!」

あの騒動以来お兄ちゃんズがわたしから片時も離れなくなった。急用ができた時もバトンタッチするかのようになり誰かきてから去っていく。必ず隊長が1人は側にいるようになり、前よりもわたしが1人でいる時間がなくなった気がする。

まあ、そのおかげでティーチが近づいてくることもなくなったからいいんだけど…

「ふふっ。そんな心配しなくても…ボクは忠告しにきただけです。あんまり制限しすぎると窮屈に感じられちゃいますよ?」ってね、まあ…ニアはその辺り鈍いから大丈夫かもしれないませんが。では、ボクはこれで」

踵を返しイオンさんは戻っていった。

…よし、こんど図書室行こう。イオンさんに癒されに行こう、そうしよう

「…つたく、イオンはイオンで油断できねえ奴だよ。俺らもニアを閉じこめたいわけじゃねえっての」

「そうだな。それはそうとニア、そろそろ武器を持ってみるか?あ、それとも素手で戦いたいのか?」

「全部教えればいいんじゃない?ニアのことだからすぐ覚えるよ」

ハルタさん鬼畜!!

ハードル上がってない?!わたしまだ5歳くらいなんだけど!!

何をさせたいの?!この人たち!!

「それもそうか。頑張れよ、ニア!」

いや、誰か少しは反対しろよ!!

くそう…もう、どうにでもなれ…

こうなりやヤケだ!!やってやる!!

第20話 大仏さんは苦勞人

それから月日が流れ鬼畜な修行にも慣れてきたころ、オヤジさんから外出の許可が出た。

「あいつの成長の早さには驚きを隠せないんだが…」

「ニアってまだ一桁だよな？俺もうかうかしてらんないぜ」

「ほんとだぜ…。というかなんで1回見て、聞いただけでありとあらゆるもの使いこなすんだ？こいつは!!」

「結論、天才だから」

腕を組み「うん」とうなづく三人衆。

「コントやってないでじゅんびしてよ！カルにい、ルカにい、ロキにい!!」

隊長ではなく隊員達とお出かけ！

あまりにも隊長がわたしにつきつきりだったので、カルガンとルーカスとロキアスがマルコさんに直談判しに行ったそう。

…勇氣ある。

頭を悩ませながらもマルコさんはオヤジさんに相談して、イオンをつけるならいいんじゃないか？という話になり現在に至る。

イオンさんが図書室を空けるのかなと心配したが、ただ「そこが静かだから落ち着く」という理由でいつも居るだけだそうで図書室自体に特別な思い入れがあるわけではないらしい。

やはりミステリアスなお方だ。

「ふふっ、張り切ってるね、ニア。けど、フードはしつかりかぶってね？いくらボク有能力があるとはいえ、何が起こるかわからないから。さすがに中將や大將クラスの人がいたら隠しきれない自信はないよ？」

もしもし、知ってます？それ、フラグって言うんですよ？

成立しないといいなあ…

「あー」

返事をし準備を終え、甲板に出るとマルコさんとサツチさんが真っ先に反応した。

「いいか!?イオン！絶対にニアに怪我させるんじゃない!!」

「イオン！頼むぞ！」

「「俺らもいるんだけど…」」

なんだか可哀想な三人衆だ…。

—マルコサイド—

ニアが自分の異能について教えてくれてから月日は流れあいつは著しい成長をみせた。

あいつのことについて知ってるのはオヤジと俺とハルタとイゾウ。ニアの許可を貰い隊長は全員把握している。聞いた時は驚いてたな、そりやそうだ。俺だつて驚いたよ。

ニアの成長の早さもそうだ。天性の才能だな、ありや

神童つてやつかよ。まだまだ発展途上だが覇気を少し使えるようになった。俺らもうかうかしてたら抜かれるな。

この船にはいろんな武器を使う奴らがいる。それぞれが自分の得意分野の知識を教えるとあいつは難なく全てを使いこなした。

1番驚いたのは甲板で飯を食つてた時だ。

ニアが少し戦えるようになったからちよこちよこ甲板に出すようにした頃。

天気も良かったからそこで飯を食つてたら海王類が襲ってきた。

そこまで大きくなかったが突然のことで反応が遅れた時、ニアが「てつのかたまりならぜんぶいっしょでしょ？」とか言い出してスプーンで海王類を切り刻んだ時はそこにいた全員が別の意味で叫んだよ！：

そのあとサッチに「スプーンは斬る為の道具じゃない！搦う為の道具だ！」とかいって怒られてたが…。叱るところそこじゃないかよ？

きつとサッチもその時の光景に正常な判断ができなかったんだな…。

そんなこんなで平和(?)な毎日を通りかかると隊員から「隊長ばかり狡猾！」だの「俺らもニアと遊びたい！」だのと言われ、オヤジに相談したら意外にも「イオンをつけるなら外に出してもいいんじゃない？」

ねえか？」と言う答えが返ってきた。

外に出すなら隊長が1人くらいついていったほうがいいんじゃないかと聞くと、「そしたら隊員が気を使っちゃうだろ」と言われた。

まあイオンは隊長クラスくらいに強さがあるからいいか……と、仕方なしに許可したがすつげえ心配だよい…。

「マルコってほんつと過保護だよね」

「船1番のシスコンだからな」

「面白いもんだ」

「うるせいやい！」

無事に帰ってくるといういいが…気苦労が絶えねえよ

—サイドエンド—

「なあ、イオン。なんで植物園なんだ？」

「そうだけ、遊園地とかもつと別なところあるだろ」

「せめて動物園とかよー」

彼らがそう言うといオンさんが優雅に笑う

「ふふつ、花の香りに包まれると癒されるでしょう？それに最近ずつと図書室に来ないから教えたいことが山ほどあるんだよ。だいたい、遊園地なんていったら人が多すぎてボク的能力なんて使えないよ？ニアがはぐれたらどうするんだい？」

「「こいつ、隠れシスコンか…」」

なにその隠れミツ〇ーみたいない方…。

あー、確かぶつかつたら解けちゃうんだっけ、イオンさんの能力…

「さて、ついたよ。ふふつ。楽しい発見があるといいね」

柔らかい物腰で優雅に笑うイオンさん。

ほんとに癒される。

植物園に入るとまず目の前にいい香りのする葉があつた

「これはローズマリーと言ってね、集中力や記憶力を高めてくれるんだ。いい香りでしょ？ボク、この香り結構好きなんだよね。ちよつと強いけど」

「あつちのしろいおはなは？」

「あれはプルメリアっていう花だよ。あれもいい香りがするんだよね。その近くにある赤やピンク、黄色の花も同じ種類さ。いろんな色があるから目でも楽しめるんだ。花言葉は恵まれた人、とか、日だまり。調べてみると面白いものだよ」

ふわりと笑むイオンさん。

ほんと、物知りだなー。

「ひだまりかあ。イオンにいちやみただね!」

「ふふっ、ありがとう」

花の前で座って話し込むわたしとイオンさん。

「なんだろう、あそこの空間だけ純粹というか」

「花が飛んでる……」

「あの空気壊していいか?」

「ニアが楽しいならいいけどよ……」

こっちもこっちでシスコンだった。

そのあと移動しようとしたらルーカスが自分の足に引っかけたよろけ、誰かにぶつかってしまい、イオンさんの能力が解けた。

「おっと…あ、すいませ…っ!」

ぶつかった人を認識するとルーカスの顔から血の気が引いていった。

その人は、海軍の元帥だった。

—?サイド—

過激な赤に、やる気のない青。中立の黄色に、自由な拳骨。

はあ、ほんとに困った部下達ばかりだ…。

息抜きに植物園に来たのはいいものの花とかよくわからん。

いや、それ以前にクザンとガープときたのが間違いだったか。まったく、あいつら自由人か!勝手にどっかいきおって!!

…うーん、花やらなんやら見てれば癒されるかと思ったがそうでもないみたいだな……

ドンツ!

…ん?何かにぶつかったか?

「おっと、すまない」

咄嗟に謝ったがそこにはさつきまで確実にいなかった5人組がいた。

そのうちの3人が驚いていて、2人は座ったまま体制を入れ替えてこちらを見た。

な、なんだ、この異様な5人組は!!

全員黒のフードをかぶっている。

こんなのがいたら普通すぐ分かるぞ!?

さつきまで誰もいなかったよな?!

すまない、理解が追いついてない、疲れているのか。

うん、きつとそうだ

なんか目を瞬かせているが驚きたいのはこっちのほうだ…

—サイドエンド—

「おいおい、どうするよ。」

「やつべえ…マルコ隊長に殺される」

「なんで元帥がこんなところにいるんだ」

カルガンとルーカスとロキアスがヒソヒソと話す。

向こうは向こうでなにか葛藤してるようだ

「えつと…君らは? ずっとここにいたか? 突然現れたように見えただが」

話しかけてきた!!

「ふふつ、ボク達は兄妹ですよ。可愛い妹に色々と教えてたんです。

……ね?」

動じないイオンさんすごい!

「うんー! にいちやにおしえてもらってた! ずっとここにいたよ? きづかなかった?」

そういうと、目の前の人は顎に手を当てて「そうだったかもな」と、ブツブツ言いながらどこかへ行った。

「…お前らのアドリブには感心するぜ」

「息を吸うくらい自然に対応できるとか…」

カルガンとルーカスが冷や汗をかきながら言った。

「あのくらいで動じてたらダメだよ。今日はバカンスなんだからね、
楽しまないよ」

「お前のマイペースについていくのに精一杯だよ!!」

ふふっ…。と笑うと彼の目が綺麗な紅に染まる。

能力を発動させてる時はどうやら瞳が紅くなるようだ

「元帥がいるとなると早めに帰った方が良さそうだね。まあけど、も
うちよつとくらいなら大丈夫でしょ」

「その自信はどこからくるんだ!!」

息びったりだなあ、この3人…。

わたしたちは植物園の奥へと歩みを進める。

……ん?なんかすこし焦げ臭いような…。

っ!違う!これは煙の匂い!

「…っ!!にいちや…、かやくのにおいする」

「……おっと…この酔いそうなくらいの花の香りの中でよく気づいた
ね。ふふっ、さすがニア。植物の勉強をさせようかと思っただけど社会
勉強に変更しようか。」

酔いそうなくらいの花の香りって…言い回しが穏やか!

すると、イオンさんの優しい瞳から柔らかさが消え、完璧な笑顔に
なる。

完璧な笑顔だけど、目が笑ってない!!怖いっ!どうしちゃったの!?

「あ…。イオンが怒った」

「こりや相手は死んだな。ご愁傷様」

「ニア、多分イオンの能力解けるからフードしっかりかぶつとけよ?」

えっ!?どう言うこと!!?

イオンさんが怒ると相手は死んじゃうの!?

その前にイオンさん戦えるの?!非戦闘員って聞いてたけど!!

わたしが困惑してるのを見据えてか3人トリオが説明を付け足す

「あ、そっか。そういや、ニアはイオンが怒ったところに遭遇したこと
ねえな。アイツな、自分の大切な物とか好きなものにケチつけられた
り手エ出されたりするのが死ぬほど嫌いなんだよ」

「それで、怒るとああやってすげえ恐ろしい笑顔をするんだ。怒っても笑顔って怖えよな。」

「イオンの能力は誰かにぶつかると解けるだろ？それは武器でも一緒。アイツが武器を何処かにぶつけた瞬間に能力が解けるから顔見られねえようにしつかりフードかぶつとけつてことだ」

な、な、な、なんですとおおおおお!!?!?

ミステリアスプチチートお兄様と呼ばせてもらおう、イオンさん!!
あなた謎すぎるでしょ!!

「ふふつ。ボクの大事な妹と……この優雅な温室を危険に晒すなんて……よっぽど死にたいおバカさんみたいだね。さあて……そんなおバカさんはどこにいるかな?」

そう言つて彼は物陰に千本を投げる。

と、どこかに当たつていたみたいで向こう側からちようど歩いてきた元帥さんがわたし達を認識しているようだった。

「あつーおーい、そこの兄妹!!ちようどよかった。人を探してるんだが……つて、何を殺気立っているんだ?」

「あ、おじさん!あのねあのね、かやくのにおいがするの。あぶないきがするんだけど、たすけてもらえないかな?」

この元帥なら手伝つてくれるはず!

わたしたちをただの兄妹だと思つてくれるはずだから使つちやえ!

「……はっ……か、火薬………たしかに言われてみれば……」

よし、私になんとかしよう。君たちは早く避難を!

なんで今ワンテンポ遅れた?!

大丈夫この人!疲れてない?!

「ふふつ、心配しないでいいですよ?ボクがいるんです。ネズミには1匹残らず消えてもらいますよ」

そういうと、イオンさんは懐から中心に穴の空いた円盤状の投擲武器とうてきを取り出した。

「チャクラム!?イオンにい、チャクラムつかうの!?!」

「ふふつ!チャクラムの名前を知ってるなんてさすがニアだね。使い

方は見て覚えるといいよ」

そう言つて彼はある一角にチャクラムを投げた。それはブーメランのように戻つてきてまた投げるを繰り返す。

チャクラムつて一種の飛び道具だね、カッコいい…

なんで非戦闘員なんだこの人…

「「ぐあつー」」

そこにどうやら犯人がいたみたいで叫び声が聞こえる

「ほらほら、早く出てこないと体が細切れになりますよ？あ、それとももう手遅れですか？」

チャクラムが手元に戻つてきてはすぐに次を投げる。その表情はどこか楽しそうだ

イオンさん実は戦闘狂!?こわっ!!

「くつ…なぜわかつた!!」

物陰から血まみれの男たちが出てきた。出て来いって言われて出てくるあたり素直なのね。

「ふふつ、この酔いしれる花園の中でそんな硝煙の香りを纏わせてればすぐにわかりますよ」

「「「わからんわ!!」」」

あ、元帥さんまで一緒になつてツツコミ入ってる。

そうこうしているうちに大きな影が2つ上から降つてきて戦闘に加わりイオンさんを下げさせた。

「あらら…。随分と珍しい武器使うじゃないの、兄ちゃん。あとは俺らに任せな」

「わーっはっはっは!!面白い若僧じゃ!のう?センゴク!」

「クザン!ガープ!貴様ら一体どこに行つておつたんだ!!」

青雫と…拳骨のガープだっけ?

何これカオス。

…青雫さん一瞬こっち向いたな。絶対気づいてる…。ま、いつか

元帥さんは意外と苦労人なのね。なんか、可愛そう。

…ドンパチやつてる彼らをよそにわたしはチャクラムに着いた血糊を拭いてるイオンさんに話しかける

あ、イオンさんの目が元の優しい目つきに戻ってる。何この変り身、すごすぎる

「イオンにい、たたかえるの？ひせんとういんってきいてたけど…」
「ふふっ、驚いた？実はね、少しだけなら戦えるんだよ。ただ、ボクは体力がないから長いことは無理なだけだね」

ああ、そういうこと。だから裏方に回ってるのか…

「そうだ、イオンにい。ストレスのかいしようにこうかのあるものってある？」

「ん？そうだねえ…。ハーブ系の香りのものとか…あとは…ああ、花ならカスミソウとかいいんじゃないかな？」

カスミソウ…か。

「にいちゃ、ちよつといいかな？」

「「？」」

敵に同情する訳じゃないけど、なんだかマルコさんと同じような苦労をしていそうで少し可愛そうだなと思ったわたしはみんなに協力してもらって元帥さんにプレゼントをあげることにした。

―センゴクサイド―

植物園に入って早々いなくなったクザンとガープを探し回るが見つからない。こんな所でまで私に苦労をかけるとは…!!

ん？あのフードの五人組は…

「おーい、そのの兄妹!!ちようどよかった。人を探してるんだが…つて、何を殺気立っているんだ？」

入り口付近で見かけた謎の兄妹がいたので声をかけるとその中の1人が殺気立っていて1番幼い子が喋る

「あ、おじさん！あのねあのね、かやくのにおいがするの。あぶないきがするんだけど、たすけてくれる？」

…なんだこの子。すごい可愛い…舌足らずな喋り方がまたなんとも言えん。癒し要員として欲しいな…

はっ！いかんいかん、それどころじゃなかった。火薬の匂い…か、…たしかに、言われてみれば少し硝煙臭いか…

こんな花の匂いが強い温室内でよく気づいたな、こいつら。

ここは任せて避難をしろといったら殺気立ってる若者が「心配いりませんよ」といい、懐から2つの輪っかを取り出し、物陰に向かって投げた。

チャ、チャクラムだと!?珍しい武器を使うじゃないか…!

子どもも驚いてる。

いや、君みたいな年の子がチャクラムを知ってることに驚きだ!!

「なぜわかった!!」

「そんな硝煙の香りを纏わせてればわかりますよ」

「「わからんわ!!」」

普通はわからんわ!!むしろよく気づいたな!!花の匂いが強すぎて意識しても分かるかわからないからくらいなのに!!

彼らの兄弟とツツコミがかぶる。こいつらもなかなかの苦労人なのか…。同情するよ…。

その後、クザンとガープがきてその騒動を収めると夕方になっていた。騒動を収めた後彼らに説教したのは言うまでもない。

あの幼い少女がこちらをじっとみてからチャクラムの青年に話しかけてたが…:…なんだったのだろう

とりあえずなんとなくて我々は兄妹たちと一緒に植物園をでる

クザンが何やら一番幼い子と話しているが…:…ロリコンで訴えられるのだけはよしてくれよ?

いや、その前にわたしもその子と話したい…

「おじさん!たすけてくれてありがとう!にいちやにきいてね、カスミソウをかつたの」

そう言つて幼い子はわたしに小さな白い花の花束を渡してきた。

カスミソウ…?さつきチャクラムの青年と話してたのはそれのことか?

「カスミソウはね、きぶんをリラックスさせてくれるんだって!」

…:…:…!!なんて可愛い、そしていい子なんだ!!

感動した!わたしの部下たちもこのくらい気が回る奴がいてくれれば…

「じゃ、ばいばーい！」

元気に手を振り去っていく兄妹を姿が見えなくなるまで見送った。
もう少し癒されたかった…。またいつか会えるといいな

―サイドエンド―

その後船に戻るとマルコさんにもカスミソウを渡した。

これでこの人のストレスが少しは解消されるといいなあ…

第21話 馬鹿と天才はなんとやら

「よお、ニア！元気だったか？」

「シャ、シャンクスさん?!」

植物園という名の遠足(?)から帰って数ヶ月

突然船にシャンクスさんがやってきた。なんできたの!? 四皇がこんな頻繁に接触していいものなの?!

って、あれ?! シャンクスさん…左腕が……

ついでに麦わら帽子もない

ま、いつか。この人別の船の人だし

「おれが呼んだ」

「えっ?!」

オヤジさんが?! なんで!?

「ニアに覇気についてそろそろ本格的に教えようと思ったんだが、覇王色まで持つてるっていうから悩みに悩んだ末に癩だが赤髪に協力してもらおうと思ってるな。」

マルコさん…癩って、あえて言葉にしなくても…

思いつきり頼みたくなかった感出てるけどいいの??

「どうしても俺たちじゃ甘やかしちゃうからって。それでね、そう言えば赤髪が協力するみたいなこと言ってたなーと思って」

甘やかす!? ハルタさん!! あなた達、わたしの修行に関してはちつとも手抜いてないから安心して?!

人のスケジュール1秒の無駄もなく管理しといてどこら辺が甘い
の?!

四六時中監視下に置いて過密で鬼畜な修行させといて何が甘い
!?

「まあ、そういうことだ。……そうだマルコ、うちに「いかねえよ!」

…そうか、残念だ」

マルコさん即答!

その前に来る度に勧誘するのやめてもらっていいですかね

「赤髪なら覇王色も使えるし、協力してくれるならとことん利用して

やろ……ニア？なんでそんなに不満気なんだ？」

あれ、わたし顔に出てた？

「シャンクスさん……マルコにいちやつれてこうとするから、すきじゃない」

つん。とそっぽを向いてしまった

あーあ。我儘言っちゃったかな？

せつかく呼んでもらったんだから受けるべきかなあ

でもマルコさんを勧誘するから嫌なんだよね。

「……だそうだ赤髪。きてもらつて悪いが帰ってくれ」

「マルコ嬉しそうだね、羨ましい……。でもまあ、ニアが嫌っていうならしょうがないか」

え、いいの？呼んどいてそんな簡単に帰らせていいの？

「このシスコンども……。わかつたわかつた！もう勧誘しねえから機嫌直せー……な？」

シャンクスさんがわたしの前に座って頭を撫でながら言った。

「むう……。ぜつたいだよ？」

「はいはい。って、なんなんだよこいつ！なんてフードで顔隠してんにこんな可愛いんだ!!反則だろ！」

「ニアだから」

「この船シスコンしかいねえのか!!」

それには同意するけどきつとシスコンしかないよ、うん。

……それはともかく、もう勧誘しないってんならいいかな。

けど、教わるはいいにしてもこの人絶対強いし……殺されないといいな

「グララララ……無茶させすぎたら殺すぞ、小僧」

「白ひげまで……。なんでそんなに過保護なんだ。はあ、とりあえず場所を変えるぞ？よつ……と。じゃあ、ニア借りてくな」

シャンクスさんはそう言ってわたしを抱き上げるとひよいつと船を降り小船に乗る

ジャングルへと向かうそう

後ろを振り返るとハルタさんとサツチさんがいつのまにかついて

きてた

「…おいおい、そんな心配しなくても殺しはしない。頼んだんなら少しは信用したらどうだ？」

シヤンクスさんが呆れ顔で言うのと2人は難しい表情を浮かべる

「…念のため、だよ」

「ああ、念のため、だ」

「……………そうか。」

わたしの異能のこと気にしてるんだ…。

痛覚の拒絶を使わないように見張り役つてところかな？

まあ、使うけどね!?

「にいちや、そんなにしんぱいしなくてもわたしはだいじょうぶだよ！」

「……………うん」

「……………ああ」

表情が暗いなー。やっぱり言わない方がよかったのかな？

いや、あの状況で嘘ついたり隠したりする技量はわたしにはないからな…うん

「ついたぞ。葬式みたいな顔してんじゃねえよ、シスコンども。俺がやりすぎないように念のため見張るんだろ？」

シヤンクスさんがイタズラっぽく笑うとハルタさんとサツチさんが顔を見合わせてから小さく笑った。

…この人結構すごいかも

—シヤンクスサイド—

いきなり白ひげから連絡が来たと思ったらニアに覇気を教えて欲しいと言われた。

…覇気、か。白ひげの船に居るのだからお前たちが教えればいだろう。人材に不足はないはずだ。そういうと、自分たちだとうしても甘くなってしまう。中途半端な力は身を滅ぼすからしっかりと教えて欲しいんだそう

…苦肉の策か。俺を頼るといふことは相当な何かでもあったのか

？

だが、俺も3年前に左腕を無くした。城下の近くで白ひげ達と宴をした数週間後俺たちは東の海イーストブルーへ向かい、そこで出会った少年に：新しい時代にかけてきた。

左腕がなくなつた俺が教えていいのか、と聞くと「覇気を教えるだけだから片腕くらいなくてもいいだろ」と言われた

何気に酷いなこいつら…。どれだけシスコンなんだ。

まあいい、俺もニアにまた会いたいと思つてたところだ。あの謎の多い少女をもう少し知りたい。

白ひげの船に行くとニアが驚いた顔をしてる。「なんでいるの!？」と言いたげだった。

：腕を一瞬みたが何も言わなかった。聞かない方がいいと思つたんだろうか、いや、こいつのことだ。普通に興味が無いんだろうなそれもそれで悲しいぞ。

俺がこの前のように1番隊のマルコを勧誘するとニアが不機嫌になつた。

「ジャンクスさん…マルコにいちやつれてこうとするからすきじゃない」

そう言つてそっぽを向いてしまった。

：なんだこれ、小動物か？可愛い…

ほっぺたつつきたい…が、そんなことしたら隊長達に殺されそうだからやめておこう

俺が謝ると機嫌を直してくれたが…：やっぱり可愛い。

…マルコ勧誘してダメならこいつ勧誘してやろうか？

良い癒し要員になるだろうな。

…と、とりあえずいきなり対人戦は危険だから近くのジャングルで覇気のコントロールの仕方を教えるか。

小船で移動しようとしたら4番隊と12番隊の隊長がついてきていた。

「…おいおい、そんな心配しないで殺しはしない。頼んだんなら少しは信用したらどうだ？」

そういうと「念のため」と、返ってきた。

：俺は鈍くない。こいつらが心配してるのはもつと別の何かだ。やっぱり、ニアには何かがあるんだな。

こいつはきつと大きな秘密を持つてる。俺がこいつと会ってからというものの白ひげの船に子どもがいるという噂をまだ耳にしている。

意図的に隠されてるんだ。：本当に何者なんだろうな

気になるが聞いても話してくれないだろう。

はあ、まあ今はいい。まずはこいつを強くしてやることだ

：俺は厳しいぞ？ニア

—サイドエンド—

そして修行が始まった。とりあえず半年間、船を開ける許可をもらった。

半年間で身につけられるわけないけど基本と応用を少し知っておけばあとは隊長達で時間をかけてなんとかするそうさ。

シヤンクスさんもわたしが少しは使えることを聞いてたそうで見えろと言わんばかりにジャングルの生物を攻撃したり、生物の攻撃をかわしたりするところを見せてきた。

こいつらは馬鹿なのか?!一桁の子どもに何をさせるんだ!わたしに死ねと?!

：。。。とりあえず痛覚は拒絶しておこう。いざという時に痛くて動けないとか情けなさすぎる。痛覚の拒絶だけは絶対にするなっすつごい念を押されたけど使わなかったら動けなくなる気しかしない。

けど、半年間ももつかなあ?

異能だつて使いすぎたら疲れるんだよね。それで倒れたら今度こそイゾウさんに縛り付けられるかな?

ま、いつか。そうなったらシヤンクスさんのせいにしちやえ!

色々と説明されながら見せつけられた後、すぐにわたしと交代した。

あんな激しい動きしながら喋ってよく舌噛まないな…

相手は巨大な虎だった。虎：ライオン？どっちでもいいや。同じネコ科だし

姿はテオ・テ○カトルから翼を取ったような風貌だ。

待て待て待て！こんな獰猛なやつ相手にしろってか!?

一撃でも食らったらアウトだろ!!

ああ、もうっ!!やればいいんだろ!?!やれば!!

襲ってくる虎から必死に逃げる。

噛まれたら即死だ！えつと、見えない鎧…とか言ってる場合か!!

死ぬ死ぬ死ぬ!!

武装色って武器とかに纏わせれるんだっけ？じゃあ石ころにでも纏わせればいいか！できるかな？いや、やらなきや死ぬ！とりあえず、目を潰そう、そうしよう!!

その辺の石ころを拾って覇気を纏わせるイメージをする。間合いを取りつつも石を虎の目めがけて思いつきり投げるとヒットしたように虎は咆哮を上げた。

ゾクッ！

背後に寒気がして、虎を視野から外さないようにその場から飛びのくとシヤンクスさんが刀を振り下ろしていた。

あつぶな！もう少しで斬られてた!!こいつ、殺す気満々だろ！

「きちく…！シヤンクスさん、おに!!」

「…：…おいおいおい、なんだこいつは！少しは使えろと聞いていたが、少しってなんだ!!少しどころじゃないだろ！だいたい！覇気を纏わせたとはいえ、石投げただけであの虎にあんなダメージ与えられるか?!普通!!バカなのか?!」

どう考えても馬鹿はあなたでしよう!!

こっちは必死に逃げてるのにそこに刀振り下ろす?!普通!!

「ニアは天才だ「シスコンはもういい!」…：」

いや、助けて?!お兄ちゃん!!

天才だからとか関係ないよ、これ!!

「逃げるのはいいが、石ころ投げるなんて誰が思うんだ！石投げるく

らいなら武器の1つでも持つとけ！つーか、なんでそれで目潰しできるんだ！」

「できるからできたんだよ！あなたもどさくさにまぎれてかたなむけないで!?しぬかとおもったよー」

「一つの物事に集中しすぎると周りが疎かになるだろ？だからちやんと周囲に注意が払えてるか確かめようとしたんだよ！」

「だとしても…もつとべつなやりかたあったでしょ!!どうもうなケモノからにげてるさいちゆうにべつほうこうからのこうげきがかわせるとおもってるの?!せんとうけいけんのあさいこどもが!!」

「実際躲したじゃねえか!!俺もあんな見事に避けられるとは思ってなかったよー」

「ならかたなふりおろさないでよ！あたってたらどうするの！」

「んなもん、寸止めするに決まってるだろ！」

シャンクスさんと喧嘩していると虎が威嚇するように咆哮を上げた。

「グオオオオオオオ!!」

「うるさいっ!!」

ドンッ!!

「グオツ…」(バタ

「うわっ!!」

虎の咆哮に対しわたしとシャンクスさんが霸王色を放ち気絶させる。

あ、霸王色使えた。

その風圧でサッチさんとハルタさんが怯んだ。

「あつ…いちや、ごめん！だいじょうぶ?!」

「あ、はは…。大丈夫、ちよつとびっくりしたただけだよ」

「…お前、滅茶苦茶だな…。赤髪と口喧嘩始めるとか…。なんつーか、虎が哀れだ…」

そこに同情する!?

「はあ…。これ、俺が教えることないんじゃないか?ここまでするんならお前らだけで十分だろ」

「むう…。せつかくきたんだからさいごまでみてつてよね」

「…ツンデレか」

「ちがうもん！にいちやたちのためだもん！」

「分かった分かった！わかったからそんな不機嫌になるな、ほっぺたつつくぞー！」

そう言つてシャンクスさんがわたしの前に片膝をつき目線を合わせる人差し指で頬をつついた。

……ちよつとくすぐりたい

「へえ！結構ぶにぶにしてるんだな。子どもだかr……悪かった、今のは俺が悪かったから刀をしまえ、シスコン共」

シャンクスさんが片手を上げて降参のポーズをとる。

その後ろではサッチさんとハルタさんが素敵な笑顔でシャンクスさんに刀を向けてた。

シャンクスさんの扱いがひどい気が……

「俺だつてニアのほっぺつついたことないのに」

「全くだ。他の船のやつがニアの頬をつつくとは……。今すぐに斬つてやりたい」

どう言うこと?!

違う船の人はわたしに近づくなと!?そう言うことですか!!?

わたしは籠の鳥か！いいけどさ！

「……こいつらと話していると想像以上に疲れるな。ニアの行動には驚いたが…石ころ一つであの虎を怯ませるとは思わなかった。あんまり教えることはないが…手は抜かないぞ？」

「のぞむところだよー！」

そういうと、サッチさんが呆れたように額に手をついた。

「ほんと、何するかわかんねえもん…こいつ。この間はスプーンで海王類細切れにしてたし」

「あー、紙に武装色纏わせて手裏剣みたいに投げてた時もあったね。船の支柱に刺さってさくあれはびっくりしたよ。紙も鉄みたいに刺さるんだなーって思った、勉強になったね」

どっちも凄い怒られた気がする。

スプーンで海王類刻んだ時は「スプーンは斬る為の道具じゃない

！」って言われたし、紙に覇気を纏わせて投げた時は「そんな刃物みたいな紙があつてたまるか！」って言われたっけ？

紙は覇気纏わせなくても切れるときはよく切れるのに…理不尽。

「武器要らずかよ…」。その辺のものが全て武器になるのか、こいつは。…ん？さて、スプーンでどうやって刻むんだ!？」

「てつのかたまりならぜんぶいっしょでしょ？」

「「ちがうから!!」」

あるえ？

わたしがおかしいのかなあ…。

修行という名のいじめられる日々がようやく終わりを迎えた。

…死ぬかと思った。

「なんつーか、あつという間の半年だったな」

「ほんと、必死に逃げるニアも可愛かった」

酷い。こちとら命がけだったのに…

途中で鷹の目って人が来て散々な目にあつたからね?!

「はあ、こいつの身体能力と知能の高さには恐れ入った。まさか木の枝一本で猛獣の足を折るとは思わなかったぞ。まあこちらとしても楽しませてもらった。あとは体がもう少し成長して体力がつけば化けるだろう。鷹の目が来たのは…ほんとに悪いと思ってる。」

人が苦しんでるの見て楽しむなよ!人の不幸は蜜の味ってか!!呪うぞこのやろう!

よく生きてたな、わたし。

「いつものしゅぎようよりハードだった…。ミホークさんきちく…」

「ははは…、そりゃそうだ。俺たちだどうしても情が邪魔するからね」

「鷹の目もどこか楽しそうだったな。何度殺してやろうかと思っただか」

「おい、それは俺に情がないと言いたいのか?俺だって何度止めに入ろうかと思っただか…。」

嘘だ!2人がかりで楽しそうに襲ってきたくせに!!

いつか見返してやる！

はあ、……………まあ、いいか。一応世話になったし。

「シャンクスさん、たぶんむようだよ」

「ん？」

「ニア…」

それでサッチさんとハルタさんは察したらしい。けど仕方なさそうに静観を決め込んだ。ありがとうございます！

わたしはシャンクスさんの左腕に指を指す。

ちよつと力の使い方統一しようと思つて一生懸命ポーズやら言葉やら考えたんだ。決まったセリフとかポーズが有ると力使つてる感あるしカツコいいじゃん？

まあ無くても拒絶さえすればいいだけなんだけどね。

「なんだ？人の腕に指差して。俺の左腕の行方でも知りたいのか？」

いえ、全く興味ないです。

【絶】

心の中で事実を否定し、言葉で一言。

かつこよくない?!これ!!

「……っ!!?な、んだ、これは…」

自分の左腕が元に戻つた事実ことに驚きを隠せないシャンクスさん。

そりやそうだ

「…それで、こんかいのかしかりはなしね。けど、だれかにこのことしやべつたらゆるさないよ?じゃ、またね。シャンクスさん」

そう言つて驚いてるシャンクスさんを置いてわたし達はモビー・デイツク号へと帰るのだった

—シャンクスサイド—

あつという間の半年だった。正直ニアの成長の早さと身体能力と知能の高さには脱帽した。

あの虎の足を木の枝で折つたときには虎に同情したくらいだ。なんで棒切れで骨まで逝くんだ!!普通枝が折れるだろ!どうなつてんだ!なんでもありか!!

途中で鷹の目が俺を探しにあのジャングルまで来たのは誤算だった。

俺とニアが戦ってるのを見てとりあえずニアに一撃入れたらしい。ニアが一撃を避けると面白いオモチャを見つけたと言わんばかりにニヤリと笑い斬撃を繰り出し始めた。

必死になってそれを避ける姿が可愛かった…。

「いきなりなに?! シャンクスさん、なんとかして!!」と、ニアに言われ我に返りミホークを止める。

事情を話すと「なるほどな、俺も手伝おう」と言い出して薄笑いを浮かべながらニアを楽しそうに虐める。

・・・悪い、ニア…無理だ。頑張つて避けてくれ!

…はあ、驚かされてばかりだったがこちらとしてもなかなか楽しかった。あいつは将来化けるだろうな

ルフィと言いニアと言い…次の時代はなかなか曲者が多そうだな

…

「シャンクスさん、たごんむようだよ」

別れ際にニアがそう言つて俺の左腕を指差した。

ん?なんだ?人の腕に指差して…

【絶】

ニアが一言言うと俺の左腕が元に戻つた。

「……………?! な、んだ、これは」

腕が…治つた…? いや再生した??おれの腕は臨海の主に喰われた

筈だ!

なんだ?!何が起きた!?!今の、回復とかそんなレベルじゃないぞ!?

こいつはこんな力を持つてたのか?!

……………!!

そうか!なるほどな…

そりゃ白ひげたちが過保護にもなるはずだ。…なんて爆弾抱えて

やがんだ、白ひげは…。

いや、白ひげとこにいるならまだマシか…。

白銀の髪に黄金と空色のオツドアイ。

おまけに得体の知れない力か…。再生させる力なのか何なのか知らないが…。外部に知られちゃいけないってことはわかる。

多分能力者じゃ無いんだろうな。だからみんながあんなにも慎重なんだろう…。

たしかに守りきれるか不安になるなこれは…

それにしても、だ

「左腕これの事を周りにどう説明しようか…」

俺は1人で頭を悩ませるのだった。

—サイドエンド—

番外編 鬼畜×鬼畜

半年間の野外学習が始まった。

覇気をレベルアップさせる為に獰猛な虎かライオンかよくわからない生物との1対1の戦いです。

意味わからん！わたしに死ねと!? ハルタさんとサッチさんはマルコさんになるべく手を出さないように、と言われてるらしい

いや、助けて?! これは軽く10回は死ねるよ?!

「グオオッ!!」

虎もどきが前脚で引つかこうとしてきた

ひっかく? 違うな、切り裂くだ

あの爪あたったら痛いじゃ済まないだろうな…

ドゴオオオオン!

ひよいつと避けるとさつきまでわたしがいたところには大きなクレーターができていた。

…うん、あたったら確実に死ぬな

シャンクスさん鬼畜すぎかよ! こんなものぶっつけ本番でやれって馬鹿なんじゃないの?!

落ち着け、わたし! 焦ったら負けだ

「まだ目に頼ってるな! 目隠ししてやろうか?」

なんか言ってる。ちよつと黙つとけ鬼畜野郎

…目を瞑って集中する。

『何故力を欲する、娘』

シャベツタアア?!

って、ふざけてる場合じゃない! えっ!? 今、この虎が言った?!

『幼き内に何故力を欲す、巨大な力は身を滅ぼすぞ』

これ、どう伝えればいいんだ? ふつうに喋ればいいのか?

「まもる、ため。わたしは、わたしのまもりたいものをまもるためにつよくなる!」

そういうと、虎が咆哮しわたしは飛ばされた。

なんとか木に捕まり、木の枝を一本折って虎に立ち向かう

『なら、我を超えてみる!』

「グオオオオオ!!」

「……わかる」

虎は次にわたしを前脚で踏みつぶそうとする。なら前脚よりも後ろに入って虎の脚が地面についた時……後ろから前へ、振り抜く!!

バキイイツ!!

「……なんかすごい音したけど大丈夫かな？」

『骨が折れたか。娘、そなたの勝ちだ。』

「えっ!?とらさんほねいつちやった?!いたいのとんでけする?」

骨折れたのになんでそんな冷静なの、虎さん……

「…物凄い音がしたが……お前の持つてる棒切れが無事な件についてまず聞いていいか?」

「…その前にさ、ニアが虎と会話してることに驚こうよ、赤髪」

「ニアについてツツコミを入れ始めるとキリがないぞ?」

噛み合ってるようで噛み合っていない!

「まずとらさんのしんぱいしてあげて?!」

だって、骨ですよ?骨!!

痛いでしょ、骨折れたら!!

えっと、赤髪さんにバレないようにこっそり……

『…痛みが…消えた?面白い娘だ』

「とらさん、わたしとわぼくしてくれる?」

『フツ…いいだろう』

虎さんがどこかに去っていった。

え、和睦するのにどつかいっっちゃうの?…ま、いつか

させてきて、修行再開つと

「お前、ほんとになんなんだ!!あの虎と和睦って!!なんでできた?!逆に!」

「できたからできるんだよ!ほら、シヤンクスさん!つづき!」

「ほんと、調子狂うな!お前!つたく…天才かよこいつは…見聞色を切らすなよっ!」

そう言うときシヤンクスさんが斬りかかってきた。

あつぶな!!いきなりかよ!!お前ほんと殺す気か?!

「わわっ!!」

「なかなか素早いじゃないか!だが避けてばかりじゃ俺は倒せんぞ?」

「たおす?!よんこうたおせるなんてばかなことおもうわけないじゃん!!ばかなの?!シヤンクスさん!」

「喋る余裕はあるみたいだな。よしっ!ペースアップだ!」

「たのしそうにいじめるな!きちくやろう!!」

憎まれ口を叩くとシヤンクスさんが笑顔で剣を振る速度を上げた。命からがら必死になつて避ける。

ハルタさん!サツチさん!ヘルプ!!これは止めていいよ!!止めて下さい!

「赤髪の奴…。殺していいか?」

「うん、殺そう。」

刀を取り出して言うお兄ちゃんズ。

えっ!?殺るの?!助けてほしいとは思ったけどまさかの殺しちゃう感じ!?物理すぎる!!

うちのお兄ちゃん過激!!

「……………珍しいことがあるものだな。これはどう言う状況だ?」

ピタッ!!

聞き覚えのない声に全員の動きが止まった。

一斉に声のした方に顔を向け、わたし以外が叫んだ

「二鷹の目?!?!」

たかのめ?なにその物騒な2つ名。

あ、目が合っ…ぎやあっ!!

ズドオオオツ!

「?!?」

目が合った瞬間に斬撃を飛ばされた。いきなりだったが紙一重でかわした。あつぶな!!

えっ!?斬撃って飛ぶの!?どうなつてんの!!?

というか出会い頭に刀振るうってなに?!わたしあなたに何かした

??!

「ほお…。これを躲すか。ならこれはどうだ？幼き者よ」

そう言つて連続で斬撃を飛ばしてくる。

ちよっ！まっつて!!まてまてまて!!死ぬって!!

「わっ!!わわっ!!」

ゾクッ！

何?!なんかヤバイのきそう!!

直感的にわたしはかがんだ。

スッパアアアン!!

その一撃は周りに生い茂ってる木を見事に伐採した。

何?!こわいんだけど!!あんなの喰らったら頭と体がサヨナラする

!!

「し、しんりんはかい…!」

「「そこじゃない!!」」

鋭いツツコミをいただいた…

その後も鷹の目さんの猛攻は続く。薄皮一枚で避けるのが精一杯だ。

躲しきれるか、こんなの!

「なんなのこのひと!わたしなにかした!?!シャンクスさん!しりあいならとめて!」

叫ぶとシャンクスは覚醒したみたいで鷹の目さんに声をかける。

今確実にポーッとしてだだろ、この野郎

「た、鷹の目、なんでここに?」

シャンクスさんが声をかけると鷹の目さんは攻撃を止め、刀をしまった。

ふうっ、助かった…

「はあ…はあ…………。しぬかと、おもった…」

「なんだ?これは。赤髪を探してきてみれば子どもと交戦している。とりあえず一撃やれば見事に躲すじゃないか。」

とりあえず一撃って何?!貴方にとつて一撃お見舞いするのは挨拶なの?!しかもこれ呼ばわり?!いいけどさ!

「訳あって詳しくは話せないんだ、許せ鷹の目。ただ、今はこいつの覇気の向上の為に修行させてる。」

「ほお…。面白そうだ、俺も手伝おう。」

「「は？」」

「実践あるのみだ。小一時間ほど暇つぶしに付き合ってもらおう。何、殺しはせん」

ゾワツ

やばい！わたしの脳が警報を鳴らしてる！！逃げろと言ってる！！

「ちよとまで！鷹のm「我が黒刀から逃げ切ってみろ」…すまん、頑張れ！ニア」

裏切りやがった！！禿げろ！シヤンクス！！

「わああっ！！」

その日は鷹の目さんとの無限追跡鬼ごっこを永遠と行った…。

小一時間って言ったのに！！嘘つきー！！

あれから鷹の目さんがちよこちよこ顔を出すようになった。

あまりにも追いかけてくるから思わず腰のホルダーからクナイを取り出し受け流す。

……腕が痺れる！！無理だ！この人の剣は受けるべきじゃない！！

やっぱりかわそう！

「よく今の流したな。」

「さすがニアだね。けど、そろそろ止めていいかな？」

「それじゃ修行にならん。もう少し我慢しろシスコン。…つか、あいつクナイ持つてるなら初めから使えよ…」

「にいちゃ！たすけてー！！」

「余所見か？」

「わああっ！！ばかー！！」

相変わらずの鬼畜な猛攻に叫びながらも応戦する。

と、急に鷹の目さんの動きが止まった。

「ふむ…。名前はなんという、強き者よ」

強き者?!あなたにとつての強いつて何!!

わたしあなたの攻撃避けるので精一杯ですけど！けど、かわしきれないからいつもボロボロですよ？！

「……ニア」

「ニア、か。俺はジュラキユール・ミホーク。鷹の目とも呼ばれてる。こだわりはない、好きに呼べ」

ミホークさん……。自己紹介はいいけど、そろそろ休憩したい。2時間も3時間も鬼ごっこする体力なんてないよ…

「赤髪」

「ん？」

「…ニアを追い込むぞ」

「ん」

はい?! シャンクスさんとミホークさんが2人がかりで来るってこと?! ばかなの?! しぬの!?! いっせ殺せ!!

「なんで?!」

「…敵が必ずしも1人で来るとは限らない。多対一の戦い方も覚えておくべきだ。お前は目立つ。身を守ることを優先して考えろ」

心配してくれたのか。

……だとしても、

「じつりよくさをかんがえろ、きちくども!!」

薄笑いを浮かべながら攻撃してくる2人に対して「禿げてしまえ!」と、思ったわたしは悪くないだろう

—鷹の目サイド—

最近赤髪を見なくなっただけだと思えば、赤髪が小さな子どもと交戦していた。その子は綺麗な銀色の髪にオッドアイの目をしていてとても目立つ容姿だった

目が合ったからなんとなく一撃入れるとギリギリでかわした。

…ほお? 面白い。いい暇つぶしになりそうだ

二撃、三撃と続けて放つと驚きながらも必死に躲した。

…可愛いな。そんなに可愛いといじめたくなるじゃないか

赤髪も同じことを思ったのか俺を止めはしなかった。

「なんなのこのひと！シャンクスさん、しりあいならとめて！」

一生懸命俺の斬撃をかわしながら必死に赤髪にお願いをする。
もう少しいじめたかったが……まあいい。

俺が攻撃を止めると子どもは乱れた呼吸を整えながら喋る

「はあ……はあ……。しぬかと、おもった」

そりやそうだ。

寧ろよくあそこまで避けたな。何発か擦りはしたみたいだが、ヒットしたものはない。……とんだ伏兵がいたものだ。

赤髪に聞くと詳しくは話せないが訳あって半年間覇気の向上の為修行させてるそう。……白ひげのところの隊長がいるからきつとそつちに関係があるのだろう。……まあいい。なんにせよ面白そうだ

「俺も手伝おう」

……気がついたらそう言っていた。ふむ、最近暇だったのだろうかだが、こいつを育てるのは楽しそうだ。

腕がなる。

それから暇な時は顔を出すようにした。……海軍で行われる定期会議ではこいつの話は一切ない。こんな目立つのが白ひげのところにいたら少なからず騒ぎになるだろう。なのに話を聞かないということ……こいつは意図的に隠されてるということになる。まあ、詳しく聞く気はないし聞こうとも思わない。ただこいつはこの先、力がなければ生きて行けないだろう。俺がきた時には赤髪の攻撃をかわせていたから白ひげ達も相当な修行をつませていると思う。

フツ……。俺と赤髪と白ひげが教えてるということか。

………よく生きてるな。

「名はなんという？強き者よ」

そういうと怪訝な顔をされた。強き者の意味がわからないのか、それとも俺より強くないのに強き者といわれたからか。

……こいつは自分の力を過小評価しすぎなんじゃないか？普通に考えて俺や赤髪の攻撃をここまでかわせるのなら下手すれば見聞色は隊長達より上だぞ？

「……ニア」

ニア……………フツ、「光」か。

こいつのこの綺麗な目から光が無くなることを願おう。

「赤髪、ニアを追い込むぞ」

そういうとニアは「何言ってるんだこいつ!!」と言いたげな顔をしたが気にしない。

赤髪もニヤリと笑い剣を抜いた。

多対一の実戦。俺と赤髪だ、不足はないだろ？

「じつりよくさをかんがえろ、きちくども!!」

そう言いながらも必死に逃げるニア。

だからそんなに可愛いともつといじめてやりたくなるぞ

さて、俺たちから逃げ切ってみろ！

—サイドエンド—

「ほらほらー動きが鈍くなってるぞ？もう限界か？」

シャンクスさんが笑いながらいう。

DS大魔王め、何時間やってると思ってるんだ！こちとらお前らと違って体力馬鹿じゃないんだよ!!

「その程度では自分の身すら守れないぞ、ニア」

……………わかってるよ、弱いことくらい!!

だから強くなるんだよ！こいつつ！ふざけんな!!

わたしはミホークさんが突いてきた剣に沿うようにして体を回転させながら懐に入った。

まさか攻めに出るとは思わなかったのか彼は一瞬身を引いた。

…その隙を逃すものか。腰につけてるホルダーからまたクナイを取り出しミホークさんの首目掛けて振り上げた。

「!!」

ミホークさんは驚いて、空いてる方の肘でわたしの鳩尾に1発いれると、簡単に飛ばされて木に全身を打ち付けられた。

そのまま地面へと落ちたが痛覚を拒絶してる今、痛みなんて感じない。すぐに立ち上がり頭から流れる血を拭いながらミホークさんを睨みつけた。

「だからつよくなるんだ。まもられてばかりはいやだから」
それは心からの想い。強い”決意”

「…すまない。少々意地が悪かったな。許せ、ニア」

一旦休憩にしよう。と、シヤンクスさんがいうとハルタさんとサツ
チさんが血相を変えてこつちに走ってきた。

心配症だなあ、ほんと

—シヤンクスサイド—

「その程度では自分の身すら守れないぞ」

鷹の目がそうニアを挑発した。

すると彼女の目つきが変わり、器用に鷹の目の懐に入り込んで腰につけてるホルダーからクナイを取り出し鷹の目の首目掛けて振り上げた。

鷹の目ならかわせると思ったのか、本気で殺す気だったのか躊躇なく頸動脈を狙った。

鷹の目は驚き、肘でニアを突き飛ばした。

…見事に鳩尾に入ったな。あれかなり痛いだろ

木に打ち付けられ地面に倒れる…が、すぐに立ち上がった。

……なんで立てる?!完璧な一撃だったぞ?!

ゾクツ…

立ち上がって鷹の目を睨むニアの目は無機質な人形のように冷たく光っていて、俺は恐怖を覚えた。

「だからつよくなるんだ。まもられてばかりはいやだから」

俺と同じようにニアの目つきに何か思ったのか鷹の目は一言謝る。

俺は「休憩にしよう」と一旦切り上げ鷹の目に話しかける

「懐に入られるとはすごい油断だな、鷹の目」

「ああ。」

「なんだ?どうかしたのか?」

隊長たちと楽しそうに話してるニアを見ながら複雑な顔をしてる鷹の目に「らしくないぞ?」と声をかけた。

「あいつは何だ?一瞬あれの殺気に当てられた」

「お前がか?…さあな。俺もよくは知らん」

「まだ爪を隠してるのか?。」

「いや、単に気づいてないだけだろ。白ひげ達が過保護すぎて自分の秘めた力を知らないだけだと思っただけ」

「なるほどな。なら起こしてみるか。」

「は?。」

あ、俺、余計なこと言ったかも。

すまん、ニア!

「ニア、休憩は終わりだ。再開するぞ」

「はやくない?!わたしあなたたちとちがつてまだそんなにたいりよくな…:…うわわっ!いきなり?!」

ニアが喋ってる最中に斬りかかる鷹の目。

俺の出番があまりない気がするがまあいいか。覇気もそうだが、動体視力もかなり鍛えられそうだな、ありや

よし、俺も参戦するか。

なんたつて、必死に逃げてるニアも可愛いことに気づいてしまったからついいじめたくなる。鷹の目もきつとそうだろう

「わああっ…ふたりしてえがおでけんふりまわすなー!」

可愛いお前が悪いんだ。さて、頑張つて避けろよ?

—サイドエンド—

そんなこんなで生死をかけた半年間を過ごしたニアはシャンクスとミホークを密かに呪うのだった。

第22話 わたしの武器は銃と剣です

鬼畜な修行から帰ってきました！

船に着くと真っ先にお出迎えしてくれたのが言うまでもなくマルコさん

「帰ったかよい。……………赤髪の奴、殺してきていいか？」

わたしの姿を見るなりそう言った。

シスコン極めてるな、マルコさん。

「いいぞ、殺してきてくれ」

「いいよ、ちよつと再起不能にしてきて」

ちよつ！ハルタさんにサツチさんまで！！

いや、あなたたちも修行中何度かシャンクスさんに剣向けてましたけど！

再起不能って何!? そんなに我慢してたの!?

「…おいおい、何があつたんだ。そんな簡単に喧嘩を売るな」

オヤジさんはまともでもよかつた。とりあえず、疲れたな…

今も痛覚は拒絶させてる。今力を解いたら絶対倒れる自信がある。

そうなたらイゾウさんに縛り付けられる…！いや、でも今回はわたし悪くないよ?! あんなに楽しそうにいじめてくるあの2人が悪いんだよ！

「それはともかくとして、ニア。お前、痛覚の拒絶はあれほどするなつて言つたよな？」

…げっ、バレてる?!

オヤジさん実はエスパー!?

「それ！俺らも言つたんだけど『そんなことしたらうごけなくなる！』って聞かなかつたんだよ」

「……………縛るか。」

「縛ろう。」

酷い！わたし悪くないよ?! シャンクスさんとミホークさんが容赦なくいじめてくるから！

マルコさんとイゾウさんがゴソゴソなにか用意してると思つたら

ロープを取り出ししていた。

…つて、本当に縛るの!?

「そんなえがおでロープようお願いしないでよー!」

修行帰りということもあり、四六時中追いかけて回されたトラウマが蘇り思わず船内へと走る。だが、隊長たちは素直に行かせてくれるわけも無く、四方八方から捕まえにくる。

「あっ!逃げた!捕まえろよい!」

「うわっ!早っ!!」

「どんなけ鬼畜な修行させたら半年でこんな成長するんだ?!」

逃げ回るわたしを追いかけるマルコさん、イゾウさん、ビスタさん。それを見て呆れるハルタさんとサッチさん。

「俺らが見ても結構鬼畜だったよ。なんと赤髪を殺そうと思ったか」

「ついでに鷹の目もな。2人してニアを追いかけるもんだからマジで可愛そうだったぜ」

「二鷹の目?!?!」

「ああ、途中で来てな…成り行きで鷹の目もニアに稽古をつけてったんだよ。」

逃げ回っていると不意に体が持ち上がった。

「ふふっ。元気そうだねニア。おかえり」

「イオンにいちや!」

わたしを抱き上げて優しい笑顔で言った

全然気づかなかった!やっぱイオンさんの能力すごい!

「ニアがいなかった半年間、みんな寂しそうにしてたんだ。逃げたら可哀想だよ?」

「イオン!余計なこと言うなよい!」

「照れ屋さんですね、マルコ隊長。ああ、でもニア?まずは体を休めようね。自分に嘘をつくのはよくないよ?側にいてあげるから…:おやすみ?」

イオンさん優しい!この優しさ、修行中に欲しかった!!

わたしは自分にかけての異能を解く。すると全身に痺れるような激

痛が走った

：ああー、うん。多用するのもしゃないなこれ

反動が半端ない。下手したら本当に死ぬかも…あ、意識飛びそう…
そのままわたしは眠りについた。

ーマルコサイドー

修行を終えたニアが帰ってきた。…こいつがいない間なんつーか
…すげえ静かだった気がする。

サッチとハルタが赤ん坊のニアを連れてきた時、俺は船に乗せるの
を反対した。けど、今となってはどうだ。今更降ろすなんて考えられ
ねえよ。半年、ニアのあの無邪気な笑顔が見れないだけですごい寂
しく思った。

はあ…。なんてったってこんなに振り回してくれるんだこいつ
は…。

「帰ったかよ。……………赤髪の奴、殺してきていいか？」

ニアを一目みて思わずそう言ってしまった。

多少の無茶なら今回は目を瞑るが…なんだってこんなボロボロな
んだ?!どこもかしこも擦り傷と痣だらけじゃねえか!なんでそんな
平気そうな顔してんだよ!まさか、こいつつ!あれほどやるなって
言った痛覚の拒絶とやらをやってんじやねえだろうな…!

どうやら正解だったみたいでオヤジが言うと「バレた?」と言うよ
うな顔をした。

よし。縛りつけよう、そうしよう。

イズウと一緒に縄を用意するとニアが逃げ出した。捕まえようと
追いかけるが早いなのなの。

どうなってるんだ、その動体視力!!半年でここまで伸びるか?!赤髪の
奴どんな無茶させやがったんだ!!

ハルタとサッチが言うには途中で鷹の目がきてニアの修行に加
わっていったそう。

……………よく生きてたな。

「ふっ。元氣そうだねニア、おかえり」

俺らから逃げ回るニアをいとも簡単に捕まえたのはイオン。

…こいつの能力はほんと敵に回したくねえな

いや、回す気は無いんだが

イオンが優しく声をかけるとニアは糸が切れた人形のように気を失った。

「寝たかよい。……まあ、無事で何よりだ」

「無事……なのかな？あれ大丈夫？ちゃんと起きるかな？」

「起きなかつたら赤髪を殺しに行こう。」

「それ、いいかもな」

俺たちが赤髪を半殺しにする計画を立てているとイオンが笑う。

「ふふっ。ニアは人気者ですね。じゃあ、寝かせてきます」

そう言つてイオンはニアを連れて船内に戻る
するとオヤジが口を開いた

「…痛覚の拒絶か。異能を使つてるあいだは本当に一切の痛みを感じねえみたいだな。」

「ああ……。なんて危ねえ力だよい。あれだけの傷でヘラつとしてやるつてことは致命傷でも動けちまうんだろ？生きてたのは奇跡かもな」

「そうだね…。鷹の目と交戦してた時、鳩尾に完璧な一撃喰らつたけど何事もなかったかのようにすぐ立ち上がったからきつと本当に痛みを感じてないと思う。」

知れば知るほど危険だな。

…ほかつとくといつか死んじまうんじやねえかって時々無性に怖くなる時がある。だから俺たちはいつもニアの側にいたいって思うんだらうな。

目を離したら無茶ばかりしやがるし

なんてつたつて前科がありすぎるからな、あいつは!!

「俺たちのために戦おうとしてくれるは嬉しいが、自分を大事にしな
いからな…」

あいつが努力してるのを俺たちは知ってる。

何があつても弱音を吐かずに目の前のことに一生懸命立ち向かう

から応援したくなる。

だが、無茶が過ぎるから心配せずにはいられない

「なあ、ニアの専用の武器を用意してやろうぜ？ 飛び道具とか暗器は
いくつか持たせてあるがやっぱり限界があるなど思った」

サッチがそう言う。

それもそうだな。いくらニアが器用とはいえ限界はあるだろう。

「それならもう考えてある。イゾウと少し話してたんだがな、銃と剣
の両方を持たせようかなと。近中遠距離全てにおいて戦えたらこれ
ほど心強いものはないぞ。」

ビスタとイゾウが脇差くらいの普通の剣より短い剣と銃を用意し
ていた。こいつら、いつのまに…。

「まあ、あとはニアが起きてからだね。いまは休ませてあげよ」

まあ五体満足で帰ってきただけ良かったとしよう。

……赤髪の奴は今度会ったら覚えとけ。

ーサイドエンドー

おはようございます。

ああー、全身が痛い。

起きたら手当されてたから多分寝てる間にやってくれたんだろう
なー

「おっ、おはよう。ニア」

「あ、サッチにいちやー！おはよー」

サッチさんがちょうど部屋のドアを開けてはいつてきた。

それをみてベッドから降りる。なんせ長いことみんなの顔見てな
いから会いたい。……というか、わたしって気がついたらベッドの上
だな…。でもなー、怪我しないって結構難しい…

「もう動いて平気か？」

「うん、だいじょうぶ！」

いや、正直大丈夫じゃない。全身痛いよ、痛すぎて麻痺してるよ多
分

まあ…無理しなきゃそのうち治るでしょ

元気に返事をする。とサッチさんがしゃがんでわたしの体を軽く小突く。と、全身に痺れるような激痛が走った。

「あうっ!!」

「……………ふむ。で、どの辺が大丈夫って?」

そう言う彼の顔は笑っていたけれど……………うん。目が笑ってない。

これ謝らないと後が怖いやつだ

「ううー…。ごめんなさい」

くそう、シスコンお兄ちゃんズに勝てる気がしない。

「つたく…………。油断するとこれだ。ほらみんなのどこ行きたいなら抱っこしてやるから捕まれ」

「うん。ありがとう」

手を伸ばすとサッチさんはわたしを掴み片腕で抱き上げる。

ロビーに行くといゾウさんとビスタさんがいた。

彼らはわたしたちを見つけると「よっ!」と片手を軽く挙げて挨拶する。

「おはよう、ニア。怪我の具合はどうだ?」

「うん、だいじょう…:「おい」…ぶではない」

『大丈夫』と言おうとしたところでサッチさんが横槍を入れる。

と、2人は悟ったみたいでわたしの頭を乱暴に撫でた。

「またこいつは…………」

「しれっと嘘をつこうとするな。」

「むう…。おみとおしでくやし」

「……………」

頬を膨らませてそう言う。と彼らは頬をつつきだした。

……………あの、それ楽しいですか?

「にいちゃ?」

「あつ、悪い悪い。ニアがあまりにも可愛いからつい」

つい…………

いや、いいけどね?!

「あ、そうだニア。お前用に武器を用意したんだが受け取ってくれるか?」

武器…か。そりゃ護身用の1つにでも持つておきたいけどやっぱり怖い。

…ん？いや、わたし飛び道具とか暗器とかいくつか持つてるな。そういえば

じゃあなんでもいいか。それに使い方次第でどうとでもなる。

「うん。わたしはまもりたいものをまもるためにけんをとるよ」

そう言うのとサッチさんがわたしを下ろし、それを見たイゾウさんが頭を撫でながら銃とボルダーを渡してきた。

それと同時にビスタさんが短剣より長く、普通の剣より短い…いわゆる脇差を差し出した。

「自分の身もちゃんと守れ。お前のその守りたいものの中に自分も入れておけよ」

優しいなあ……ん？まっつて、銃と剣？

えっ、銃と剣で戦えって?!なんてトリッキーな!!

受け取りますよ！受け取ればいいんですよ!?

イゾウさんとビスタさんから武器を受け取り腰にセットした。

上手く扱えるようにならないとな。

「じゃあ、さっそくれんしゅ…「ニア?」…ごめんなさい」

練習しようとうと道場に行こうとしたら腕を掴まれ笑顔で凄まれる

うちのお兄ちゃんが過保護!

「…ニア。お前、赤髪に使ったかよい?」

マルコさんが後ろから歩いてきていつもより低い声でわたしに話しかける。

あつ…、やばいこれ。怒ってる。マルコさんが怒ってる!

わたしが答える前にサッチさんがその質問に答えた

「ああ、俺もハルタもそれに関しては何も目も瞑った。一応世話にはなつたし、それで貸し借りは無しって事でな。赤髪もそんなに馬鹿じゃないだろ。言いふらすようなやつじゃない…って、なんで知ってんだ?」

たしかになんで知ってるんだろう?ハルタさんが言ったのかな?

そう思つてると船内にしばらく見たくない顔が入ってきた。

「よお、ニア！昨日ぶりだな！」

「?!?なんでできたの!?きちくやろう！」

「おいおい、酷いじゃないか。せつかく様子を見にきたって言うのに。鷹の目にだいぶ虐められてただろ？体の具合はどうだ？」

「あなたもえがおでけんふりまわしてきたよね?!あちこちいたいよ！」

「痛いのか？ケロツとしてた癖に」

「いたいなきまつてるでしょ！」

グルルツという勢いでシャンクスさんを威嚇する。

何度死を覚悟したか…

というか、何しにきたんだこの人

「お前に修行をつけた礼が利き腕一本つてのは少々高すぎる。という事で、何かしてやりたいと思つてな。こうして乗り込んできたわけだ。とりあえず…武器を下ろせシスコンども！」

いつのまにかみんな剣や銃を抜いてシャンクスさんに向けていた。

いいよ！そのままやつちゃえ！

「俺の扱い酷くないか？ニア」

「ひどくない！そりやしゆぎようつけてくれたのにはかんしゃしてるけど、げんどがあるでしょ！2じかんも3じかんもおにごっこするたいいりよくないよ！」

言いたかったこと全部言つてやろうかな？今ならお兄ちゃんズもいるし怖くない！

「それは主に鷹の目だろ。つか、実際やつてのけたじゃねえか。天才め」

「ほとんどこんじょうだよ！で、ほんとになにしにきたの？」

こいつのことだ、絶対何か企んでる。

何しにきたのか改めて聞くと彼はため息をついた。

「…はあ、鈍いんだか鋭いんだかわからねえやつだな。まあいい。お前あの時俺になにをした？この腕のこと、説明してくれないか？」

シャンクスさんが左手で刀に手をかけそうと言うと空気が一変した。

マルコさんが隠すようにわたしを後ろに庇い、サッチさんとビスタ

さんは刀に手をかけている。イゾウさんは銃を抜いて警戒してるよ
うだった。

「頼んどいて悪いんだがそれ以上の詮索はやめてくれねえかよい？」

「そう言うわけにもいかない。これは回復なんてレベルのものではないぞ？お前たちはそれを知っていたのか？」

「ああ。だがニアには使わないように言つてあるし、本人もちゃんと理解してる。今回は特別だ。感謝しろ、赤髪」

サツチさんが答えるとシャンクスさんの目つきが変わった。

肌が少しピリピリする。こいつ、威嚇してるな

「俺は正直ニアを気に入っている、だからこそ心配なんだ。お前たちを信用してないわけじゃない。だが、お前たちがそこまで過保護になる理由を知ってしまったから聞きに来たわけだ。そいつはこの先、平穏を求められないだろう。…守れるのか？」

それは彼らが1番不安であろうこと。

わたしニアとイレギュラー言う異端児を抱えるのは正直言つて重荷でしかないだろう。それでも、彼らはわたしを家族として見てくれている。だからわたしはここにいるんだ。

「守れるか、守れないかじゃない…守るんだ。余計なお世話だよ、赤髪」

…イゾウさんカッコいい。キユンときた

やっぱ好きだなー、ここの人たち。あつたかい…

「わたしはわたしのいしでここにいるの。…ここにいたいの！いくらシャンクスさんでも、わたしをにいちやたちからひきはなそうとするならゆるさないよ！」

そう言つとシャンクスさんは驚いたような顔をし安心したように頬を緩め、お兄ちゃんズはなんか感動していた。

…おい、なんでそんな「うちの妹がこんなに立派になつて…」みたいな目で見るとこのやろう

「…そうか、ならいい。ああ、1つだけ言つておく。もしニアが泣くようなことがあつたらその時は横から攫つてくから覚えとけ。」

シャンクスさんが微笑んで言つた。

誘拐ですか、そうですか。罪に罪を重ねるなロリコン鬼畜ドS魔王。

「さて、ニア。それで何をして欲しい？」

「えっ？あのはなしほんとうだったの?！」

「なんで嘘だと思うんだ。もつと信用しろよ、お前の師だぞ?！」

「いつしゅんたりともしだなんておもったことないよ!」

シャンクスさんと言い争いを始めると周りは呆れたような、感心したような目でわたしたちを見ていた。

「…ニアって結構肝座ってるよな」

「度胸あるのかないのかたまにわからねえけどな」

「アホなのか天才なのかわからねえときもあるな」

わたし褒められてるの?呆れられてるの?どっち!?

「にいちや!ほめるのかけなすのかどっちかにして?！」

((耳いいな、あいつ!!))

「俺の話の途中でよそ見をするとはいい度胸だな。また追いかけてやるのか?そしたら俺しか見れなくなるだろう?」

「なにそれ!ヤンデレか、このやろう!……って、ストップ!かたなぬかないで!?!ここせんないだから!ふねこわれるでしょ!!」

「待てニア!突っ込むべきところはそこじゃない!」

「赤髪!これ以上ニアをいじめんなら俺たちが相手するよ!!」

サッチさんとハルタさんが威嚇するとシャンクスさんは子どものように駄々をこねた。

「…もうちよつとニアと遊びたいんだが」

「二!さつさと帰れ!!」

お兄ちゃんズが止めにはいりなんとかシャンクスさんを追い返した。

…はあ、疲れた……。

第23話 ケガは友達？

わたしの怪我が治って少しした頃、隊員も含めてレベルアップだ！
と言う話になりビスタさんがみんなに稽古をつけるそう。

…なんでそんなやる気になってるんだろ

「脇が甘い！」

「二「うわっ!!」二」

そう言つてビスタさんは竹刀を振り隊員を蹴散らす。

すごつ、一振りであんなたくさんの人を蹴散らせるんだ

人間技か?!

見聞色を使い気配を消すようにこつそりと背後を取る。

……が、隙がない。やっぱり隊長は違うなあ

どうしようか。

「もう終わりか?次！」

ビスタさんをよく観察して隙を探す。

…ん? 頭上の警戒がない…?

よくわからないけどそんな気がした。足音を立てないように駆け出しビスタさんの背中から首辺りをめがけて跳び、クナイを取り出す。

「……っ!?!」

ドンツ!!

ビスタさんが体制を入れ替え、竹刀を持ちながらも器用にわたしの腕を掴み手前へと引き、胸ぐらを掴むと地面へと押し付けた。

「わっ！」

いてて…。やっぱり無理だった…

強いなあ…。

「…はっ! すまんニア! ちょっと強く防ぎすぎたか?」

「あたた…。ううん、だいじょうぶ！」

ビスタさんがわたしを離し慌てて謝る。

…別に稽古なんだから謝ることないのに…。

うーん、新しく戦闘方法考えてみようなあ。正攻法だったら絶対勝

てない…

ービスタサイドー

ニアが覇気の修行からボロボロになって帰ってきてから俺たちはニアが無茶しないように隊員も含め全体の戦力向上を図るため稽古を行うことにした。隊長だけじゃなくて、隊員もいざという時ニアを守るように、と。一番張り切ってるのはルーカスとカルガンだ。あの2人は二度とニアに大怪我をさせたくないと思気込んでいる。

「脇が甘い!!」

そう言っつて木刀を振るうと何人かの隊員が飛ばされる。

…もう少し体幹鍛えとけ。

ゾクツ

突然背後に寒気を感じ俺は竹刀を持ちながらも体制を入れ替え、小さな腕を掴み手前に引くと胸ぐらを持って地面に押し付けた。

…ん？小さな腕？

「…はっ！すまんニア！ちよつと強く防ぎすぎたか？」

俺は慌ててニアを離す。

彼女は「たはは…」と笑い、大丈夫と言った。

うーん、と何か考えながら別の方へと歩いて行った

「…背後を取られるなんてお前らしくないな」

今の攻防を見ていたらしいイゾウが話しかけてきた。

マルコとサツチも、一緒に近づいてくる。

「いや、本当にあんなに近くにいたことに気づかなかった」

「気づかなかった？お前がか？」

「ああ。それどころか得体の知れない気配を感じた。あれは…起こしていい力なのか？」

「あいつに眠ってる力があるなら起こしてやるのが俺らの仕事だよ。赤髪も言っつてたろ？…あいつに平穏は求められない。なら、自分の身を守るくらいにはなっつてもらわねえといっつまでも籠の鳥だ。そんなの可哀想だらうい？」

確かに…。

なにも言わないから気にしたことが無かったが、あいつはいつも閉じ込められているんだったな。

……ニアは外に出たいと思わないのだろうか

自由を求めるはずの海賊でありながら…自由に生きられないなんて皮肉な話だ。

はあ……。それよりも、いくら驚いたとはいえニアを地面に押し付けてしまうとは……。嫌われたらどうか…

「おいおいおいおい……！なんでそんな落ち込んでんだよビスタ！あいつがさっきの気にすると思うか?!」

……たしかに。

むしろ「けいこなんだからしかたないよー」と言いそうだ。

だが、ニアに背後を取られたのは少しショックだ。うかうかしてたら抜かれるな、こりや。

強くなつては欲しいが、できれば大人しく守られて欲しいもんだ

ーサイドエンドー

対能力者相手にどう戦おうかな。覇気を使うのもありだろうけどもう1個あったよな…なんだっけ、えつと…かいろうせき?とかいうやつ

なんか自分で作ってみようかな…

「ニアー！何してるの?」

物置の前で考え込んでいたらハルタさんがやってきた。

「うーん。かいろうせきをつかうかはきでたいこうするか…」

「ん?どうしたの、急に」

「のうりよくしゃあいてにたたかうとき、かいろうせきなげればひるませれるかな…?」

「ニアー、きこえてる?」

「なげるのはもつたないかな?ぶきにしこむか…。うーん」

「ダメだ、完全に自分の世界にはいつてる…」

どうすべきかなあ。海楼石ってそもそもそんな簡単に手に入れられるものじゃないよね。加工も難しいって聞いたし

「…どうしたんだ?」

「あ、イゾウ!ニアが何か考え込んでるみたいで…俺の話きいてくれないんだよ」

今度はイゾウさんがきたらしい。だがしかし!気にしない。

あ、そもそも拒絶このちからの力があるんだから海楼石いらんのか。

拒絶の力…もつと向上させたいな。

あ、無機物なら生まれてこなかったことにできるかも知れないって
いう仮定を確定にしたいな。なにかないかな?消してもいいもの。

あれ、そういや、無かったことを無かったことにできるのかな?

うーん、試したいことがあるすぎて時間が足りない。

「ふむ。よっほど集中してなにを考えてるんだ?また無茶でもする計画か?」

…ん?

……ええっ!?

「ちよっ!イゾウにい!いつのまにロープまきつけたの!!」

「今だ。気づかないお前が悪い」

考え事をしてるうちにいつのまにかロープでぐるぐる巻きにされていた。

「目を離すとすぐ無茶するからな。お前はもうちよつと自分を大事にするべきだ」

ええー、最近わたしの扱いが雑な気がする。

…そうだ。このロープで試してみるか。

ロープの存在を否定する。

『絶』

スウツ…。

わたしに巻きつけられていた縄は跡形もなく消えた。

「っ!?!」

うーむ。無機物は本当に消せるらしい。じゃあ、無かったことを無かったことにできるか試してみよう。

地面に指をさし縄を否定した事を否定する

『絶』

パチッ

と音を立てて縄が地面に落ちる。

…できた。なるほどなく。

これ生物以外なんでも否定できるなら結構ヤバイ力だね。

水中で呼吸したりとか重力無視して空飛んだりとか意外となんでもありな気がする。

ま、いつか。

「それ、対人だけじゃないの？」

「縛れもしないのか？じゃあどうやってこいつの無茶を止めりゃいい？」

あ。

わすれてた。

思考するのに夢中になって彼らの存在を忘れてた！

やばい、また尋問タイムだ!!

いや、素直に話せば尋問されない…か？だってもうほとんど知られてるし別にいいか。

「えーっと、まだかていだったからいわなかったんだけど、むきぶつもたいしようにできるの。」

わたしは素直に力のことを話した。

無機物なら無かったことにできること。無かった事にした事を無かった事に出来ること

命あるものは否定できないこと。

「…なるほどな。つまり誰かがお前を押さえつけておけばお前は無茶できないってことか」

「イゾウにい！なんでさいきんしばらくとするの!？」

「…怖いんだ。」

イゾウさんがさつきまでのすまし顔とは打って変わって悲痛な表情を浮かべる

「目を離れた際にボロボロになるお前を見るたびに怖くなるんだ。いつか死んじゃまうんじやないかって…。縛り付けておいたらそんなことできないだろ？多分マルコも同じだ。きつとみんな同じことを

思ってる。だからお前はもっと自分を大事にするべきだっていうんだよ」

そんなに心配させてたんだ。

とはいってもなあ：実際大怪我したのってあの破壊王と戦った時だけだし、風邪の流行事件の時は熱出ただけ：いや、あのときは青雉が来なかったら確実に死んでたな

修行の時はシャンクスさんとミホークさんが悪いから別としてでもやっぱかなり心配かけてるんだ。

「うん、きをつけるよ。しんぱいしてくれてありがとう！にいちやだいすきっ！」

そう言っつてイズウさんに抱きつく。イズウさんは驚きながらも優しく撫でてくれた。

心配症なお兄ちゃんズを安心させるためにも早く強くならなきや！

「敵襲だー！」

その夜、大きな音と声で目が覚めた。

さっさと着替えて武器を腰にセットする。ロビーまで行くとロキアスに止められた。

「おい、まてニア！お前は甲板に行くな！もう隊長達も何人か行ってる、大丈夫だ！」

今回の敵は強いのだろうか。ロキアスが焦ってる。

「：今回の敵は数が多くて危険だからお前を甲板に出すなって言われたんだよ。お前は安全なところにいろ」

「なに：それ！そうやっていつもわたしにあんぜんなところにいるっというけど、このうみにあんぜんなところってあるの?!」

「ーっ!!」

わたしが歯向ったからかロキアスが一步下がった。

「いざというときにたたかえなくてなんでわたししゆぎようしたの！こもつてうごけないりゆうをさがすよりも、きけんでもみんなのとなりでたたかいたい！」

そう言うとロキアスが頭を搔いた。

「だああっ！妹にここまで言われたら俺が弱気になるわけにはいかねえだろ！けどニア、甲板はダメだ！数が多いから取りこぼして中に入ってくるやつもいる可能性を考えて、ここを守るぞ！今回はそれで我慢してくれ！」

「うん！」

案の定、何人か船内に侵入してきた。

数人の隊員とロキアスとわたしで敵を斬りふせる。ルーカスとカルガンもいる。

「チツ、思ったより数が多い。ニア！大丈夫か？」

「うん、だいじょうぶ……っ！ロキにい、うしろっ！」

ロキアスの背後で敵の1人が剣を振り上げる。

わたしはとっさにホルダーから銃を取り出し敵のこめかみを撃つた。

相手を殺す事に躊躇いがないわけじゃない。けど、仲間を…家族を失うくらいならいくらでも手は汚す。そう決めた。

「…お前、その距離でよく当てたな。イゾウ隊長に教わってるだけある」

「のんきなこといってないで、しゅうちゅうして?！」

今、戦闘中!!

30分くらい経つが敵の侵入が収まる気配がない。

「多すぎだろー！一体どんなけいるんだー！1匹見つけたら100匹はいるって言う黒光りの奴らの様にうじゃうじゃと!!」

文句を言いながらも斬りふせるロキアス。

言いたいことはわかるけど緊張感が無くなる…

でもまあ、このままだと消耗戦になるな。

わたしは一呼吸置いて覇王色を使った。

あんまりみんなの前で使いたくなかったけどしょうがない。使えるものは使っておこう

敵を気絶させるととりあえず船内は落ち着いた。

「覇王色…っ?!お前持ってたのか!!すっげえ！」

…思ってた反応と違った。

シースさんがバカだと罵りまくってた理由がわかる気がする。

「…とりあえず助かった、ニア。よくやったな」

ルーカスがわたしの頭を撫でる。落ち着いたと思って武器をしまった時。

…ゾクツ

ふと殺気を感じた。どこから?!

見ると倒れてる敵がロキアスに銃口を向けていた。

取りこぼしたか…!

「ロキにい!!」

わたしはとつさにロキアスを背に庇い銃弾を受ける。

…激痛が襲ってきたから思わず痛覚を拒絶する。

あーあ。また怒られるな、これ

痛覚拒絶する以前にあの銃弾拒絶すればよかったじゃん。馬鹿だな、わたし

ホルダーから再び銃を取り出すと相手の頭を撃ち抜いた。今度こそ敵は倒れる

ふうっ、こんなこと繰り返してたらそりゃ戦闘にも出してもらえないか。黙っとこ。

「ニアっ!!お前なに庇ってんだ!傷見せろ!血が…」

「えっとね、かえりちだよ!」

「…なわけあるか!!」

こんな時でも仲良くツツコミ入れるんだなあ。

「しんぱいしようだなあ。みんなはこれよりもひどいけがしてもたびしてるでしょ?」

「それを言われると、なにも言い返せねえ…」

「いや、返せよ!!バカロキアス!」

隊長に見つかる前に戻ったほうがいいかな。

また説教が始まりそうだ。昼間イゾウさんに自分を大事にしろって言われたばかりなのに

「ニア!危ない!!」

考え事をしていたらどうやらまた新手が来たらしい。
ルーカスがわたしの背後で剣を振り上げて敵を撃つ。

「大丈夫か?!」

「あ、うん!ごめん、ぼーっとしてた。ありがとう!」

「しっかしキリがねえな」

「きつともうすこしだよ!がんばろ!」

そう言っって新手を斬りふせる。

味方も疲れが溜まり押されてきた。もう一度霸王色で威圧する

これも結構疲れるなあ…

「うわあぁっ!」

叫び声がし、声のする方を見るとロキアスが尻餅をついていた。

敵が振り上げる剣にはなにか液体の様なものがついている。

ー毒かつ!!

やらせない!!

ザシユツ!

…背中を斬られたな。

とりあえず間に合っってよかった。わたしは体制を入れ替え、ニツコ
りと笑うとロキアスに剣を向けたやつに銃口を向け頭と胸に2発撃
ち込んだ。

「……………ニア?」

ロキアスがなにが起きたかわからない様な声でわたしを呼ぶ

もう頭きた。いつまでたっても終わらないし、ロキアスじゃないけ

どGのつく虫のように湧いてくるのが鬱陶しい。

こいつら、殺していいかな? いいよね?

だって…ぼくの家族に手を出したんだもん…。

見逃してやる義理、ないよねえ…?

剣を横一直線に振るい斬撃を飛ばし首を一斉に跳ねる。

残った奴らを睨みつけ、殺気を送った

「おまえら…これいじょうぼくのかぞくにてをだすなら……みなごろ
しだよ?」

そう言うのと情けない悲鳴を上げ蜘蛛の子を散らすかのように相手

は逃げ出した。

…ふうっ。終わったね

わたし真っ先に飛び込む癖直したほうがいいな、これ。

せっかく拒絶の力って言う人外的な力持つてるのに自分の体盾にしたら意味ないよね。

でもなあ、考えるより先に体が動いちやうだよな…。

「ニアっ!!」

3人が一斉にこちらによつてきた。

「バカっ！お前なに庇つてんだ！つて、これ2回目だ！傷見せろ！服脱げ！」

ロキアスが大慌てでわたしの上着のボタンを外そうとするとルーカスが頬を赤く染め両手で目を押さえる

「わああっ！バカロキアス！ニアは女の子だぞ?!こんなところで脱がせるな！」

ルーカスがロキアスを止めようするとカルガンがそれを一喝する

「いつてる場合かルーカス！ニアは毒受けてんだぞ?!とりあえず船医呼んでくる！大人しくしとけよニア！」

……。

この人達は心配してるのかコントやつてるのかどっちだ？

バタバタとカルガンが船医を呼びに行くがわたしが行った方が早い気がする

わたしがカルガンの後を追うように歩き出すとロキアスが腕を掴み止める

「さて、ニア！どこ行くんだ！」

「いりようしつ。わたしがいったほうがはやいでしょ？」

「怪我人は大人しくしてろ！」

「だって、みつからないうちにかかないとまたおこられちゃう」

そう抗議すると後ろから声が飛んできた。

「誰にだ？」

「だれって、たいちようた……ち」

やばい、相当まずい気がする。

振り向かなくてもわかる。今の声、マルコさんとイズウさんとビス
タさんだ。一瞬気づかなかった。

しかもかなり怒っていらっしやる。

「船内に入った敵が慌てて出てきて撤退だって騒ぐものだからなにが
あったのかと見にきてみれば血まみれの妹がいるじゃないか」

「見るからに背中をバツサリいかれてるのにしれっとした顔で立つて
るし」

「おまけに変色してる。毒かよい？」

まずい、非常にまずいけど、誤魔化したら殺される気がする。

「たぶんどくだね。さわらないほうがいいよ。あと、みんなはぶじだ
よー！」

にこつと笑ってその場をしのごとくするができるわけもなく捕
まった。

「どう見てもお前が無事じゃない。異能を解け、運んでやる」

「ほんとに言うこと聞かずに無茶ばかりしやがるな。3度目だぞ、
ニア。目を覚ましたら覚悟しとけ」

あ、やばいこれ。監禁コースかも…

ビスタさんがわたしを運ぼうとこちらに手を伸ばすがその手をか
わす。

「なんのつもりだ？俺に運ばれるのが嫌なのか？」

躲されたのがショックだったのかビスタさんは傷ついたような顔
をした。

あ、誤解させちゃった。

「ご、ごめん！そうじゃなくて…。これほんとうにどくだとおもうか
らさわらないほうがいいよ？あぶないから……」

弁解すると納得したらしく彼は持ち直した

そんなにショックだった!?なんかごめんなさい!!

「成る程?なら……ここで服を脱がされて毒抜きしてもいいんだな?」

いや、ちよつと……それは……

「……………えつと……その……………おとなしくはごばれます」

「それでいい。」

ビスタさんに勝てない!!この人にだけは絶対言い返せない!
くそう!一枚も二枚も上をいくぜ、ちくしょう!

「ビスタ、いつも思うがニアの扱い上手いよな」
異能を解くと案の定激痛に見舞われ立っていられなくなる。

ビスタさんが倒れる前にわたしを抱きとめ、背中の傷には触れない
様に担ぎ上げた。

そこで彼はわたしの怪我が背中だけじゃないと言うことに気づい
た。

「…こいつ、腹部にも1発喰らってるぞ」

「おいおい、まじかよい。Mなのか?!こいつは!」

「こいつも怪我ばかりされると閉じ込めとく他ないよなあ」

あー、起きたらまたおこられちゃうかな…

ケガするのも慣れてきたなー

あんまり繰り返し返してるとそのうちほんとに閉じ込められそう

番外編 海軍にて

ここ数年、赤髪海賊団と白ひげ海賊団の接触が増え続けており、海軍は頭を悩ませていた。

四皇同士がそんなに頻繁に接触しないでほしいという彼らの思いもいざ知らず多いときには5日に1回の頻度で会っているそうだ。

この、荒れた海でなにかとてつもないことが起ころうとしているのではないかと危惧されている。

海軍本部では緊急で七武海の招集が行われた。

元帥と呼ばれている人物、センゴクはふと花が生けてある花瓶に目をやった。

「あの時の少女は元気だろうか……。はあ、癒しがほしい」

「センゴク、あんた最近どうしたんだい？あちこちに花なんか生けて」

海軍中将、大参謀のつると言われる人物がセンゴクに話しかける

「…あれを見てると癒されるんだ。カスミソウは気分をリラックサさせてくれる効果があるんだと」

「…疲れてるんじゃないかい？」

「全くだ。毎日毎日、胃が痛くなることばかり……。大体！なんでわたしの部下共はあんなに自由なんだ!!」

センゴクが愚痴を漏らしていると、会議室のドアが開いた。

どうやら七武海海賊たちがやってきたらしい。

彼はにっこりと笑うと海賊たちに告げた。

「ようこそ、海のクズども」

彼がいうと、反応したのは、天夜叉、ドンキホーテ・ドフラミンゴ

”と”サー・クロコダイル”。

「フフフフフ……急に呼んでおいて酷いいいようだ！」

「クハハハ！そのクズたちに何の用だ？」

「……………」

ほかに、”鷹の目、ジュラキユール・ミホーク”、”暴君、バーソロミュー・くま”がいたが彼らはなにも言わず席に着いた。

「4人…か。まあ、集まった方だな」

招集をかけても全員が集まらないのはザラなことであり、海賊だからといえばそれまでなのだが、その自由さに元帥は頭を悩ませている。

青雫・クザン、黄猿・ボルサリーノ、赤犬・サカズキの現大将たちと拳骨のガープも部屋に入り主役が全員揃ったところで扉を閉める。「早速本題だが、最近赤髪と白ひげの接触が増えているのを知っているか?」

センゴクがそういうと、皆が口々に話し出す。

「フフフフ…。知ってるぜエ?結構騒がれてるよなあ!なにが起ころうとしているのか…!」

「白ひげの首でも取ろうと赤髪が動いたか?クハハハ!それもそれで面白そうだ。が、奴の首を取るのはオレだ」

「滅多なことを言うんじゃないよ。あそこが争ったらこの海は荒れるじゃ済まないよ?」

「じゃが、放つとくわけにもいかんじやろ」

「わーっはっは!ワシらでなんとかできる問題じゃなさそうじゃがのう!」

「ガープさん、なんでそんな呑気なんですか…」

「手はあるんですかい?センゴクさん」

「ないからおれたちを呼んだんじゃないのか?」

「……………」

それぞれに言いたいことを言う中、鷹の目だけは静観を決め込んだ。

「だんまりか、鷹の目?」

かれはセンゴクの質問にさえ答えなかった。

「フフフフ…。それよりも最近あちこちで花を見るようになったんだが、なぜだ?ガーデニングなんて趣味でもあったのか?」

「ん?ああ、前にある少女に貰ったんだ。カスミソウは気分をリラックスさせてくれるって言ってな。それ以来飾るようにした。」

そう言うとガープが笑い出し、クザンが苦笑いをした。

「わーっはっはっ!!あの時のフードの5人組の話か!ありや傑作

じやったのうー！」

「あー…。あれね」

「なんだ、クザン？　そういやお前、あの時一番幼い子となにを話してたんだ？　知り合いだったのか？」

センゴクは少女とクザンが楽しそうに話していたのを思い出す。

いや、少女の方は少し迷惑そうにしていたかもしれない。

「まあ、世間話ですよ」

「ほお。まあいい。とりあえず、白ひげと赤髪の接触が多い今、お前たちにも警戒してほしい。何かあったらこちらに連絡を入れろ」

彼がそう言うのと鷹の目が初めて口を開いた

「心配はいらないだろう、赤髪も馬鹿じゃないんだ。白ひげに喧嘩を売るような真似はしない」

「やつと口を開いたか鷹の目。お前何か知っているのか？」

「さあな。ところであの花、少女にもらったと言っていたがどんな奴だ？」

鷹の目が横目で花を見るとセンゴクに問いかける。

「…一言でいうなら小動物だな」

「舌足らずに喋る小さい女の子か？」

「っ!?!知っているのか?!」

鷹の目が興味を示したことに驚くセンゴク。

だが、彼の反応に返事をしたのは青雫だった。

「鷹の目、お前…あの子知ってんのかい？」

「…まあな。」

「なにを知ってる、鷹の目…」

センゴクが睨みを効かせると鷹の目は目を瞑り少し何か考えた後、席を立った。

「次、赤髪に会うことがあれば行動はわきまえるように言っておく。これ以上話すことはない、俺は帰る」

「なっ!!まてー鷹の目！貴様何を知っているんだ!?!」

元帥を無視して鷹の目は部屋を後にするがそれを青雫が追いかけた。

彼は青雉に鷹の目を任せることにし会議を進める

「クザンも何か知ってるみたいだねエ…。」

そんな様子を見ていた黄猿が呟く

「ああ。後で問い質すか」

「それで俺たちにどうしてほしいんだ？」

「…今のところ接触が多いというだけで目立った動きはない。だが何が起こるか予想すらできない今、お前たちにもあいつらの動きを警戒してほしい」

「四皇を2人…俺達に警戒しろと？フフフフ…自分がどれだけ無茶なことを言っているかわかっているのか？」

「わかっているつもりだ。だからできる範囲でいい。」

「用事はそれだけか？」

「そうだな。今のところはそれだけだ」

結局特に進展はないまま会議は終わった

ーミホークサイドー

突然七武海の緊急招集がかかり何事かと思ったら赤髪と白ひげの接触が多いから情報があれば連絡しろとの事。

おそらくは赤髪がニアに構いたくて執拗に白ひげの船に行っているんだろう。

アレがきになるのはわからんでもないが…立場を考えると、赤髪。

お前の行動のせいでニアに危険が迫ったらどうする気だ。

いくら戦えるからとは言えまだまだ子どももいいところだ。経験も圧倒的に浅い。…赤髪に伝えておくか。

そう思い俺は部屋を出た。しばらく廊下を歩くと後ろから声がかかった。

「鷹の目…。お前、何をどこまで知ってる？」

青雉だ。わざわざ追いかけてきたのか…、ご苦労な事だな

何をどこまで…とはどう意味だろうか

だが俺からアレについて言うつもりはない

「なんの話だ？」

「とぼけるな、ニアちゃんのことだ。お前ニアちゃん知ってんだろ？」
…これは驚いた。

こいつ、アレを知っていてなにも言っていないのか
思わず足を止め、振り返らずに聞き返した。

「俺の方こそ聞かせてもらおう。アレを知っていてなぜ報告していない？」

「…やっぱあの子知ってんのか。ニアちゃんがどこにいるかも知っているのか？」

「知っていたとしたら何だというんだ？」

「…白ひげと赤髪の接触の多さにニアちゃんに関係してんのか？」

「してるかしていないかで言えばしているな。」

「なんだ、その曖昧な答えは」

「悪いが俺からアレについて話す気はない。ただ一ついうなら…」

「一ついうなら？」

俺は一旦言葉を切り目を瞑りアレのことを考える。

修行中に見せたあの人形のような目と俺や赤髪でさえも怯ませる
高圧的な殺気……。

「アレには得体の知れない”何か”が潜んでいる。…関わらない方が
身のためだ。」

少し脅しておけばこいつらも慎重になるだろう。

特にこいつはアレを知ってるような口ぶりだからなんとかしそうな
気もするがな

「…知ってるなら答えろ、鷹の目。ニアちゃんはなぜ白ひげの船に
いるんだ？」

こいつ……意図的にアレを元帥から隠してるな。

大将がそれでいいのか…。

まあ、俺もその理由は知らないからここは素直に答えてもいいだろ
う

「悪いがそれについては何も知らない。興味もないしな。他に話すこ
とがないなら俺は行くぞ？」

「チィ…。まあ、仕方ねえ…か。」

青雉が踵を返したのを見て俺も止めた足を進める。
そろそろ動くかもしれないな。：負けるなよ、ニア

ーサイドエンドー

ークザンサイドー

七武海を緊急招集して会議を開いた。

題材は赤髪と白ひげの接触についてだ。最近あの2人の接触が増
えてきた。

四皇同士がこうも多頻度で接触されるとこちらもしても対応に困
る

つたく：立場つてもんを考えて欲しいぜ：

会議で話を進めるとある少女の話が出た。その話に反応したのは
意外にも鷹の目だった

：こいつまさかニアちゃん知ってるのか？

鷹の目が一足先に部屋を出る。俺はそれを追った。

「お前、何をどこまで知ってる？」

そう聞くと鷹の目は「なんの話だ？」と返した。

シラをきるつもりか？

「とぼけるな。ニアちゃんのことだ。お前、ニアちゃん知ってんだろ
？」

そういうと、鷹の目は足を止め振り返らずにいった。

「俺の方こそ聞かせてもらおう。アレを知っていてなぜ報告してない
？」

この言い方：。やっぱりニアちゃんと接触してたか。

つたく、本当になんなんだあの子は！

「：やっぱりあの子知ってるのか。ニアちゃんがどこにいるのかも
知ってるのか？」

「知っていたとしたらなんだというんだ？」

七武海は報告の義務つーもんがあるだろ！

：……ニアちゃんのことをセンゴクさんに言っていない俺が言える
セリフじゃねえな。

「…白ひげと赤髪の接触の多さにニアちゃんが関係してんのか？」
「してるかしていいないかで言えばしているな。」

なんだそりゃ。

こいつもあの子をなんとか守ろうとしてるのか？

まあ、あんな子どもが白ひげの船に乗ってるなんて噂流れたら白ひげの首を取ろうとしてる奴らが真っ先に狙いに行くだろうな。

「なんだ、その曖昧な答えは」

「悪いが俺からアレについて話す気はない。ただ一ついうなら…」

「一ついうなら？」

こいつは何か知ってるみたいだが俺たちにそれを話す気はないらしい。

だが、何やら言葉を切り考える素振りを見せる。

そして俺を横目で見ると冷静に告げた。

「アレには得体の知れない」何か”が潜んでいる。…関わらない方が身のためだ。」

得体の知れない…”何か”？

ただの子どもじゃないと思っではいるが鷹の目がこんなことを言うとは…

ん？……まてよ…。

白ひげと赤髪の接触到ニアちゃんが関係しているとなると…赤髪もニアちゃんを知っているのか?!

こいつの口ぶりから鷹の目はニアちゃんの得体の知れない”何か

”が顔を出した瞬間を見たと仮定すると白ひげもそれを知っている…?

だから白ひげが子どもを船に置いてるのか？

ああつくそつ!!わけわかんねえ!

とりあえず報告するか。もう隠しておけねえな

俺は踵を返し思考を巡らせながら来た道をもどる。

会議室のドアを開けると七武海の連中は帰っていた

「戻ったか、クザン。貴様も何か知ってるな？」

開口一番にセンゴクさんがそんな事を言う。

まあ勘付かれるとは思ったが…

「あくまで噂だから言わなかったんですけど白ひげの船には子どもが乗ってるらしいんです」

「「は？」」

……みんなしてそんな間抜けな顔しないで頂戴よ

さて、どうやって誤魔化すか…。

「鷹の目がそのことについて知ってそうだったから聞いたけど…曖昧に誤魔化されて終わりました」

「…奴の船に…子どもが乗ってるだど？…まさか！それが関係してると言うのか!？」

「鷹の目は『してるかしてないかで言うならしている』って言ってますよ」

「なんだ、その曖昧な答えは」

うん、俺も同じ反応したな

「ガキが白ひげの船に乗っちゃるじゃと？」

「クザンはア…それを知ってたのかいー…？」

「聞いただけだ。まさか白ひげが本当にガキを乗せてるなんて思わないだろ？だから信じてなかったんだよ。」

嘘も方便とはまさにこの事だな。

多分ニアちゃんに手を出したら四皇が2人動くんだろうな…

さすがに白ひげと赤髪に協力されたら海軍はタダじゃ済まない

センゴクさんとガープさんとボルサリーノはいいとして、サカズキが余計なことしないようにここはなんとか丸く収めねえと…

「鷹の目の話を信じるとしてその子どもとやらが奴らの接触に関わっているのならその子どもが何者かを知らないといけないな…」

「ガキなら捕まえられるんじゃないですかい？なんならワシが…」

「よく考えろ、サカズキ。早とちりするなんてお前らしくないぞ？奴らの接触にその子どもが関わってるならその子どもに手を出せば四皇が2人…動くと言うわけだぞ。」

「わざわざガキ1匹のためにあやつらが動くとは思えんが…」

サカズキの言葉に城下であった出来事を思い浮かべる。

……… 確実に動くな。隊長がアレだもんな。

「頭と胃が痛い……」

「ちよつと休んだらどうだい?」

「そうする。お前たちご苦労だった。……ああ、またあの子に会いたい、癒されたい……」

センゴクさんがぶつぶつと何か言っているが……

その胃痛の原因にその子も関わってるって知ったら吐血するかな?
?

今は言わないでおいの方がセンゴクさんの為でもありそうだ

はあ………なんとかなったが問題はこれからだ。

これ以上隠すのは難しそうだ。

まあ、海賊と海軍は敵同士だし……仕方ねえよな? 悪いな、ニアちゃん

………そんなことを思うとどこからか『いまさらそれいふ?! あなたなんどかみのがさなかった!!? ばかなの!』と言う声が聞こえてきた気がした。

………俺も疲れてるのかな?

よし、仕事サボって今日はもう寝よう。

ーサイドエンドー

第24話 夢の中

気がついたら真っ白な空間にいた。

……ここ、すっごい見覚えあるんだけど、どうしよう

『お久しぶりですね！えーっと今は、ニアさんって呼ぶべきですか？』

「あ、じしようてんしさん。ひさしぶり」

『自称天使さん!?酷いっ!わたくし本物ですって!!ちゃんとして転生できてたでしょ??あなたのその可愛らしい容姿もわたくしからのプレゼントですよ!』

「そのおかげでじんせいハードモードだよ!うまれたしゆんかんにすてられるっていうとんでもないはじまりかただったけどね!!」

『それはごめんなさい!でもでも、身体能力とかは高いでしょう!?それで許して!ね?ねっ!』

本当に威厳もクソもないこの天使

「まあいいよ、おわったことだし。それで、なんでまたここに?わたししんだの?」

『許してくれるんですか!ありがとうございます!』

「しつもんにごたえて!」

『あ、はい。えつと…死んでませんよ?死にかけてはいますけど…』

死にかけてるんだ。

まあ当然といや当然かな。

「ふーん。じゃあわたしここでおしまい??にどめのじんせいしゅうりょうのおしらせ?」

『いやいやいや!!まだ死ぬには早いですよ!!あなた転生して何年目ですか!?10年経ってないでしょう?!そんな最短記録更新しないでいいんですよ!』

最短記録って……

いちいち記録つけてるのかな?何十万年といろんな世界管理してる奴が一人一人の転生者の生きてた年数記録してるとか暇人かよ。

そんな暇あるならガタが来てる輪廻の輪とかいうの直せよ。

「じゃあわたしはどうすればいいの?」

『今はあなたの意識だけがこちらに来てる状態なのでもう少ししたら体に引き戻されますよ』

ああ、なるほど。

暫くしたら体に意識が引き戻されるってわけね。

『さてさて、どうですか？2度目の人生は。楽しいですか？』

「……………うん。」

『どうしたんですか？』

「わたしね、いっしょうけんめいいきてたつもりなの。すごいひとたちにひろわれてそのあしひつぱらないようにどりよくして。しんぱいかけないようにきじょうにふるまって……。でもぜんぶからまわりしてるきがするの。どうしよう…、わたし…このままでいいのかな？」

『……………大丈夫ですよ。ずっと見てきたけれどあの過保護な兄達はあなたが思ってる以上にあなたのことを大事にしています。本人達にきいてみたらどうですか？』

本人達に…………。

本当はずっと聞きたかったけど彼らの本音を聞くのが怖くてずっと我慢していた。

「ごわいの。どうおもわれてるのがごわくてききたくてもきけないの。…………ほんとのわたしはとてもおくびようなんだよ。ちつともつよくなんてないの」

『それでも強くないようと頑張るあなたは素敵だと思いますよ』

「そうかな…。もうここでおわつてもいいきがするの」

『いやいや！まだまだ死ぬのは早いですよ？あ！じゃあもう1個異能つけちゃいますか？』

「いらない…」

『即答で振られちゃいました。そんな落ち込み気味のあなたに！魔法をプレゼント！テツテテツテツテツ♪おめでどうございませー！』

「はなしきいて!?だいたい！ひとばなれしたちからもってるっていうのにまたじんがいてきなちからてにいれてどうするの!?こんどこそいばしよがなくなつちやうよー!」

『もう少し、自分に自信を持ったらどうですか？彼らはあなたの思っている以上にあなたを大事にしますよ？あなたはもつと自分を曝け出しているんですよ？それに、ここで終わってしまったては面白く無いでしょう？あなたも彼らに言いたいことがたくさんあるはず。…まだこれからですよ、さあ、頑張ってくださいね』

「もしかしてげきれいのつもりだったの!?!わっつかりにくいんだよ!!」

そう叫ぶと同時にわたしの体が浮上し、どこかへと引っ張られていった

ーマルコサイドー

突然船を襲ってきた敵船。

一人一人は大したことないがなんせ数が多い。取りこぼして何人かが船内に侵入する。

…まあ、中にも何人が配置してあるからよっぽど大丈夫だとは思いますが、心配なのは妹^{ミア}だ。

あいつは簡単に危険に飛び込むからこっちも気が気じゃない

「おい、野郎ども!!撤退だ!この船には化け物がいる!!逃げるぞ!」

船内に入ってしまった奴らが出てきたと思ったらそう叫び全員が蜘蛛の子を散らす様に逃げ出した。

「化け物…?そんなやついたかよいい?」

「…居ないだろう。とりあえず中に入ってみよう」

俺とビスタとイズウで船内に入ると焦った様子でニアに駆けよるルーカスとロキアス

医療室へと走るカルガン。そして背中をバツサリ斬られて平然と立っているニアがいた。

しかも変色してる。…毒かよいい?

…だいたい察した。このバカ、また無茶しやがったな。

ニアが奥へと行こうとするとロキアスが「怪我人は大人しくしてろ!」と叱りつける。ごもつともだよ

「だって、みつからないうちにいかないとまたおこられちゃう」

そう頬を膨らませながら抗議する。

俺らが同時に「誰にだ?」と聞くと、「やべつ」と言いたそうな霧囲気を出した。

ほんとにいつか無理が祟って死ぬんじゃないか?

…俺らより先に死なせてたまるかよ!

ビスタが異能を解けと言うと途端に倒れる

使うなって言ってるのにいつになつたらわかるんだよ!

ビスタがニアを医療室に運ぶと、ルーカスが話しかけてきた

「マルコ隊長…。ニアは…ニア、だよな?」

「あ?どう言う意味だよ!」

「…あいつな、ロキアスを庇つたんだ。…殺やれそうになつたロキアスを庇つて斬られた後、人が変わったように霧囲気が変わって…敵の首を…一斉に刎ねたんだ…!あのっ…ニアが!!」

…人が変わったように霧囲気が変わつた?

まさかあいつらが言つてた化け物つて…ニアのことか?

「俺…っ…怖かった!ニアじゃない気がして…あの冷たい目で敵を睨みつけたニアは…ニアの姿をした別の何かな気がして、すげえ怖かった!俺に向けられたわけでもないのにあいつの殺気に俺も震えちまつたんだ!」

「無機質な人形っつーか…心をどこかに置いてきたような顔してたな。オレもビビつた。けどニアはニアだぜ?今度はオレのせいで怪我させちまつた…悪いことしたな」

「…ロキアス、おま「まあ、ニアのことだ!すぐに元気になるさ!」…お前は!!なんとたつていつもそう、おちやらけるんだ!!」
ルーカスとロキアスが喧嘩を始めた。

…無機質な、人形…ね。

あいつはどうやら俺らがまだ知らない一面を持つてるみたいだな。
なにせよ、どうしてくれようか。あの娘

ーサイドエンドー

意識が戻り、ゆっくりと目を開け起き上がる

と、背中に激痛が走った

痛みに顔を歪めながらも部屋を見渡した

誰もいない…か。暗い部屋の中で自分の両手を見る

「はははっ…またやっちゃった。あきれられたかな」

自分でも驚くほどの乾いた笑いが漏れた。片手で前髪を掻きあげ自嘲する

「いつも、うまくいかない…」

銀色の髪にオッドアイなんて普通に考えたらありえない。本当に”異端”なんだ、わたしは。

「このすがたも、このちからもふつうじゃない。けど…このこのひとはふつうにせつしてくれる。だからここにいるんでしょ？」

今度は膝を抱えて縮こまる。

すると涙が溢れてきた。零れないように必死に我慢する。

「ないたらだめ。みんなはやさしいけど…そのやさしさにあまえすぎたらだめなんだ。じりつしなきや…。やくにたたなきや…みんなのやくにたつようなことしなきや。」

そうだ。何もできない奴なんて必要ない。

仲間1人守れないのならわたしみたいな子どもがこの船にいていいわけないんだ。

「なかまを…かぞくをまもるんだってきめたじゃないか。ひろわれたいのちなんだからこのひとたちのためにつかうって。…このていどでへこたれちゃだめだ。…っ…あれ？…なみだが…」

流すまいと我慢していた涙が頬を伝う。

泣いてることを自覚するとポロポロと零れ落ち止まらなくなる
それを隠すように拭い鳴咽を殺して自分に言い聞かせる

「なくな。ないたらだめだ。…ここはかいぞくせんだよ？よわいじぶんはみせたらだめ。…わたしはつよくなきやいけないの。みんなにしんぱいかけないように…つよいわたしでいなきやいけない…。だいじょうぶ。わたしは…だいじょうぶ」

自己暗示するかのように何度も何度も『大丈夫』と繰り返す。

言葉には力があって時にそれが言霊となるからそれを信じて言葉

を紡ぐ。

だから大丈夫と言えば大丈夫になるんだ。

「よしっ、だいじょうぶー……さて、みんなはぶじかな？」

しばらく繰り返り返し落ち着くと布団をでる。部屋を出ようと鍵を開け扉を引くと『パンツ!』と言う音とともに扉が閉まる。

何が起きたか一瞬わからず放心するとわたしの腰に腕が回された。誰かの手が開けた鍵を閉める。

わたしの後ろに……誰かいる？

「……いい加減にしろよい、お前。……言い逃げは許さねえぞ。何が大丈夫なのかきっちり説明してもらおうか」

……マ、マルコさん!?

や、やばい!今の聞かれてたとしたら……どうしよう!

怒られるじや多分済まない!

に、逃げなきゃ!!

そう思っただけで咄嗟に体を捻り彼の腕から逃れようとするが彼はわたしの行動が分かっていたかのように簡単に捕まえ、扉とは反対方向に放り投げる。

「おっと……。怪我のせいか力が乗ってないぞ?それで俺に抗うとはいい度胸じゃねえかよい。イゾウ、ハルター!パス」

「オーライ」

「ほいっ……と。はい捕まえた」

イゾウさん!?ハルターさん!?!

えっ!!この人たちどこにいたの!?

混乱してる間に2人に片側ずつ腕を拘束される。

……やりたくないけど……ごめん!!

わたしは片方ずつ蹴りで散らそうと腰を捻る。……が、その前に鞘が足首に置かれ押さえつけられる

「まだ抵抗するか。中々の根性だが……これだけの隊長から逃げ切れるところ思ってるのか?」

ビスタさん?!嘘……!!

驚いていると背後から頭に手が置かれて撫でられる。

「はははははっ！……ここまでしないと捕まえられないってのもすげえな！！」

サツチさんまで!!? えっ、待って……

まさかこのメンバーにさっきの独り言聞かれてたの!?

「今のがお前の本音かよい。つたく……そんな1人で抱えることないだろ。俺たちに心配かけないようなお前の振る舞いが逆に心配かけてるってこともつと知つといたほうがいいぞ」

どう言うこと!?

えっ！わたし元気で笑顔絶やさずにいたよね?! 心配させる要素あつた?!

「……まあなあ……。俺たちは騙せるだろうが……イオンは騙せない。なあ? イオン」

「ふふっ。あんまり妹に手荒なことしたくないけど……少しお仕置きが必要な、ニア?」

イオンさんまでいたの!?

というかめちやくちや怖いんですけど!! つか見た冷たい乾いた笑顔じゃなくていつものような優しい微笑みなのにすっごく怖い!!

「1人なら誰の目も気にせず本音が言えるでしょう? ボクのを甘く見たらだめだよ? この部屋に……誰がいた?」

「だれも、いなかった……」

「ふふっ。でしよう?……意地悪でこんなことしたんじゃないよ?……ボク達はね、君の本音が聞きたかったんだ。君はいつも思いを閉じ込めてしまうから……。君がボクらの役に立ちたいように、ボクらも君の力になりたいんだよ」

つまりイオンさんが能力でみんなを隠してたってことか。

だからこの部屋にだれもないように思ったんだ。

それで、マルコさんがわたしに触れたから突然現れたかのように思えたのか

……見えないって恐ろしい。

次から念のために覇気使って周囲を確認してから行動しよう

次は無いと思いたいけど……

「拾われた命だから俺たちの為に使うって？お前ずっとそんな思っていたのか？お前の人生なんだからお前の好きに生きればいいじゃないか。何を遠慮する事がある」

「だいたい、役に立ちたいっていうけど、俺らがニアに『役に立て』なんて言ったことある？もしそんなこと言った奴いるなら教えてくれない？1発殴りに行くから」

「1発と言わず、この部屋にいる奴ら全員分でいいだろう。そんなこと言う奴がこの船にいるならな」

怖い！

顔は笑ってるのにめっちゃくちや物理解決しようとしてる…！

初めの頃は『いい人すぎるだろ、本当に海賊かよこの人達』とか思ってたけど…やっぱ海賊だ！この人達!!

「だれからも…いわれてない。…で、でもっ！」

「でもっ…」

ずっと閉じ込めてきたことだ。

こんなこと言ったらどう思われるのか怖くて言えずにいた。

でも…本当は聞きたかった。わたしも…みんなの本音を知りたかった

「しろひげかいぞくだんって、すごいかいぞくなんですよ?!あんまりそとでたことないからよくしらないけど…せかいでゆうめいなかいぞくなんでしょ!?!わたしみたいなこどもがいてもいいの!!?!ぎんいろのかみにオッドアイで…のうりよくしやでもないのにとくべつなちからがつかえる…。どこからどうみても『ふっう』からかけはなれてる!それにくわえてこどもだよ!?!まだふたけたにもいつてない…やくたたずなこどもが…ここにいて、いいの!?!」

ああ…言ってしまった。

ずっと隠してたわたしの”想い”

「みんな、なにかのスペシャリストじゃないか!マルコにいちゃはこうかいしで、いりようにもたけてて…サッチにいちゃはりようりがじょうずでたかいかいだってつよい!!ビスタにいちゃとハルタにいちゃは、けんがつよくて、たいおうりよくもたかいし、あたまもい

でしょ!? イゾウにいちやはしやげきがとくいでもんなまとにだつて
かんぺきにあてれるし、イオンにいちやはものしりでわたしにたくさ
んのことおしえてくれた!!……なんのとりえもないわたしがむじよ
うけんであいされていいわけない!……だからっ……やくにたたな
きや……いけないの……っ!!」

涙が溢れ声が震える。

呆れられたら……見放されたらどうしよう。

数秒だったかもしれないが流れた沈黙がとても長いように感じた

「お前……それ本気で言ってるのか?」

「ほんきだよ?」

「……どうしよう、俺。兄貴として自信なくなってきた」

「安心しろハルタ。俺もだ」

……はい?

えっ!? 何!! 急に何?!

「…悪いニア。俺たちが悪かった。」

なんでいきなり謝るの!?

何故か落ち込み出した隊長達を横目にイオンさんが笑い出す

「ふふっ……ふふふっ……そういうことか……! ふふふっ!」

何故いきなり爆笑?! というかイオンさんがそんなに笑うところ初
めて見るんだけど

「イオン! 笑ってねえでなんとかしてくれよ! 俺たち相当なダメー
ジ受けだぞ今!」

そんな傷つけること言っただけ?!

全部自虐だったと思うんだけど!

「あのねニア。ふふふっ……! 君、色々と難しく考えすぎだよ! あと、自
己評価低すぎない? 君は君が思ってる以上に出来る子だよ? マルコ
隊長が航海士だからどうしたの? ニアは航海術を教わってないだけ
で、教えてもらえばすぐに君だつてこの海の気候がわかるようになる
よ。サッチ隊長が料理上手なのは当たり前でしょう? この船のコツ
クなんだから。ビスタ隊長とハルタ隊長は剣が強いのも、イゾウ隊長
の射撃の腕がいいのも当然のことさ。隊長やってるくらいなもの。」

「たいいんだって…みんなすごいよ」

「そりゃあ…各隊ごとにその道を極めた人たちがいるんだからみんな出来るのは当然のことだよ？それに、ボクが物知りなのだって普通のことさ。こんな性格してるから警戒されにくいし、この能力もあるから軍の地方の基地に忍び込んでちよつと機密情報を盗むことなんて訳ないよ。本が好きだからいろんな本を読んで知識を増やしていったんだ。誰も1日で得た力じゃない。みんな努力してるんだ。…何もおかしな事じゃないだろう？」

…おかしな事じゃないけど、地方の基地にちよつと忍び込んで機密情報盗むって…：イオンさん以外できないよね

というか、『ちよつと』で機密情報って盗めるものなんだ

「おかしくない…けど…」

「けど、なんだい？さつきも言ったでしょう？ニアは自己評価が低すぎるんだよ。誰も傲れなんて言ってないけどもう少し自分に自信を持ちなよ。じゃないとシスコン隊長ズが立ち直れなくなるよ？」

シスコン隊長ズ?!なにそれ新しい!!

「ここで俺らに振るか!？」

「言いたいことは自分で伝えなきゃですよ？たーいちよ？」

「イオンに茶化されると腹立つな!!」

イオンさん、意外とお茶目なんですな。

「あのなあ…お前、自分が天才だってもうちよつと知つとけ？紙に覇気纏わせただけで鉄みたいな斬れ味出して、スプーンで海王類刻んで…赤髪とか鷹の目とかに物怖じしないどころか喧嘩始めるような肝っ玉の座った奴そうそういねえぞ？」

「むしろいるの？逆に!」

「お前がこの船にのってからみんな変わったんだぞ？マルコなんて『なにが起きたお前!』って言いたくなるほど優しくなったんだ」

「うるせえよい!」

「ほら、こんなツンデレじゃなかったんだぞ？こいつ。もつとトゲトゲしててサッチと喧嘩ばつかしてたんだ。なのに今はどうだ？随分と丸くなった」

「おい！俺をからかうのもその辺にしとけよ！…はあ。あとな、お前まだ二桁にもいってないだろう？その歳で覇気を使える奴はそうでもないぞ。それにイオンが物知りでそれを教えてもらったんだろ？ならお前なりに活かせばいいだろうが。お前はお前なんだから、誰かの真似しようとしなくていいんだよ！」

……わたしは…わたし。

「あと…一番言い返したかったこと返すぞ!?お前がなんのとりえもないだど?!取り柄しかないだろ!!可愛いし!可愛いし!!可愛いし!!」

それボケてるの、本気なの!?!どういう反応返せばいいの!?!

「……一回黙りましたどうか、サッチ隊長?」

「はい。ごめんなさい」

「「イオンが怒った…」」

どこでもボケを忘れないあたりこの人たちがすごいな。

「無条件で愛されちゃいけないって言ったな。……家族を愛するのに理由が必要か?」

……っ!!!

…そうだ。……そうだったんだ

わたしも…「家族」として愛されていたんだ。

わたしだって優しいみんなが好きなんだ。そこに論理的な理由なんて…ないじゃないか

「……うえ……。うっ……」

「我慢するなニア…もういい。泣きたいなら泣け。受け止めてやる」

「溜めてるもの全部吐き出せよ!」

いつのまにかみんなの拘束が解けていた。けれどももう逃げ出す気にはなれなかった。

わたしは目の前にいるマルコさんの所へとふらふら行くと彼の服を掴む

彼が頭を撫でると喉の奥から熱いものが込み上げてきた。

「ごめんなさい…ごめんなさい…っ!!!」

口を開くと出てきた言葉は謝罪。

勝手な思い込みでみんなのこと誤解してたんだ…。

その後思い切り泣いた。多分結構響いてるだろうなと思ったけど声を殺すことができずに悲鳴のような泣き声をあげる。

その後のことは曖昧にしか覚えいかなかったが、ただ温もりに包まれていたような温もりが残っていた。

ーマルコサイドー

「はぁー……。寝たか。しっかし、こいつ今までよくこれだけの思いを吐き出さずにいたな」

我慢強いなんてもんじゃねえだろ。子どもがこんなに我慢できるものなのか？

「はははっ！ そうだな。それよりもイオン。こいつが色んなこと我慢してるって、お前よく気付いたな」

「なんとなくでしたけどね。……この子は昔のボクによく似ているから……。嫌われたくなくて、誰かに見て欲しくて……愛して欲しくて……心を隠して自分を演じる。常に笑顔で明るく振る舞えばみんな見てくれる。そう思っているんじゃないかな？……と、思ったんですよ。そんなことしなくてもみんなちゃんと見てくれてるのに。」

「そういうイオンもここに入ったばっかの頃は荒れてたよなあ」

「ふふっ。昔のことを掘り返さないでくれませんか？」

「ごめんなさい」

「はははっ！ お前ほんとなんで隊員やってんだよい」

「その方が自由だからですよ？」

俺たちが談笑しているとハルタが呟く。

「いいなー、マルコ。場所変わってよ」

「なんだ、ハルタ？ 寂しいのか？」

「ニア、ちゃんとそこにいるよね？」

「ん？ ああ」

その表情は憂いに満ちていた。

「サッチキ、ニアが修行中に鷹の目に突き飛ばされて木に全身打ち付けて地面に落ちた時のこと覚えてるっ？」

「……ああ、あの時のことか。覚えてるぜ？」

「俺、怖かったんだ。…あの時の鷹の目を睨みつけてたニアが…：…凄く、怖かった。」

ハルタがそういうとサッチが俺にしがみついて寝ているニアを見て険しい表情を浮かべる

「ああ…：…そうだな。」

2人を見て俺はさつきロキアス達が言っていたことを思いだした。

「無機質な…：人形の様な目」

「?!?」

俺がポソつと眩くと驚いた表情を浮かべた。

「マルコ知ってるの!？」

「いや、見たことはねえよ。さつきロキアスとルーカスがそう言ってた。」

「…そう。…：俺、もうあんなニア見たくないんだ。ただ、怖かった。ニアが居なくなった気がして…」

「ハルタ…」

「と、言うわけで場所かわろうか、マルコ?」

「どういうわけだ…」

すごい恐ろしい笑顔になったぞこいつ。

しかしなあ…：ニアの奴、俺の服掴んで離さねえんだが

嬉しいが、今それを言葉にしたらハルタに殺されそうな…

ハルタがベッドの上に乗ると傷に触れないようにそつとニアを後ろから抱き寄せる。

「そういえば毒受けたんだよね?大丈夫なの?」

「ああ、なんとか抜いた。船医が『これだけの出血と致死量の毒でなんで生きてるんだ?!いや、死んでほしくはないが!!』とか、文句言いながら手当てしたよ。」

「なんだそりゃ」

俺たちは顔を見合わせて笑い、ハルタを除いた全員が部屋を後にした。

—サイドエンド—

第25話 しつこい人は嫌いです

朝起きたらハルタさんにホールドされていた。

…なにがどうしてこうなった。

確かマルコさんに縋り付いて泣いて…うん。なんでこうなってるんだ？

まあ、いいや。

…あー、叫びすぎたかな？喉と目が痛い。

でもなんだかようやく地に足がついた様な感じがした。

「ん…。あ、ニア、おはよう」

「おはよ、ハルにい」

ハルタさんが起きた。

「怪我の具合は？」

「へいき、にいちやがいるから」

「そつか。でも、まだ無理はしちゃダメだよ？」

「うん。ほかのにいちやたちは？」

「甲板かな？おいで、連れてったげる」

ハルタさんはわたしを抱き上げ甲板へと向かった。

そこにはオヤジさんとイズウさんとサツチさんが…

最初に声をかけてきたのはサツチさんだ。

「おー、ニア！よく寝れたか？」

「うん」

「グラララ！すげえ泣きっぷりだったなあ！甲板まで聞こえたぜ？」

「うっ…。ごめんなさい」

「謝ることはない。どこか吹っ切れた顔してるぜ？お前。いいことじゃねえか、グラララ！」

オヤジさんは本当に鋭い。

少しを話しているとロキアスとイオンさんがきた。

珍しい組み合わせだ。

「ニアアッ！よかった、生きてたんだな！ごめんな！俺のせいで怪我させちまって！」

「だいじょうぶ！ロキにいもぶじでよかった！」

「おはようニア。怪我の具合はどうだい？」

「うごかすとすこしいたむけどだいじょうぶだよ。」

「そっか。今回はボクも薬の処方を手伝ったんだ。効果があつてよかつたよ」

この人ほんとになんでも出来るな。

なんで隊員やってるの??

「ニアにも今度教えてあげるね？」

「うん！」

イオンさんとほんわか話しているとイゾウさんが「そういえば…」と話を持ち出す

「イオンはなんでニアのことそんなに気にかけるんだ？大事な妹つてーのはわかるがお前が図書室から出てくる大半の理由はこいつに会うためだろ？」

「知りたいですか？」

「教えてくれるなら、でいいが。無理にはきかねえよ」

「まあ、隠す様な事じゃないですしね。…ボクには妹がいたんですよ。血の繋がった実の妹が。…けど、ボクの妹は村の人になにを吹き込まれたのか知らないけどいつからかボクのことを”死神”と呼ぶ様になつたんです。紫色は”死の象徴”らしいですよ？」

突然重い話?!

えっ、それ聞いてもいいの!?

「悪魔の実を口にした時、ボクは誰の目にも映らなくなって孤独から逃げる様にして村を出ました。オヤジさん達との出会いは端折りますけど、この船のみんなに出会えてやっと自分の居場所を見つけた。と思つた時にニアが来たんです」

……わたしきいてもいいのかな、その話。

どういうオチだろうか。なんか怖い

「新しい妹だつて紹介された時ボクは内心恐怖しました。妹という存在はボクを傷つけてきたから…。」

「…だからお前初めの方にニアを避けてたのか。」

「ええ。なるべく会わないようにずっと図書室に籠りつきりでしたね。会うのが怖かったんですよ。」

避けられてたんだ。わたし…

なんかごめんなさい

「ふふつ。そんな顔しないでニア？まだ続きがあるから。…ニアが図書室に来て初めてボクを見た時、なんて言ったか覚えてる？」

「なんかいったっけ？わたし…」

「ふふつ。『おにいちゃん、きれいだね！』って言ったんだよ？あれは衝撃だったなあ…」

うん、覚えてない。初対面にそんなこと言ったんだわたし。

…初対面に!?

なにそれ恥ずかしいっ!!

「それでボクもニアの力になりたいって思うようになったんですよ。まさか妹といるのがこんなに楽しいとは思わなかったから」

「そういうことか。はははっ！みんなニアに助けられてんだな！」

それだけ?!

というか、初対面で「きれいだね」ってどこのナンパ野郎だよ！

なにしてんのわたし!!

「…さてっと。この言うことを聞かずに無茶ばかりする娘はどうしてくれようかな」

「しばらく閉じ込めるか」

みんな気が済むまで笑うとイゾウさんが気を取り直したかのよう
に話を切り出す。

するとサツチさんが監禁発言をした。

閉じ込められるの!?わたし!!

「そうだな。それがいい。今回の怪我は大きいから開いたら困る。完
治するまで閉じ込めておこう」

ええー!

そんなに信用ないの?!

そんなことを思っているとわたしを抱っこしてるハルタさんが耳元
で小さく言った。

「最近ティーチがニアの情報を集めようとしてるんだ。ニアはティーチが苦手…っていうかティーチを警戒してるんでしょ？だから俺らしか知らない場所に怪我が治るまで隠しておこうって魂胆。さすがにずつとは一緒にいられないから…ちよつとの間、我慢してね」

…あ、そういうこと。

最近近づいてこないから安心してたけど裏で動いてたのかあいつ。

「じゃあハルタ、頼んだぞ。」

「はい。いこつか、ニア」

「あ、あい…」

だとしても、監禁されに行くってどうなの…。

はてさて、隠れ部屋みたいな所に閉じ込められました、ニアです。結構快適です、ここ。監禁場所が快適ってすごい！

この船、なんでこんな部屋あるの?!謎！

それはさておき、イオンさんが隊長経由で渡してくれた本が何冊かあつて案外暇しない。イオンさん、ほんとに感謝…！

中でも「悪魔の実図鑑」ってのが、面白い。

世界中の悪魔の実が載ってる。この図鑑、優秀…！

えーつと、超人系、バラミンシア自然系、ロギア動物系とあつて、「海の悪魔の化身」である悪魔の実を口にした者は海に嫌われ、一生カナヅチになる…か。

つまり泳げなくなるってことか。海の悪魔の化身って言われてるのに海に嫌われるんだ？この悪魔さん、海に何したんだろ…？喧嘩でも売ったのかな？

「ゼハハハハ…こんな所に閉じ込められてたのか、ニア！探したぜえ？怪我は治ったか？毎回無茶ばかりしやがって！」

本を読んでいるとティーチがやってきた。

…こいつ、どうやってここ嗅ぎつけた？何この執念、謎。怖すぎる。

助けて、お兄ちゃんズ！

…ってあれ？わたし結構冷静？

「可哀想になあ！まあ無茶が過ぎるつてのはわかるが何も閉じ込めなくてもいいだろう」

「いいの。わたしがわるいんだから」

読んでいた本を閉じて冷静にいう。

「ゼハハ…！飼いならされてんなあ、ニア」

飼いならされる？…わたしはペットじゃない。

それに、あの人たちはそんなことしない。

うん、大丈夫。わたしは、わたしの信じたいものを信じる

「ニアよお、いつも思ってたんだがお前、自由になりたいと思わねえのか？」

「わたしはいつでもじゆうだよ？」

「今は閉じ込められてるじゃねえか」

「それはむちやがすぎたからだよ。ちよつとしたばつだとおもってる」

「…罰、ねえ。ゼハハハハ！いつでもどこでも隊長が付きつ切りで、窮屈じゃねえか？俺が出てやろう、すぐには無理だが」

「いいの。わたしはこれでいいの。ここがすぎだから」

そういうと、ティーチは怪訝な顔をした。

「だからね、ティーチにいちゃ。」

目を瞑り、一呼吸置いてからティーチを睨むようにして見上げた

「うらぎったら、ゆるさないよ？」

「……っ！！ゼハッ！ゼハハッ！俺はこのクルーだぜ？」

それ以上は何も言わずにティーチは去っていった。

…はあっ！怖かった！！

なんなのあの人！！怖すぎかよ！しかも、しつこい！

「ニアッ！大丈夫?!」

「ハルにい、どうしたの？」

「…さっきティーチとすれ違ったから、見つかったんじゃないかって」

「うん、きたよ。けど、とくになにもなかったよ！」

「そっか。せつかく隠したのに…。ここにニアがいるってどうやって知ったんだろう…」

ほんとだよ。

できればもう話したくないなあ

—ティーチサイド—

『うらぎつたら、ゆるさないよっ。』

無機質な人形のように冷たい目で俺を見上げた妹。^{ニア}

その時に覗いた殺気と覇気に恐怖を覚えた。

…少し焦りすぎたか。

なんせいつも隊長が付きつ切りで話す時間がない。

目的のものがいつ見つかるかもわからないし、ニアを手懐けるのにも時間がかかりそうだ。

随分と飼いならされてんなあ…。あそこまでオヤジや隊長たちに懐いてるとなると攫ってくしかなさそうだな。

あいつの情報は全然入ってこねえからこつちから集めないといけねえ。

隊長なら知っているとおもったが誰に聞いても知らないと返ってくる。

隠されてんのか本当にしらねえのかわからないが……こりや警戒されたかもな。ニアは鋭いからよ

まあ…なんにせよ、あいつの力は欲しい。

悪魔の実の能力者だろうがそれで無かろうが、どんな怪我也治せるなんて夢のような力だ。

さあて……どうやって懐柔してやろうかな…！

ゼハハ！ゼハハハハ！

—サイドエンド—

「ティーチがここにきた？」

あの後マルコさんとサッチさんがわたしの様子を見に部屋に来た。

ハルタさんが彼らにティーチの話をするとマルコさん達の表情が変わった。

「なぜあいつがこの部屋の存在を知っている？いくら奴が古株だから

とはいえここは隊長しか知らないはずだが…」

「それがわからないんだよ。」

「…なんにせよ、警戒しておくに越したことはないよ。最近様子がおかしいのは事実だからな」

「ニアの情報を嗅ぎまわってるんだっけ？」

「ああ、この前も聞かれた。ニアは能力者なのか？ってな。なんでそんな事気にするんだ？って聞き返しても答えてくれねえのに」

「なにを考えてるんだろうな。…仲間を疑いたくはないんだが…」

仕方ない。というようにため息をつく3人。

「はあ、まあ考えてても埒があかないな。とりあえず現状維持だよ。さて、と。ニア薬を塗るぞ」

マルコさんがそう言ったので、わたしは背中を向けて上の服を脱ぐ。

するとハルタさんとサツチさんが頬を染めて顔を背けた。

ん？どうしたんだ…？

「…お前なあ。一応女の子なんだからもう少し警戒心を持て！」

「ええっ!?!くすりぬるだけでしょ?!それにちゃんとしたぎきてるし！」

「…：うーん、そうなんだが、そういう事じゃなくてな…。まあいいよ。すこし染みるかもしれないが我慢しろ」

そう言ってマルコさんはわたしの背中に薬を塗って包帯を巻き変えた。

「相変わらずすごい回復力だ。あと、1、2週間もすりや傷は塞がるだろうよい」

「ほんと？ありがとう、マルコにいちや！」

「あんまり危険な目に遭わせたくないけどそれがニアだもんね。危険でも逃げずに必死に頑張るところ好きだよ。偉いなあ」

褒められた。お兄ちゃんに褒められた！

最近怒られてばっかだったから嬉しい！…いや、怒られてんのは全部自分が悪いからなんだけど…。

さて、早く怪我治してわたしも復帰しないと！

それから数週間、怪我也もみるみる治り船医さんからのOKが出た。しばらく監禁されてたせいかな、みんなの顔が見たくてしようがなかった。うーん、わたしもブラコン極めてるなあ

「よお、ニア！出てこれたのか！」

「サツチにいちや！でてこれたよ！」

「また逆戻りしないように気をつけろ。」

「う、うん…」

はい

怪我しないように気を付けます！

「じゃあ、早速「ニア！怪我したって聞いてたけどもう大丈夫なのか?!」…何しにきた、赤髪」

ほんとに、何しにきた?!この人最近よくくるよね?!暇なの!?

「何しにつて…可愛い弟子の様子を見にな！」

「だれがいつでしになった！」

「おー、元気そうだなあ！よかったよかった！」

シャンクスさんを見上げて噛み付くように反論すると彼は上機嫌にわたしの頭を撫でる。

「グラララ…。お前、最近おれの船にきすぎじゃねえか？立場つてもんを考えやがれ、小僧」

「はははっ！それこの前鷹の目にも言われたぜ。けどなあ、俺が単身で来てるだけだからなんも無いと思うんだが…」

「たんしんでもふねあげてでもよんこうのせっしよくにかわりはないよね?!ばかなの!?!」

「あいかわらず俺には冷たいのな。まあいいけどよ！」

いいのかよ！なんなんだほんとに！用件を言え！そしてさっさと帰れ！

「大怪我したって聞いたから見舞いに来ただけだ。元気そうで何よりだぜ、ニア。」

「ふーん。しんぱいどうも」

「…デレた!?ニアがデレた！なあ！俺の船にこないか？」

「断る!!」

お見舞いに来たっていうから一応お礼を言ったら抱きつかれた。どさくさに紛れてシャンクスさんがわたしを勧誘するとお兄ちゃんズが一斉に引き剥がした。

「おいおい、いいじゃねえか。少しくらい」

「ニアに触るんじゃねえよ、ロリコンが!」

「あと、どさくさに紛れて勧誘するな。こいつはどこにもやる気はない」

シスコンお兄ちゃんズがかっこいい!

「はいはい…シスコンのお兄ちゃんは怖いな。まあ、閉じ込めたくない理由はわからんでもないがな。じゃあ、俺は帰るぜ?あんまり人に心配かけるもんじゃねえぞ、ニア」

ほんとに帰った!え?!見舞いに来ただけってホントだったの?!
迷惑だなんて思ってたけど、案外いいひと!!

「つたく。油断も隙もねえな。」

「まったくだ。さてニア、まずは体力を戻そうか。」

そうか、そうだな。

何週間も動いてなかったから鈍ってるよな、そりゃ

「はいー!」

元気に返事をして体力作りから始める。

みんながいれば怖くない。そんな気がした

ーひとりりの青年と少女が出会うまでもう少しー

ーシャンクスサイドー

先日白ひげの船にニアに会いに行ったら怪我してるから会わせられない。と追い返された。

：怪我だど?!俺は心配したが、心配いらなからさっさと帰れと言われてしまった。白ひげのやつら俺に冷たくないか?

「赤髪」

いきなり短く名前を呼ばれたと思ったら刀を振るわれた

俺は剣を抜きそれを受け止める。

「ご挨拶だな、鷹の目。久々に会ったのに冷たい奴だ。最近は勝負を挑んで来なかつたがどうした?」

「……………なんだ?……………それは」

鷹の目が俺の左腕を見ながら言った。

「何って……………左腕だが?」

「そんなことを聞いてるんじゃない。お前、左腕は無くしたんじゃないのか?」

「えーつとなあ、女神様が降りてきて治してくれた。」

「嘘をつくならもつとまともな嘘をつけ。そんな言い訳に騙される馬鹿はいないぞ」

くそ、こいつには通じないか。

俺のクルーは納得してくれたんだけどな。いや、察してくれただけか?」

爆笑してる奴もいたが

「納得できるように説明しろ、じゃなければ斬る」

「おいおい。なんでそんなに物騒なんだ。」

剣をぶつけながら喋る。

「よくしたかまないね?!」っていう突っ込みが欲しい。

誰とは言わないが…

俺の腕は無くなっていたんだ。そりや気になるだろうが俺に話す気が無いことくらい長い付き合いのこいつならわかるだろう

「つい先日、七武海の緊急招集があった。議題はお前と白ひげの接触の多さについてだ。…………お前、そんなに頻繁にアレに会いにいつてるのか?」

「…まあなあ…………。なーんか、構いたくなるんだよあいつ。暇な時は遊びに行ってるな」

「馬鹿か貴様は。友達の家に行くんじゃないんだぞ?遊びに行く感覚で四皇が四皇の船に行くな。アレを晒さなくてもいい危険に晒す必要はないだろう」

「なんだなんだ?お前がそこまで肩入れするとは珍しいじゃないか、鷹の目」

「とにかく立場はわきまえろ。と忠告しに来た。そしたらお前に左腕があるじゃないか。……まさかアレの仕業か？」

「だーかーらー。女神様が降臨したんだって！」

鷹の目の攻撃をあしらいなから喋る。

俺もこいつも本気じゃないから島が吹き飛ばずにすんでるが……あんまり茶化すところいつ本気で斬ってきそうだな。

「真面目に答えろ赤髪。お前……アレがどういう存在なのか本当にわかっているのか？」

俺や鷹の目まで恐怖を覚えたあの冷たい目……

修行中の事を思いだし顔をしかめる。

その隙に鷹の目が重たい一撃を入れてきた。勿論受け止め押し返す。

剣が合わさり力が拮抗する。そしてお互いに弾くようにして間合いを取った。

「本人は気付いていないがアレは相当危険な力を秘めているぞ。もし、絶望を知った時……アレが暴走すればこの海は……いや、世界は滅ぶ。お前もわかっているだろう？」

……そうだろうな。あいつがその気になればそんなことを容易にできるだろう。

今は白ひげに守られて温もりの中で生きているから何事もないだけだ。

「守ればいいんだ、鷹の目。ニアがこの先もずっと笑っていられるように……守ればいい。」

そうだ、守りきればいい。

「……フツ。そんな綺麗事がいつまでもつやら。とにかく、忠告はした。」

鷹の目はそういうと剣をしまい去っていった。

……忠告されたばかりで悪いんだから来週あたりにでもまた行く予定だ。

あいつの怪我、治つてるといいな

「悪いな鷹の目。俺は今更ニアを見捨てることはできないんだ」

あの無邪気な笑顔を消させはしない。
—サイドエンド—

第26話 火拳のエース

それから月日は流れわたしも成長する。

成長する予定でした。なんか全然身長伸びなかったんだよね。今自分が何歳か知らないけど120cmくらいしかないんだ。

体を酷使しすぎたせいかな？

せめて身長だけでも欲しかった…。

まあ、しょうがない！ほぼ自業自得だし、小さい体を活かして頑張ろう

はてさて、なんか甲板が騒がしいな。

行ってみよう。

ー？サイドー

世界最強の男と言われている”白ひげ”

そいつの首を取って世界中に俺の名前を轟かせてやる！

そう意気込んで海に出た。

だが、現実には簡単にはいかない。行く途中で海峡のジンベエという

七武海の1人が俺の行く手を阻む。

「デケエの、おれは白ひげつてのに会いてえんだよ」

「こんな人斬りナイフのような奴をオヤジさんに会わせられるか！」

そう言つて5日に渡る長い戦いの末、お互い満身創痍で死にかけていた。

くそっ…おれは、ここで終わるわけにはいかねえんだ!!

「グララララ！おれの首を取りてえのはどいつだ？望み通りおれが相手してやろう！」

し、白ひげ!?

こんな時に！

「炎上網!!お前ら逃げろ!!」

おれは炎を周りに広げ、仲間を逃す

「グララララ！今更逃げ腰か？」

「仲間は逃してもらおう。その代わり、おれが逃げねえ!!」

「クソ生意気な…!」

おれは白ひげに立ち向かったが、あっさりと負けた。

「今死ぬには惜しいな、小僧。暴れたきやおれの名を背負って好きなだけ暴れてみろ!おれの息子になれ!」

…息子?!息子だと!!?

「ふざけんなア!!!」

そう叫んだのも束の間、おれの意識は途絶えた。

—サイドエンド—

甲板に出るとオヤジさんが男の人を担いでいた。

「…だーれ?」

「グラララ!新入りだ」

「!!じゃあ、あたらしいにいちや?」

「そうだな!グラララ!」

やった!また家族が増えた!!

「それはそうとお前、甲板でてくるならフードつけろよい」

「あ、わすれてた。パーカーきてくる!」

わたしは急いで船内に入りパーカーを着てまた甲板へと向かった。

戻った時には新しい人はすでに部屋で寝かされていた。

大丈夫かな?

うろろろしてると声をかけてきたのはサッチさん。

「なんだ?ニア。新入りが気になるのか?」

「うん。どんなひとかなーって!」

「ははっ!そういうやニアは俺ら以外に人に会ったことがねえもんな。せいぜい青雫とか、赤髪…とか…鷹の目と…か。…お前、よく生きてたな」

「ええっ!!じぶんでいっつといてあわれんだめしないで!?!ほかにもガープってひとと、かいぐんのげんすいさんにはあったよ?」

「何か持つてるだろ。なんでそんな大物との遭遇率が高いんだ」

サッチさん何気に酷い!

しばらく話し込んでるとバンツ!と扉が乱暴に開く音がした。

人が飛び出してきて船の上だと確認すると頭を抱えて座り込んだ。
「おつ。起きたか新入り。俺は4番隊隊長サツチってんだ。仲間になるなら仲良くしようぜ?」

「しようぜー!」

「うるせえ!!……って、こども?!」

わたしがサツチさんの言葉に乗ると新入りさんが反応した。

サツチさんはわたしの頭を撫でながら話を続ける

「ああ、こいつはニアってんだ。仲良くしてやってくれ。無邪気かわいいやつだぜ? 無茶ばかりするのがいただけないけどな」

「むう…。」

「ハハハ! 拗ねるなって! よしよし。ああ、氣い失った後のこと教えてやろうか。お前の仲間がお前を取り返しにきたから俺らで叩き潰しといた。何、死んじやいねえよ。この船に乗ってる」

「ようしやなかったよね。ちよつとかわいそうだった」

「お前に手を出そうとした奴らだけだろ!」

誰に対してもそうよね。赤髪にさんですら刀やら銃やら向けるものね。シスコンお兄ちゃんズが強すぎる

「おにいちゃんはなんていうの?」

「……………エース。」

「エースおにいちゃん? よろしくね!」

「ああ……………って! おれはまだ乗るなんていってねえ!! ……錠も枷もつけずにおれを船に置いていいのか?」

「枷?! ハハハ! いらねえよ! んなもん! さて、そろそろ飯の支度しなきゃな! ニア、後は頼んだぜ?」

「はーい」

そう言つてサツチさんはその場を後にした。

…と、言われてもわたしそんな知らない人といきなり話す能力ないよ?

「…なんでお前みたいながキがこの船にいるんだ?」

「うん? ……ふふっ! ひろわれたの。ここのひとたちに」

「……………拾われた?」

「そ。まだね、じぶんのあしであるくこともできないくらい小さいときにすてられていたわたしをひろつてくれたの。」

「すてられ…ていた？」

「うん。あつー！そうだ、わたしこれからけいこだった！じゃ、またね！おにいちゃん」

忘れてた。すつぽかしたらビスタさんに殺される…！

エースさんに軽く手を振るとわたしは早足で道場に向かった。

—エースサイド—

目を覚ましたらやつと船の上だった。

リーゼントの男が親しげに話しかけてきてイラついたが小さい女の子が話に入ってきて何故か和んだ。

名前を聞かれて普通に答えてしまった。…なんなんだ、こいつは

リーゼントの男はサッチというらしい。そいつが飯の支度があると言って去っていった。

少女の方はニアだそうだ。おれは純粹に疑問をぶつけた。

「なんでお前みたいなガキがこの船にいるんだ？」

そう聞くと、少女は「ふふっ！」と可愛らしく笑い、拾われた。と言った。

拾われた…だと？

詳しく聞いてみると、まだろくに歩けもしないくらいの小さい時に捨てられていた自分を拾ってくれたらしい

…こんなガキが捨てられてたのか…。

なのになんでこんなに明るいんだろうなこいつ。

「あつ、わたしこれからけいこだった！じゃ、またね、おにいちゃん」
そう言っておれに手を振ると駆け足で船内へと戻る。

…あのフードの下を見てみたいなんて思ったのはそつと胸に秘めておこう

—サイドエンド—

ガシャーン!!

明くる日、甲板でマルコさんとビスタさんとハルタさんイゾウさんと駄弁つてると物凄い音が聞こえた。

「…なんのおと?」

「ああ、新入りがオヤジの首を取ろうと頑張ってた」

「こんじようあるね」

「二「お前がいうな!」」

ええっ?!酷くない?!そんなみんなしてハモらなくても!

「いや、ニアは肝がすわってるだけだろい」

「だけではないよね。根性もあるよ?」

「あと、度胸もあるな」

「まあ、ありすぎて怪我しまくるから野放しにできないんだがな」

「ううー。きをつけてるんだよ?これでも!」

「二「なら刀に対して向かっていくな!!」」

事前練習でもしてるの?!この人たち!!

なんでこんなに息びったりでツツコミ入れてくるの!

「くそっ…。」

わたしたちの横を擦り傷だらけのエースさんが通る。

…なんだろうなあ。なんかほっとけないんだよなあ、あの人

「だいたいじようぶ?」

「…構うな。」

彼がわたしを見下ろした。…みんな身長高いなあ。

1センチずつくらい分けて欲しい

「……………おれに、構うな」

何ですか、今の間は。

けど、なんかすごく辛そうな顔してた。

「あいつっ!ニアに心配してもらっつといて…!」

今のやり取りを見ていたカルガンが言った。…みんなシスコン極めてるなあ

わたしも人のこと言えないけど

「なんか、とつてもつらそう」

「…お前がそう思うならきつとそうなんだろうな。声かけてきてやつ

「たらどうだ?」

「うーん。なにをはなしていいかわからない」

「行くだけ行ってあげなよ。俺たちには一言も喋ってくれないからね」

隊長たちに後押しされ話しかけに行くことにした。

後を追うと、エースさんをみつけた。

…うわあ、なんかすごい絶望してる感半端ない。

頭抱えて…頭痛くないのかな?

「ねえ、だいじょうぶ?」

「っ!!構うなっっていったらろ!」

「うん、いわれたよ。でも…きになるの。」

「…なんなんだよ、お前!!なんで、おれに構うんだ!」

「だって、おにいちゃんだから」

「誰がお前の兄になったんだ!おれはあいつの首を取る!その為此にここにいる!」

「なんでもしっぱいしてるの?」

「っ!!うるせえ!!」

エースさんは立ち上がって何処かへ行った。

…ああ、わかった。似てるんだ、前のわたしに。

方向性は違うけど、傷つきたくなくて自分の心を隠して…

存在を認めて欲しくて、存在する理由を知りたくてもがいている。

自分がここに居ていいのかどうか。それを知りたくて足掻いているんだ

ああ、じゃあ…わたしが助けないと…

白ひげ海賊団らに助けてもらったように今度はわたしが彼をを助けないと。

次の日もまた次の日もエースさんはずっとオヤジさんに奇襲を仕掛けては失敗していた。

どうしよう。どうやって声かけようかな。

甲板で彼にどう話しかけようか悩んでいた。

「ねえ、もうやめたら?」

頭を抱えて壁にもたれかかるエースさんに気がついたらそう言っていた。

「っ！またお前か！なんたつておれの周りちよろちよろしてんだ！」

「めざわりだったらごめんね？けど、どうしてもきになるの」

「…なんでだ？」

「むかしのわたしににってるから…。あなたをみてるどくるしいの」

「……っ!!!」

そう言うと、彼は驚いた顔をした後わたしを睨みつけた。

「何がわかるってんだ!!お前に！おれの何がわかるんだ！」

「なにも知らないよ？あなたのこと。だってわたしたちはあつたばかりだもの」

「じゃあ、おれに構…」でも、あなたもわたしのこと知らないでしょ？っ!!」

「だからしりたいの、あなたのこと。おしえてよ、エースおにいちゃん」

ふわりと微笑みかけると今にも泣きそうな顔でわたしを見る。

けど、彼は受け入れられずに噛み付いてきた。

「ははっ！はははっ！……お前みたいなガキに心配されるなんておれもおわりだな！……この海じゃ何が起こるかわからない、明日死ぬかもしれないんだ。人の心配より先に自分の心配したらどうだ？」

「……そうかもね。でも…あなたのほうがくるしいってかおしてるよ」

「……っ!!!」

そう言うと彼は目を見開きわたしを凝視する。その目は潤んていた

えっ!?わたしが泣かせた!!?

ご、ご、ごめんなさい!!!

わたしはエースさんに駆け寄り顔を隠すように抱きしめた。

「なっ！何しやがる！離せっ！」

「ご、ごめん。いやかもしれないけど、もうふとかふとんかとおもって……。ひとりでなくのはさむいから」

「っ!!……う、うわああああっ!!」

ぎやあつ! 涙腺切れた? わたしのせい!? ごめんなさい!!

エースさんがわたしの服を掴んで泣きついた。

ど、ど、どうしよう!!

わたしがマルコさんに泣きついた時もマルコさんこんな気持ちだったのかな?! ならほんとにごめんなさいだよ!!

わたしはエースさんが泣き疲れて眠るまでどうしていいかわからず、ずっと彼の頭を撫でていた。

—エースサイド—

おれは奴の首を取るべく、来る日も来る日も首を狙って奇襲を仕掛けるが何度も失敗していた。

己の無力さに絶望し、頭を抱えて蹲っているとあの女の子がきた。

「ねえ……もうやめたら?」

そんなことっ!! おれが1番わかっている!! 敵わないってことも! 無謀だっということも!!

「またお前か!! なんだっておれの周りちよろちよろしてんだ!!」

こんなガキに同情されるなんて真っ平御免だ!!

「めざわりだったらごめんね? でも、どうしてもきになるの」

「なんでだ?」

…おれを気にかけてくれてるっていうのか? こいつあたまおかしいんじゃないのか? おれはお前らの船長の首を狙ってんだぞ!!

「むかしのわたしににってるから……。あなたをみてるどくるしいの」

昔の……こいつ?

こいつもおれみたいな時期があったってのか?

…っ!! なに言ってるやがるんだ!

「何がわかるってんだ!! お前に! おれの何がわかるんだ!」

「なにも知らないよ? あなたのこと。だってわたしたちはあったばかりだもの」

おれが激情に吞まれ怒鳴ってもこいつは静かにそう告げるだけだった。

正論だが……なら尚更！こいつがおれに構う理由はないはずだ！！
「じゃあ、おれに構……でも、あなたもわたしのことしらないでしょ？」っ！！

構うな！と言おうとした言葉を遮り少女が言う。

……確かにおれもこいつを知らない。

「だからしりたいの、あなたのこと。おしえてよ、エースおにいちゃん」

ふわりとそう微笑む。

……顔は見えないけど口元は笑っていた。

おれを……知りたい？

……だがそんなすぐに素直になれずおれは反論する

「ははっ！はははっ！……お前みたいなのがキに心配されるなんておれもおわりだな！……この海じゃ何が起こるかわからない、明日死ぬかもしれないんだ。人の心配より先に自分の心配したらどうだ？」

自分で言っても腹が立つな。こんな小さな子に八つ当たりでもするかのように酷いことを言った。

「……そうかもね。でも……あなたのほうがくるしいってかおしてるよ」

でもその言葉は空を切り、少女の言葉がおれの心を貫いた。

おれは生きてていいのか……。ずっと悩み続けていた。

さっきまでおれの心の中を渦巻いていた嫌な感情が消える。

おれは今、こいつに……受け入れてもらったのか？

こいつならおれの悩みをバカにせず罵らずに真剣に聞いてくれるだろうか？

目に涙が溜まるのがわかる。けど、ガキの前でガキみたいに泣くわけにはいかない。

そんな風に思っただけで我慢しているとニアがおれの顔を隠すように抱きついてきた。

「なっ！何しやがる！離せっ！」

思わず突き放すようなことを言ってしまった。

けれど彼女は離さずそれが強く抱きしめてきた。

「ご、ごめん！いやかもしれないけど、もうふとかふとんかとおもって……。ひとりでなくのはさむいから」

鬼の子と蔑まれてきた。

おれは生きてていいのか、生まれてきてよかったのか…

そんな事を悩んで1人で膝を抱えてた時もあった。

『ひとりでなくのはさむいから』

どこまでも優しく、なのに悲しそうな声におれの我慢は限界だった。

「う、うわああああつ!!!」

おれはニアにガキのように泣きついた。

ニアはあたふたしたけど、おれの頭をずっと優しく撫でてくれた。

こいつになら打ち明けてもいいかもしれない…。

そんなことを考えながらおれはそのまま眠りについた。

—サイドエンド—

「しずかになった」

自分の膝の上で眠ったエースさんに対し、どうすればいいかわからない。

これ動かしたら起きちゃうかな？

「…すごい声でしたが、どうした？」

エースさんの叫びを聞いて何事かと人が集まってきた。

わたしのせい?!

「ご、ごめん、にいちや！なんか、なかせちやったみたい。」

「泣かせた?……おい、なんでそいつがお前の膝の上で寝てるんだ」

そこ?!イゾウさん、怒るところそこの?!

「イゾウ、気持ちにはわからんでもないが我慢しろ。だが、その状態だとニアが動けないか」

ビスタさんがエースさんを担ぎ上げる。

…起きないんだ。爆睡型かな?とりあえずよかった。

部屋へとエースさんを運んでいった。いつも思うけどその腕の筋力すごい。少し分けて。

「思い出すなあ。ニアもああやって泣き叫んでた時あったよね。」

「ううー。はずかしいからいわないでえ…」

「二…二…」

えっ!?なんでだんまり?!

「どうしよう、今のニアすっごい可愛いって思った俺悪くないよね?」

「悪くないな。あんまり可愛いといじめたくなるから気をつけろ、ニア」

「あんまりいじめてやるなよ。その一件があったからこいつがやつと俺らに近づいてきてくれたつてのに」

シスコンお兄ちゃんズのシスコン具合がカンストしていつてる気がする。気のせいかな?うん

第27話 あなたも家族ですよ

—マルコサイド—

つい先日、新しく入った俺らの家族。

そいつはめげずに何度も何度もオヤジに奇襲を仕掛けてはぶっ飛ばされていたよい。

敵うわけねえのに根性あるな、あいつ。

そいつが入って何日かたった日の夜、そいつの叫び声？泣き声？が甲板に響き渡った。

何があったのかと見に行ってみたらそいつがニアに縋り付くようにして眠っていた。

ビスタがそいつを担ぎ上げて部屋へと運ぶ。

なんか知らんが仲良くできるかねえ…

次の朝、俺は甲板でそいつとばったり会った。

「あ」

「おはよう、新入り」

とりあえず挨拶を交わす。

「おは、よう」

返してくれた。こいつ、俺たちに返事するの初めてじゃねえかよ？ニアには少し反応してたが俺たちはガン無視だったな。昨日のアレが関係してんのかねえ。ならお手柄だよい、ニア。

「……………あいつは？」

「ん？誰のことだよい？」

「あの、フードの」

「ああ、ニアか。あいつなら船内のロビーじゃねえか？」

「そう、か。」

戸惑ってはいるがこれだけ話してくれるようになったんなら俺らも少しはやりやすいな。

「なあ、お前ら…なんで白ひげをオヤジって呼ぶんだ？」

「…あの人が息子って言ってくれるからだよい。…嬉しいんだア。ただの言葉でも、嬉しいんだ」

ほかに理由なんてないよ。意外と単純なもんだ。

「っ…。そう、か。…そう…なのか。」

俯いて少し考え込む新入り。そういや、名前聞いてねえな

「おれ、ポートガス・D・エースっていうんだ。エースでいい。…なあ、あの子はなんであんなフードかぶってんだ?」

「…あいつが船内にいるなら理由はすぐわかるよ。見てきたらどうだ?」

「わかつ、た。」

…ニアの影響力はすげえな。

エース、か。仲良くやってけそうだな。

—サイドエンド—

エースさん、昨日号泣しちゃったけど大丈夫かな?

あれって完璧にわたしのせいだね。謝らなくちゃ

「…………お前がニアか?」

名前を呼ばれたので声のした方を見るとエースさんがいた。

「あ、エースおにいちゃん!きのうはごめんね、よけいなこといったかな?」

エースさんはわたしを見るなり目を見開いた。

あ、顔見せるの初めてか。ずっと甲板でしか会ってなかったからフードつけてたもんね。

「そう、か。だから、フード付けてたのか。…ニア。お前に話がある。話?」

エースさんがわたしの手を引き人気のないところへ歩いていく

えっ!?何?!わたしやっぱ怒らせた?!泣くほど怒らせたかな!?

エースさんは周りに人がいないことを確認するとわたしの手を離し向かい合って口を開いた。

「なあ、お前。海賊王に息子がいたらどうする?」

へ?…海賊王に?」

待って待って。何急に。わたし怒らせたわけじゃない!」

海賊王ってあれよね、ゴールド・ロジャーって人。オヤジさんとか

シヤンクスさんが昔話してた気が…

簡単に言えば今の時代を作った人。…時代を作るって相当すごいよね。良い悪いに関わらず時代を変えられるってかなりの偉人よね。

けど、息子さんはきつと苦勞したんだろうな。どれだけ良い人だとしても海賊っただけで、悪目立ちだもんね

息子がいたら、かあ。

「ともだちになりたい。」

「……………え?」

「おやおやでこどもはこども。けど、せけんはきつとそうみてくれない。だからわたしはそのひとと、ともだちになりたい。ひとりじゃないよ、っていつてあげたい。」

「なんで…?」

「わたしはこのふねのひとにひろわれてからたくさんのおいじょうをもらってそだってきた。けどここからいっぽでもでたらきつと、わたしはさべつのたいしようになる。だから、そのひとがひとりならわたしがいるよって、ひとりじゃないよ。ってささえたいの。」

「もし、それがおれでもか?」

えっ…。つまりあなたがロジャーって人の息子ってこと!?

いやいや、だれの子どもだろうと関係ないけど、それそんな簡単にカミングアウトしていいの?!

「え。うーん…。だったらともだちではないかな?」

そういうとエースさんは心なしか悲しげな表情をした。

あ、なにか誤解させちゃったかな?

「だって、エースおにいちゃんはおぞくだもん!」

にこつと笑って言う。

するとエースさんは驚いた顔をしてから優しく笑った

「っ!!はははっ!…お前には敵わねえな。まだ会って数日だつてのによ。」

「うん?」

「ごつちの話だ。そうだニア。エースでいいぞ?呼び捨てにしてくれ。そつちのが親近感あるだろ?」

ニカツと笑って言った。

…すごい許された感がある。これを機にこの人が馴染めるといいな

「それにしても、銀髪で黄金と空色のオッドアイか。お前、目立つな」「うん」

「隠すのもつたいねえけど仕方ねえよな。けど、そんなに目立つんならいいな！お前がどこにいてもすぐ見つけれる！」

…そんな素敵な笑顔で言われると照れる。

「ニア！フードつけろ、甲板行こうぜ？」

「あ、うん！わかった！」

わたしは部屋に戻りパーカーを着るとエースと一緒に甲板に向かった。

—エースサイド—

この船のクルーにニアがフードをかぶってる理由が知りたいなら見てこいと言われた船内に入ると銀色の腰くらいまである長い髪をした少女がソファに座っていた。

声をかけるとおれの方を見る。目が合うとまた驚いた。

片方ずつ違う色の瞳をしていたからだ。…オッドアイって奴か。本当にいるんだな…。

おれが『話がある』とそいつを人のいないところまで連れて行くと聞きたかった事を聞いた。

「海賊王に息子がいたらどうする？」

そう言うのと少し驚いた表情を浮かべたがなにやら考える素振りを見せる

考えが纏まったのかニアが口を開く。その言葉は驚くべき事だった

「ともだちになりたい」

友達…？海賊王の息子だぞ!?

犯罪者の息子と友達になりたい…?!

おれは思わず聞き返してしまった。ニアは決して目を逸らさずお

れをまつすぐ見て答えた。

彼女の言い分は『親は親、子どもは子ども。でも世間はきつとそう見てくれないからその人が1人でいるのなら1人じゃないよ。って言うってあげたい』と言う事らしい。

なんでだ？だって…犯罪者の子どもと友達になつたところで苦勞するだけだろう！

おれの心の叫びを悟つたのかニアは続きを紡ぐ

「わたしはこのふねのひとにひろわれてからたくさんのあいじょうをもらつてそだつてきた。けどここからいっぽでもでたらきつと、わたしはさべつのたいしようになる。だから、そのひとがひとりならわたしがいるよつて、ひとりじゃないよ。つてささえたいの。」

…こいつ…自分が普通じゃないつて思つてるのか。

いやだが…銀髪にオツドアイなんてそうそういないだろうな。

むしろこいつの他にこんな目立つのがいるのなら見てみたいくらいだ。

「…もしそれが…おれでもか？」

恐る恐る聞くとニアはきよとん。とする

「え。うーん…。だつたらともだちではないかな？」

…やっぱりおれは…

「だつて、エースおにいちちゃんのかぞくだもん！」

「……………」

ああ…………こいつは本当におれを”兄貴”として見てくれてたのか…

ははっ…はははっ!!

まだ出会つて何日だよ！数日しかたつてないだろ！

なのにこいつの中ではもうおれは兄貴なのか。

全く…………こいつには敵わないな

いちいち心を貫くような事言つてきやがる。

いや、無意識だからこそ刺さるんだろうな…

傷口から薬が浸透していくような感覚に襲われるのは錯覚だろうか？

『家族だもん!』

その一言で全てが救われた気がする。

おれは生きてていいのか、生まれてきても良かったのか。

そんな悩みを一気に吹き飛ばした。

あの人にもいつか話そう。ロジャーと渡り合った男らしいからきつとわかってくれる。

はあーっ!!すごくスッキリした。

暗い感情が一気に晴れた気がする。おれはずっと誰かに認めてもらいたかっただけなんだ。

生まれてきてよかったって、生きてていいんだよ。って誰かに言うて欲しかったんだ…。

…ありがとう、ニア

—サイドエンド—

甲板に行くと、カルガンとロキアスとイゾウさんがいた。

「あ、ニア!と、新入り!お前、オヤジへの奇襲はやめたのか?」

「ああ。こいつのおかげで目が覚めた。おれはエース、よろしくな!」

「そうか。なら近いうちに歓迎会でもやるか。みんなの名前も覚えてもらいたいし。…次はお酒飲むなよ?ニア」

「あれはふかこうりよくだよ!わたしわるくない!」

「ははっ!確かにそうだな!酔ってるニアも悪くなかったけどな。ああ、ただお前に記憶が残らないのは残念だな。その後にいじれない」

「むう、イゾウにいいいじわる!」

「はは!と笑いながらわたしの頭を撫でるイゾウさん。最近この人がSっぽくなってきてる気がする。」

「ニアは戦えるのか?」

「ん?うん、たたかえるよ?すこしなら」

「少し?!」

カルガンとロキアスに驚かれた。

「お前の少して何?!敵をバサバサ斬りふせて、百発百中の腕持つて

「て少し!?」

「どんな武器でも使える癖に、スプーンとか紙とかも武器に変えちゃうようなやつが少し!?」

「少し定義を考えろ!」

「ええー、着眼点違くない?」

「なあなあ!ニア連れてどこか行ってもいいか?」

「エースさんがわたしの肩に手を回して抱きつくようにしながら言う。」

それを見てイズウさんは顔をしかめた

「お兄ちゃん!我慢して、お兄ちゃん!!」

「……………あまりよくはないな。マルコかオヤジの許可を取らないとそれは連れ出せない。」

「そうなのか?」

「そのフードの下を見たか?…まあ、目立つんだ、どうしても。海軍もそいつの存在をまだ知らない。余程なことがない限り知られるわけにはいかないからな。…ん?そう言えば青雫は知ってるはずなのになんでまだ海軍で広まってないんだろうな」

「あおきじさんがまだしゃべってないだけじゃない?じかんのもんだいだよ。でもいいの、かくごはできてるから!にいちゃたちがいたらこわくないよ!」

「……………」

「え、なんで無言になるの!?

「うちの妹が天使だ!」

「ニアエルだ。かわいい!」

ロキアスとカルガンが騒ぎ出した。

「なんでも「エル」ってつければいいもんじゃない!」

「じゃあ、許可取ればいいんだな?」

「そんなに一緒にでかけたいのか?」

「ああ!心配すんな!ちゃんと守るから」

「そういう問題じゃないんだが…、まあいいか。俺も付いて行ってやろう。」

「えーつと…マルコってあのパイナッフルみたいなやつだよな？」

「誰がパイナッフルだよ!!」

イズウさんとエースが話しているとマルコさんがきた。

なんてタイミング…!!

「あ、ちようどよかった!なあ、ニア連れて外出したいって言ったら許可くれるか?ちゃんと守るからよ!ダメか?」

「随分と仲良くなったな。はあ、オヤジに聞いてみるか。ただ、外に出すならもう1人くらいつけろ。そしてフードは絶対外さすなよ!」

うーん、相変わらずの過保護具合。

さすがマルコさん!

「相変わらず過保護だな、マルコ。仕方ねえが…。ああ、後もう一つ、そいつから絶対目を離すな。気がつくとすぐ怪我しやがるから」

「むう、なにもいいかえせないのがくやしい」

そういうと、マルコさんとイズウさんがわたしの頭を笑いながら撫でる。

事実だけどさ!怪我したくてしてるわけじゃないからね?!

「そうなのか。わかった!ちゃんと見とくぜ!けど、もう1人って言われても…:「俺がいこうか?」…:アンタは確か、サッチだったか?」

サッチさんが船内の方から歩いてきた。どうやら話を聞いていたらしい。

「おう!隊長がついてんならいいだろ?マルコ」

「だああつ!わかったよ!絶対に怪我させるんじやねえぞ!!あと姿も見られるんじやねえよ!オヤジには言つとくから社会勉強も兼ねて行ってこいよ!。但し!1日だけだ!日が沈む前には帰ってこい!」

マルコさんがおかんと化してる…。

日が沈む前に帰ってこいって…

「いいのか!?やったぜ!よし、いこうニア!」

エースさんがわたしの腕を掴み引っ張る

痛い痛い!腕抜ける!!

「ひっぱらないで!エース!うでぬけるから!」

上機嫌のエースとお目付役のサツチさんと一緒にお散歩に行くのだった。

「…なあ、今あいつ、エースを呼び捨てにしたか？」

「したな。エースがそうしろって頼んだんだろうか」

「なんか、負けた気分だ（よい）」

なんの話だ、シスコン兄ども!!聞こえてるから!!

—エースサイド—

なんとか許可をもらってニアと出かけることになった。

こいつに対しては過保護なんだな、みんな。まあ、理由はわかるけど…

「にしてもどこ行くんだ？」

サツチが聞いてきた。

「とりあえずその辺の海賊たちでも狩ろうかなと。俺の強さを見せてやる！」

ニカツと笑いおれは体を炎にした。

「おれはメラメラの実の能力者だ。名は体を表すぜ？」

そう言っておれは体を炎に変え、ちょうどそこを通った海賊船を一船沈めた。

「ほー。なかなかやるな！」

「けんかっぱやいね」

ニアが冷静な突っ込みを入れた。

おれはニアたちのところに戻り、ニアの肩に腕を回すと頬をつついた。

「おいおい、もうちょっとねえのかよ。かつこいとこ見せたかったんだぞ？」

「…俺だからいいが、エース。ハルタとかイズウとかマルコの前でそれしたら多分色んなもんが飛んでくるから気をつけろ」

なんだそりゃ!?!なんたってそんな物騒なんだ!!

はははっ!…もう少し早くニアと会いたかったな

これからたくさん思い出作るか!

—サイドエンド—

サッチさんとエースと出かけること数時間。

エースさんが船を見つけたら沈めるからハラハラしてる。

なんでそんな喧嘩っ早い?!それ以前になんでそんなに張り切ってるの!?

あ、そういえば使う機会なかったし、正直忘れてたけどわたし魔法ってやつが使えるようになったんだっけ?

でもどうすればいいんだ?イメージすればいいのか?

うーん、物は試しだ!

わたしは両手を合わせ銃の形にして構え、指先付近から水を発射させるイメージをする。

ドオオオン!!

ハイド○ポンプ並みの勢いで指先付近から水が出てエースを背後から狙ってた敵を飲み込んだ。

…なんでもありか、わたし!

慌てて構えをとき、何事もなかったかのようにエースを傍観するがサッチさんが逃がしてくれるわけもなく質問タイムが始まった。

「おい。何もなかったかのように振る舞うな。なんだ、今のは」

「え、つとく。まほう?」

「俺に聞くな!なんだ?異能は拒絶だけじゃないのか?」

「ロキにかばってケガしたときくらいかな。たぶんそのへんでめぎめたのか、できるようになってた」

「なんでいわなかった?」

「かくしてたわけじゃないの。わすれてただけなの」

「忘れてた、って……ったく、オヤジに報告するぞ?」

「うん。」

圧倒的にやらかした。

まあいいや。彼らに隠し事はしたくないし、言いふらすような人もいないだろう。

…けど、やっぱり不安だ。

こんな力：能力者じゃないのに使えるなんて、わたしは彼らの目
人として写ってるだろうか。

そんなことを考えてるとサッチさんがわたしの頭に手を乗せた。

「大丈夫だ、怯えるな。お前がどんな力を持ってようが俺らがニアを
恐れることはないから安心しろ」

なんでもお見通しらしい。ちよつと悔しいけど嬉しい。

サッチさんと話しているとエースが戻ってきた

「おい、ニア！お前も能力者なのか!? さっきのすげえな！」

屈託のない笑みでそういう。：なんて純粹な子！

彼の質問にサッチさんが複雑な表情で答える

「あー、エース。今のは内密に頼む。こいつは能力者じゃないんだ。
だから俺らはいいつに對して過保護なんだよ。」

「：そうなのか?! わかった！秘密だ！」

：素直！そして純粹！なんていい子なの!!

そうしてるうちにあつという間に1日が終わりわたし達は帰路に
ついた。

―サッチサイド―

エースがマルコの許可を取ってニアと出かける事になった。

なんつーか、行動力あるな。

エースが次々と海賊船を沈めていく。：なかなかやるじゃねえか。

さすがオヤジに何度も喧嘩売ってただけのことはある。

ニアが隣でコソコソ動いていたからどうしたのか思い視線を向け
ると両手を合わせ指を銃の形にし、その先端からエースの背後を狙っ
てるやつめがけて水鉄砲を発射させた。

いや、水鉄砲なんてもんじゃない。何つー勢い！水のビームだ！

：敵が哀れだ：。

つて、うん? こいつ、拒絶だけじゃねえのか?!

俺が聞くと素直に答えてくれた。

：あのニアが泣き叫んだ件以来、こいつは素直になった。

良いことなのか少しは誤魔化して欲しいというか：

なんでもその時くらいに使えるようになったらしい

なぜいわなかったのか？と聞くと『忘れてた』と答えた

こんなすげえ力に目覚めといて忘れてたってなんだ!!

っーか、なんでもありかこいつは!!

ニアを見ると俯いていた。

まあ：そりや怖いよな。自分でもよくわからない力持ってたんだから。

俺はニアの頭に手を乗せ「お前がどんな力を持ってようが俺たちがニアを恐れることはないから安心しろ」と言うと、安心したように肩の力を抜いた。

：とりあえずはオヤジに報告だな。マルコが知ったらまた閉じ込められそうだ

可哀想だが仕方ねえよなあ。こいつ自身、それを理解してるからいいが、俺らも箱入りのようにこいつの自由を奪うのは気がひけるんだ。

子どものうちから満足に外を歩けないって可哀想だよなあ。

だが、ニア。絶対守るから安心してくれ。傷つけさせはしない

あまり外に出してやれなくてごめんな…

―サイドエンド―

第28話 ちよつとかなり無茶なこと

「ただいまー」

「帰ったぜ」

「戻ったぞ」

ニア、エース、サッチが日帰りの散歩から帰ってきた。

「ニア！船内を案内してくれ！」

「いたたた！だから、うでひっぱらないで、エース！」

帰るや直ぐにエースがニアを連れて船内へと行った。

ふと、サッチが真剣な表情になる

「オヤジ。ああ、マルコとビスタとイズウとハルタも。ちよつといいか？」

彼の真剣な表情に彼らはただ事ではないと悟り、聞く姿勢に入った。

「ニアの事なんだがな、なんか拒絶とは違った別の力が使えるようになったらしい。」

「別の力？」

「ああ。魔法、って言ってたかな。あいつが両手で銃の形を作って指先から水のビーム砲みたいなの出したの見ちまつて聞いたらそう言ってた」

「はあ？なんだそりや。マジかよい」

「なんでもありか！あいつは！」

「水のビーム砲って、なにそれ。見たかった」

「頼んだらやってくれるんじゃないか？」

確かに彼女なら頼めばやってくれるだろう

…が、そんなことよりも。と白ひげはニアの心配をする

「サッチ…。ニアは怯えていなかったか？」

「さすがオヤジ、鋭いな。ちゃんとフォローはしといたぜ？お前がどんな力を持ってようが俺たちがニアを恐れることはないから安心してろってな！」

サッチがそういうと白ひげはどこか安心したように笑った。

「グラララ…。そうかア。ならいい」

「だが、それも能力じゃないんだろ？」

「ああ。だからこそこのメンバーには知っておいてもらおうと思っ
な」

「じゃあ、ちゃんと見ておかねえとな。あいつすぐ隠すから」

「結構素直になったろい。あの件以来」

「そうだね、けど、万が一ってのががあるから」

自分の妹がまた一人で悩まないか心配するシスコンたちであった。

「ニアく！こつそり抜け出して星見にいかねえか？」

「エース、なんでそんなにげんきな…。！」

船内の案内をした後エースに振り回されて疲れて果てていたわたし

なのにエースはまだまだ元気だ。

何故!?体力馬鹿なの?!

「だってよ、楽しいんだ！ニアに会ってから楽しくてしようがないん
だ！」

そんな笑顔で言われると断れない。

どうしよう、と悩んでるとイズウさんが来た。

「ははは！すごい懐かれたなニア。だがな、エース…。悪いんだがそ
いつはあまり外に出してやれない。わかってくれ」

「可哀想じゃねえか？それ。そりやたしかに目立つ容姿してるから目
立たせたくないってのは分かるけど」

「…容姿だけじゃないんだ、こいつは。俺らが常にニアの側にいるの
も深い訳がある。お前がもう少しここに馴染んだら話してやるから
それまで我慢してくれ」

「…言ったな！絶対だぞ!!」

イズウさん、上手い！

「じゃあニア、一緒に寝よう！」

「…それはダメだ!!」

隊長だけでなく隊員からも猛反対を喰らった。

…うーん、この人も良い感じのシスコンになりそうだな。

エースが仲間になってから数ヶ月。

わたしは来る日も来る日もエースに連れ回されていた。

外に出せない分、船内で強制鬼ごっこやらかくれんぼやらをしていた。

「あいつ、最近よくエースに連れ回されてるよな」

「なんでもニアがエースの心開いたみたいだぜ？」

「さすがうちの天使！」

傍観しないで助けて?!

この人、食事中とか会話中に寝るし…なんていうか、天然なの?!

わたしじゃツツコミきれない!!

「…ニア、ちよつと来てくれないか？」

エースがなにやら真剣な顔をしてわたしの手を掴むと先を歩いた。

え？何?!急にどうした!?

彼はオヤジさんの部屋の前まで行くと一呼吸置いてからノックをした

「オヤジ、話があんだ。ちよつといいか？」

エースがそういうと中から「いいぜエ」と聞こえエースは中に入った。

「どうしたんだア?こんな時間に…。ニアまで連れてきて」

「ああ、ニアを連れてきたのは…こいつから勇気を貰おうと思っただけ」

「なんん?どういう事!?わたしそんなパワー与えられるような人じゃないよ!？」

「あのおよ、オヤジ。おれ、実はロジャーの…海賊王の息子なんだ。」

…あ、それを言うためにオヤジさんを尋ねたのね。で、わたしはそれを知ってるから一緒に連れてきたと。

もしもし、エースさん。握ってる手に力入ってるの気づいてる?地味に痛いよ?」

「そうだったのか…。似てねえなあ」

「!!おれを追い出さねえのか?敵だったんだろ?」

「話があるって言うから何事かと思えば小せえ事言いやがって！誰から生まれようが人間みんな海の子よ」

「!!」

かっこいいなく

オヤジさん。

エースは「そうか…」と一言言うわたしを連れただま部屋を出た。どこか安心したようだ。

「ありがとな、ニア。…お前って、すげえな」

うん？いきなりどうした？

「わたしはなにもしてないよ？」

「いや、お前がいたからおれは変わった。ありがとな」

そのままエースに手を引かれ、ロビーへと戻っていった。

…手は離してくれないのね。うん

ロビーに戻ると隊長たちがいた。

「あ、ニア！ちようどよかった！」

丁度良かった？なにか用だったのかな？

「ねえねえ！俺のこと呼び捨てにしてみて！」

…わつつ？

なんて言った、ハルタさんこの人？

「エースだけ呼び捨てってずるいなあって思ってさ！だけど今更”隊長”って呼ばれたら距離感じちゃうでしょ？だから呼び捨てにしてみて！」

いやいやいや!!それは無理でしょ!!

「俺もだ、ニア。」

「あ、俺も！」

「俺も頼もうか」

「俺もだよ」

なんなの?!このシスコンお兄ちゃんズ!!

ちよつとかなり無理がある頼みだよ、それ?!

「む、むちやぶりでしょそれ！」

私が反抗すると「ふむ」とビスタさんが言った。

あ、このパターンまた逆らえなさそうな案件が来そうな予感。

「無茶か?…3つくらいの時、3億を超えた賞金首と戦って、5つくらい時には40度近い高熱で雨の中険しい山を1人で登り、8つくらいの方に仲間を庇って斬られても尚、背を向けずに立ち向かう。…俺たちの名前を呼び捨てにするのとどっちが無茶だと思う?」

……………ずるい!この人めちやくちやずるい!!

「うう…。ビスタにいちやにかてない…」

「誰だつて?」

「ビスタにい…誰つて?」…

いま呼べと!?すぐ呼べと?!

「ハルにいく!ビスタにいちやがいじめるー!」

わたしはエースから手を離しハルタさんのところへと向かった。

ハルタさんは嬉しそうにわたしを抱き上げると素敵な笑顔を浮かべた。

あ、これヤバイやつ。不可避案件だ

「ニア!ちよつと呼び捨てにしてくればいいんだよ?」

ダメだこりや。誰に言っても回避不可だ。お兄ちゃんズのシスコン具合がカンストしてる

「ハ、ルタ……………にいちや」

覚悟を決めて言った。が、やっぱ無理!今更呼び捨てとか無理!

「ははは!いいじゃねえか、ニア!名前くらい呼び捨てにしてやれば!本人たちもそうしてくれって頼んでるんだからよ!」

呑気すぎか!エース!!

「うう…。いまさらはずかしいよお…」

両手で顔を隠して言うとお兄ちゃんズが頭をわしやわしやしてる

「ニアの可愛さが日に日に増してる」

「もつと困らせたくなるな!」

「あまりいじめると拗ねるぞ?」

「拗ねたニアも可愛いから意味ないよ!」

「ハハハ!間違いねえ!」

そのやりとりを見ていたロキアスたちがヒソヒソと話し出す

「ニアが可愛いのはわかるけどうちの船これでいいのか？」

「隊長たちニアのこと好きすぎだろ！俺たちもニアと遊びたいのに……！」

「いや、これはある意味チャンスだ。隊長たちに使乗して俺たちも呼び捨てにさせよう」

「「それだ!!」」

いやいやいやいや!!言っていないで助けて?!ロキアスたち!!

だいたいなんで呼び捨てにこだわるの?!エースをそうしてるから!?!エースは早い段階でそうしてくれて言われたから抵抗なくできたけどあなたたちはちよつとかなり違うよね?!

ましてや隊長だよ!?!ああっもう!考えるのがめんどくさくなってきた!!

「もうっ!ハルター!イゾウ!ビスタ!マルコ!サッチ!わたしもおこるよ?!」

ふふん!どうなつても知らないんだからね!

青雫さんみたいにやっぱなしとか言い出したらもう呼ばないんだから!

「いいな!よしっ。それでいこう!」

「なんか新鮮!もつと早く呼ばせればよかつたかな?」

「よいよい。妹の成長は嬉しいもんだよい」

成長?!なんの成長!?!呼び捨てにするのが成長なの?!

もう好きにしろ!

シスコンお兄ちゃんズ!

「ははは!……今更だがお前チビの時そんな無茶してたのか?」

「してたよい。目離れた隙に血塗れになってるから焦るのなんの」

あれは不可抗力だと思っけどなあ……

「あ、そうだエース。お前を2番隊長にするって話があるんだが……どうだ?」

「おれが?……いいのか?」

その話、ついでのように出していいの?!

結構重要だよね!!?

「ああ、ずっと欠番だったんだ。お前最近活躍してるし、みんなも文句ないってよ。前にオヤジと話してたんだが、受けてくれるかよい?」
「…ニアと居られるならなんでもするぞ」

「ははは!お前もシスコンの仲間入りだな!」

ダメだこの人たち!手に負えない…!

「わたしどこからつつこめばいい…?」

ツツコミ要員を切実に求む。

―エースサイド―

覚悟を決めてオヤジにおれのことを話しに言った。ニアを連れてつたのはこいつがいれば何でもできる。…そんな気がしたから。

オヤジはおれを受け入れてくれた。

ここに来て…この船に乗ってよかった。

ニアに、オヤジに、みんなに出会えて本当によかった

感謝しても仕切れねえ

もつと早くこんな奴らに会いたかったなあ…。

ロビーに戻ると隊長たちに「呼び捨てにしてくれ」とニアが絡まれた。

ここの奴ら、こいつが大好きなんだな。だがその気持ちはわかる。

構いたくなる性格してやがるし、反応が小動物っぽくて可愛い

そういや、おれこいつのことあんまりしらねえな。

捨てられてたのを拾われたって事くらいか。

「成る程な。3つくらいの時、3億を超えた賞金首と戦って、5つくらいの時には40度近い高熱で雨の中険しい山を1人で登り、8つくらいの時仲間を庇って斬られても尚、背を向けずに立ち向かう。…俺たちの名前を呼び捨てにするのとどっちが無茶だと思う?」

ビスタが名前を呼ばせるためにニアが過去にした無茶な出来事を並べたらしい。

…無茶以前によく生きてたな、こいつ!!

そりゃ目も離せなくなるぞ!そのうち死ぬんじやねえの?!

ニアを見ると頬を膨らませていた。

…やべえ、どうしよう。つつきたい…。

いや、そんなことしたら色んなものが飛んでくるってサッチが言っていたな。

隊長たちの勢いに押されてニアが怒って名前を呼び捨てにした。

…嬉しそうだな、こいつら。

その後、ついでかのようにおれに2番隊隊長になるか？との話をした。

隊長…か。おれでいいならやろう。

オヤジに、みんなに恩返しをしたい。ここで頑張ろう。

ーサイドエンドー

なんなの？本当に。みんなシスコン拗らせすぎじゃない？！

わたしもブラコンになって思ってたけど、比じゃないよ！

「ニア。なんだ？まだあの時のこと怒ってるのか？いい加減許してやれよ！」

「おこってないよ！ただ、いまさらよびすてにしろっていわれても…にいちやたちはにいちやなわけで…」

「んー、よくわかんねえけど、呼び捨てにしたって兄貴なことに変わりはねえだろ？」

…この人、たまに確信つくよね。

それもそうか。

「むう、しかたないな…：…っ、ティーチ…にいちや。ごめんエース、わたしもどる」

エースと一緒に食堂へ向かうとそこにティーチがいた。

できれば関わりたくない。そう思ってわたしはそこから去ろうとしたがエースに腕を掴まれてそれは叶わなかった。

「どうしたんだよ？急に。…って、お前顔が青いぞ？熱でもあるのか？」

「ねっは、ない。ただ、ここに、いたくない」

「…：…？」

入り口付近でエースと話しているとティーチがこっちに気づいた。
あのキラリとした凜猛な目がわたしを捉える

「ゼハハハハ！エース隊長にニアじゃねえか！どうしたんだ？そんなところで！こっち来いよ！」

行きたくありません。

わたしあの人一回睨みあげたよね?!なんでそんな親しげに話しかけてくるの!?

エースがわたしの手を引きティーチのところに向かう。

わたしはティーチから離れるべく、エースを挟んで座った。…やっぱり怖い。知らず知らずのうちにエースの腕を掴んでいた。

……今更かもしれないけどーついい？

服を着ろ！エース!!

「そーいやティーチ、お前結構な古株なんだろう？俺みたいな若いのが隊長でいいのか？」

「ゼハハハハ！いいのさ、俺はそういう野心がないからな！やってやってくれ、エース隊長！」

嘘つけ。野心の塊のくせして。

「ニア！そんな縮こまってたら顔見れねえだろ？こっち来いよ、ゼハハハハ！」

俯いているとエースが席を立ち、わたしを抱き上げる

「なんかこいつ調子悪そうだから船医に見てもらってくるな！悪いな、ティーチ！」

…察してくれたのかエースはわたしを連れてその場を後にした。

ロビーまで行くとわたしを下ろし、心配そうに聞いてきた。

「どうしたんだ？ニア。あんなに怯えてよ」

「うん、ごめん」

謝ると怪訝な顔をされたがそれどころじゃない。

やっぱりあの目は嫌いだ。この前はなんであんなに冷静に返せたんだろう？

「エース！ニア！…どうした？暗い顔して」

サツチさんとマルコさんがロビーにきて、わたしたちを見るなりそ

う聞いた。

…察しがいいな

「こいつがいきなり怯えちまってよ、青い顔してるからどうしたんだろうと思つて。」

「ニアが怯えた？……ティアチか。」

「だな。この船でニアが怯える要因はそこしかないよ」

「え、たしかにティーチには会ったが…なんだ？ティアチ嫌いなのか？」

エースがそう言うのとマルコが返した。

わたしがそれどころじゃないことを察してくれたんだろう

さすがお兄ちゃん。

「ああ、お前も隊長になつたんならニアの事少し知つてほしいな。結構連れ回してるみてえだし。場所を変えるよ、ついてこい。サッチ、ニアを頼むぞ」

「任せろー」

マルコがエースを連れて人気のないところへ行くのを見送るとサッチが口を開いた

「お前もちよつとこい」

彼がわたしの手を引き、部屋に入る。

「ここなら誰もこない。…前からティアチが怖いって聞いてたが、その理由を聞いてもいいか？」

「……あのひとはきつと、わたしをひととしてみてない。かれのめにうつてるわたしはかれにとって、やくにたちそうなどうぐ。あのめのおくにあるやしんにあふれたどうもうなひかり。それがわたしをとらえてはなさないの。だから、こわい」

「…野心に溢れた獰猛な光…か。なるほどな」

「ねえ、わたしもひとつきいていい？」

ずつと思つてたこと、ちやうどいい機会だ。聞いてみよう

「どうしてにいちやたちもとーさんもわたしをしんじてくれるの？ティーチのこともそう。なんのかくしようもしようこもないんだよ？わたしがただ、そうおもうだけ。なのに、なんねんもいっしょにい

るティーチよりどうしてわたしをゆうせんしてくれるの?」

それは素朴な疑問。普通に考えてそうだ。

ずっと鳥籠のなかの小鳥のように船の中からあまり出してもらえず外を知らない子ども言葉はどうして信じられるのか

「あー、きちやったかその質問。まあ、そろそろ聞かれるとは思ってたんだけどなあ…。うーん、どうしてって言われると困んだよな」

困る?なんで?

「俺たちがお前を信じただけだ、ほかに理由なんてねえよ」

…意外と単純。そっか。

いつもみんなが難しく考えすぎて言うのはそういうことなんだ。結構単純なんだな、何にしても

「それに、お前嘘下手だし!」

「それはよけいだよ!」

ははは!と笑いながらわたしの頭を撫でる。どこまでも優しい人たちだなあ、ほんとに

第29話 誘拐

ーガチャ

部屋から出るとイゾウがドアの近くの壁にもたれかかって腕組みをして立っていた。

「籠の中の鳥のように船からあまりだせず、人との関わりがない中でお前は誰よりも人の感情に敏感だ。」

…ん?!いきなり何?!どうしたの?!

「…何をポカンとしてるんだ?俺たちがお前を信じる理由だ。エースだってそうだろう?お前が辛そうだっていつて声をかけ続けたお陰でこうして今がある」

「なんだ、聞いてたのか、イゾウ」

「サッチがニアを連れて部屋に入っていくのが見えてな、何事かと思っただ。」

マルコといい…盗み聞き好きか!

「ごめんね、わたしのせい…。なかまはうたがいたくないよね」

そう言うといゾウにデコピンされた。

「あつー!」

驚いて顔を上げて額を抑える。

「気にするな。俺らは俺らの信じたものを信じるだけだ。お前もそうだろう?」

…うん、その通りだ。

カツコいいなあ、お兄ちゃんは

「うん!ありがとう、イゾウ、サッチ!」

そう言うとき彼は口角を上げる

「ふむ、やっぱりいいな。」

「ちよつと照れくさいけど」

ちよつとか!

こっちはかなり抵抗あるよ!呼び捨てにするの!

ーエースサイドー

マルコに人のいない部屋に連れられてニアの話聞く。

「あいつはな、非能力者で拒絶の力が使えるんだよい。ありとあらゆる物事を”否定”する。そんな力だ。簡単に言えば無くなった腕もその事実を拒絶すれば元に戻しちまうってことだな。」

…なんだ、それ。

無くなった腕も元に戻す?! そんなの回復とかそんなレベルじゃないぞ!? そんな力持ってたのか、あいつ

ん? ちよつとまで。否定する力…無くなった腕も元に戻す…

まさか!

「それって、死んだ人間ですらその事実を”否定”したら生き返るってことか?!」

「……………察しが良くて助かるよい」

……………っ!!

それをニアは自覚してるのか?! いや、きつとわかってる。だから自分からもあまり外に出たがらないんだ。何があるか分からないから「それでこの前、魔法? ってのが使えるようになったのに気づいたらしい。お前も見たんじゃねえかよい?」

あの水のビームみたいなやつか。

サッチも能力者じゃないって言ってたな。

「だからお前らはニアを外に出さないのか? 出しても甲板だろ?」

「まあ、そう言うことだよ。ニア本人もちゃんと理解してるし、あの容姿だ。外に出ても満足に歩けやしないだろう」

たしかに。おれたちはいいが、よくよく考えたらあの見た目は普通じゃない。そういや、ニアも言ってたな。「ここから一歩でも出ればきつと差別の対象になる」って…。

あいつがあんなに明るくて真っ直ぐ育ったのはこいつらが側にいたからか…

「なのに人の感情にはすごく敏感でな、お前もそうだろ? ニアの奴、お前が辛そうな顔してるって言ってずつと話しかけてた」

そうだ。事あるごとに話しかけてきた。何度「構うな」と突き放しても大丈夫? って聞いてきてくれた。

「だから俺たちはあいつの味方をしてやりたいんだ。…ニアはティーチを警戒している。結構前からだが、ティーチが怖いつて距離を置いてるんだ。」

…だからさつきあんなに怯えてたのか。

「それで最近になってティーチがニアの情報を集め出した。これはきつと何かある。だからエースも少し気にかけておいてくれよ。俺たちはニアを好きで閉じ込めてるわけじゃないんだ。あいつは知られちゃいけない存在なんだよ！」

「わかった。気をつけるよ。話してくれてありがとな！」

あいつも苦労してんだな…。

聞かねえと何も喋ってくれないくせして人のことは知りたがる。

あの小さな子を支えてやりたい。そう思った。

ーサイドエンドー

マルコ、エースに何話したんだろう。

あれ以来、前以上にエースがくつついてくるようになった。そのかわりあまり連れ出そうとはしなくなった。

行動力がかなりあるからいろんなところ飛び回ってるみたいだけど暇な時とか船にいるときはほとんど側にいる。

「なあ、見てくれニア！これ、俺の弟なんだ！」

エースがある手配書を持って指をさした。

麦わら帽子を被って満面の笑みを浮かべた顔写真。目の下にはキズがある

「モンキー・D・ルフィ？へえ、エース、おとうといたんだ。」

「ああ！オヤジたちにもみせてくる！」

嬉しそうにそういうと早足で甲板へと走っていった。

弟か。あの麦わら帽子…シャンクスさんのかな？

あの人、今麦わら帽子してないもんね、前はしてたのに。

にしても、初期手配額が3千万ベリーか。曲者だなく

さすがエースの弟。

「やあ、ニア。珍しいね、1人かい？」

「あ、イオンにいちや！」

「隊長たちに便乗してイオンでいいと言ったでしょ？ふふつ。まだ慣れないかい？」

「…うん。くせみたいなものだよ。そのうちなれるかな、ね！イオン！」

「そうだね。…おつと」

イオンが珍しくロビーにきた。

彼は何か気づくと自然な動作でわたしを背に庇った

「何の用だい？ティーチ」

「ゼハハハ！イオンじゃねえか！お前がここにいるのは珍しいな！」

「そうだね、ボクはあまり図書室からでないから。」

「よお、ニア！最近エース隊長に連れ回されてるみてえじゃねえか！疲れねえのか？」

正直疲れるよ！あんなに体力馬鹿じゃない！！

けど、それ以上に楽しいからいいんだ。というかこの人なんで隊長がいないタイミング見計らってくるの?! ストーカーなの!?

「うん、めがまわりそうなくらいだけどたのしいよ！」

「…相変わらず、籠の鳥やってんなあ。」

「ふふつ、健気じゃないか」

イオンがわたしをかばいながらも、ティーチに勘付かれないうように自然に会話する。

この人やっぱりすごい。

彼が懐から懐中時計を出すと「おつと…」と言ってティーチを見た
「もうこんな時間だ。ボクたちはこれから用事があるんだ。ごめんね？行こうか、ニア」

そう言っつてイオンがわたしの手を引き図書室の方へと向かった。

…用事なんてあったっけ？いや、きつとイオンが気を回してわたしをティーチから離してくれたんだ

しばらく歩くとイオンが話しかけてくる

「大丈夫かい？ニア。青い顔をしているよ？そんなに彼が苦手？」

「…うん。」

「まあ、彼はボクも好きじゃない。あの笑い声…耳障りだ」
「イオンが少し腹立たしげに言った。

えっ!? イオンの口調が乱れたところ初めて聞いたかも!!
このひと、めちやくちやかっこいい!?

図書室に行くの本が積まれていた。

「…いい機会だね、久しぶりに勉強していくかい?」

「うん! やる!」

その日はイオンと一緒にまた昔のように本を読んでいた。

「ニア!」

「ルーカス、ロキアス、カルガン? どうしたの?」

ロビーのソファに座っていると三人衆が声をかけてきた。

「居たから声をかけたただけだ!」

「天使がいるのに声をかけない術はない!」

「そうだな」

「どういう事だ…。しかも天使って」

「ニアはよ、その。外に出たと思って思わないのか?」

「隊長たちだっけ好きでニアを閉じ込めてるわけじゃない。頼んだら少しくらいは出してもらえらさう?」

「ニアがいいならいいんだけどよ、ときどき思うんだ。…天使みたいな翼があったらニアはここからでてっちまうんじゃないかって」

窮屈してないか? と、そう言った。

「ふふっ! しんぱいしすぎだよ! わたしは好きでここにいるの。はねがあつたからっていつてどこかにいくことはないよ。わたしのいえはここだからね!」

「!!!」

そういうと三人衆は嬉しそうな顔をし、抱きついてきた。

「やっぱり天使!」

「うちの妹天使!」

「ニアエル万歳!」

最後のは何か違う気がする…

そう、わたしの家はここなんだ。

外の世界を知らなくてもいい。外に出れなくてもいい。

わたしはただこの人たちと一緒にいたい。それ以上は何も望まないよ

だから、安心してよね。

ある日甲板でエースと喋っているとサッチが歩いてきた。

「おっ！相変わらずニアにべったりだな、エース！マルコに劣らないシスコン具合だ！」

「ハハハハ！そうだな！ニアといると安心して安心するんだ！」

人を安心させる力なんて持ち合わせてないけどなー

まあ、いいか。それが本当なら嬉しい

「ああ、そうだ。2人とも！いいものを見せてやるよ」

そう言っつてサッチは変な模様の木の実を取り出した。

「あ、それ悪魔の実か！」

「ああ、まだなんの実かはわからないけどな」

悪魔の実か。能力者になったら泳げないんだっけ？

じゃあ、なんの実かわかるまでは食べない方がいいのかな？

能力を得たからっていつて絶対に強くなるとは限らないんだろうか？

まあ、わたしには必要ないけど。

サッチはあれどうするんだろうなあ

ー時は迫り、幸せは壊れるー

月明かりが妖しく光る夜……。暗闇の中で鈍く光る爪から滴る血……

血を流して床に倒れ伏すサッチと耳障りな高笑いをするティーチ

ー……え……？

なに………これ………？

………なんで………

なんでサッチが倒れてるの？

ティーチの持つてる鉤爪についてる血は誰のもの？

や、やだ………

やだやだやだ!!

夢?!

夢なら覚めてよ!!

「やあっ!!!……はあっ……はあ……。ゆ、ゆめ?」

自分の叫び声で飛び起き、さっきの光景は夢だった事を確認する。
嫌な汗が額から流れる

夢だとしてもわたしはいてもたってもいられなかった。

飛び起きた状態でそのまま部屋を飛び出し甲板まで一直線に走る

夢……だよな?

甲板に行ったらきつとサッチが笑顔で「どうした?」って聞いてくれるんだ。そうだよ、そうであって……

それはただの”願望”

けど、願わずにはいられなかった。

甲板へ繋がるドアを乱暴に開けると体を海の方へむけ悪魔の実を見ながらなにか考えている様子のサッチがいた。

「サッチ?……サッチ!」

「ん?ニア?……どうしたんだこんな時間に。怖い夢でも見たのか?」

わたしが声をかけるとこちらを向いて笑いかけてくる。

……やっぱりただの夢だった?……ならよかった……

サッチの方にゆつくりと近づく。

「サッチ……」

「本当にどうした?様子……」

安心したのも束の間。彼の背後で影が動いた。

彼の後ろにはティーチの姿が……

「……サッチ!?!サッチ!?!あぶないっ!!」

「っ!?うわっ!!」

わたしは駆け出しサッチの腕を掴むと横へと放り投げる。

その時に彼は悪魔の実を落とした。

精神が安定してなかったせいか冷静な判断ができず、わたしは防ぐ術もなしにティーチに貫かれた。

「ゼハハハ!お前の方から飛び込んできてくれるとはな!ニア!!おか

げで簡単に欲しいもんが全部手に入りそうだぜ！」

「ーっ!?はあっ!あっ!!はなっ…せっ!!」

「ゼハハハ!悪いな、ニア!7秒程我慢してくれや」

ティーチはすぐさまわたしから鉤爪を抜くと首を締め上げ呼吸が出来なくなる

「ニア…。一体どうし…ニ、ニア!」

「ゼハハハ!命拾いしたなア!サッチ隊長よオ!!」

「ティーチ!!?てめえ…ニアを離しやがれ!!」

そう言つてサッチは剣を抜きティーチに斬りかかるがわたしを盾にする

「ーっ!」

「ゼハハハ!こうすれば手エだせねえよなア!」

「ぐはっ!!」

サッチの動きが一瞬止まりその隙をつきティーチが蹴り飛ばすとサッチは壁に背中を打ちつけ倒れる

「ーっ…!!!(サッチ…チ…)」

サッチの名前すら呼べず、わたしは意識を手放した。

ーサッチサイドー

俺が悪魔の実を手に入れた日の夜。

それを見つめながらどうしようかと悩んでいると甲板へと繋がるドアが乱暴に開いた。

何事かと顔を向けるとニアが肩で息をしながら俺を見ていた。

「サッチ?…サッチ!」

「ん?どうしたんだニア?こんな時間に…」

明らかに様子がおかしい。

怖い夢でも見たのか?

ニアはふらふらとしながら俺の方に近づいてくる。

何かあったのだろうか?

そう思っているとニアの表情が変わった。

「サッチ!あぶない!!」

「っ!?うわっ!!」

いきなりニアが駆け出したと思ったら俺を横へと投げ飛ばした。

こいつ見かけによらず力あるな!!

一体どうしたのかと思ひ顔を上げると信じられない光景が目に見えた。

ティーチが鉤爪を持っていてその爪には血がついている。

そして奴に首を締め上げられているニアが苦しそうな声をあげていた。

ニアの下には血が滴っている。そこはさっきまで俺がいた場所だった。

……っ!!俺の代わりに刺されたのか!!

「ゼハハハ!命拾いしたなア!サッチ隊長よオ!!」

「ティーチ!?てめえ…ニアを離しやがれ!!」

俺はすぐに剣を抜きティーチに攻撃するが奴はニアを盾にする。

なっ!!あつぶな!!もう少してニアを斬るところだった。

そんなことしたら後悔なんてもんじゃ済まねえ!!

俺の動きが止まった一瞬の隙に奴は俺の鳩尾に蹴りを入れ、船の壁に背中を打ちつけ一瞬呼吸が出来なくなる。

くそっ。ニアは…ニアは無事なのか?!

痛む体を無理やり動かして必死に顔を上げニアを見ると気を失っているのか全身が脱力し、ピクリとも動かなかった。

そんなニアをティーチは肩に担ぎ俺が落とした悪魔の実を食べる。

「ーっはあ!まつじーなア!!ゼハハハ!ついに手に入れた、ヤミヤミの実を!!ついでにニアもなア!ゼハッ!ゼーハハハッ!」

耳障りな高笑いに殺意を覚えるが、逃げるティーチを見ていることしかできなかった。

「ニアッ!!ニアーッ!」

俺は痛む鳩尾を押さえニアの名を叫ぶがそれで彼女が戻ってくるわけじゃない。

でも、そうすることしかできなかった。

悪魔の実なんかどうでもいい!!

ニアを…妹を守れなかった！

それどころか庇われて…あいつの言う通りだ。

ニアのお陰で俺は今、生きている。

「何の騒ぎだ?!」

俺の叫びが聞こえたのか船内から人が集まってきた。

「サッチ?!どうしたんだよい!何かあったのか?!」

壁に寄りかかってぐったりしてる俺を見てマルコが心配する。

「おい、これは誰の血だ?」

イズウが甲板の床についてる血に気づいた。

俺は何も答えなかった。いや、答えられなかった。

シヨックが大きすぎて、顔を伏せたまま微動だにもしなかった。

「何とか言え!どうしたんだ、サッチ!!」

ビスタが俺の胸ぐらを掴んで問い詰める。

そこでやっと口を開くことができた。

自分でも驚くくらいの掠れた声が出た。

「…ニアが……攫われた。」

「…え?」

その一言で静寂が広がった。誰もが信じられないとでも言うように

「その血はニアのだ。俺をかばって刺された。そのあと首を絞められて気絶させられて、そのまま攫われた。…なにも、できなかった」

俺がそう言うと、その言葉に返したのはハルタ

冷静だけどその声は怒っていた。

「誰に、攫われたの?」

「………ニアがこの船で唯一警戒していた奴だ」

「!!!」

名前は出さなかった。それで通じるから。

「くそっ!まさか裏切るとは……!」

イズウが右手で拳を作り左手の掌に当てる。

「チイツ。まずは行方を追うぞ!……立て!サッチ!!」

マルコが一喝し俺の襟を掴むと無理やり立たせる。

「裏切つてニアを攫つて逃げ出すとは……よほど殺して欲しいみたいだな」

ビスタが静かに殺気立つ

「ニアは絶対に取り返す。許さない……ティーチ！」

ハルタが怒りを露わにする。

だが、誰も俺を責めはしなかった。それが責められているようで苦しかった。

いつそのことお前のせいだと、お前が守れなかったからと、責めてくれれば楽なのに……!!

「なんでっ……、なんで誰も責めねえんだ!!俺のせいで攫われちゃったのに!あいつにまた、怪我っ……させちゃったのに……!」

「……なぜお前を責める必要がある?悪いのは裏切ったティーチだ。サッチを責める理由はない」

「泣き事言ってる余裕があるなら大丈夫だよ。とりあえず夜が明けるまで待つぞ。話はそれからだ」

…イゾウ……マルコ……

そうだ、落ち込んでる暇なんてない!早くニアを助けねえと!!

「あいつ、まず飛び込む癖を直させた方が良さそうだな」

「本当それだね。毎回毎回…自分の体を盾にするのはやめて欲しいよ」

「全くだ。あいつの体が鉄でできてるわけじゃあるまいし」

「鉄でできてたらただのロボットだろう」

…イゾウ、ハルタ、ビスタ、マルコ

…ありがとう、落ち着いたぜ。…つてあれ?

「エースは?」

「ああ、あいつなら寝てる」

「二寝てる?!?!」

これだけ騒ぎで起きねえってどれだけ爆睡してんだ!!

「俺でもサッチの叫び声で飛び起きたのに。ある意味すごいね、エース」

ハハハ…

みんな起こしちゃったのか。悪いな
：ニア、絶対助けに行くから：無事でいてくれ
ーサイドエンドー

第30話 逃走

ーエースサイドー

朝起きるとニアがいなかった。

部屋にもいないし食堂にもいない。

……どこ行っただんだ？

俺は甲板に出てニアの姿を探すがどこにも居ない。

見渡すとマルコが目に入る。

「マルコー。ニアはどこだ……って……どうした？」

声をかけてからようやく気づいた。

なんだか空気がピリピリとしている

「……エース。落ち着いて聞けよい。ニアは……攫われた」

「攫われた!?いつ、誰に!？」

「落ち着いて聞けって言っただろい。昨日の夜、ティーチにだ。今捜索中だよい」

ティーチだと……!!?

くそっ、注意しとけって言われてたのに……!

あの野郎……やりやがったな!!

おれがニアを取り戻す!そして、ティーチに制裁を加える……!!
すぐに旅に出る準備をした。

昼下がりに準備を終え甲板へと向かうと、みんな集まっていた。
た。

「なんだ、その格好は?どこへ行くつもりだ、エース」

「おれがニアを連れ戻す。」

そう言っつて船から出ようとするとマルコに止められた。

「さてよい!今、ティーチの行方を捜してる!一人で行動するな!」

……言いたいことは分かる。分かるが……

おれはニアとの思い出を振り返る。

『あなたのほうがくるしいってかおしてるよ』

それはおれを暗闇から救ってくれた。

『ひとりでなくのはさむいから』

心を救ってくれた

『だってエースおにいちちゃんはかぞくだもん!』

存在を認めてくれた。生きる意味を与えてくれた…。

おれはあいつに何を返せた?なにをしてあげられた?

「あいつは!おれに光をくれた!裏切り者にくれてやるわけにはいかねえ!」

「エース。いいんだ、今回は。おれも嫌な予感がしてた。ニアがティーチを警戒していたことを知りながら、なんの対策もしなかった俺の失態だ。おれがなんとかする…ニアは殺させねえよ。わざわざ攫うくらいだから殺しはしてねえだろう。」

「そうだとしても…!そんなの仮定の範囲だろ!!ニアが大人しくティーチに従うと思うか!?逆らって…もし、殺されでもしてたら…おれはっ…」

「エース、言いたいことは分かるが闇雲に動いても何にもならないぞ」
ジョズがおれを諭すが頭に血が上っていて素直にその言葉を受け取ることが出来なかった。

「ティーチはおれの隊の隊員だ!何十年もあんたの世話になつときながらその顔に泥を塗ったんだ!!おれがケジメをつける!おれが…ニアを取り戻す!」

「っ!!まてよい、戻れ!エース!!」

おれは仲間の制止を聞かずに船を飛び出した。

…待ってるニア、今助けに行くからな。

ーサイドエンドー

ゆっくりと意識が浮上するとお腹に痛みを感じた。

体を起こすとジャラ…と、鎖の音がする。見下ろすと両手足に手錠をつけられていた。

なにがあつたんだっけ?

…あ、そうだ。サツチを庇って、ティーチに刺されて首を絞められて…気を失ったんだ。

てことはここはティーチの船の上か。見覚えもないもんな…

そのまま連れてこられたのか。

すごい執念だな、あんなのに好かれても嬉しくない。

…考え事をしていると部屋のドアの鍵が開いて何人かが入ってきた。

その中の1人は二度と見たくもない顔だ。

「…ん？ゼハハハハ！ようやく起きたか、ニア。怪我の具合はどうだ？3日くらい眠ってたなあ！攫ってきて死んでもらったら困る。手当はしたから大丈夫だろうが…。ああ、その手錠と足枷は海楼石だ！お前が能力者なのかはわからねえけど、念のためな！」

いや、痛いよ。

容赦なく貫通させやがってこのやろう。なんでわたしこんなにお腹刺されるんだ…。

しかも、海楼石まで用意して。…苦労なことで

「ホホホホ、なんとも可愛らし娘さんですね、船長。」

「ウイツハハハ！珍しい容姿してんじゃねえか。」

…うるさいな、こいつら。

人を見世物小屋の動物みたいに見やがって…不愉快極まりない

「これもまた巡り合わせ。…お嬢さん、名前は？」

「…るさい」

「ん？ゼハハハハ！どうした？」

わたしは覇気で威嚇し、彼らを睨み上げる

「うるさいんだよ、おまえら…。ぼくはみせものじゃない。きずにひびくだろ？でてけクスども」

「「「「「「「「「!!!」」」」」」」」

霸王色を覗かせ威嚇するとティーチ以外は悲鳴をあげて出て行った。

意外と弱そう…。けど油断は禁物だ。こいつら、得体が知れない…それは自分もか。

「…俺ですら恐怖するその殺気…!!ゼハハハハ！お前を手懐けるは至難の技だなあ！ニア!!大人しく俺に下るってんならその鎖外してもいいぜ？」

「だまれ、うらぎりもの。あのひとたちをうらぎるくらいならしんだほうがましだ。」

「…ゼハハハ！ゼハハハハ！見上げた根性だ。お前がいつ折れるか、楽しみだなア!!」

そう言つてティーチも部屋を後にし鍵をかけた。

：簡単には逃してくれない、か

まずはここから逃げることを考えよう。どうする？

この手錠も足枷も拒絶で消せるだろうけどそんなことしたら能力者じゃないことが1発でバレる。あいつはわたしが能力者じゃないことを知らない、だから海楼石をわざわざ用意した。

部屋の鍵はなんとか誤魔化せるかもしれないが、うーん。

：わたし寝巻きで素足のまま飛び出してきたから武器も何にも持っていないんだよね。クナイの一本くらい忍ばせてこれば良かった。海楼石はダイヤモンド並の強度なんだよね？なら引きちぎれないな。

足は枷で歩きにくいけど歩けないことはない。

鎖で繋がらなかったあいつらの失態だ。

：とりあえず怪我が治るまでは大人しくしておくべきかな？

：いや、ここに居たくない。あの目は嫌いだ。これからあの目に毎日見られると思うと吐き気がする。

すぐにでも逃げよう。

ドアを蹴り壊したら音でバレる。やっぱり拒絶しかないか。

わたしは鍵がかかっている事実を拒絶した。

：凶とでるか吉と出るか…。一か八かだ。

部屋を出て音を立てないように船の壁を登り、平らなところに立つと、奴の仲間に気付かれた。

「あつ！船長！あの子ども!!」

「ん？ゼハハ！どうやって出たんだア?!ニア！そこは危ねえぞ?」

「ホホホ。まさか飛び降りる気ですか？この激流の中に落ちれば助かりませんよ?」

そんなこと知らない。ただ、わたしは彼らを裏切りたくないだけ。

彼らを睨みながら静かに口角を上げる。

「さつきもいったよね？あのひとたちをうらぎるくらいならしんだほうがましだよ。じゃあね、ティーチ」

そう言っつてわたしは海へ飛び込もうとし、ティーチが止めようとこつちに走りわたしの髪を掴む。

「いたいっ！」

「ゼハハ！本当に飛び込む気だったのか?!逃がしやしねえよ、ニア！」
女の子の髪引っ張るとか最低かよ、こいつ!!

どうしようかと暴れると彼の腰に刺さってる剣が見えた

あれ、私を刺した鉤爪か？そうだ！刃物なら……

わたしは彼の武器を奪い髪を切り落とすと彼の手から逃れる。

ティーチは驚いた顔をして呆然としていた。まさか髪を斬るとは思わなかったんだらうね

一杯食わせれたかな?…ざまあみろ

彼を一瞬睨むとわたしは海へと飛び込んだ

ーティーチサイドー

オヤジの船からニアを搔っ攫つて3日。ニアがやっと起きた。

ゼハハハハ！こいついつでも無茶しやがるな!!

まあ、そのおかげでこうして攫つてこれたんだがな！

ラフィットとバージエス、オーガーが言いたいことを言うとニアが怒った。

「うるさいんだよ、おまえら…。ぼくはみせものじゃない。きずにひびくдарろ?でてけクスども」

ー！ー！ー！！

でた。あの殺気のこもった目!!

俺の仲間は一目散に外へ出た。

ゼハハハハ！だれもが恐怖するあの目…！物にしてえなあ！ゼハハハハ！

部屋を出て鍵をかけ、そこを離れるとラフィットが話しかけてきた。

「あの子どもは何者ですか？恐ろしく冷たい表情をしていましたが……」

「あいつはニアってんだ。なかなかすげえやつだぜ？なんせ3つの時に3億の賞金首を殺したんだ」

「3億…!?あんなチビが?!ウィツハハハ!とんだ化け物がいたもんだなあ!!」

しばらく仲間と話しているとバージェスが何かに気づいた。

「あつー船長!あの子ども!!」

見るとニアが船の上に立っていた。

手錠も足枷もしたままどうやって?!いや、まずどうやって部屋を出た!?

鍵はたしかに掛けたはず!

「ホホホ。まさか飛び降りる気ですか?この激流の中に落ちれば助かりませんよ?」

ラフィットが言うとニアはあの殺気のこもった目で俺らを睨みつけてどこか呆れたように笑う。

……こいつ…あんな綿に包まれるような優しい世界で育っておいでこんな嘲るような顔するのか…。

「さつきもいったよね。あのひとたちをうらぎるくらいならしんだほうがまじだよ。」

そう言つてニアは船から飛ぼうとする。

急いでニアの元へ駆けつけ髪の毛を掴む。腕や足よりも髪の方が早く手に届いたからだ。

「ゼハハ!本当に飛び込む気だったのか!?!逃ししやしねえよ、ニア!」俺がニアの髪を掴み引つ張るとニアは手錠の付いた手で俺の腰から器用に武器を奪い自分の髪を切り落とした。

驚いている俺を一瞬睨むと「ざまあみろ」と小さく呟く

そして海へと飛び込んだ。

「見上げた覚悟だなあ!!健気なやつだ!あいつの力は欲しかったが仕方ねえか。ゼハツ!ゼハハハ!ゼーツハハハ!!」

俺は気にも留めてないように笑い声をあげるが、まさか本当に海に

飛び込むなんて思わなかった。……ここの海域は波が荒い。

：もう生きちやいねえな、こりや。

俺は仲間に気づかれられないようにそつとニアの髪を握りしめた。

ーサイドエンドー

：初めてやったけど成功してよかった。

水につかる前に体の周りに膜をはり、水の中に沈んだところで円状に自分の周囲を囲う。

シャボン玉の中に入ってるような感じだ。

ほんと、なんでもありだね。わたし

まあそのお陰で助かったけど……。

ただ、海水の流れが強すぎてコントロールはできないから流されていくしかない。いや、できるんだろうけどなんせ今はそんな力がない。

精神的にも肉体的にも疲れている。

ああ：帰りたい。みんなのところに：

でも髪切り落としちやつたから怒られるかな？それでもいいや。

とにかくモビー^あ・デイツク^場号に、わたしの家に：帰りたい……。

みんな心配してるかなあ……。

あ、とりあえず手錠と足枷は外しておこう。

2つを拒絶し、存在を消す。

：これからどうしよう。行くあてもオヤジさん達の情報もない。

そつと首にしてるチョーカーを触る。

これは貰った時からずつとつけてる、大切な宝物だ。

：うん、わたし頑張る。絶対に帰る!!

まずは人のいるところに行かないと……。

行っても、大丈夫かなあ

顔も髪も隠せない。そんな状態であの人たち以外の人と会うのは怖い。

けど、そんなこと言つてられない。

とりあえずは流れるところまで流されよう

ーエースサイドー

ニア、待つてろ。今助けるからな

ドラム王国、アラバスタ：色々なところをめぐり、おれはやつと
ティーチを見つけた。

「よお、ティーチ。てめえよくもやつてくれたな。ニアは無事なんだ
ろうな？」

「エースじゃねえか！俺に何の用だ？」

「人の倍生きてるお前がおれがここにきた理由がわからねえわけない
だろ？…ニアはどこだ？妹を返せ」

そういうと、ティーチはゼハハハ！と笑った。

「わざわざ追っかけてきたところ悪いんだが、ニアは…死んだぜ？」

……………こいつ、今。なんて言った？

「信じられねえって顔してんなあ！エース隊長よお!!もう一回言つて
やろう！ニアは死んだ！お前らを裏切るくらいなら死んだ方がマシ
だつて激流の海に飛び込んでつたぜ？あんなちっこいのが荒波に飲
まれて生きてるわけがねえ！見事な最後だったなあ！ほら、これが証
拠だ！」

ティーチは懐から銀色の髪の毛を取り出して見せた

それはたしかにニアのものだ。

「……………!!ティーチィー！てめえだけは許さねえ!!」

おれは怒り、ティーチと戦うがやつの能力の前におれの力は無力
だった。

全力を尽くしたがやつに負け、インペルダウンへと送られた。

すまねえ……ニア。

ごめん、ごめんなつ!!守つてやれなくて…!!

お前にたくさん助けてもらったのに、お前になにも返してやれなく
て…ごめんな、ニア

ーサイドエンドー

第31話 心の闇

海流の流れに乗って何日がたっただろうか。

わたしはシャボン玉が浮いている島に着いた。

…あつちのほうが賑やかだな。行ってみよう

街の方に行ってみるとかなり賑わっていた。

ここどこだろう？ 辺りを見回しながら街を歩く。

…痛っ！ 石ころ踏んだ…。

くそう、やっぱり裸足だところなるよなあ…。でも仕方ないか。

お金ないし

そういえばサッチは無事かな？ 蹴られてたのは見たけどそれ以降どうなったかがわからない。無事でありますように

街を歩いているとヒソヒソと声が聞こえてきた。

「何？ あの子。あの髪と目！ 気持ち悪いわ」

小声でチラチラとわたしをみながら陰口をいう大人たち

「ママー、あの子なんで目の色が違うの？」

「変な子ー」

指を指して変な子だという子どもたち

「おい、あいつ。捕まえて売ればいくらつくと思う？」

「高く売れそうだよな」

金儲けのためにわたしを捕まえようと算段する攫い屋

……………わかったた。

あそこから出たらこうなることくらいわかったた。

分かってたけど……………痛い。

ズキズキと胸が痛む。言葉にしない心が突き刺さるような感覚だ

わたしは駆け出す。

隠すように顔を伏せて誰もいないところへ、木が並ぶ森の方へと走った。

前を見てなかったからか誰かにぶつかり尻餅をつく。

「あ、ごめんなき…い…」

見上げて謝ると宇宙服のような変な人たちがわたしを見下ろして

いた。

「なんだえ？お前。…ん？ほお…珍しい容姿をしてるえ。これ程までに目を楽しませてくれるのはいいない。おい、こいつをわちしの養子にするえ。連れてけ」

「はっ」

黒スーツの人達がわたしの方に手を伸ばす。

いやだ、やだやだやだ！そんな目でわたしを見ないで！

わたしは見世物じゃない！

こつちこないで！触らないで…！

「さ、さわるな！」

思わず霸王色を使いそこら一体の人を気絶させた。

…怖い。ここ、怖い！

腕を体の前で交差させ自分を抱きしめるようにする。

確かな恐怖がわたしを襲い鼓動が早くなる

とーさん、にいちゃ！助けて…！

わたしは走った。涙目になりながらも走り続けた。

どこでもいい、人のいない所に…

どれくらい走っただろう。数字の書かれた木がたくさん生い茂っていて、人気はなかった。

茂みの中に隠れるようにしてうずくまる。

わたしは守られてたんだ、ずっと。

愛情っていう温もりに包まれて危険から遠ざけられてきた。

そりや何度も怪我したけど、危険の種類が違う気がした。

そういう感情に触れたことが無かったせいか心のより深いところまで刺さり抜けない棘のようにわたしのを扶える

もう街に行きたくない。怖くてここから動けない…。

膝を抱えて顔を伏せて縮こまる。

「とーさん…。にいちゃ…。わたし、ここにいますよ…」

そう呟く。

…わたしは弱い。

彼らの前で気丈でいられたのは強くありたいと願っていたから。

こんなにも1人が怖いだなんて思わなかった。

街で感じたのは確かな、”嫌悪”

嫌悪、悪意、嫉妬

：わたしが何をしたの？なぜそんな感情を向けられなければなら
ないの？

「うう…マルコお…」

1番最初に出てきたのは長男の顔だった。

「かえりたいよお…。みんなどこにいるの…？」

ポロポロと涙が零れる。

拭いても拭いても溢れてきて止めることができなかった。

籠の中でもいい、外に出れなくても出してもらえなくても、彼らが
近くにいるだけで安心するんだ。

：エースが言ってたな。わたしといると安心するって。わたしも
同じだ。

心細いよ、だれか…そばにいて…。

「あらら。まさかとは思ったがなーんでこんなどこにいるんだ？」

聞き覚えのある声に思わず顔を上げた。

「…泣いてんのかい？もしかして、迷子か？って、お前、その髪どうし
た？」

「ああ、きじ…さん？なんでここに」

それはこっちの台詞だ。と、頭を掻きながらいう。

「世界貴族から連絡があったんだよ。銀髪でオッドアイの娘を探して
捕まえろって。そんな目立つやつお前くらいしかいないだろ？だか
らセンゴクさんに掛け合って俺に行かせてもらったんだ。感謝しろ
よ？じゃなかったらボルサリーノ…えっと、黄猿が来る所だったんだ
ぞ？」

「せかいきぞく…？あなただったたら、なにかかわるの？」

そう聞くと、しらねえか。と言った。

「世界貴族、まあ、天竜人っていつてな。世界政府を作り上げた創造主
の末裔って言われてる存在だ。そいつらに手エだしたり、逆らったり
すると俺たち大将が動くってわけよ。身に覚えねえか？」

…あ、あの変な喋り方した宇宙服っぽい服着てた人たち
まさかあの人達が天竜人？

「…心当たりはあるみてえだな。はあ…しっかしなあ…なんつたつて
よりにもよってシャボンディ諸島にお前が1人でいるんだよ。セン
ゴクさんには少し報告したがお前はまだ海軍では広まってない。そ
のまま静かに隠れてりやよかつたのに…いや、あいつらがお前を野放
しにするわけねえか。何があつたんだ？」

「さらわれて、にげてきたらここにいった」
帰りたい…。と、また膝を抱える。

「お前が攫われた？おいおい、どういうことだ…？あの船からお前を
さらうなんて命知らずなことできる奴がいるのか？」

「どつかいって。だれのかおもみたくない」

「あらら、随分と病んでるな、こりや…。そりやそうか。お前はずつと
守られてきたんだもんな。だが悪いな、ニアちゃん。傷つけずに連れ
てこいってことらしいんだ。大人しく付いてきてくれねえか？」

この人…わざわざ元帥に掛け合つてここにきたつて言つてたよね
なんでだろう？

でも、あれが天竜人つて言うならあんな所行きたくない。

あんな人をオモチャのように見るやつらのことなんて殺されたつ
て願ひ下げだ。

「ここにあなたにころされても…わたしはどこにもいかない。」

「…頑なだな。ニアちゃん、俺だつてお前を傷つけたくねえんだ。言
うこと聞いてくれ」

…話が平行線だ。これ以上は無駄だな。
けど、わたしはどこにも行く気はない

わたしの帰るところはあの船以外に無いのだから。

「…白ひげもお前を探してるかわかんねえだろ？攫われたんだろ？
ニアちゃん。もしかしたら諦めてるんじゃないの」

…やめて…。それ以上言わないで。

「何がどうなって白ひげたちからはぐれたかしらねエけどよ、この広
い海で一旦迷子になつちまったら…生きてないって思うのが普通だ

ぜ？」

彼らがわたしのこと探してないかもなんて一瞬でもそんなこと思いたくない。

「お願い、わたしを絶望させないで…。」

「隊長達だつて…「だまれ、あおきじ」ーっ!？」

わたしは立ち上がり茂みから出て青雉を睨んだ。

彼はわたしの怒気に気圧されたのか数歩後ろに下がった。

「なにもしゃべるな。それいじょういったら…ころすよ?」

「おいおい、こりゃとんだ伏兵がいたもんだな…」

青雉は冷や汗をかきながらわたしを見下ろした

ークザンサイドー

プルプル、ガチャ

「海軍本部…:はあ、銀髪にオッドアイの娘…ですか。…はい、了解しました。」

セングクさんが電伝虫を取り、心当たりのあるワードをいくつか言ったかと思うと電伝虫を切り、溜息をついた。

「仕事だ。世界貴族からで、銀髪にオッドアイの娘を捕まえて欲しいらしい。ああ、無傷で、だそうだ」

「銀髪にオッドアイですか?オー、そりや目立ちますねエ…」

「頼めるか、ボルサリー…:俺にいかせてください…:珍しいじゃないか、クザン」

仕事を自分から受けようとする俺に対しセングクさんが訝しげな表情を浮かべた

「あー、まあなんつーか…」

「なんだ?はつきり言え。」

言っつていいものかねえ…。多分セングクさん胃を痛めるぞ

「はあ、ずつと言うか迷つてたんですけど、結構前に植物園でフードの5人組に会つたの覚えてます?」

「ん?ああ。カスミソウの子の話か?」

「その、カスミソウをくれた1番小さい子。多分その子です。銀髪、

オッドアイなんてそんな目立つ奴、2人も3人もいてたまるか」

「はあっ?!まさかあの子が!?!……だからフードをかぶってたのか。残りの4人はその子が浮かさないようにカモフラージュで……」

ほら、やっぱりうな垂れた。

そりやそうだ。世界貴族に目エつけられたら助からない。

強制的に連れて行くしかないんだ。

「……お前、あの子を知ってたのか?」

「植物園のちよつと前に山で会いましたね、風邪をひいた家族のために薬を取りに来たって。けど、雨が降っててその子も熱を出してたらほつとけなくて介抱した時にフードの下をみたんですよ。」

あながち間違つてはないから大丈夫なはずだ。

なんでこんなに庇つちまうんだろうなあ、敵のはずなのに。

…あいつは堕ちたらいけない。そんな気がするんだ

あいつが心を闇に沈めたら何かとてつもないことが起こりそうな気がして少し怖い

「なるほどな。顔見知りだから行かせて欲しいって事か?だが、私情は挟めんぞ。尚更ボルサリーノの方がいいんじゃないのか?」

「無傷で捕らえろ。なんでしょ?俺のが適任じゃないですか」

「うっ…。たしかに。…はあ、仕方ないな。じゃあ、頼んだぞ。しかしどうしてあんなに可愛い子を…。できれば捕まっつて欲しくない。…ああ、これは独り言だからな!」

なんだかんだでセンゴクさんも私情挟んでるな。

「オー…、クザン。行けたらわっしも行つてみるよオ?」

…ボルサリーノが来る前に逃さねえとな、こりや

しっかし、なんでニアちゃんがシャボンデイにいるんだ!!

内心で文句を言いながらシャボンデイ諸島に向かう。

諸島に着くと、ニアちゃんを探すが…見つかるか?これ。

いや、あんな目立つやつが見つからないわけないんだが…

そーいや銀髪にオッドアイで搜索されてるつて、ニアちゃんフード付けてねえのか?あんなのが堂々と歩いてたら良いのだぞ?!

ん?目立つ…?…?ああ、もしかしたら森の中に隠れたのかもしれ

ねえな。

そう思い森の方へいくがなんせ広いから簡単には見つからない。
…もういないか？連絡を受けてそう時間は経ってないはずだが。

いや、あいつが見つかったから俺らのところに連絡が来るまでに時間がかかった可能性がある。じゃなけりやこんな遠くまで来れねえだろ。あいつが見つかったのは街中だ。数十分でこんな森の奥までこれるわけねえか。一旦もどってみるか…？

「うう。かえりたいよお…。みんなどこにいるの…？？」

唐突に聞き覚えのある声が聞こえ、声のした方を見ると茂みの中に隠れるようにして銀色が縮こまっていた。

おいおい、本当にニアちゃんか？だとしたら白ひげの奴らは何やってんだ！

「あらら。まさかとは思ったがなーんでこんなどこにいるんだ？」

俺が声をかけるとニアちゃんが顔を上げる。

目は赤く腫れてて、頬は濡れていた。…泣いてんのか。

まさかと思うが、迷子か？…って、髪が短くなってる？！

「さらわれてにげてきたらここについた」

そう言つてまた俯き、膝に顔を埋めると「帰りたい…。」と呟いた。
攫われた…だと？！

こいつをあそこから攫つてくるってどんな命知らずだ！

…まさか内部犯か？その可能性の方が高いな。

外部の奴らがそんなことするのは不可能に近いだろう。

白ひげの船で籠の中の鳥のように閉じ込められて来たんだろうな。
きつと外の世界を知らない。

こんな奴が無防備に歩いてたら攫ってくれと言ってるものだ

よく見ると寝巻きのようなラフな格好に裸足だ。本当に攫われたのか。

そーいや、少し前にマーシャル・D・ティーチって奴が七武海に入りたいてって申し立てしてきてたな。…関係がありそうだがまあ、その話はやめとくか。

ニアちゃんはかなり病んでいた。俺と話してる間でもずっと泣き

続け、俺に返す返事もそっけない

世界貴族のところに連れてく前にセンゴクさんのところに連れてって話をしてみよう。できれば俺も捕まえたくない。

まずは白ひげへの執着を諦めさせねえと。そう思っただけで色々と言ってみるがそれがまずかった。

「だまれ、あおきじ。なにもしゃべるな。それいじょういったら…ころすよ?」

今までに聞いたことないくらいの怒気を含んだ声で、見たことのないくらい恐ろしく冷たい人形のような光のない目で俺を睨みつけた。

…なん、だ?こいつは…。ニアちゃん…なのか?

「こりゃとんだ伏兵がいたもんだな…」

俺は冷や汗をかきながらそう呟いた。

ーサイドエンドー

「悪かった。俺が悪かったよ、ニアちゃん。意地悪を言った、ごめんな」

意地悪にすり替えたか。

…戦う気はなかったってことでもいいのかな?

「そう。ほんきじゃないなら、いい。」

それでも涙は止まらなかった。

次から次へと溢れ出て頬を濡らす

「おいおい、そんな泣くなよ。俺が泣かせたみたいじゃねえか」

「きえて。ひとりになりたい」

「あのな、天竜人に目をつけられちまったら逃げられねえんだ。…なんとか逃してやりたいが俺にも立場がある。だから逃げてくれ。おまえならできるだろう」

「…:しよくむほうきとおりすぎてしよくむたいまんだね、あなた」

「いきなり辛辣だね!」

彼のあまりの仕事のしなさに思わずそう言う光が青雉の隣に立ち人の姿を生成する

「オー…こんな子がア…:本当にいるなんてねエー…」

ゆつくりとした喋り方と共に現れたのは黄色のスーツをきた青雉と同じくらいの身長の子供の男の人だった

「ボルサリーノ…。」

「クザン…？この子がセンゴクさんの言ってた子どもかい？」

「ああ。そうだ」

「わっしはボルサリーノ。黄猿だよオ。クザンと同じ大将だよオ？お嬢さんはなんていうのかなア？」

「ピカピカのみものうりよくしゃ…。ひかりにんげんのたいしようきぎる」

彼の質問を無視して呟く。

「わっしをしってるのかい？」

「まあね、でもきえてほしい」

「オー…、君、世界貴族に目をつけられた以上逃げれないんだよ…。諦めて捕まってくれないかなあ…？傷つけちゃダメなんだよねエー」
「ボルサリーノ…。ちよつと待ってくれ。あんまりこいつを刺激しないでくれるか？」

「んー？クザン、もしかしてこの子逃がそうとしてるのオ？私情を挟んだらだめだよねエ…？まあ、どうせ行くあてもないんだよオ？」
『行くあてもない。』

…確かに行くあてはない。

けど、帰る場所はある。

ああもう…。イライラしてきた。

我慢してたけどもう怒っていいかな？いいよね？

「…うるさいんだよさつきから！きえろっていつてるだろ!？」

左手の掌を前に出し細い水のレーザーを発射させるとそれは黄猿の脇腹を貫いた。

「ーっ!？」

「ボルサリーノ!?! ツチー! アイヌ フロック 塊・暴雉 フェザントベック 嘴!」

黄猿を撃つと直ぐに青雉が反撃してくるがそれを躲し両手に雷を纏わせる。

電撃の弾を彼らに連射するとすぐに炎へと切り替える。

「なっ!!」

「どいてなよオ? クザン。 やさかにのまがたま 八尺瓊勾玉」

雷と炎の弾を黄猿が光の球体で相殺し、煙が辺りをつつむ。

「アイス塊 ブロック・両棘矛 パルチザン」

煙の向こうから大量の氷の矛が飛んできてわたしに当たる。

覇気を使って気配を読んだがかわしきれなかった。

咄嗟に痛覚を拒絶し気絶だけは防ぐ。

すると煙を掻い潜って青雉が懐に潜り込みわたしの鳩尾に一撃を入れる

その衝撃で壁まで飛ばされ体を打ち付ける。そのまま床に倒れるフリをした。

「おいおいクザン。傷つけちゃダメだろオ?」

「あ、悪い。思ってた以上にやるもんだからつい」

「まあ、その気持ちはわかるけどねえ…」

2人が倒れてるわたしに近づいてくる。

青雉がわたしに触れようと手を伸ばした時…

「……っ!!!?」

「クザン?!」

左手で手刀を作り青雉の脇腹を貫いた。

すぐにその手を抜き黄猿に空気弾を撃つ。

風を操り砂埃を上げ視界を奪うとわたしはその場から逃げ出した。

ークザンサイドー

ニアちゃんの豹変っぷりをみて落ち着かせようとした時、ボルサリーノがきた。

ニアちゃんはボルサリーノの言葉に怒り水のレーザーっぽい何かで彼の脇腹を貫いた。

俺が反射的に反撃するとニアちゃんはそれをかわし、さらに反撃してきた

おいおい…反射神経良すぎるだろ!

ボルサリーノがニアちゃんの攻撃を相殺すると爆発が起こり土煙

が昇る。

その土煙に乗じてバルチザン両棘矛を放ち見聞色を使い彼女との間合いを詰めその鳩尾に肘鉄を喰らわせる。

「おいおいクザン。傷つけちゃダメだろオ？」

「あ、悪い。思ってた以上にやるもんだからつい」

「まあ、その気持ちはわかるけどねえ…」

やべえ……。驚いてやりすぎちゃった。

俺たちは倒れたニアちゃんに近づき彼女を連れて行こうと手を伸ばすと倒れていたはずのニアちゃんが起き上がり手で俺の腹部を貫いた。

「……っ?!?!」

「クザン?!」

彼女は俺を心配するボルサリーノに何かをしようとボルサリーノが吹き飛ばされる

一瞬そつちに気を取られるかすぐにニアちゃんに目を向けると砂埃が舞い俺たちの視界を奪う。

砂埃が収まると彼女の姿はなかった。

……逃げられたか。

「……クザン。……ありや一体何だア？」

体制を立て直し、服を整えながら俺の方に歩み寄ってくるボルサリーノ。

「俺も分からねえ……」

そう言った後にいつか鷹の目が言っていたことを思い出す

『アレには得体の知れない何か潜んでいる。関わらない方が身のためだ』

得体の知れない…「何か」…か。

「能ある鷹は爪を隠すと言うが……とんでもねえもんみつけちゃまったねエー…。皮肉だが逃げてくれてよかったかもなア…」

そうだな。

逃げてくれて逆に助かったかも知れない。

「…ボルサリーノ、大丈夫か？」

「大丈夫に見えるかいイ…？痛いねエー…。あの子、最後わっしに何かしただろオ？肋骨を2、3本持つてかれたよオ。クザンこそ結構な怪我じゃねえか」

「ああ。だが、あいつが受けた傷に比べりや…なんてことないな」

「そうだねエー…。あんな絶望に満ちた目エするなんて相当酷い目にあつたんだろうなア」

あのままあの子を放つて置いて大丈夫だろうか？

だがアレを無傷で捕らえるなんてまず無理だろうな。

とりあえず帰つて報告するか。

…ニアちゃん、壊れねえといいけどな

ーサイドエンドー

第32話 麦わらのルフィ

逃げ出して隠れて、どれくらいが経っただろうか。
何日、何週間と経ってるかもしれない。

なんせ街に行けないから情報も集められない。この前諸島を見回ってる海軍の兵士にあったとき、その人はわたしを見るなり「化物」と言っただけで逃げた。

……もういいよ、どうせ異端児だ。

みんな、みんな消えてしまえばいい。

わたしはいつものように茂みの中で膝を抱えて縮こまる。

どうすればいいんだろう。連絡する手段もないし、何もできない。人と会うのが怖い

こんなにも自分が無力だとは思わなかった。

どれだけの温もりを与えられてきたか、愛情を貰ってきたか…
今になって痛いほどわかる。

「トーさん…、ううっ。」

毎日のように泣き続ける。そのうち涙が枯れるんじゃないか？

涙が出なくなるとき、わたしはどうなるのかな？

ーいつそ狂ってしまおうか…

膝を抱え嫌な感情がわたしを支配すると一瞬だけ涙が止まる

これはきつと抱いてはいけない感情だろう。彼らがわたしから遠ざけていたもの

ふと目の前に影がさし、顔を上げると目の前に鹿のようなトナカイのような動物がいた。

じつとこちらを見つめてる。

「…わあっ！」

「うわあっ!!」

わたしが驚くと向こうも驚いた。

なぜ?!あなたが見てたんじやないの!?

「お、おいルフィ!!こんなとこに子どもがいるぞ?!」

ルフィ…?どっかで聞いたことあるような…。

そう思っていると人が集まってきた。

「どうした、チョップパー……おい、お前！泣いてるのか?!どうしたんだ?!」

「…なんだ?…おつと、こりゃあ…」

今度は麦わら帽子を被った人と緑の髪をした剣士がきた

「な、な、な、なんだあ!」

「銀髪に黄金と空色の目?!なんて綺麗なんだ!」

「スーパー可愛いじゃねえか!」

今度は長い鼻の人に金髪にぐるぐるの眉毛をした人とロボットみたいな人?がきた。

何この人たち……。というか、あの麦わら帽子…もしかして

「…ちよつと!!そんなに困んだら可哀想でしょ?!…大丈夫?」

「…この子、迷子かしら?」

オレンジの髪をしたお姉さんと黒髪の綺麗なお姉さん。

「お嬢さん、パンツ見せてもらっても「だまらっしやい!!」…あいたーっ!」

喋るガイコツ?!何この集団!!

「おれ、ルファイ!お前は?」

「……ニア」

「ニアは何でこんなところで泣いてんだ?」

何で泣いてる…か。

言ったところでどうにもなるわけじゃない

………ん?ルファイ…?麦わら帽子……

あつ!思い出した。ルファイって確かエースの弟だ。あの麦わら帽子もシャンクスさんのかもしれない

「かぞくと、はぐれたの…」

また、「帰りたい。」とどうぞくまる。

「ニアちゃんの家はどこにあるんだ?」

「うみのうえ」

「っ!?まさか、海賊なのか?!」

眉毛のお兄さんの質問に答えると長い鼻の人が驚いた

「かいぞく…。そう、かいぞく。とーさんもいちやもすごいひとなの。すごくて、つよくて、やさしいの。」

「…そのとーさんってひとたちはこの海の前か？後か？」

「だいぶあと、かな。ずっとふねのなかにいたからあまりよくはしらない」

「まあ、こんな目立つやつそんなに出さねえよな」

ルフィさんの質問に答えるとロボットっぽい人が返す。

この人たちは怖くない。

一般市民より、海軍より海賊の方がやさしいってなんなの?!

「にしししっ！決めた！お前をとーさんと兄ちゃんって人たちのところに連れてってやる！」

「はあっ?!?!」

ルフィさんが言うのと反応したのはグル眉の人と緑髪さんと長鼻さん

「おいおい、本気かよルフィ！」

「ヒントが少なすぎるだろ!!とーさんと兄ちゃんってだけでこいつの家族を探すのか?!」

「どどどど、どうすんだよ！そのとーさんってのがおつかねえ奴らだったら!!」

仲間がいろいろ言うがルフィさんは気にも止めず腕を組み仁王立ちでいった。

「こいつがこんなに帰りたいって言ってんだ！帰してやろう!!それに、こいつの家族だってきつとこいつを探してる！にしししっ！」

え、、、いや、ほんとに何言ってるのこの人。

そんなに簡単に素性も知らないやつ受け入れていいの?!

「仕方ないわね。泣いてる子ども見つけたら背を負けるわけにはいかないわ」

「ただ、もう少しヒントが欲しいわね。海賊団の名前はいえるかしら?」

わたしは首を横に振る。

さすがにそれは言えない。

「大丈夫だ！おれが絶対に連れてってやるから泥舟に乗ったつもりでいろ！」

「…それ、しずむから」
わぎとなのか真面目なのか……。ものすごいボケかますな、この人。

ルフィさんがわたしの腕を掴むと引っ張るようにして連れて行くとする

「いたいっ！うでぬける！」

「ちよつとルフィ!!乱暴よ！えつと、ニアちゃん…だっけ？あたしはナミ。よろしくね」

ナミさんがわたしをルフィさんから救出する。

すると、8本の腕がある魚人の人が入ってきた。

「ニユー、話はまとまったか？」

「あ、悪い、はっちゃん！行こうぜ！」

ルフィさんが言うところ一行は再び歩き出した。

「俺はサンジ。よろしくな、ニアちゃん」

「…ゾロだ。」

「俺はウソップ！よく聞け！俺には八千万の部下がいるんだ！」

「俺はフランキーだ！」

「私はブルックといえます。ヨホホホ！」

「ロビンよ、よろしくね。」

「おれはチョップパーだ！もう大丈夫か？」

すごい賑やかな一行だな。

「うん。ねえ、ルフィさん。そのむぎわらぼうしってシャンクスさんの？」

「お前、シャンクスしってるのか?!そうだ、これ預かってんだ！」

やっぱりそうだ。

じゃあ、この人は信用できる。シャンクスさんが認めた人ならきつと大丈夫だ。

「ニアちゃん、四皇をしっているの？あと、いくつなのかしら？」

ロビンさんが聞いてくる。

そりやそうか。普通は気になるよな

「せいにかくにはしらないけど、15か16くらいだとおもう。シャンクスさんはすこしめんしきがあるの」

「「15か16?!」「」
?!!」「」

そんなに驚かなくても!!

どーせ、チビですよ!!

「どう見ても10代前半だろ!」

「合法ロリってやつか…ニアちゃん、可愛い!」

「黙れ、変態!!」

「呼んだか?」

「お前じゃない!!」

…漫才してるのかな?この人たち。

「……盛り上がってるところ悪いんだが、ついたぞ。ここだ」

そこは「ぼったくりバー」と、堂々と書かれた看板の店だった。

中に入るとお姉さんがチンピラを締め上げていた。

こわっ!

「いらっしやい…あら。」

「ニュー!シャツキー!久しぶりだな!レイリーはいるか?」

「レイさんなら今はいないわ。」

「そ、そうか。」

そうこうしてるうちに話が進む。女の人はシャクヤクさんと言うらしい。わたしはロビンさんの後ろに隠れるようにして縮こまる。

ダメだ、やっぱりまだ立ち直れない。いくら彼らが連れて行ってくれるとは言っても怖いものは怖いんだ。

「さて、モンキーちゃん。あなたの一味にそんな子いたかしら?」

シャクヤクさんはわたしを見て言う。

「いないわよね、あなたみたいに活躍してる人の船にそんな目立つ子がいたら噂の的よ」

「ん?ああ!ニアか!さっき、ここに来る前に会ってな!迷子で家族に会いたって泣いてたから連れてきたんだ!おれが連れてってやろうってな!」

「へえ。」

「じゃあ、おれたちレイさんって人探してくる！ニアはここで待つてろ！」

そう言うのとロビンさんがわたしの頭を軽く撫でみんな行つてしまつた。

…どうしよう、今ここで取り残されるのは不安しかない。

「…あなた、ちよつと前に噂になつた子？天竜人に目をつけられて逃げ出したっていう。銀髪にオッドアイの娘って聞いてたけど、あなたかしら？」

この人、情報通かな？

どうしよう。海軍に知らされでもしたらまた追いかけてこが始まる。。。

…ならそうなる前に……

……ダメだ。今はきつと正常な判断が出来てない。

一時の感情に飲まれて思うままに暴れたらそれこそ本当の化け物だ

手を出しそうになるのをグツと堪えて質問する

「だったら…つうほうする？」

「…あつははは!!しないわよ！ふうん。随分と傷ついてるのね。こつちにおいで、あつたかいご飯と落ち着く飲み物用意してあげるわ」

初対面の人の作るご飯なんて食べられない

なに入つてるか分からないし。。。

「いらぬ。おかねももつてないし」

「お金はいらぬわ。さっきのやつから結構ぼつたかつたし、大丈夫よ。そんなに警戒しないで、何もしないわ。だから信じて。ね？」

『信じて』という奴ほど信じられないものだがわたしはこの人を疑いきれなかつた。

「あなたはどこから来たの？」

「それは…いえぬ」

「うーん。じゃあ、ヒントを頂戴。わたし情報通だから少しのヒント

でわかるかもしれないわ」

この人がいい人だつていうのはわかる。

何故そう思うんだろう？

…そんなのは決まっている。船のみんなやルフィさんたちと似たような暖かさ感じるからだ。

疑いきることはできない…：けれど、信用することもできない。

ああ、わたしは心を閉ざしてしまったんだ。

なんて臆病なんだろう。

「…とーさんとにいちやたちがいるところからきた。みんなつよくて、すごくて、やさしいの」

「うん。家族が大好きなのね」

これでわかるわけがないのに優しく答えてくれた。

言ってみる価値はあるかな？

…でも…

いや、勇気をだしてみよう

「いちばんうえのにいちやはね、とりさんになるの。あおいほのおのとーさん。かっこいいんだよ」

「青い炎の…鳥…？…：…つ！！まさかっ！！はあ、それは、言えるわけないわね。わたしですらそこにあなたがいるなんて知らなかった。たぶん彼らはあなただを隠してたのね。」

シャクヤクさんが出来上がったご飯とスープをだして「どうぞ」と言ってくれた。美味しそうな匂いがし、わたしのお腹が小さく鳴る

スプーンで掬い一口食べる。

…温かい。知らず知らずのうちにまた涙が零れる

「ど、どうしたの?!不味かった?!」

泣き出したわたしを見てシャクヤクさんは焦りだした。

…いい人だ。この人も。

わたしは首を横に振る

「あつたかくて。かぞくをおもいだしたの。…かえりたい。みんなに、あいたいよお…」

シャクヤクさんは無言でわたしが落ち着くまでずっと頭を撫でて

くれた。

ーシヤクヤクサイドー

ハチとやってきたモンキーちゃん一味。

そこには見たことのない子が混ざっていた。

：銀髪に黄金と空色の目：。ちよつと前に噂になった子かしら？

大将の青雉と黄猿から逃げたっていう。

聞くと、その子は迷子で家族を探しているらしい。

モンキーちゃん一味がその子を置いて、レイさんを探しにBARを
でるとわたしはその子に話しかけた。

優しく声をかけるけど返事はそっけない。

その表現はどこか影を落としていて全てを諦めたかのような昏い
目をしていた

：こんな子が顔を隠さずに街を歩いていたら差別の対象になるわ
ね。人の悪意に触れてしまったのかしら？

よくみるととてもラフな格好に裸足だった。：どこから逃げ出
してきた：？

わたしがどこからきたのかというと「とーさんとにいちやたちがい
るところからきた」と言った。

その後、覚悟したかのように口を開いた。

「いちばんうえのにいちやはね、とりさんになるの。あおいほのおの
とりさん。かつこいいんだよ」

そう話す彼女はすこし嬉しそうだった。本当に家族が大好きなの
ね…

………つて、青い炎の鳥?!ちよつとまって。

それって白ひげのとこの1番隊長長のこと?!まさかそこから?!

こんな子がいるなんて知らなかった。ましてや白ひげ海賊団に…
どうしてそんなところからここまでできたのか。とか、色々疑問は
あるけどとりあえずご飯とスープを作ってあげた。

彼女は一口食べると泣き出してしまった。不味かったかしら?!

「……かえりたい。みんなに、あいたいよお…」

温かいご飯に家族を思い出したみたいね。
そう泣く子どもに対してわたしは頭を撫でてあげることしかでき
なかった。

ーサイドエンドー

ー海軍にてー

これは少し前の話。

銀髪にオッドアイの娘を逃し、仕方なく帰還した青雉と黄猿。

黄猿が扉を叩き元帥のいる部屋へと入る

「戻ったか……って……クザン、ボルサリーノ。その傷どうしたんだ
？」

「センゴクさん。例の娘、とんでもねえやつですよオ？」

「っ!?まさか、その子に?!」

「やられました。しかもかなり強いです。」

バンツ!とセンゴクが机を叩く。

「次から次へと問題が起こる……! 一体何が起きてるんだ!!」

赤髪と白ひげの接触。

火拳のエースが白ひげに入ってから無くなったが火拳が捕まって
また接触が起きたそう。

シャボンディ諸島に現れた謎の少女

インペルダウンへと送られた火拳のエース

問題ばかり起こす傍迷惑なルーキー

元帥の胃に穴が空くのも時間の問題かもしれない

「傷心中の迷子の子どもってあんなに怖えんだな」

「ニアちゃん、だっけ? 迷子なのかいい〜?」

「ああ、あんなのが1人で顔も隠さずにシャボンディをうろつくわけ
ねえだろ。攫われて逃げてきたらあそこについたらしい」

「それは、可哀想な話だな……」

だが、油断していたとはいえ青雉と黄猿に傷をつけるほどの力を持
つものを海軍は放っては置けなかった。

「何としてでも捕らえなければ……世界貴族の方には適当に理由をつけ

て諦めてもらう他ない…な。はあ、まためんどくさい…」
「触らぬ神に祟りなし。ですよ、センゴクさん。ありや、触れちやいけねえパンドラだ。いつそ死んだことにしたらどうです?」
「いや、放置するには危険すぎるよお〜? あんなのがいたとはねえ〜。今までどこに隠れてたんだか…」

青雉と黄猿は絶望したような少女の目を思い出し、嫌な予感を感じるのだった。

第33話 不穏な火花

わたしが落ち着きを取り戻してからシャツキーさんがわたしのザンバラになった髪を肩くらいで切り揃えてくれた

ご飯作れて散髪できてそこそこの腕っ節もあるって万能かよ、この人

「可愛くなったわね、短いのも似合うわ。でもどうしてこんなにぎんばらだったのかしら？」

「……。」

わたしはその言葉にティーチのことを思い出し口をつぐんで俯いた。

シャツキーさんは何かを悟り頭を撫でる

「……ごめんね、もう聞かないわ」

彼女がそういうとBARのドアが開いた

「ただいま、シャツキー。……ん？その子は？かなり珍しい容姿をしているな」

「あら、お帰り。レイさん。この子はだいぶ深い事情がある訳ありの子よ。すごく傷ついてるの。聞かないであげて」

「ほお……。」

彼は興味深そうにわたしを見るが何も聞いてこなかった
続いてルフィさんたちも戻ってきた。

一気に賑やかになったな。

彼らを思い出す。

「ニア！……ごめんな、待ったか？」

「ううん。」

「そつか！ああ、悪いニア！おれ騒ぎ起こしちゃまってしばらく隠れなきやいけねえんだ！でも安心しろ！お前はおれが守ってやる！」

……なんで会ったばかりの事情も知らない奴にそこまで言えるんだろう。

そしてレイリーさんって人とルフィさんたちが話し出す。

船のコーティングに3日はかかるらしい。

それまで身を潜めなければならぬ、と。

ルフィさんがわたしの腕を掴む

「わかったー！じゃあ、3日後なー！いくぞ、ニア！」

そう言っただけでもわたしも連れてルフィさんたちはB A Rを後にした。

ーレイリーサイドー

モンキー・D・ルフィとヒューマンショップで出会い、ハチの手当と彼の話を聞くべくシャッキーのいるぼったくりB A Rへ一足先へと戻る

B A Rにはかなり珍しい容姿をした子どもがいた。

その子の目に光はなく私は恐怖すら感じた。

ルフィたちは船にコーティングを施してほしらしく、少なくとも3日はかかるという、わかった。と言った。

3日間どこかに身を潜めるべくB A Rを出る。あの少女も連れて行った。

あの子は麦わらの一味なのだろうか？

「シャッキー、あの子は？聞くなと言われてもあんなに光のない目をしていれば気になるぞ」

「…そうよね。あの子、迷子なんだって。家族とはぐれたらしいわ」

家族はいるのか。…何故あんなにも昏い目をしていたのだろうか。

…そういえばあの子裸足だったな

攫われた可能性が高い、か。

「どこからきたんだろうか。あんな容姿じゃ満足に外も歩けやしないだろう。」

「お父さんとお兄ちゃんがいるところ、らしいわ。」

「聞いたのか？」

「少しね。1番上のお兄ちゃんは青い炎の鳥になるんだって。それ以上は話してくれなかったわ」

長男が青い炎の鳥になる?!その奴らが家族だと!?

…完全に何者かに攫われてきたな。

何故奴の船にあんな子どもがいるかは知らないが、あの子はきつと

守られてきたんだろう。

「何事もないといいが…」

私は何か胸騒ぎがした。

—サイドエンド—

「だから遊園地に隠れようって!」

「「お前遊ぶだろ!派手に!」」

やっぱり漫才やってるのかな、この人たち

…ん?なにか見聞色に引つかかったな

「…なにかくる。」

「「?」」

するとクマっぽい大きな人(?) いや、機械か?が襲ってきた

ルフィさんたちが一通り騒いだ後、戦闘体制にはいった。

「ギア2!強えってわかってんなら、最初から全開だ!!ニア!お前は下がってろ!!」

どこの誰かも知らない赤の他人を必死になって守ろうとする彼に心が揺らぐ。

この人になら教えても大丈夫かもしれないという根拠のない思いが湧き上がってくる。

彼らは一味全員で力を合わせてようやく一体を倒した。

「おいおい、なんてザマだ!PX—4!貴様ら”パシフィスタ”を一体作るのに軍艦1隻分の費用を投入してんだぜ?!」

そこに鉞を持った男が現れた。

…:平和主義者か、随分と綺麗事だな。

それにしてもまた、次から次へと…。

暇なのか、海軍は!

「ん?なんだ、あのガキ…。PX—5!あいつは誰だ?」

鉞を持った人がわたしに気づくとPXとかいうロボットにそういう

あれ、人工知能か何かなのかな?

「ピ。ピ。ピ。ピ。データなし。」

「ああつ?! 麦わらといてデータがないだど?!」

そりやそうだ。わたしこの船の人じゃないもん

「ニア！隠れてろ!!」

「ぎゃーっ！なんだお前!! ゾロツ!!」

急にウソツプさん達が騒ぎ出した。

みると黄猿さんがゾロさんを殺そうとしていた。

「まさか一撃でノックダウンとはねえ。随分と疲れが溜まってるといだねエ…。」

「やつときたか！黄猿のオジキ！」

「オー、戦闘丸くん。ん？オー、君、まだこの島にいたのかいいく？ニアちゃん、だっけ？クザンから少し聞いたよオ？迷子なんだってねえ？」

「ニアを見るな！こいつはおれが家族のところに送ってやるって約束したんだ!!」

ルフィさんがわたしの前に立ち両手を広げる。

「麦わらのルフィ…。なにがあつてお前とその子が一緒にいるかしらねエが…それはお前程度の奴が手に負える子どもじゃないよオー…？」

「んなこと知るか！おれはこいつと約束したんだ！絶対に約束は守る!!」

…なんて真っ直ぐな人だろう。

ほんとにエースの弟なんだな。ならわたしも力にならなきゃ

わたしがルフィさんの前に出ようとするとレイさんが来て黄猿さんを足止めた。

そのあと、バーソロミュー・くまっという本物の七武海のくまが来て一味を散り散りにする。

その惨状を見てルフィさんは木に頭をぶつけ自分を責める。

…その気持ち、すごくわかる。わかるから声をかけようと動くと彼はまだわたしが残っていることに気付いた。

そして彼はわたしだけでも…と、庇うように抱きしめた。

「おれは弱いっ！仲間一人救えねえ！…こいつだけでも逃さねえと

「…。」

「もう会うことはない。じゃあな、モンキー・D・ルフィ」

くまさんがそういうと、ルフィさんも消えた

「お前も麦わらの一味か？」

「ちがう。わたし、まいごなの…。かぞくをさがしてて、ルフィさんがいっしょにさがしてくるって…」

「そうか、それは悪いことをしたな。ならお前もどこか旅行するか」

そう言つてくまさんがわたしに触れるとジェットコースターに乗ったような浮遊感に見舞われた。

—白ひげ海賊団にて—

時は少し前まで遡る。

不穏な火花は散っていた。

「オヤジ！赤髪だ!!」

白ひげ海賊団の元に赤髪のシャンクスが現れた。

彼が歩くと隊員は次々と気絶していく。

「おい、何してくれんだよい赤髪。久々に来たと思つたら覇気撒き散らしやがって」

「よお、マルコ。久しぶりだな！ニアに勧誘するなって言われたがやっぱりする！どうだ？おれの船に来ないか？」

「……………」

「……………断る。」

「……………？」

不自然な沈黙と彼らの憂いを帯びた顔に赤髪は首を傾げる

そして彼は無邪気に笑う小さな影を探すがどこにもいないことに気づく。

「グラララ。小僧……………いい酒は持ってきたのかア？」

「……………あ、ああ…とびっきりの酒だ。」

白ひげの言葉にそう言つて酒を取り出すと自分の分を一杯注ぎ、大きなひょうたんを白ひげに渡した。

白ひげはそれを一口飲むと「懐かしい味だ」と笑った。

だが、その表情はどこか浮かなかった。

「白ひげ、話があるんだが：人払いを頼む。……ああ、聞きたいことがあるからニアと仲のいい隊長達は残っててくれ」

隊長を数人残し他が甲板からはける。

人がいなくなつたのを確認すると赤髪は口を開いた

「おれは強い敵と戦うに当たって怪我を負うのは仕方ないことだと思ってる。…今疼くのはこの左目の傷だ。……嫌な予感がするんだ。エースを止めてくれないか？」

「いきなり乗り込んできて、何を言いだすかと思えば…。ティーチは裏切つた。それをエースが追ってるんだ。止める理由はねえ」

その答えを予想していたかのように赤髪は1つため息をつき酒を飲み干した。

「帰んなア、小僧！」

そう言つて白ひげはひょうたんを赤髪に投げるが彼はそれを避ける。

「まあ、そう言うだろうと思つていた。それはいい。だが、もう一つ聞いていいか？」

その瞬間赤髪の雰囲気が変わり霸王色の覇気が放たれる。

「なんのつもりだア？？小僧……」

「なんの？……おれの用事など分かり切つてるだろう？……ニアはどこだ？白ひげ。今、この船に…あいつはいるのか？」

その質問をした途端に隊長たちが顔を背けた。

悔しそうな、悲しそうな顔に赤髪は悪い方に悟つた。

驚愕の表情を浮かべた後、白ひげを睨みつける

「…まさか………。何をしていた、白ひげ!!」

赤髪は腰の刀を抜き白ひげに斬りかかる。彼はそれを薙刀で受け止めた。

「お前まさか……あいつを死なせたのか?!あんな小さな子を!!」

「死んじやいねえ!!おれアそう信じてる!」

「信じてる、だど!?!説明しろ!何があつた?!」

その問いかけに答えたのはサツチだ。

「俺をかばってティーチに刺されて攫われたんだ。攫うくらいだから殺してはいないと思う」

その答えに赤髪は黙っていないかった。

サッチの方に顔を向け話を聞いた後白ひげに向き直し思いをぶつける。

「ティーチに?!お前…っ!あの子がどう言う存在かちゃんとわかっていたのか?!あいつはお前と同じ…いやお前以上に世界を滅ぼす力を秘めてるんだぞ?!それがティーチの手に渡っただ?!ふざけるな!!」

白ひげと刃を合わせながら赤髪は喋る。

「お前たち…あいつを守ると言っただろう!!白ひげ海賊団であろう奴らがあんな幼い子に逆に守られてどうする!!例えば生きていたとしても、あいつが心を闇に墮としていたらどう責任を取るつもりだ!!」
「おれに説教垂れるたア…何様だ、小僧!!ニアは死んじやいねエ!確かにあいつを守れなかったのはおれの責任だが…簡単にティーチに屈するほどあいつは弱くなんかねエ!!もし、墮ちていてもなんと少しでも引き戻す!てめえに言われる筋合いはねエんだよ、鼻つたれの小僧が…おれに指図するな!」

刃と刃がぶつかり風圧ともいえる重圧が辺りを包む。

煙が渦巻くかのように圧力のある風が巻き上がると空が割れた。

「誰にも止められなくなるぞ、暴走するこの時代を…!ニアが心を壊していたら…お前らはそれでもあの子とられるのか?!あいつの力が暴走すれば時代だけじゃない…世界が終わるぞ!!」

「恐るるに足らねえ…、おれは白ひげだ!!何度も言わせるな鼻垂れ小僧!!あいつはそんなに弱くねエ!無事であることを信じてやれなくてなにが家族だ!笑わせるな!!ニアは必ず取り返す!!だから黙ってみてろ!!」

割れた空を見上げ隊長たちは悲しそうな顔をした。

もしかしたらあの陽だまりのような少女にもう会えないのかもしれない
れない

いつでも一生懸命に頑張って、どれだけ危険な目にあっても諦めずに立ち上がる。そんな少女の姿を彼らは思い出す

「…交渉は決裂か。まあ、そうだろうよい。赤髪も赤髪で、ニアを可愛がっていたから」

「…生きてると、いいな」

「滅多なこと言うな。サッチ。」

「珍しく弱気だね。ニアに怒られるんじゃない？」

「ははっ！ そうだな。いつでもあいつが元気をくれた。大丈夫だ。生きてるさ、絶対」

彼らの持つそれはただの願望。

誰も彼もが不安で仕方ないのだ

綿にくるむように優しい愛情の中で育ててきた子が心の闇を知ってしまったら狂うのも時間の問題だろう

「どこにいるんだろうな、ニア。もしかしたらティーチのところから逃げ出して俺たちを探してるんじゃないか？」

「ありえない話ではないけど、だったら尚更心配だね」

あの小さな少女がいなくて彼らも酷く寂しい思いをしていた。

彼らにとつてもまたニアはかけがえのない存在だったのだ

「必ず見つけてやるから、負けるんじゃないぞ」

マルコがそう呟いた

第34話 サボとの出会い

くまさんに触れられた瞬間意識が暗転し、覚醒したら空を飛んでいた。

あのくまさんは能力者なのか!?

なんでわたし空中散歩してるの?!

まてまてまて!これ大丈夫なの?!落ちたら死ぬでしょ!!

最悪の事態が脳裏をよぎるが一向に落ちる気配が無いため一旦落ち着いて情報を整理することにする。

ルフィさん達が黄猿さん達に追い詰められたときくまさんが現れた。

今わたしが空中散歩してるってことは他の人たちも同じってことだ。あの状況でこんなことするって事はくまさんはルフィさん達を助けた事になる。

ふむ……。じゃあ、わたしもどこかに飛ばされている最中だってことか。

よし、深呼吸しよう。

すーすーっ、はーはーっ

ふうっ。少し落ち着いた。

でも、またあんな悪意を向けられたら今度は問答無用で殺しそうな気がする。

一瞬、道の間違えかけた。でも、狂いそうになったわたしを踏みとどまらせてくれた。

あれでおかしくなっていたらわたし本当に帰れなくなるところだった。

次ルフィさんに会うことがあったらお礼言わなきゃ。

それはそうとこれどこまで飛ぶのかな?くまさんは多分目的地をどこかに設定して能力を使ってると思うんだけど…

まさか、適当に飛ばしてるわけじゃないよね?!

わたし人生で何回命の危機に晒されればいいんだろうな。その度に奇跡的な生還を遂げるって我ながらキチガイすぎる。

考え事をしていてと日が沈んでいた。

……これ日跨ぐんだ。ここまで勢い落ちずに飛び続けるって人外的な何かが働いてるでしょ。

とーさんとかマルコとかエースとかジョズとか見せて時々思うけど能力者の能力って凄いいよね。どういう構造になってるんだろう？

地震起こせて？鳥になれて？人体発火が可能で？体がダイヤになる??

謎すぎる。……まあ、1番の謎は転生者っていう自分だけだね。

それから何日か過ぎるとようやく勢いが落ち地面へと落下していく。

あつーやばい……。これ建物直撃……。っ!!

と、思った時にはすでに遅く見事に屋根を突き破って落ちました。いててて、お尻打った。

「動くな!!」

辺りを見渡すとわたしは囲まれていて殺気と武器を向けられていた。

……うん。

なんか正直もう怖くない。

「おい、ガキ。何者だ？何が目的でここに来……。っ!？」

目に傷のあるお兄さんがわたしを威嚇する。が、わたしの姿を確認するなり言葉を詰まらせた。

「ほお……。こりや珍しい客だ。銀髪にオッドアイか。こんな歩く宝石が上から降ってくるとは……」

刺青の人が口角をすこし上げてそういう。すると傷の人が威嚇してきた。

「何者だ？ガキ。只者……では無さそうだ。どこからきた？大人しくしているというのなら殺さないでおいてやる。」

「……まい、なの」

「はっ。」

……聞こえなかったのかな？

もう一度言ってみよう。

「だから……わたし、まいごなの。」

「迷子？なんで迷子のガキが上から降ってくるんだ」

「くまさんにさわられたとおもったらとばされた」

「くま?!?!」

え?!?!なんでそんなに驚くの?!

そりや信じれないかもしれないけどあれ、くまでしょ?!?!どう見てもたぬきじゃないよね?!

「くまってバーソロミュー・くまか?!お前、どこから来た!!」

あれ?くまとかたぬきとかそう言う問題じゃなかった?

あのくまさんと知り合いなのかな?

「しゃぼんだまがうかんてるしま」

「…シャボンディ諸島の事か?……ガキ、迷子っていったな。家はどこにあるんだ?」

「うみのうえ」

「海の上……?まさか、海賊か?」

「そう。」

「……随分と素直じゃないか、誤魔化もしないとは…。お前自分の状況わかってんのか?」

「ごまかしたらみのがしてくれるの?」

「わかってんじゃねえか。意外と冷静だな。まあいい、お前名前はなんていうんだ?」

「ひとになをたずねるときはじぶんからなのるものだ。ってうちのにいちやはよくいうよ?」

「「ぶっはっ!!」」

わたしの返答が面白かったのか何人かの人か吹き出した。

目の前の傷の人は何やら引きつった顔をしている

「…肝の座ったやつだな。おれはサボだ…多分な」

……多分?

わたしの持った疑問に気づいたのかすぐにつき話を話す。

「おれ、記憶喪失なんだ。自分の名前も小さい時のことも覚えてない。ほら、名乗ったぞ。お前も答えろ」

優しい!!

地味に優しいよこの人!!

「…ニア。」

「ニアか。」

ふと机の新聞を見ると見覚えのある顔が写っていた。

「っ?!ちよつと、それみせて!」

「ん?ああ」

わたしが新聞をみせてと頼むと刺青の人は素直に渡してくれた

ー火拳のエース、公開処刑ー

見出しにはそう書かれていた。

エースの、公開処刑?

なに、それ。どうして!!?

「おい?どうした娘。顔が青いぞ?」

刺青の人がいう。

わたしはそれどころじゃなかった。行かないと…!助けに行かないと!

多分エースはわたしを助けようとして捕まったんだ!!

わたしのせいで…!

「おい!まで!!どこ行くんだ?!」

わたしが外に出ようとするとサボさんに腕を掴まれ止められた。

今は時間が惜しい。説明してる時間もないけど納得してくれないと離してくれなさそうだから早口で話す。

「マリソフォード。エースをたすけにいく」

「はあっ?!馬鹿言うな!!お前、これがどんな規模の戦争か分かってんのか?!死ぬぞ!」

もしかして…心配してくれてる?

でも…行かないとエースが…

わたしはカツとなって思わず大きな声を出してしまった。

「ここでもできずにまってるっていうの?!エースはかぞくなの!たすけにいかなきや!!」

「火拳のエースが家族…?お前…まさか白ひげのクルーか?」

「……!!」

「……そりやそうか、そうだよね。」

隊長格はみんな有名だもんな。分かるに決まってる

「おねがい。…いかせて」

「どうやって行くつもりだ?」

「…それは」

多分魔法を使えばマリنفォードに行けるはずだ。でも、異能のことを話すことはできない。

傷の人の問いに言葉が詰まる。

すこし考える素振りを見せ刺青さんが言った。

「俺たちは革命軍だ。俺はドラゴンという。悪いがその戦争に革命軍が協力することはできない。…が、情報は欲しい。お前が何をそこまです死になっているかは知らないが…何かしらの情報をくれると言うのなら力を貸してやらんこともないぞ」

「じょうほう?」

「ああ。火拳のエースが家族なんだろう? 何故お前のような子どもが白ひげの船にいる?」

「……それは、わたしのことでも、いい…?」

彼の質問には答えずに質問を返す。

彼は首を傾げるも興味があつたのか肯定する。

「……構わん。有力な情報ならなんでもいいぞ」

なら……これしかない。

エースを助けられるのなら、あの人達を守れるのならわたしの平穏なんていくらでも売ってやる。

この力を知られてもし彼らに被害が及ぶならこの命を捨てても守ってみせる。

わたしは自嘲するように笑った。

「ふふふつ…。そつかあ、ならよかった。じゃあ…わたしのとびつきのひみつ、おしえてあげるよ。とーさんたちとシャンクスさんしか知らないんだからね? とくべつだよ?」

「…………お前の? ……って、待て! シャンクスさんって赤髪か!」

「そうだよっ…こまかいことはきにしないの。…それでね、うーん…：そ
うだなあ…：サボさん、きおくそうしつっていつてたよね？うしなっ
たきおく、とりもどしたい？」

「はあ？んなこと出来んのかよ。ははっ！いいぜ？やれるんならやつ
てみる」

「そのかおのきずはどうする？いつしよになおしてあげようか？」

「なんだそりや…、傷はいい。記憶だけでいいぜ？できるんならな」

半分馬鹿にしたような言い方でわたしにそう言い放った。

信じてないな。まあ、信じられないだろうけどね。

わたしはサボさんの頭を指差し、”記憶が無くなった事実”を”拒
絶”する

『絶』

するとサボさんはわたしを凝視し目を見開く。

体が震えだし彼の目には涙が浮かんできた

そして震えた手で新聞を取る。

その内容を確認すると新聞を机に叩き大声で叫ぶ

「ーっ！！ドラゴンさん！おれをマリソフォードに行かせてくれ
！！」

…はあっ?!

なんで?!えっ!!もしかして、関係者?!

って、なんでわたしが驚いてんの!!こいつ、なんか腹立つ!!

「おいおい、本当に記憶が戻ったのか？サボ」

「ああ、全部思い出した…：。貴族に生まれたこと、エース達と盃をか
わして兄弟になったこと、天竜人の船の前を横切つて殺されかけた事
!!なんで忘れてたんだ、こんな大事な事…!!…：お前、一体何者だ？」
いや、こっちの台詞!!

エースと兄弟!?ルフィさんだけじゃなかったの!?

「わたしのこれは…ありとあらゆるものごとを”ひてい”して”きよ
ぜつ”する。すべてをなかつたことにする。そんなちからだよ」

そういうとドラゴンさんは少し考える素ぶりを見せた。

「とびっきりの秘密…か。ならついでに聞こう。なぜシャボンディ諸

島にいたんだ？言っでは悪いがそんな容姿であの島をうろつくなど攫ってくれと言ってるようなものだぞ？」

「もともとはトーさんのふねにいたの。でもマーシャル・D・テイーチっていううらぎりものにさらわれたんだ。それでにげてたらあの上まについたの。」

「……なるほどな。…その『トーさん』というのは白ひげの事か」

首を縦に振る。

「確かに有力な情報をくれたら力を貸してやるといったが……もうすこし考えた方が良かったんじゃないのか？とびきりの秘密と言うのには納得しよう。だがそれで俺たちがお前を人質にして白ひげ達の首を取りに行こうと動いたらどうするつもりだ？」

「ひとじちっていうのはいきてるからいみがあるんだ。わたしのせいでかれらにひがいがでるのなら、こんなくび……きりおとすにきまつてる」

「「……………」」

何を言っているの？と首を傾げると彼らは哀れむような表情を浮かべた。

「…俺が悪かった。そんなことしないからそんな顔するな。……コアラ！この子に戦の支度をさせてやれ」

ドラゴンさんがそういうとサボさんが笑顔になった。

「いいのか?!ドラゴンさん!!」

「ああ。お前の兄弟なんだろ？なら俺に止める事はできんさ」

ニヤリと笑うドラゴンさん。

「はーい。ニアちゃん！おいでー！」

わたしはコアラさんという人に連れられて別室へと行った。

ーサボサイドー

物凄い音と共に屋根を突き破って人が降ってきた。

おれ達は武器を構え警戒する。土煙が晴れるとそこにいたのは少女だった。

だがもし密偵だったら……？女の密偵つてのは油断できない。

おれが威嚇し、前に出て少女の姿を確認すると言葉に詰まる。

……銀色の髪にオツドアイ。それに雪のように白い肌

綺麗な目をしているのにその瞳には一切の光がうっていないくておれは恐怖を覚えた。

少女は迷子だそう。

「どこからきた？」

「しゃぼんだまがうかんてるしま」

「…シャボンデイ諸島の事か？…ガキ、迷子っていったな。家はどこにあるんだ？」

「うみのうえ」

「海の上…？まさか、海賊か？」

「そう。」

随分と素直に答えるな。

そういうと「ごまかしたらみのがしてくれるの？」と不思議そうな顔をして言った。

まあ確かに見逃しはしないだろうがこんな状況でここまで冷静にいられるつてのも凄いなと思うがな。

彼女はふと机に置いてある新聞を見る

その内容を理解すると顔色を変え出ていこうとした。

「まて！どこへ行くつもりだ!？」

「マリンフォード。エースをたすけに行く」

「はあっ!?馬鹿言うな!!お前、これがどんな規模の戦争か分かってんのか?!死ぬぞ!？」

こんなガキが大規模な戦争に首を突っ込もうとしてるんだ。常識のある奴なら止めるよな、普通

「ここでもできずにまってるっていうの?!エースはかぞくなの!たすけにいかなきや!!」

「火拳のエースが家族…?お前…まさか白ひげのクルーか？」

ドラゴンさんが聞き返すと彼女は一瞬「しまった」という顔をした。

……こんなガキが…世界最強と呼ばれる男の船に乗ってるだど!?

けど彼女はその質問には答えずにただ「いかせて…」とおれ達に言

う

ドラゴンさんがなにか考えた後に口を開いた。

「俺たちは革命軍だ。俺はドラゴンという。悪いがその戦争に革命軍が協力することはできない。…が、情報は欲しい。お前が何をそこまですて必死になっているかは知らないが…何かしらの情報をくれると言うのなら力を貸してやらんこともないぞ」

「じょうほう?」

「ああ。火拳のエースが家族なんだろう? 何故お前のような子どもが白ひげの船にいる?」

「…それは、わたしのことでも、いい…?」

やはり白ひげについて聞いても答えない。

それどころか『自分の事なら話してもいい』と取れるようなことを言ってきた。

ドラゴンさんは面白そうに口角を上げると『有力な情報なら構わない』という。

その言葉を聞いた少女はとてつもなく昏い目で嘲るように笑った。

こんな子どもが…なんて顔をしやがるんだ。

「ふふふつ…。そっかあ、ならよかった。じゃあ…わたしのとびつきのひみつ、おしえてあげるよ。とーさんたちとシャンクスさんしか知らないんだからね? とくべつだよ?」

「…お前の? …って待て! シャンクスさんって赤髪か!」

「そうだよ? こまかいことはきにしないの。…それでね、うーん…そうだなあ…サボさん、きおくそうしつっていつたよね? うしなつたきおく、とりもどしたい?」

細かい事!? こいつにとつて赤髪と知り合いつてのは細かい事なのか!?

つーか、記憶を戻すだど!? そんなことできるわけないだろう!!

「はあ? んなこと出来んのかよ。ははっ! いいぜ? やれるんならやってみろ」

「そのかおのきずはどうする? いっしょになおしてあげようか?」

「なんだそりや…、傷はいい。記憶だけでいいぜ? できるんならな」

出来るわけがない。とおれはたかをくくり小馬鹿にした態度を取る。

が、彼女はお構いなしにおれの頭に指をさす。

何やら言葉を発したと思っただらおれの脳裏に様々な記憶が蘇った。貴族として生まれ、家を飛び出しエースと出会った。海賊貯金を集め、大きくなったら海に出ようと約束をする。そこにルフイも加わり、おれ達は盃をかわして兄弟になる…

貴族達の陰謀によりゴミ山が焼かれ、ゴミはどっちだとおれは絶望した。

2人の無事を祈りながら一足先に海に出たが天竜人の船の前を横切り殺されかけた。

…：震える手で新聞を取る。

火拳のエース、、 そうだ。

こいつはおれの…：…大切な『兄弟』

「ドラゴンさん!!おれをマリンスフォードに行かせてくれ!」

新聞を机に叩きつけ、おれはそう叫んでいた。

ニアが驚いた顔をしていたが驚きたいのはこっちだ!!

なんなんだ、こいつは一体!!

「わたしのこれは…ありとあらゆるものごとを”ひてい”して”きよぜつ”する。すべてをなかつたことにする。そんなちからだよ」

ありとあらゆる物事を”否定”して”拒絶”する…：…?

全てを…無かつた事にする、だと!?

そんな…：…そんな神みたいな力が存在するだ?!?何の冗談だ!!

「確かに有力な情報をくれたら力を貸してやるといったが…：…もうすこし考えた方が良かったんじゃないのか?とびきりの秘密と言うのには納得しよう。だがそれで俺たちがお前を人質にして白ひげ達の首を取りに行こうと動いたらどうするつもりだ?」

ドラゴンさんがそういう。確かにその通りだ。

あれだけ白ひげについて頑なに喋らなかつたのに何故…??

知られてはいけない力だという事は分かる。だから彼らのところにこいつがいるのを誰も知らない。つまり、意図的に隠されているん

だ。

なのにこんなに簡単に何故喋った？

「ひとじちっていうのはいきてるからいみがあるんだ。わたしのせい
でかれらにひがいがでるのなら、こんなくび…きりおとすにきまつて
る」

ーーーっ!!

少女は親指を首の前で横に動かす。

これが…子どものする考え方か？

ドラゴンさんも何か思ったのか哀れむような視線を送る。

その後コアラに指示を出した。

「コアラ…この子に戦の準備をさせてやれ！」

ドラゴンさんがそう言う。

おれは許可が出たのだと喜んだ。

確かニアって言ったな、あの子。

あの死にたがりっぷり、いつぞやのエースにそっくりじゃないか。

…守らねえとな。あいつを死なせでもしたらエースに怒られそ

うだ。

はあ。全く、世話の焼ける兄弟だぜ。

ーサイドエンドー

第35話 開戦

ドラゴンさんの指示でコアアラさんと別室で戦場へ行く準備をする。

コアアラさんがわたしの服を探すと興奮しだして着せ替え人形と化していた

「ニアちゃん、何着ても似合うのね！どれがいいかな〜？」

「なるべくうごきやすいふくがいい」

「動きやすいのかあ。じゃあこれかな？あ、ニアちゃんは武器は何を使うの？」

「おもにはとびどうぐ、かな？けんとじゅうもつかう」

「ふむふむ。じゃあこれと、これとこれ！はい！」

コアアラさんがクナイが数本入ったホルダーと、わたしでも扱えそうな普通より短めの剣と軽くて使いやすい銃をくれた。

「いいの？こんなに…」

「いいのいいの！だって今から戦場に行くんでしょ？ほんとにはサボくんだってニアちゃんみたいなの可愛い子をそんな危ないところに行かせたくないはずだから！」

え、えええ。

どう言う理由…？それ。

とりあえずわたしは戦闘用具を一式揃えてもらおうと部屋を出た。

「準備できたか、ニア。…お前、弓は使えるか？」

「うん」

「なら弓でおれを援護しろ。前線には立つな」

「…うん。」

わたしの顔を見られないようになって配慮してくれたのかな？

「コアアラ、こいつに合わせてマントを新調しろ。あと、弓と矢も用意してくれ」

「はいはい。人使いが荒いなあ」

それでもやってくれるコアアラさん。

海軍よりも海賊とか革命軍の方がいい人ってどう言うこと?!

「海軍に見せてやることはない。お前もおれが守ってやるからおれの

後ろにいる」

『おれが守る』

どこかで聞いた事ある台詞だ。

…エースも似たような事いつてたなあ。けど、結構最近聞いた気が…

あ、そうだ。

「……ルフィさんだ。」

「はっ!?お前、ルフィもしってるのか?!」

わたしがボソツと呟くとサボさんが驚いた。

……え?…あつ!そうか。

エースとルフィさんが兄弟なんだ。サボさんとエースも兄弟ならサボさんとルフィさんも兄弟つてことになるね。

この三兄弟いろんな意味で強いな

「しゃぼんだまのしまであつたの。まいごのわたしをおくつてくれるって…」

「へえ…。お前つて物凄い縁を持つてるな。」

まっただよ。

運がいいのか悪いのか…

「あ、そうだ。サボでいいぞ?エースのことも呼び捨てにしてんならおれも呼び捨てでいい。」

「わかった。」

雑談をしているとコアラさんがマントと弓矢を持ってくる。

「はい!マントと弓と矢!」

「ありがとう、コアラさん」

「こんな可愛い子にお礼言われちゃった!」

コアラさんからマントと弓矢を受け取り装着する。

お礼を言うのと逆に喜ばれた。…コアラさんも十分可愛いと思う。

「じゃあサボくん。気をつけてね!」

「ああ、ちよつくらエースを助けに行ってくる!ニア、いくぞー!」

「うん」

わたしとサボは潜水艦に乗りマリンスフォードに向かうのだった。

潜水艦にて。

サボが舵を取りながらニアに質問をする

「なあ、ニア…。聞いてもいいか？」

「うん？」

「お前、何で白ひげの船に乗ってるんだ？」

「ひろわれたの。」

「拾われた？…捨てられてたって事か？」

「うん。まだじぶんのあしであるくこともできないくらい小さいときにもりのおくにすてられてたわたしをみつけてくれたの。どこかにおくるのかとおもいきや、そのままだててくれたんだ。」

「なんか色々謎だな。白ひげがお前を船で育てることにしてくれたのか？」

「わたしをひきとってくれるひとをさがすほうがむずかしいっていつてたかな？どこにいてもきけんだろうからじぶんらのところにおいておいたほうがあんぜんだしはやいって」

「……………間違っちゃいねえな」

ニアの説明に対し、横目で彼女をチラツと見ると納得したらしい。

「じゃあ、本当に白ひげ海賊団がお前の家族なんだな」

「うん。はかいおうっていうかいぞくにさされたときも、こうねつでやまをのぼってしんぱいかけたときも、シヤンクスさんとミホークさんのしゅぎようでちよつとむちやしたときも、にいちやをかばってきられたときも、いつだってわたしのことをたすけてくれたの。だからたすけるんだ。こんどは、わたしが…」

その揺らがない意志にサボは表向きでは感心するが内心は突っ込みを入れまくりであった。

「そうか。お前は強いな。(ちよつと待て!!こいつ今、自分でとんでもないこと言ったって気づいてねエのか?!破壊王って億越えの海賊だったよな!?!結構前に消えたって噂された…!こいつがその犯人だ?!それに高熱で山を登った!?!馬鹿なんじゃないのか!!!!どんな状況だったのかしらねえけど自殺行為に等しいだろ!!あと、赤髪と鷹の目

に修行をつけられただど!?ちよつと無茶したってかなりの無茶だろ!!こいつ今幾つだよ!!こんなチビがなんで世界最強の剣士と四皇に修行つけられて生きてんの!?それに兄を庇って斬られたって?!どんな生活送ってきたんだ、こいつは!!むしろよく五体満足でいるな!」
彼の心境などいざ知らず彼女は話を続ける。

「ありがとう、サボ。」

「なんだ?いきなり」

「わたしね、しゃぼんだまのしまでいままでうけたことのないあくいをうけたの。かなしくて、つらかった。いつそぜんぶこわしてやろうかって…そんなおもいがめばえたときにルフィさんとであつたんだ。……そのおかげですこしおちついたの。」

それはルフィにお礼を言うべきであつておれにいうのは違うんじゃないか?と、サボは思うが続きがあるみたいだったので何も言わずに話を聞く。

「ルフィさんたちがきぎるさんにおいつめられて、わたしがでようとしたときにくまさんがそれぞれみんなをとばしたの。わたしはかれのいちみじやないけど、まいごだつていつたらくまさんはわたしもとばしたの」

「それでお前、俺たちの基地に降つてきたのか」

「うん。ルフィさんにもおれがいいかたつたけどいえなかつたから、サボにはさききにいっておこうとおもつて」

「……なんか礼を言われることしたか?」

「ふたりにあわなかつたら、わたしきつともうくるつてた。……そしたらとーさんたちのところにかえれない。」

「…なんでそう思うんだ?」

「じぶんがいつだつてよくしつてるから。……このちからはね、のうりよくじやないの。わたし、あくまのみをたべてないから…。だからこのちからをげきじょうのままにふるつたらだめなの。いちどくるつてしまえばクセになる。そんなことになつたらいつもまもつてくれたかれらにあわせるかおがないの」

今も結構危ないと思うけどな…。と、サボは思うが口には出さない

彼女が1番わかっていると信じてるからだ

「あつたばかりでこんなこと言うのもアレだが…お前ちよつと1人で頑張りすぎだ。ちつたあ肩の力を抜け。今回の戦争だつておれもエースを助けに行くんだ。お前1人じゃない。もつと自分に素直になれ、ニア」

「……………うん」

「よし。…………つと、まだ時間もあるしちよつと寄り道するぞ？食料やらなんやら揃えねえと。」

「うん」

サボが潜水艦を上昇させ水面に上がる

彼が先に出ると艦内に手を伸ばす

「……………」

「お前も来い。」

首を傾げるニアにそう言うとな彼女は手を伸ばす。彼はその細く小さな腕を掴むと引つ張り出した。

「いくぞ」と優しく笑む彼をみてニアはエースを思い出す

「……………うん（本当に血が繋がってないのかな？すつごいそつくりなのに不思議……………少しづつ近づいてるんだ。エース、みんな。今、いくよ）」

—白ひげサイド—

ニアを探してる途中で手に入った情報。

エースの公開処刑。

…海軍の野郎ども、本気で言ってるのかア？

おれは船にコーティングを施し、水中へと潜り海軍の虚を突くことにした。

傘下の奴らにも連絡を入れて総戦力で戦場へむかう

ドでさえ戦争になりそうだなア

「…オヤジ」

「どうしたア？マルコ」

「エースを助けにいくんだよな？」

「当たり前だろ。なんかあったのか？」

「ニアはどうするんだ？」

「ティーチの情報が入ってこない以上迂闊には動けねえ。おれたちはニアを信じることでしかできねえんだ。だが、エースはすぐに助けに行かねえと殺される。優先順位ってやつだ。ニアを見捨てる気はねえよ」

「生きてる、よな？ニアは。」

誰もかれもが言う。

生きてて欲しいという”願望”

もしかしたらもう手遅れかもしれない。

そう不安がよぎる事もある

「グラララー！情けねえなあ、お前ら！末っ子がいつも命かけて戦ってるのにそれを信じられねえのか？おれたちがあいつを信じなくて誰が信じてやるんだ」

「！！！！」

そうだ、ニアは生きてる。

絶対に迎えに行くから、闇に染まるんじゃねえぞ。

まずは海軍との戦争からだ。

エースは死なせねえ。おれの家族に手エ出した事、死ぬ程後悔させてやる！！

—サイドエンド—

「お前って、少食すぎねえか？」

少し寄り道をして食料やらなんやらを買い揃え、潜水艦へと戻る。

休憩にご飯を食べている時、サボがそう言った。

「ふつうだとおもうよ？」

「いや、少食だ。コアラでももう少し食べるぞ？だからそんなに小さいんじゃねえの？」

「うーん。そうかなあ」

小さい時に体を酷使しすぎたせいだと思う。…そう思いたい。

「まあ、栄養が足りてるならそれでいいけどよ。…さて、そろそろいく

か

サボが再び舵を取り海の中へと潜る。

じわりと嫌な汗が流れる。

「緊張してるのか？」

「うん、すこし」

「安心しろ。おれがいる」

ウインクをしながらそう言う。

舵に集中しろ。事故るぞ

「おれはな、お前に感謝してるんだ。記憶を取り戻せてこうしてエースを助けに行ける。お前が居なかったらおれは何も知らずに兄弟を失うかもしれないところだった。その借りはエースを助ける事で返す。それでいいか？」

「じゆうぶんだよ、むしろおつりがでるね」

「ハハハッ！お前はどこまでも優しいな。そう育てたのは白ひげ達なんだな。あーあ、悔しいなあ。お前みたいなのやつにもっと早く会いたかったぜ。なあ、ニア。エースと出会ってくれてありがとな」

「おれいはエースをたすけてからいつてよね」

そういうと、サボはまた笑った。

大人の余裕って感じがあるのがまた腹立つ

けど、きつとそれがわたしを安心させてくれるんだな。

「そろそろ着くぞ。覚悟はいいか？」

「もちろん。とつくにできてるよ」

わたしは首につけてるチョーカーを触る。やっとみんなに会えるんだ。

サボは潜水艦を脇につけ、見つからないように顔をのぞかせた。

「…まだ始まつちゃいねえな。もう少し待つか。」

「うん。わかった」

ドキドキする。

みんなに会いたかったのにいぎとなったら会うのが怖い。

わたしの心境を読み取ったのかサボがわたしの頭に手を置く。

「大丈夫だ。おちつけ。な？」

会ったばかりだと言うのにお見通しのようで悔しい。
深呼吸をし心を落ち着かせる。

バシャアアアアン!!

「おれの息子は無事なんだろうなア！」

モビー・デックス号とともにオヤジさんの声が響き渡った。

オヤジさんが能力を使い空間にヒビを入れる。

「きてやったぜエ? センゴク! …野郎どもオ! エースを救い出し、海軍を滅ぼすぞオオオ！」

オヤジさんが高らかに声を上げると「うおおおっ!!」と言う雄叫びを全員があげる

「近くで見るとすげえ迫力だな。ニア、出るぞ。まだ見つかるなよ」

「うん。」

こっそりと潜水艦を出てモビー・デックス号の陰に隠れる。

「オヤジイイ!! なんて見捨ててくれなかったんだ!! おれの身勝手にこっとなつちまったのに! …!」

「おれは行けと言った。そうだろ? マルコ」

「ああ、俺も聞いてたよ。悪いなエース、こんな苦労かけちゃって。誰もが知ってるはずだ! この海で俺たちの仲間に出したやつらがどうなるかってことをなア!!」

…かっこいい。どうしよう、うちの長男がすごいカッコいい!

マルコを見てブーツとしてたらサボが「おい」と声をかける。

「お前、相当なブラコンだな。感極まってる場合か。」

「あ、うん。ごめん」

いけない、いけない。集中しなきゃ。

「おれは、助けられていい存在じゃない!! おれはっ…妹を…ニアを救えなかった!!」

「っ!? どういうことだよ、エース!」

「テイチが言ってた。おれがテイチを見つけた時にはもう…ニアはっ…。あいつは、俺たちを裏切るくらいなら死んだほうがマシだって…激流の海に飛び込んだって…! おれは…無力だ!」

あー、うん。やったなあ

あの時は逃げるのに必死だったから。

若干遠い目をしてあの時のことを思い出しているとサボが言った。

「お前、そんな無茶したのか。」

「したね」

「なんか死んだことになってるが…」

「みたいだね」

白ひげ海賊団のみんながざわつき始める。

「そんな…」「ニアが、嘘だろ?」

などと言った言葉が聞こえてきた。…わたしはいいんだ。だからエースを助けて。

「それなら尚更! お前まで死なせるわけにはいかねえよ、エース!!」

オヤジさんがそう叫ぶと隊員、隊長、傘下の人たちが一斉に乗り込む。

……さつきのオヤジさんの能力で津波が来た。

それを青雩さんが凍らせる。

そしてミホークさんが動く。その一撃は修行の最中でも見たこと何くらい大きな斬撃だった。

それを体をダイヤに変えたジヨズが正面で受け止める。

ええっ!? あれって受け止めれるの!!?

硬すぎるだろ! さすが隊長!!

ミホークさんはかなり本気だったのか受け止められた事に苛立ちを見せた。

あの人ってあんなキャラだったっけ?

「今のは何の話だ!! お前たち……まさかアレを死なせたのか?!」

ミホークさんが怒ってる…?

彼の言葉を聞きサボが驚いた。

「お前…鷹の目に相当気に入られていたんだな。何したんだ?」

「あのひとのこうげきかわしてたまにはんげきしたくらいだよ? とくになにもしてないとおもうけど」

「…………十分だろ、それ」

次に黄猿さんが光の玉をオヤジさんに飛ばす。

それをマルコが受ける。

「いきなりキングは取れねえだろうよい！」

いちいちカツコいいな、うちの長男は…

わたしもかっこつけようかな。

「様子見はここまでだ。動くぞ、ニア。援護は頼んだ」

「うん」

サボさんが戦場の方へ走る。それを見てわたしはモビー・ディック号に忍び込み、帆に登る。弓なら高いところからの方が狙いやすい降りられるかが心配だけど。たぶんおそらくきつと降りれなくなるだろうけどその時はその時だ

「ぎゃああっ！」

「な、なんだ?! うわっ！」

一角が騒がしくなりみんなそこに注意がいく。

「竜の鉤爪！」

指を竜の爪のように開き、武装色の硬化を使う

いやいやいや!! 関節どうなってるの?! それ!!

指の力で次々と海軍をなぎ倒す。

色々おかしい! あの人!!

「?! 誰だよい、あいつ！」

「なんだア? あのマントの小僧は」

オヤジさん側も戸惑ってる。そりやそうだよな。いきなり知らない奴が入ってきたらそりや戸惑うか。

「なんだ?! あいつは！」

「誰だいいく？」

「新手か？」

「敵なら殺す! それだけじゃ!」

戦いの幕は切って落とされた。

—センゴクサイド—

火拳のエースの処刑。

そう世界に通告した。

誰を呼び寄せようとこいつは死ななければならない！

あの男の血を引く限り…

白ひげ達が現れる前に海兵達の士気を上げるべくわたしは世界に情報を流す

「貴様の父親は、ゴールド・ロジャー！この処刑には大きな意味がある！」

そういうと、海兵達がどよめいた

そりやそうだ。あの男に息子がいたなんて誰も知らない

「海賊王の息子であるお前はここで死ななければならぬ！たとえ誰を呼び寄せようとも、どんなに大きな戦争になろうとも!!」

あの男の血を…絶やさなければならぬのだ!!

そういうと、雄叫びとともに海兵たちの士気が上がる。

ザッパアアアン!!

突然モビー・ディック号とその傘下が現れた

何!?どこから…!!

…っ!!そうか、奴ら船にコーティングを!!

「おれの愛する息子は無事なんだろうなあ!!」

白ひげがやってきた。そして奴は能力で大気を揺らす

「おれは、助けられていい存在じゃない!!おれは…妹を…ニアを救えなかった!!」

火拳がそう叫ぶ。

…妹、だと?!

火拳が『妹』と呼ぶつてことはこいつより年下だろう?!

白ひげの船に女で子どもに等しいくらいの奴がいればすぐに噂されるはずだ!

…ニアなんて奴聞いたことがない。なんの話をしているんだ、こいつらは?

「なら、尚更！お前まで死なせるわけにはいかねえよ！エース！」

白ひげが叫ぶと一斉に海賊共が島に乗り込み戦争が始まった。

しばらくすると島の一角が騒がしくなり何事かと見てみるとフリードで顔を隠した青年が武装色を纏わせた爪で海兵をなぎ倒していた

…な、なんだ、あいつは!!

白ひげの援軍!?!いや、そんな報告は受けてない…

戦争は始まったばかりだと言うのにわたしは不安を覚えた

—サイドエンド—

第36話 再会

「さーて、暴れるぜ！」

サボさんがニヤリと笑って海軍を爪でなぎ倒していく。

わたしは弓を構え矢を引き覇気を纏わせてサボさんの背中を狙つてる海兵を撃つ。

「なっ!? 矢だと?! 一体どこから!!」

突然の上からの攻撃に敵も味方も驚いているが気にせず撃ち続ける

「「うわあっ!!」」

海兵たちが矢を受けて倒れる。…心が痛むけれど手加減はしない。わたしはわたしの大切なものを守るために戦うんだ。

家族を傷つけるやつらに慈悲なんて与えるものか

「あそこだ! モビー・ディック号の帆の上!!」

「あんな所から?! なんて腕だ!!」

「しかも子どもじゃないか!!」

海兵の1人がわたしを指差し一斉に視線がこちらへと向く。

「ピューツ。いい腕してるじゃねえか!!」

「隙を見せた……ぐはっ!!」

サボさんがわたしを見て口笛を吹いたとき彼の後ろに海兵が回り込むがそいつの心臓部を確実にを撃ち抜く

「ほめるのはいいけど、しゅうちゅうして?! ゆだんしてうたれるとかなさないよ!」

あ、つい叫んでしまった。いやでも、戦闘中に余所見つて自殺行為だよ!

「ははっ! 悪い悪い! あまりの腕の良さに見惚れちゃった!」

「じょうだんいってないでたたかう!」

「つれないなあ。」

「「「「「?!!」」」」」

ああ、やつぱり彼らが近くにいるだけでわたしはこんなにも元気になる。

やっと会えた。大好きなわたしの家族。

って、なんでみんなこつち見て固まってるの?!死にたいの?!

また矢をつがえ覇気と冷気を纏わせて放つ。

矢が地面に刺さると海兵たちの足元を凍らせ、兵士の動きを止めた。

「っ?!能力者か!!」

「なんて厄介な!」

海兵の誰かが言うけれど、厄介じゃない敵なんて存在しないと思う。

「…ニ…………ア?いや、でもニアは…」

誰かがそう呟く声が聞こえた。

多分ハルタだ。

すると叫び声とともに船と人が降ってきた。

見上げるとルフィさんが……

って、ルフィさん!?何してるの!!?

なんで軍艦と一緒に落ちてきてるの?!馬鹿なの!?

「うわああああ!!」

「こんな死に方嫌だつちやブル!誰か止めてええーツヌ!!」

「あ、おれゴムだから大丈夫だ!」

「貴様1人助かる気カネ?!麦わら!」

なんであの人の周りはいつも賑やかなんだ!!

「エース!!!助けに来たぞおおお!!」

沢山の人を引き連れてやってきた。どこからきたんだろう?

囚人服着てる人たちもいる。まさか、牢獄?!

「元七武海、クロコダイルに海峡のジンベエ!」

「それだけじゃない、エンポリオ・イワンコフもいるぞ!?なんだ、あの面子は!!」

海賊も海軍も降ってきた人たちに驚きを見せる

「ルフィ?!?!」

そしてサボとエースが同時に叫んだ。

「エースウウ!!やつと会えた!!助けに来たぞオオオ!!」

ルフィさんが叫ぶ。

と、顔面凶器さんが「クロコボーイは?!」とあたりを見回した
クロコ…? 黒子? って、あの顔隠す奴?

「久しぶりだな、白ひげ…」

あ、違った。ふつうに人だった

砂がオヤジさんの背後を舞い、人の形を作る。

義手のフックをオヤジさんに向けるがそれをルフィさんが蹴り飛ばす。

ナイス! さすがエースの弟!

「なんでてめえが白ひげの味方をする!!」

「やっぱりこのおっさんが白ひげか。じゃあ、手エ出すな! エースはこのおっさん気に入ってたんだ!」

エースだけじゃない。

わたしもその人大好きだよ。

真下にいる砂の人に上から大量の水をかける。

それだけ水びたしになったら砂になれないでしょ

「……っ!」

「ねえ…そのひとにてをだすなら、いくらルフィさんがつれてきたひととはいえゆるさないよ?」

殺気をぶつけながら言う。砂男さんはわたしを見上げると殺気に気圧され後ずさった。

ルフィさんがわたしを見上げると「あーっ!」っと、気づいたようにわたしを指差し叫んだ。

「ニア!! お前、ニアだろ?!」

「ニアッ?!」

あ、まずい。

なんとかして話題を逸らさないと後でお兄ちゃんズに怒られる!

「お前、こんなところに飛ばされたのか?! とにかく、無事でよかった! ここは危ねえから隠れてろ! あそこに捕まってるエースって奴。あいつはおれの兄ちゃんなんだ! エース助けるためにちよと寄り道するけど、お前との約束はちゃんと守るから待っててくれ!」

待って待って!!全部カミングアウトしないで?!

この後が怖すぎるから!

「ニア!お前はおれが絶対に家族のところに連れてってやるから!もう、泣くなよ!」

ぎゃあつ!!

それ以上言わないで、ルフィさん!!恥ずかしい!

「おーい、ニア!きいてんのか?!というか、降りてこいよ!なあ、ニア!聞こえてんだろ?」

「ああ、もう!うるさいよ、ルフィさん!!おりれるならおりてるから!」

登ったのはいいけど降りれないんだよ!

やっぱ高いところは苦手だ!

「なんだそりゃ?降りれないなら登るなよ!」

そう言っつてゴムの様に手が伸びてくる。

それがわたしに巻きつくどわたしを甲板へと降ろした。

「猫みたいな奴だなあ、ニア。エース助けたらお前のとーさんと兄ちゃん探すからちよつとまってる。エース!今行くぞオオオ!」

「待つのはお前だ。」

「ぐえっ!」

いつのまにかサボが甲板に来ていて、エースのところを走ろうとしたルフィさんの首根っこを掴んだ。

「…小僧…その帽子、昔赤髪がしてたやつによく似てるなあ」

「いてて。ん?おっさん、シャンクス知ってんのか?!そーいや、ニアも知ってたな。これ、預かってんだシャンクスから」

「ほお…。それはそうと、こいつとどこで会った?」

オヤジさんがわたしを見ていう。

「シャボンディ諸島だ!茂みの中で『家族に会いたい、家に帰りたい』って泣いてたところをおれの仲間がみつけたんだ。それで、おれが家族のところに帰してやるって約束したんだ。あ、そうだお前!ニアと知り合いか?ならこいつ守ってくれ!約束は絶対に守る!ニアに怪我させたくなえんだ!」

ルフィさんがサボに言うともまた走り出そうとして、サボに首根っこを掴まれる

あれ？兄弟じゃないの？

あ、ルフィさんがサボに気づいてないのか。

「ぐえっ！おいっ！何すんだよ！おれはエースを助けに行くんだ！」

「そんなことわかってるよ。だが、がむしやらに突っ込んで勝算はあるのか？」

「やってみなきやわかんねえだろ！」

「相変わらず猪突猛進だな、ルフィ」

「誰だよ！お前！邪魔すんな！」

「おれを覚えてねえか？おれ。だよ、ルフィ。お前にはエースの他にもう一人兄弟がいただろ？」

サボがフードを外しながら優しく声をかける

「あいつは…もう、……………っ!!? って、さ、さ、さ、サボオオオ?!?!」

「サ、サボだと?!?!」

「サボ?!ヴァナーター…ここで何してるっキャブルの?!」

ルフィさんの叫びにエースと顔面凶器さんが反応する。

なにこれ、カオスすぎるでしょ。

「ど、ど、どうなってるんだ?!なんで、ニアとサボが一緒にいるんだよ！その前にお前、死んだんじゃ…!!」

ルフィさんが目に涙をためて言う

死んだと思ってた兄弟が生きてたらそりゃあ嬉しいよね

ってあれ？それって今のわたしも似た状況？

「話すと長くなるから後だ。とりあえず、お前はこいつとの約束は果たした。だからエースを助けることに集中しろ」

「はあっ?!…こいつの家族がここにいいのか?!」

「あれ？知らねえのか？こいつの言う”とーさん”ってのは白ひげのことだ。”にいちや”って奴らは隊長とか隊員のことだぞ？」

サボがオヤジさんを親指でクイツと指しながらいう。

「ええええええっ?!?!じゃあニア、エースと同じ船に乗ってたのか?!」

「…いったら、まずいかなとおもって。ごめん」

そういうと、「別に謝ることじゃないけどよ！」と、笑って許してくれた。

この兄弟心広いな。

「さて、と。落ち着いたか？ルフィ。エースを助けに行くぞ！ニア！援護は頼んだぞ！」

サボがそう仕切るとルフィさんは涙を拭って笑顔で返事をした

「おうー！」

「うん」

ルフィさんとサボが同時に処刑台まで走り出す。

この周りを置いていく感じ、ほんとそっくりだな

わたしも動くか。そう思って2人の後を追おうとすると、ぽんつ…と頭に手が置かれた。オヤジさんだ

「…死んじまったかと思ってた…」

「…うん」

エースがそう言ってたもんね

「ほんとに、無茶ばつかしやがるなア。この馬鹿娘が」

「ごめんなさい」

その声には安堵と慈しみが混ざっていた。

「生きててくれてありがとな。よく、帰ってきた。エースを助けるぞ」

「うん…」

『よく、帰ってきた。』

その言葉にわたしの涙腺が緩み声が震える。

信じていたけど青雉が言ってたみたいに本当は諦めてるんじゃないかって心のどこかで思っていた。

頬を伝う涙を拭って気を引き締める。泣くのは後にしなきや

エースの解放が優先だ

わたしは矢をつがえ、今度は覇気とともに風を纏わせて放つ。

その矢は周りの海兵たちを切り裂きながらまっすぐに疾る。

周りを切り裂き壁へと突き刺さると蜘蛛の巣状にヒビを入れ音を立てて崩れる。

それをみたオヤジさんは「こいつが味方でよかった。」と小さく呟い

た。

「頼もしいぜ、ニア。そうだ、あの小僧は何者だ？」

オヤジさんがサボを見ながら言う

「サボのこと？ サボはエースとルフィさんとおさないときにさかずきをかわしたぎきようだいでって。」

「あの小僧もエースの兄弟か。グララララ。こりやまたとんでもねえ助っ人がきたもんだぜ」

ー白ひげサイドー

マリンフォードに着くと処刑台にエースがいた。

おれが叫び士気を上げるとエースが言った

「何で見捨ててくれなかつたんだよオ！ おれの身勝手にこうなつちまつたのに！！」

ああ、お前を止められなかったおれの責任だ。

「おれは助けられていい存在じゃねえ！ 妹を…ニアを救えなかつた！！」

ニアを、救えなかつた…？

マルコがどういふことだと聞くと、エースがテイチに会った時にはもう死んでいたそうさ。おれ達を裏切るくらいなら死んだ方がマシだと激流の海に飛び込んだらしい。

………なんて奴だ。そうまでして裏切りたくなかつたのか。

…おれは裏切りをゆるさねえ。仲間殺しなんてもつての外だ。

ニアはおれたちの半分も生きてねえつてのに、おれたちより何倍も立派な奴だぜ。末っ子がいつも命かけて仲間のために戦うんだ

じゃあ今は、悲しんでる場合じゃねえよなア！！

「なら尚更ーお前まで死なせるわけにはいかねえよ、エース！」

おれがそういうと隊員、隊長、傘下が一斉に乗り込み戦争が始まった。

少しすると島の一角が騒ぎ出した。

見てみると1人の小僧が爪で海兵どもをなぎ倒していた。

…誰だア、あの小僧…。

小僧に気を取られていると矢が小僧を背後から狙ってる海兵に刺さる

何?! 一体どこから!!?

「あそこだーモビー・ディック号の帆の上!!」

1人の海兵の声におれも含めて全員が見上げる。

そこにはマントをしてフードで顔を隠し、弓矢を射る少女の姿があった。

なんだあの小娘。……いつのまにおれの船の帆に登りやがった?

逆光でよく見えない。が、おれは1人の少女を連想した。

あいつはもう居ねえはずなのに……

「ピューッーいい腕してるなー!」

見知らぬ小僧が少女を褒めると背後を取られる。それを少女はまた矢で射る。

しっかしなんて腕だ。よくあんな所から急所を1ミリも外さずに

狙えるな。確かニアも狙撃に関していい腕してたよなあ

イズウがベタ褒めしてたのを思い出す

「ほめるのはいいけどしゅうちゅうして?! ゆだんしてうたれるとかなさけないよ?!」

ぞの声、喋り方。…ニアにそっくりだ。

まさか……生きて!?! いや、まさか、な。

エースの話が本当ならもうあいつは死んでるはずだ。激流の海に落ちたらまず助からねえ……

すると頭上から叫び声が聞こえて見上げると船と人が落ちてきた。

「エースウウ!! 助けに来たぞオオオ!!」

あいつは、エースの言ってた弟か。

砂の小僧に名のある海賊共……

おいおい、なんつー奴ら引き連れてんだ……!

「久しぶりだな、白ひげー!」

エースの弟と一緒に来た砂の小僧がおれの背後に回る。懲りねえ奴だなあ。

おれが構えようとするのとエースの弟が砂の小僧を蹴り飛ばし、小僧の頭上から大量の水が降ってくる。

帆の上にいる娘が水を撒いたみてえだ。

…ありや、もう砂になれねえな。

「そのひとにてをだすなら、いくらルフィさんがつれてきたひとでもゆるさないよ?」

その声は怒気を含んでいておれに向けられたわけでもないのにその殺気に少し恐怖を覚えた

「あーっ!ニア!!お前ニアだろ?!」

エースの弟が少女を見るなり叫ぶ。

…ニア、だど?!そんな馬鹿な。だつてあいつは…

いや、その前になぜエースの弟がニアのことを知ってるんだ?!

まさか、本当に…?

「なあ、ニア!お前はおれが絶対に家族のところに連れてつてやるから!もう、泣くなよ!」

家族のところに連れてつてやる…だど?

信憑性が湧いてきた。…本当にニアなら降りてこい。

…顔を見せてくれ、ニア。

エースの弟が少女に降りてこいという少女は『おりれるならおりてるから!』と訴えた。

…ニアだな…

降りれない癖に高いところに登るようなアホな真似するのはあいつしかいねえ。

エースの弟がニアを降ろすと「まつてろ」と言った。

この様子じゃ、エースの弟はニアの言う家族が誰かを知らねえな

まあ、言えるわけもねえだろうなあ

エースの弟が走り出そうとすると見知らぬ小僧がいつのまにか近くにいて、その首根っこを掴んだ。

「こいつとどこで会った?」

ティーチに攫われたはずなのになんでエースの弟がニアをしってるんだ?

「シャボンディ諸島だ！茂みの中で『家族に会いたい。家に帰りたい』って泣いてたところをおれの仲間がみつけたんだ。それで、おれが家族のところに帰してやるって約束したんだ。」

シャボンディ諸島だア?!…よく無事だったな。

家族に会いたいわって泣いてた…か。

グララララ。寂しい思いさせちまったみてえだな。

何がともあれ、よく帰ってきた。

怖い思いさせて、寂しい思いさせて済まなかったなあ。

今度はちゃんと守ってやるからもう離れるんじやねえぞ

そういう思いを込めニアの頭を撫でる

ふと疑問を思い出した

「あの小僧は誰だ？」

ニアと一緒にきた謎の小僧。あいつがここまでニアを連れてきたのは想像がつく。だが、なぜこの戦争に加担する？

「サボのこと？サボはエースとルフィさんとおさなきときにさかずきをおかわしたぎきようだいでって。」

何?!

グララララ…まだ兄弟がいたのか。

こりやとんでもねえ助っ人が来たもんだぜ

ーサイドエンドー

第37話 正義と悪

ルフィさんとサボが処刑台へと走る。

わたしはそれを援護する。彼らには当てないように注意しながら彼らの周りに群がる兵士を矢で射る

「あの少女、なんて腕だ!! なんてあんな所から当たるんだ?!」

「しかも矢に纏ってる風やら水やら火やら…なんて厄介なんだ!」

海兵が口々に叫ぶ。

「一気に攻め込め!!」

「ニアの援護があるんだ! 恐れることはない!!」

「うおおお!! 信頼してるぜ! ニア!」

ルフィさんがわたしを「ニア」と呼びまくってから白ひげ側が元気になった。

なんだか嬉しい。

必死になって帰ってきた甲斐があつたと言うか…

「アイスBALL!!」

氷が飛んできた。…青雫さんだな。

矢に炎を纏わせ射ろうとするとその前に隣にいたオヤジさんが能力で青雫の氷を砕く。

「こいつもおれの大切な家族なんだ。手エ出すんじゃねえ…若僧が」

嬉しいことを言ってくれる。

諦めずに帰ってきてよかった。

「八尺瓊勾玉!」

光の球体が大量に飛んでくる。

…あれ、最初にマルコが受けたやつだな。

同じような力をぶつけたら相殺できないだろうか?

そう考え、彼の真似をするかのように同じ大きさの光の球体を創り出し彼の技にぶつけると空中で相殺され爆発が起こる。

その爆発に乗じて矢を射るが彼は間一髪でそれを躲した

「背後にも注意しな。白ひ……うーっがはっ!」

後ろからさっきの砂の人がフックでオヤジさんを攻撃しようとし

だから砲弾くらいの水の弾をお腹に1発喰らわせてやった。

「……このひとにてをだすならようしやしないっていったよね？おにーさん、ことばがわからないのかな？さんどめはないよ。つぎやったらころすから」

「ニア。おれは大丈夫だ。落ち着け」

わたしが砂の人を威嚇するとオヤジさんが止める。

彼を見上げるとどことなく不安そうな表情を浮かべていた。

そうだ、エースの救出が優先なんだ。ここで手の内を明かしちゃいけない。

「…うん、ごめん。とーさん」

「ニア……。なにがあつたんだ……。……いや、今は話してる時間はねえな。頼むから…堕ちないでくれ」

堕ちる？

…エースの心配をしてるんじゃないの？

「ルフィーー！」

オヤジさんと話しているとエースが突然叫ぶ。

どうしたんだろうか

「おれにはおれの冒険がある！おれには、おれの仲間がいる！！お前に助けられる筋合いはない！！帰れ！ルフィー！なんできたんだ！！そして、サボ！お前今までどこにいたんだ！？なぜ今更現れた！！」

…2人を巻き込まないようにあえて突き放してるのか。

優しいなあ、エースは

「おれは、弟だア！！海賊のルールなんて知らねえ！おれは死んでも助けろオオ！！」

「おれもだ、エース！！おれたち、兄弟じゃねえか！！どこに居たって駆けつけるさ！変な氣い使うんじゃねえ！！」

2人がそう叫ぶと、海兵達が騒ぎ出した

「火拳のエースに弟?!兄弟だと?!」

「じゃあ、あいつらも海賊王の息子?!」

すると、元帥が拡声器でみんなに聞こえるように言い放った

「何をしている！ルーキー1人とよく分からん小僧に戦況を左右され

るな！その男もまた未来の有害分子、幼少の頃火拳のエースとともに育った義兄弟だ。その血筋は革命家ドラゴン!!そっちのもう1人の方は分らんが只者ではなさそう。その3人を逃してはならん！」が、サボは別の意味で驚いていた

「はあっ?!ルフィ、お前っ…ドラゴンさんの息子なのか!?その前にあの息子いたのか?!」

「サボ、おれの父ちゃん知ってんのか?!」

「ちよつと、サボ!ヴァナータ、どうしてここにいるツキヤブルの?!」

「あ、イワンコフ!説明は後ですからエース助けるの手伝ってくれ!それからだ!」

「んもう!人使いが荒いツキヤブルよ!仕方ないわねえっ!デースウインツク!!」

顔面凶器さんがパチつと瞬きをすると人が吹っ飛んでいく。

何あの光景…。シユールすぎる。瞬きで人って飛ぶの?!

落ち着けわたし。冷静になれ。

あの人たちにツッコミ入れてたらきつとキリがない。

さつき元帥さんはなんで言った?

そうだ。エースがロジャーさんって人の息子でルフィさんはドラ

ゴンさんの息子…。だから逃しちやいけない…

…だから、にがしちや…いけない?

犯罪者の子どもは…犯罪者ってこと?

エースは『海賊』としてじゃなくて『犯罪者の息子』として処刑されることになったの?

…なに、それ。

ああ、どうしよう。すぐ殺してやりたい。

そんなふざけた理由でエースを殺そうとしてる海軍のバカどもを今すぐに皆殺しにしてやりたい…。

わたしは弓を構えながら船から飛び降り、矢尻を地面に擦り付け火花を散らし熱をもたす。そしてありったけの覇気を込めて処刑台にいる元帥さんの頭部を狙い放つ。

「ーっ!?!」

元帥さんはまさか届くとは思っていなかったのか矢が近くに来るまで気づかなかったのか驚いていたがそれを避ける。が、完全には避けきれなかったみたいで彼の頬に傷がつく。

矢は空を切り彼の後ろにある建物に刺さるとその建物は崩壊した。

元帥さんともう1人：多分ガーブさんって人だ。その2人は自分の後ろにあったはずの建物が跡形もなく崩れ落ちたのを確認すると驚愕の表情を向けた

他の兵士たちも海賊たちもその威力に息を呑み、戦場が静まり返る。

「…エースが、ロジャーさんってひとのむすこだからなんなの？ ルフィさんがドラゴンさんのむすこだからどうしたっていうの？ そんなからっぽのりゆうで…しよけいされるの？ だれがどこにどううまれようがそのひとのせいじゃないのに、どうしてちすじのかんけいでひとをころすの？ それか、かいぐんのかかげるせいぎってやつなの？」

そういうと元帥さんは言葉に詰まる。

だが、すぐに反論を返した

「……そうだ！……我々は”正義”だ！危険分子は排除しなければならぬ！火拳のエースは海賊王の実の息子！未来の有害分子だ！奴の血筋は絶やさなければいけないんだ！正義の名にかけて！」

「それは…だれにとって、なんのせいぎ？」

「海賊は善良な一般市民にとって恐怖の対象でしかない！そんな一般市民を守る為に我々が存在するんだ！海賊は悪！これは昔から決まっていることだ！」

海軍は”正義”で、海賊が”悪”。

揺らぐことのない絶対的な関係。

「…なにがただしくてなにがまちがってるかなんて、そんなの…だれにわかるっていうの!? だれかにとってのせいぎは、だれかにとってのあくだ！そんなふたしかなものをほこらしげにかかげて、うたがわしいってだけでばっするのがせいぎだっていうの?!」

「お前は子どもだから分からないんだ！疑わしきは罰するべきだ！何

かが起こってからでは遅いんだぞ!! いいか、海軍は絶対なる正義! それを揺らがない真実だ!」

”絶対的な正義”

その言葉でわたしは昔を思い出した。

船で風邪が流行っていた時、わたしはイオンと『絶対無事に帰る』つて約束した。けれど、あの時青雉に助けられなかったらわたしはイオンとの約束を破ることになっていた。

…そうだ。この世に《絶対》なんて事、ないんだ

「ぜつたい」なんて、ぜつたい…しんじられないことばだ! こたえなんてひとによっていくらでもすりかわる! こどもだからわからない?! みかけでいいかげんなこといわないで! かいぞくはあくだつて?! かいぞくだからつていちがいに『あく』つてことはないんだ!」

「さつきから…貴様は一体何者だ! 白ひげの船のクルーなのか?! 貴様のような子どもが何故火拳を助けようとする!!」

その言葉を聞きわたしはフードを外す。

顔が顔になり、海賊海兵共に騒ついた。

「銀髪に黄金と空色の目…だと?! 貴様まさか、シャボンディ諸島でクザンとボルサリーノに傷を負わせて逃げきった奴か!」

「…そうだよ。わたしね、むじんとこのもりのおくにすてられてたの。そんなわたしをかれらはひろつてそだててくれたんだよ? ひとりでいきっていくことができないうまれたばかりのこどもをすてるいっばんしみんが”せいぎ”で、それをみつつけてそだてることにしたかいぞくが”あく”?…ふふっ。おかしなはなしだよねえ」

わたしの言葉にまた戦場が騒めく。

海兵たちに迷いが生じ始めたのがわかった。

本当に白ひげ海賊団は滅ぼされるべき悪で、火拳のエースは処刑されるべき存在なのか。

兵士達は迷い動きが鈍る。

だが、それは一部で数々の修羅場を乗り越えてきたであろう中将や大将は至って冷静だった。

「世の中は理不尽な事だらけだ。お前も海賊の味方をするのなら排除

対象だぞ。」

「クザン大将や黄猿さんから逃げ切れる程の危険人物を放置しては置けない。君には悪いが消えてもらおう」

「そうだな。まだ10を超えたばかりのような小さな子が大将と同等の力を持っているなど…化け物じゃないか」

化け物…。そうだ、わたしは普通じゃない。けど、彼らはそんなわたしを家族だと言ってくれる。

「わたしが、ばけものにみえる？ふふっ…ふふふっ。『ごどもをまもる』かいぞくと『ごどもをのしる』かいぐんと…いまのじょうきょうを”ぜんりょうないっぱんしめん”がみたらどうおもうかな？」

「ーっ!!!（しまった!!乗せられたか!）」

化け物だなんて自分が1番よくわかってる。

狂いそうになる自分を必死で抑えて微笑み余裕を見せる。

「命知らずなガキじゃのう。じゃが例え天地がひっくり返ろうが海賊は絶対的な悪！正しくないもんは死ぬべきじゃー！」

「そうだね。”あく”がいなきや、”せいぎ”もないもんね」

「ーっ!!さて!サカズキ!ここでそいつを攻撃したら思うツボだ!!」

わたしはマグマを纏い拳を振りかざす大きな人を微動だにせずに見ていた。

赤犬さんが拳を振り下ろそうとした時、身を守るために水の壁を作ろうとしたが体が無抵抗に横に持っていかれその拳がわたしに届くことはなかった。

「お前はっ!どうして危険に飛び込んでいくんだよい!馬鹿なのか?!死にたいのか!?っ!か、どうしたんだその髪!!短いのも似合ってるけど何で短くなってるんだよい!!」

赤犬さんの拳が振り下ろされる前にマルコがわたしを横から攫い比較的安全なところで降ろすと両肩を掴んで前後に振りながら説教を始めるがどこかズレてる気がする

「えっ!?!そこ?!っ!つ!つ!こむとこそこのなの?!」

「他になにがあるってんだよい!ティーチか!?ティーチに何かされた

のか!？」

「いや、もつとほかにあるでしょ!?なんでまつさきにきにするのがかみのけなの?!」

緊張感が一気に死んだ!!

なんてお人だ!

「…マルコ。今はシスコンを發揮させてる場合じゃない。だから、後で監禁して尋問しよう。言い訳はそのときに聞いてやろうじゃないか。」

イズウ?!あなた最近ドS具合に磨きがかかってない?!

むしろヤンデレ!?

「…ニアツ!!お前…生きてっ…よかつ…生きてたのはよかつたけど!お前!なんで俺を庇ったんだ!もつと自分を大事にしろ!!」

これどういう反応で返せばいいの?!えっ!わたし怒られてるの?!感謝されてるの!?!どっち!!?

「…俺たちの寿命をあと何年縮めたらニアは無茶しなくなるのかな?俺たちがどれだけ心配したか、守れなかつたことをどれだけ後悔したか…。なんなら今すぐにわからせてあげようか?」

完璧な笑顔でめちやくちや怖いこと言ってる!この人!ハルタさん

「お前…実は俺たちが海楼石並みの硬さの心を持つてると思ってるだろ。エースがお前が死んだと言った時、俺たちの絶望具合を後で思い知らせてやるから覚悟しておけ」

怖い!

シスコンお兄ちゃんズのシスコン具合がカンストしたと思ったら上限解放されてる!?!しかもヤンデレ方向に向かつてない?!

「うわっ!!いいいな隊長!俺もあそこ行きたい!ニアと戯れたい!!」

これ戯れなの!?!なんなら今が一番の危機だと思っただけ!!

「まて、カルガン!気持ちちはわかる!痛いほどわかるけど持ち場を離れるな!」

「あとでたくさん愛でればいいんだ!俺らの天使は不滅なんだ!」

人を不老不死みたいに言わないで?!

「おいおい…。なんでそんなガキ1人を隊長が5人がかりで助けるん

だいいく？ニアちゃん、君は白ひげの船のクルーなのかア？」

「どうせ全員死ぬんじや。別れの挨拶でもしたらどうじや？」

「油断するなよ。サカズキ、ボルサリーノ。あの中で1番厄介なのはニアちゃんだ」

大将が3人揃ってこつちに来た。思うツボだな、馬鹿なんじやないの？

まあ、気を引いてる隙にサボトルフィさんがエースを助けてくれるだろう。なら出来るだけ時間を稼がないと…

「やつかいだろうがなんだろうがわたしはわたしのまもりたいものためにたたかうんだ！あまくみてるみたいめみるよ！」

「…ふん、ガキだろうが敵なら容赦せん！拾われたといっちよったな、小娘。可哀想にのう。ならず者に拾われてその命を落とすか。呪うんなら己の運命を呪うがええ！」

「ガキとかこどもとかいろいろいうけど、わたしこれでも15さいせんごだからね！そこまでちいさくないよ!!」

小さいのは身長だけだよ！と、言うとお兄ちゃんズが微妙な顔をする。

「ニア、それは少し違うぞ」

「なんかズレてない？」

「お前、さつき自分で自分の事こどもって言ってなかったか？」

あなた達もさつき結構ズレてたよね!?

「わしからみたらガキじや!!小娘！」

赤犬さんが右手をマグマに変え、殴りかかってくる。

左手の平を前に出し覇気を纏わせ水の盾をイメージする。

地面から巨大な水柱が立ち、赤犬さんの攻撃を防ぐ。

すると、水が蒸発し水蒸気が昇り、視界を奪う。

視野が悪くなったところで弓を取り出し矢をつがえる。見聞色で気配を探り、矢の周りに一回り大きく水を張るイメージをして放つ

ドスツ。

「ぐはっ…小娘エ!!覇気使いか!!めんどくさいのう!!」

赤犬さんの腹部に当たったらしく逆上してきた。矢を抜きながら

殺気をこちらに向けるが痛くも痒くも無い。

それを青雩さんが止める。

「さて、サカズキ!!ここで3人でこいつらを相手にするのは思うツボだ!分かれるぞ!」

青雩さんがいうと赤犬さんが舌打ちをしてルフィさん達の方へと向かった。

黄猿さんも別のところへ行く。

これは少しまずいな、いくらサボがいるとはいえ相手は大将だ。

ここはお兄ちゃんズに頑張ってもらおう。

「わたしはだいじょうぶ。にいちやたちもサボとルフィさんのえんごにまわって」

わたしがそういうとすこしの無言の後にイゾウさんがくしやりと頭を撫でた。

「…チツ、仕方ない。今回の無茶は許してやる。」

「だが、死んだら許さねえからな!」

「またあとでね、ニア!」

「妹に頼らなきゃいけねえとは情けないな。ニア、無茶すぎるなよい。」

「逃げることも戦いだからな。引くときは引けよ?いいな!」

そしてわたしたちも散り散りになりそれぞれの持ち場へとついた。

「ニアちゃん、君とはできれば戦いたくなかったんだが…」

「…わたしだってできればたかいたくないよ。けど、うしないたくないんだ。わたしのかくご、みくびらないでよね」

「チビのくせに背負いすぎじゃねえの?ニアちゃん。でもまあ、やるってんなら手加減も容赦もしねえぞ」

「のぞむところだよ。」

それぞれの場所で火花は散る。

…強いものが勝つんじゃない。勝ったものが強いんだ

―エースサイド―

処刑台に立たされ、死を覚悟した。

だが、オヤジが…みんなが助けに来てくれた。おれがみんなの言うこと聞かずに勝手に行動して捕まったのに…。

おれはニアを救えなかったのに、オヤジは「なら、お前まで死なせるわけにはいかない」と言った。

…みんなが命かけて戦ってくれる。そのことに涙が出そうだ。

するとマントで顔を隠した2人組が現れ、海兵を蹴散らしていく。

…誰だ？あいつらは。

そんなことを思っているとルフィが空から降ってきた。

ル、ルフィ?!あいつ、ここまできやがったのか!!

なんて無茶な奴だ!しかも、なんて奴ら引き連れてんだよ!

ルフィがオヤジをクロコダイルから守ると帆の上にいる子どもを呼んだ。

「あーっ!!ニア!お前、ニアだろ?!」

?!ニア、だと?!いや、だってあいつは…

って、なんでルフィがニアを知ってるんだ?!もしかして、ニアが奇的に生き延びてルフィに会った、とかか?

じゃ、じゃあ…ほんとにニアなのか?!

「もう…うるさいよ!ルフィさん!おられるならとつくにおりてるから!」

どうやら、ほんとにニアらしい。おれの頬に涙が伝った。

「火拳、なんだ?あの少女は」

元帥がおれに聞く。

何って言われてもあいつは大事な妹だ。それ以外なんでもない

「ニアだ」

「…質問を変えよう。あの少女がお前達がさつき言っていた『妹』か?」

「そうだ。おれたちの大事な妹だ。もう、会えねえと思ってた…」

ニアが生きていた…。それだけでおれは十分だった

その後もいろいろ聞いてきたが元帥の言葉は耳に入ってこなかった。それほどまでに嬉しかった

ルフィがおれのところに向かおうとするがマントの男に何度も止

められる。

ルフィとマントの男が話すと、ルフィが叫んだ。

「さ、さ、さ、サボオオオオ?!?!」

サボ?!サボだと!?う、嘘だろ!!

だって、あいつは…。死んだって…!!

今までどこで何してたんだ!!生きてたなら連絡の1つくらい入れやがれ、馬鹿野郎!!

死んだと思ってた大切な兄妹が2人とも生きていた。

これほど喜ばしいことはない。

ニア、サボ：ありがとう…!!

生きててくれて、ありがとう!!

だがこんな馬鹿のせいでルフィとサボがきずつくのは見てられない。

おれは追い返そうとするが2人は帰らなかった。

…なら、おれはもう足掻かない。おれを裁く白刃の刃も、おれを助ける救いの手も全て受け入れる。じゃないと、みんなに悪い。

命をかけて戦ってくれてるんだ。おれも命をかけよう。

ーサイドエンドー

ーサボサイドー

エースを助けるためにルフィと共にエースの元へと向かう。

「にししっーまたサボとこうして一緒に走れるなんて夢みてえだ!」

ルフィが無邪気という。

…まあそうだろうな

ニアと会わなかったらおれたちはこうして再び出会う事も無かったかもしれない。

「全部ニアのお陰だな!踏んだり蹴ったりだぜ!」

「…馬鹿は相変わらずだな、ルフィ。それをいうなら至れり尽くせりだ」

「それだ!…それより、ニアってすげえんだな!おれらを守るように色んなもん纏った矢が飛び交ってる!」

「そうだな。あれだけ広範囲攻撃が出来る矢を放ってるのに、おれ達に一切被弾しないって……狙撃のプロだな」

そんな話をしながら走っているとエースが叫んだ。

「ルフィー！おれにはおれの冒険がある！おれには、おれの仲間がいる！！お前に助けられる筋合いはない！！帰れ！ルフィー！なんで来たんだ！！そして、サボ！お前今までどこにいたんだ！！なぜ今更現れた！！」

ごめんな、エース。心配かけて

けどもう大丈夫だ。記憶も戻ったし、お前は死なせねえよ

「おれは弟だアアア！海賊のルールなんて知らねえ！おれは死んでも助けるぞオ！」

…ははは！相変わらずだな、ルフィーは。

けど、おれも同意見だ。

すると元帥が拡声器でルフィーの父親の名を明かした。

「そいつの父親は革命家ドラゴン！」

…はあっ!?ドラゴンさんの息子だと!!?

あの人息子いたのか?!

こりゃ、驚いたぜ…。だが誰の子だろうが関係ねえよ。

お前たちはおれの大切な兄弟だ。

2人とも死なせないさ！

ーサイドエンドー

番外編 七夕

これはエースが白ひげ海賊団に入って少ししてからのお話。

「イオンにいちや！もうすぐこのまえのはなしのきせつじゃない?!」

ニアがやや興奮気味で図書室のドアを開ける。

「やあ、ニア。どうしたんだい？そんなに興奮して。珍しいね」

「あのね！このまえよんでくれたおりひめさまとひこぼしさまのおはなしあつたでしょ?」

「ああ、七夕伝説のことかい?」

「そう！だからみんなでおねがいごとにしたくなつて!」

無邪気に言うニアにイオンは頬を緩ませた

「ふふつ。可愛いね、ニア。うーん、そうだねえ…。じゃあ、隊長たちに内緒で準備をしてちよつとしたサプライズにしてあげようか」

「!!いいの?!わがまま…きいてくれる?」

「我儘だなんて、そんなことないよ。ニアがおねだりしてくることなんて滅多にないからね、頑張ろうかな。さすがに笹までは用意できないけど」

「うん！いいよ！たんぎくにおねがいかいて、もやすくらいのかんたんなのでだいじょうぶ!」

そうしてニアはイオンの協力を得て七夕に向けて色々準備を始めるのだった。

ーイオンサイドー

ニアが図書室に来たとおもったら七夕の願い事の短冊をみんなで書きたいと言われた。

可愛いなあ…。純粹で、可愛くて、いい子だね。本当に

ボクは勿論協力するよ。ニアがボクらに頼ることなんて滅多にないからね

ニアの数少ないおねだりは聞いてあげなきや

けど、ボクとニアの2人じゃ、さすがに準備しきれないかな

短冊と燃やすための囲炉裏か。あとは千羽鶴

ん？あれはロキアスにルーカスにカルガンじゃないか。

ちようどいい、手伝ってもらおう

「ちよつといいかな？」

「おつ、イオン！どうしたんだ？珍しいじゃないか。お前が俺たちに話しかけてくるとは」

「なんだ？なにか悩み事か？聞くぜ？」

「俺も俺も！相談ならのるぜ！！」

「相談…って程でもないんだけどね、ニアがボクにちよつとしたお願いをしてきたから手伝ってほしいなって」

そういうと3人の目が輝いた。

「ニアが!？」

「それは手伝うしかない!!」

「なんだ？協力するぞ！」

ニアの事になるとみんな協力的なんだよね

ふふつ、ニアにもちよつとしたサプライズをしてあげよう

「うん、じゃあ手伝ってもらおうかな。ルーカスには短冊を用意してもらいたいな。青、赤、黄、白、紫の五色の短冊。」

「青、赤、黄、白、紫、だな。わかった」

「カルガンとロキアスは短冊を燃やす困炉裏が欲しいからレンガか何かを集めてきてくれないかな？」

「了解」

「燃やす？火はどうするんだ？」

「それはエースにでも頼もうかなって思ってるよ」

「二ああ…。適任だな」

ニアのためだからね。頑張ろうかな。

さて、ボクはニアの衣装を作るとしよう

「おーい、何してんだ？そんなところに集まって」

シースがボクたちを見つけると歩いてきた。

「シースかい？ちようどよかった。君、鶴は折れる？」

「折り紙か？折り紙は得意だぜ？」

「ならニアを手伝ってあげてくれないかな？今、千羽鶴を折ってるん

だ」

「は？なんで？」

「ふふっ。ニアのお願い事だよ。そろそろ七夕が近いからみんなでお願いを書いた短冊を燃やしたいんだって。ちゃんとしたやり方じゃないけど、みんなでやる事に意味があるからね。協力してくれるかな？」

「そういうことか！任せろ！ニアのおねだりは聞かねえとな！あいつはどこにいたんだ？」

「図書室だよ。今、一生懸命鶴を折ってるはず。あ、隊長と他の隊員には内緒にしておいてね」

「了解。んじゃ、行つてくるぜ」

ふふっ、楽しくなりそうだね

ーサイドエンドー

カチャカチャカチャカチャ……

「お前、折るの早えな」

「これで200わ。よし、つぎ！」

「おいおい、何時間やってるつもりだよ。そろそろ休憩しようぜ？根詰めすぎると当日に倒れるぞ？」

「うっ…わかった。じゃあいつたんきゆうけいする！シースにいちや、おひざかりでもいい？」

「!!も、もちろんだ!!」

ニアはシースの膝に頭を乗せ仮眠をする

「(ニアに膝枕をする日が来るとは…！イオンの頼みを聞いてよかった!!…隊長たちに見られたら殺されそうだが…)」

「……すこしねてもいいかな？」

「もちろんだ。」

シースは「もう幸せ」とかなんとか思ってたそう。

数日後、ロビーにて

「なんか、ここ2、3日ニアをあまり見なくなっただな」

「ずっと図書室にこもってるみたいだよ。イオンが『ニアの為にもし
ばらくそつとしておいてあげてください』ってすんごい笑顔で言っ
た」

「なんだ？ なにか企んでやがんのか？」

「そこをエースが通りかかった。」

「おつ、エースじゃねえかよい。」

「おー、マルコ、サッチ、ハルタ。どうしたんだ？」

「いや、最近ニアをあんまり見ないからどうしたのかなど。お前、何か
知ってるか？」

「あー…。まあ、今夜のお楽しみだ。」

「「はあ？」」

「ニアがみんなのために面白いこと考えてんだよ」

「ニカツと笑っていうエース。そのまま甲板の方へと消えていった。」

「なんだ？」

「俺たちのために面白いこと…ねえ…」

「まあ、今夜わかるらしいし。待ってみるか」

「そしてその夜」

ロビーには千羽鶴が飾られていた。

「ふうっ！ まにあつたよ、イオンにい！」

「頑張ったね、ニア。…ちよつとおいで？」

「？」

イオンに連れられ別室に行くとなースが待っていた。

「あれ？ ナースさん。どうしたの？」

「ニアちゃん！ まつてたわ、着替えましょ」

「??？」

「ふふっ、驚いた？ ボクからのサプライズ。着替えておいで、ニア」

「う、うん」

ニアはイオンの言う通りに着替えを始め、ナースがニアの衣装、髪
型をバッチリ決めた。

しばらくすると部屋のドアが開く

ナースはどこかほくほくとしている

「イ、イオンにいちや！なにこれ!!」

「ん？おや、ふふっ！可愛いじゃないか、ニア」

天女の羽衣の様なひらひらとした着物を見に纏ったニアが恥ずかしそうに頬を赤らめていた。

「ボクが作ったんだ。お気に召したかい？」

「つくった!?イオンに、さいほうもできるの!？」

「ふふっ、今度教えてあげるね。ニアならきつとすぐ覚えられるよ」

なんでもできるイオンにニアは驚くがイオンはニアの着物姿を見て満足そうだった

イオンとニアがともにロビーに行くと、短冊を用意して待ってるルーカス、カルガン、ロキアス、シースがいた。

彼らはニアを見るなり騒ぎ出した。

「お、イオンとニ……ニア!?なんだその格好!?めちやくちや可愛いじゃないか!!ちよっ、カメラ!誰かカメラ持ってねえか!？」

「あ、俺持ってる!部屋まで取りに行ってくる!ニア、ちよっと待ってる!」

「ニアー!天使か!?いや、天女か!？」

「すげえ!女って髪型と服装1つでこんな変わるのか!いや、ニアだからだな!」

シスコンはどこまで行ってもシスコンはだった

その騒ぎに何事だとシスコンを拗らせた隊長たちが集まってくる

「なんの騒ぎだよ……い……い……。イゾウ、天使がいる気がするんだが俺ちやんと生きてるかよ!？」

「大丈夫だ、マルコ。天使の様な妖精なら俺にも見えてる。」

「うわあ……。すっごい似合ってる!!可愛いね、ニア!」

そこにカメラを取りに行ったカルガンが戻ってきた

「カメラ持ってきた!あ、隊長!どうせならみんなで撮ろうぜ!」

「ふふっ、じゃあボクが撮るよ、ほらみんな並んで」

パシャっ

ニアを真ん中にし、何枚か写真を撮る。

海賊とは程遠い光景だ。

「おーい、ニアー!…って、何だその格好! すごい可愛いな!! こっちは準備できたぞ!」

　　エースもやってきた。

「じゃあルカにい! みんなにたんぎくわたして!」

「ほいほい。はい、隊長。…と、お前らも」

　　ルーカスが色とりどりの短冊を配る。

「お? 何の集まり…:ニア?! 何だその格好! 天使か!」

「…天使というか、妖精というか…。とりあえず可愛いな」

　　サッチとビスタもやってきた。

「サッチにいちやとビスタにいちやも! たんぎくにね、おねがいごとかくの」

「願い事? 願掛けのようなものか?」

「うん! じゃあ、エース! かんぱんいこ!」

「…まてまてまて!!!」

　　シスコンを拗らせた隊長たちが全力で止めに入る

「その格好のまま甲板に行く気かよい!」

「可愛すぎて心配だ! 外に出せない!」

「何でそんなに可愛いのか?! ニア! その格好、俺ら以外の人に見せたらダメだよ!」

「この妖精を外に出して飛んでいったらどうする気だ」

「空に帰る気か、ニア。ダメだ、そんなことさせられない」

「何言ってるんだ、こいつら」と、ニアは内心思う。

「ふふつ。ボクがいるんだから大丈夫ですよ、隊長方。たまにはこういうのも悪くないでしょう?」

　　イオンが笑顔でそう言うと、それもそうだな　と言い、いつも以上に過保護になりながらもみんなまで甲板へ向かった。

「グラララ! 可愛いじゃねえか! ニア!!」

　　甲板には白ひげもいて、ニアを見るなりそう言った

　　彼は一足先に短冊お願い事を書いたらしい

「ありがとう! けど、ちよつとはずかしい…。あんまり、こういうかっこうしないから…」

頬を染めて恥ずかしそうに言うニアに対し、周りの隊長や隊員は「可愛すぎるだろ!」と、思ったとか

「そ、それはそうとたんざくかいちやおうよ!」

恥ずかしさを隠すようにペンを取る。ニアが短冊に願い事を書く
とマルコにペンを回した。

「と、言われても…。願い事、ねえ…。ニアはなんてかいたんだよい?」

マルコが聞くと彼女は「ふふっ!」と笑い、満面の笑みで言った
「とーさんと、にいちやたちのねがいがかなくなりますように!」

無邪気な笑顔で言う彼女に一同は嬉しくて堪らないと言うように
ニヤける顔を必死に取り繕っていた。

「そ、それは…百人力だな。(ニアの笑顔が消えませんが…)ほ
い、サツチ」

マルコはサツチにペンを回す

「俺か…(ニアの無茶が減りますように…)よしっ。ビスター」

「ふむ。(ニアが元気でいられるように)こんな感じか?ほら、ハルタ」

「はーい。(これからもニアが笑顔でいられますように!)はい、イゾ
ウ!」

「お前書くの早いな。(ニアに幸あれ…つと)…これで全員か?」

イゾウが書き終わるとシースがペンを受け取り、それを確認したニ
アは「じゅんびかんりよう!」と嬉しそうに言った

「じゃあ、もやそう!」

「ん?これ燃やすのかよい?あ、だから火が焚かれてんだな」

「せつかく書いたのに燃やしちゃうの?」

ハルタが言うといオンが説明した

「煙は上に昇っていくでしょう?燃やした煙が上に昇っていくことか
ら願いが天に届くように。という意味が込められているんですよ」

「ははは!ロマンチックだな、それは!よし、じゃあ燃やすか」

イオンの説明にイゾウが返すと全員で一緒に短冊を火に入れる。

立ち昇る煙を見上げるとそこには満天の星空が広がっていた

「わあ…。すごい綺麗…。長いこと海賊やってるけどこんな風にじっ

くり夜空見上げたことないなあ…」

「たまにはこういうのも悪くねえな！」

そして、夜空を見上げるニアが呟く

「わたしね、いまとてもしあわせだよ。みんな、であってくれてありがとう」

静かな甲板にその声はよく聞こえた。

甲板にいるみんなが感極まっているとイオンが声を出す

「あ、ふふっ！ニア、っ覧。天の川だ」

彼が指差すとそこには雲状の光の帯が広がっていた。

「すごい！きれいな…」

そして、ほのぼのとした1日は幕を閉じた。

第38話 負の感情

ールファイサイドー

エースの処刑を知って助けるためにハンコックの力を借りてインペルダウンへと潜入した。その奴らは強敵でおれはかなりのダメージを負っちゃった。

……けど、エースは絶対に助ける!!

level6までいったが間に合わずにエースはすでに連行されていた。

おれはマリルフォードまで行く!と、協力してくれたイワちゃんに宣言する。ジンベエって奴も手伝ってくれるみたいだ。

そこにはクロコダイルもいた。こいつを出すのは渋ったけど仕方ねえ

待ってる、エース今行くぞ。

そう強く思いながらインペルダウンから逃げ出し、マリルフォードへと向かう。正義の門を越えてしばらくすると津波が襲ってきた。

津波に飲まれそうになった時、波が凍りその下ではすでに戦争が始まっていた。

エース!!ここでもたもたしてる時間はねえ!!すぐにでも行かねえと!!氷を滑り降りようとして船を固めている部分を攻撃すると氷が割れ、おれたちは真つ逆さまに落ちた。

なんとかみんな無事だったけど

「エース! やつと会えた!! 助けに来たぞオ!!」

そう叫ぶとエースともう1人の声がおれを呼ぶ。

誰かは分からなかったけど、気にしてる余裕はねえ!

クロコダイルが白ひげのおっさんを攻撃しようとしたから止めると奴の上から大量に水が降ってきた。見上げると子どもがクロコダイルを威嚇してた。

…ん? あいつ、もしかして…

「ニア! お前、ニアだろ?!」

こいつ、こんなところに飛ばされてたのか! こいつがここにいるって

ことは本当に他の奴らも別なところに飛ばされてんだな！じゃあ、みんな生きてる!!

…よかった。

エース助けて仲間見つけたらこいつの家族を探さねえとな

おれがおっさんと少し話をしてエースを助けに処刑台の方に走ろうとするとフードの男がおれの首を掴み止める。

何度も止められ、おれが怒るとそいつはフードを外しおれを優しく呼んだ。

「おれを覚えてねえか？おれ。だよ、ルフイ。お前にはエースの他にもう1人兄弟がいただろ？」

エースの他の…もう1人の兄弟。

おれはその言葉に目の前の男を凝視する

……………ま、まさか!!

「さ、さ、さ、サボオオオオ?!?!」

なんで!?!だってこいつ、死んだんじゃ…!!

目に涙が溜まるのがわかる。けど、今は泣いてる場合じゃねえ!!

おれはサボと一緒にエースを助ける為、今度こそ処刑台まで走った。

ーサイドエンドー

わたしは青雉と対面する。

正直怖い。実践なんて数える程しかした事がない。

けど、負けられない!

彼が腕を直角にし、技を繰り出す

「アイス塊フロック・暴雉フエザントベック嘴!」

彼が氷の巨大な鳥を創る。

わたしは自分の周りに炎の竜がとぐろを巻くイメージをする。すると炎がわたしを守るように立ち昇り氷の鳥を溶かした。

「あらー!なんつー火力!!」

その竜を操り青雉を襲わせる。追尾式のように青雉を追いかける「うわっ!そんな危ないもん向けないで頂戴よ!溶けるでしょ?!」

「ごおりはとけるものだよ!」

「なにげに酷いこと言わないでくれる?!」

抗議しながら彼はひたすら氷の塊を竜にぶつけて鎮火する。

「氷河時代!」
アイスタイム

次に足元を一瞬で凍らせた。

動きを止められる前に飛び上がり両手を下に向けて、砲弾くらいの大きさの火の玉をいくつか創り出し火山弾のように地面にぶつける。

氷は跡形もなく溶け、ついでに隕石でも降ってきたかのようなクレーターがあちこちにできた。

「おいおいおいおい……。ほんとに箱入りかよお前!これヤベエんじゃねえの?お前さん一人に時間喰うわけにもいかねえし……。ここは引かせてもらうぜ?」

青雫はわたしを無視して処刑台の方に向かって行った。

大将を3人揃えるのはまずいと思い追いかけてしようとしたが嫌な予感だったので一旦オヤジさんのところに戻ることにする。身軽に走りオヤジさんの隣へ行く

「グララララ……。お前どこでそれだけの術を身につけたんだア?そんなに戦えるほど戦闘に出しちやいねえと思うが」

「…わかんない。けど、みんながいるならなんでもできるきがするんだ」

オヤジさんと話していると後ろから声がした。

「おやつさん…」

「スクアード!今お前に連絡を…」

「ああ、すまねえ。おやつさん。後方はえらいやられようだ。」

なんとも言えない違和感を感じ、わたしは首を傾げる。

「なにしにきたの?」

そう言うと彼はゆっくりとわたしに視線を向けた

「…ニア、だったか?俺たち傘下の海賊はお前のことをあまり知らねえ。だが、隠される理由もわかる。そんな目立つ見た目してたんだな、お前。たまに見るときもフード被ってたから知らなかったぜ」

「はなしをそらさないで。なんでそんなにさつきだってるの?なにを

ゆらいでいるの?」

「……っ!」

わたしが違和感の正体を口にするとスクアードさんは目に見えて動揺した。

彼はオヤジさんを睨みつけ鞘から剣を抜くとオヤジさんに突き立てようとする。考える前に体が飛び出し、武装色で刃を掴むと指の力でへし折った。

…サボみたいなことした気がする。

「なっ!!」

「…なんのつもり?あなたもうらぎるの?うらぎりものには、せいさいを…」

「まてニア」

スクアードさんに近づき彼に向かって手を伸ばすとオヤジさんが伸ばした腕を掴み、止める。

「スクアード……。お前どういうつもりだ?」

「俺にこうさせたのはオヤジ達じゃねえか!オヤジは裏で海軍と密約を交わしていて傘下の海賊の命と引き換えにエースの命も保証されてるって!俺達を囮に使う気なんだろ?!」

「…なにそれ。あなたばかじゃないの?そんなことしてるんならみんなのちかけてたかかったりしないでしょ。みんなのあのひつしなかおみて、エースのいのちがほしようされてるなんておもうの?」

わたしがそう言うときスクアードさんは戦場を見渡す

状況がやつとわかったのか拳を握り歯を食いしばった

「仮にも親に刃物向けようとするとはとんでもねえバカ息子だな!!」

オヤジさんはそう言って彼を抱きしめる

「馬鹿な息子をそれでも愛そう」

…オヤジさんが許すなら仕方ない、か。

オヤジさんが彼と少し話すとわたしの方に来て頭を撫でる

「ニア、よく気づいてくれたな。助かった」

「ううん。たまたまだよ、とーさん。」

彼は膝をつき涙を流す

「すまねえ、オヤジッ！俺はっ……！」

「さっきのこうどう……つくなうきがあるならやることはなくことじやない。いいおとななんだからじぶんのしんじたいものくらいじぶんできめたらっ？」

「お前……可愛い見た目とは裏腹に結構はつきり物を言うんだな」

「いったらだめなの？」

「いや、目が覚めた。礼を言う。一度揺らいだ俺をオヤジは許してくれた。お前は俺を信じれないかもしれないが……俺は戦う！」

「…そう。」

彼はわたしにそう宣言すると船を降り、海兵を蹴散らしに向かった
「相変わらず人の心に入るのが上手いなア……お前は」

「うん？わたしはじぶんのやりたいようにうごいてるだけだよ」

「グララララ……。おれも出るぞ、ニア」

「わかった。きをつけてね」

オヤジさんが動いた。ここからが本番か。

あちらこちらで血が流れ命が散る。

ああ、なんて痛いんだろう。

こんなにも敏感だったかなあ……

ここは戦場だ。

恐怖、殺意、憎悪、嫌悪、嫉妬、嫉み、不安、軽蔑、絶望……

様々な負の感情があちこちで生まれてはわたしの心に突き刺さり、
抜けない棘となる。

痛いけど、苦しいけど、わたしだって引けないんだ。

引けない理由があるから……。

【“自分”の“痛覚”を“拒絶”する】

……よし。わたしも動こう。

再び船から降り、ルフィさんとサボさんの所へと向かった。

ーマルコサイドー

死んだと思ってた妹が生きていて、マリルフォードへとエースを助けにきた。

一緒にきたあの男は誰だ?…誰だろうとニアは渡さねえが。

ニアがフードを外し海軍を挑発する。おいおい、エースを助けるためとはいえ姿を簡単に見せるな…よ…い…っ!?髪が短くなってる、だど!?

いや、似合うけど、なにがあつた!?ティーチの仕業か!!

だとしたらほんとに許さねえあいつ!!

赤犬の前に立つものだから慌ててニアを救出すると比較的安全な所で説教をし、戯れる。

だが、そんな癒しのひとときでさえ今は邪魔される。大将が揃って俺たちの前に立ち主にニアを警戒する。

大将が散つたのを見て俺たちも散り散りになる。ふとニアを見ると青雫と同等に戦っていた。

あいつ、あんなに戦えたのか!?戦闘経験だつて数える程しか無いはずなのに…!!さすががとうかなんというか…。

その後なにを思ったのかオヤジの所へ戻つた。するとスクアードがオヤジを刺そうと剣を抜きそれをニアが止めた。

…まさか、スクアードの行動を読んでいた?いや、あいつは傘下の奴らとあまり関わってないはず。行動が分かるくらい親しい奴が傘下にいるわけ…っ!?

彼女の目に光はなく、無機質な人形のように冷たい顔をしていた。心をどこかに置いてきたような…。

あれか!ハルタたちが言っていたのは…!!

たしかに、ニアじゃないみてえだ。怖いな。このままあいつをこの戦争に参加させてもいいのか?

「マルコ…。あれ、大丈夫なのか?」

ビスタが俺に声をかける。どうやら同じことを思ってるらしい。

その後オヤジも動き出し、船から降りる。

そこに1人取り残されたニアは痛む心を抑えるかのように胸に手を当て目を数秒瞑る。だが、すぐに目を開けニアも船を降りた。

そのとてつもなく昏い目に俺は胸騒ぎがした

―サイドエンド―

オヤジさんが動いた後、わたしも船を降りルフィさんとサボの所へ向かう。

「ルフィさん、エースをたすけるのはいいけど…てじようはどうするの？」

いざとなったらわたしは拒絶すればいいだけの話だが、一応聞いてみる。

「ニア！お前、すげえ強かったんだな！大将と戦えたのか?!…手錠のことなら心配すんな！さつきハンコックから鍵をもらった！」

「海賊女帝と知り合いだった事に驚いたぜ…って、ニア。お前大丈夫か？」

サボがルフィさんからわたしに視線を移すと痛々しいような表情を浮かべた。

「なにが？」

「気づいてねえか。お前今、物凄い酷い顔してるぞ。下がった方がいいんじゃないかねえの？」

酷い顔って…。

今どんな顔してるのかな…。だって、すごく痛い。どうしてみんなそんなに平然としていられるんだろう？

「そうかなあ…。ふふっ、だいじょうぶだよ」

サボがいる反対側からルフィさんを狙う攻撃を受け止めながら言う。

多分彼も物凄いダメージが蓄積してると思う。

PXとか言うのと戦って、くまさんの能力でどこに飛ばされたかは知らないけど囚人服着た人たちと落ちてきたからきつとインペルダウンとか言う監獄から来たんだろう。平気そうな顔をしてるけど内面はボロボロだと思う。

なら近くにいる時はサボが捌き切れない攻撃をわたしは捌こう。

「…にいちやたちには…いわないでね」

ボソツと言うと彼らは少し間を置いてから「わかった」という。

自分も致命傷は受けない様に気をつけながら攻撃を捌き、処刑台へと向かう。

するとミホークさんが立ちほだかった。

黒刀を抜きルフィさんに向ける。

「…悪いが赤髪。この力、慎みはせんで。この黒刀からどう逃す?」

ルフィさんを庇うサボの前に立ち脇差を抜くと彼の一撃を受け、その力を下へ流す。その際に足元に巨大なクレーターができるが気にしない。

なぜなら力を流さないとその人の一撃は腕を持っていかれるからだ。

「ニア、生きていたのか。死んだと聞いたが」

「うん、きせきてきにね」

「随分と酷い顔をしている…。何があつた?」

「いたいんだ。ここは、とても…:…いたい。」

「…お前は優しすぎるな…。悪い事は言わない…。心を砕いてしまう前に船に戻れ」

「だめだよ、エースをたすけるんだ。じやまするならミホークさんでもようしやしないよ?ルフィさん、サボ。ここはまかせて」

わたしにミホークさんの相手を任せる事を不安に思ったのかルフィさんが戸惑うがサボがルフィさんを引つ張つてエースの所へとむかった。

それを横目で確認するとミホークさんと距離を取り斬撃を何発か飛ばす。

彼は驚いた顔をしたが冷静に全て受け流すと距離を詰め剣を振り下ろす。半身になって躲すと脇差を彼の首目掛けて振り上げる。

彼は空いてる方の手でわたしの腕を掴み剣を止めた。

自分でもここまでできるとは思わなかった。いや、彼が本気じゃ無いだけだ。

「背後にも注意しな!チビ!!」

後ろで誰かが刀を振るう気配を感じた。多分海兵だろう。

背後から斬りかかってくるのはいい度胸してるじゃないか。

…なら、死んでも文句いえないよね？

わたしは小さく笑うと腰のホルダーから銃を抜き、安全レバーを引く。

「(…今、笑ったか？…つ！銃を…！)よせ！今のニアに殺気に向けてるな！」

ミホークさんがおそらく海兵に叫ぶがもう遅い。銃口を後ろに向けて撃つ。

人を1人殺す度に心が1つ消えるような感覚を覚えるけど、躊躇はしてられない。

迷ったら最後、大切な人を失うかもしれないだ。

「ーっ！(何をしている、白ひげ!!早くニアを下がらせろ！これは相当まずい…。決壊したらマリ^こンフオ^島ードは沈む!)」

後ろを見ずに背後を狙ってきたやつを撃つと辺りが騒然とする。

「あのガキ、全く見ずに!!」

「なんて奴だ！見ずに頭を撃ち抜くなんて!!」
海兵が叫ぶ。

見聞色使えばできるんじゃないの？

「…かなりまずいな。ビスタ！鷹の目の相手を頼むよい！」

「任せろ！ニア、下がれ！」

まずい？なんの話だろうか。

なにか戦況が変わるようなことでも起こったのかな？

マルコがビスタに指示を出すとビスタがわたしを下がらせ、ミホークさんと戦い始める。

…えつと、どうしよう。

じつとしてるわけにもいかないよね。ここはビスタに任せてわたしも先に行こう。

ルフィさんとサボのサポートをしなきゃ！

ーマルコサイドー

ニアが鷹の目と交戦している時、あいつの背後を狙った海兵の頭を全く見ずに撃ち抜いた。

…なんつー腕してんだ。見聞色を使ったからと言ってあんな状態で1ミリも外さずに額のど真ん中撃ち抜くなんてイゾウでもできるかわからねえつてのによ

…だが、あれはかなりまずいな。

ティーチの所でなにか酷い目に遭ったのか知らねえがニアがおかしくなりかけてる。

今思えば当然のことだよ。あんなに優しいやつが人を殺してなんとも思わないわけがねえ…。

なんとも思っていないフリをしてるだけなんだ。

ニアをどうにかして戦場から下げたいが下手なことを言う逆逆に刺激しそうで怖えよ

「気づいてるか？マルコ。ありや、決壊するのも時間の問題だ。」

オヤジがニアを見て冷や汗をかきながらいう。

同じことを思ってるだろうよ

「ああ、かなりやばいな。下手したらこの島沈むぞ」

「だろうなあ…。止めれるか？…正直、見てられねえ」

「俺もだよ。やってみるが、難しいだろうな」

俺はビスタに鷹の目の相手を頼みニアに近づくがニアはエースのいる処刑台へと走っていった。

ニアを追いかけようとするとビスタと鷹の目の会話が聞こえる。

「お前達、何故アレを下がらせない？相当心を病んでるぞ」

「…気にかけてくれんのかい、鷹の目。今そのために俺がお前の相手

をしてんだ。」

「なら早くしろ。手遅れになる前に」

「何故そこまでニアをきにするんだ？お前、あいつの修行にも加担しづらいじゃないか。だいたい虐めてくれたみたいだが」

「可愛いからに決まってるだろう？アレといると癒される。それに可愛いものはいじめたくなるというじゃないか。」

「…殺していいか？赤髪と似た様なこというんじゃない、鷹の目」

「あの阿呆と一緒にするな」

………鷹の目ってあんなキャラだったかよ？

ニアに関わった奴ってみんなおかしくなってる気がするんだが気のせいかな？

そんなことを思いながら止まった足を動かし彼女を追う。

ニア……。お前はいつだって自分を犠牲にしてきたな。

その小さい体に抱えきれないほどの想いを背負って何度お前は死にかけた？

もういい、ニア。よく頑張った。もう十分お前には助けられた。

不甲斐ない兄たちを許してくれよ。次は必ず守るから、そんな顔しないでくれ……。

ーサイドエンドー

ルフィさんとサボを止めるべく、沢山の海兵がこちらに向かってくる。オヤジさんも、マルコたちも海兵を蹴散らすがなんせ相手は将校や七武海だ。簡単に行くはずもなく手こずっていた。

「白ひげ！未来が見たいなら今見せてやる！やれ！」

元帥が執行人に指示を出しエースを処刑しようとした。

オヤジさんが動きそれを止めようとするが胸を抑え吐血し、膝をついた。

っ!!そうだ、病気が進行してるんだ！

マルコさんがそれに気づき慌ててオヤジさんの元へと向かう。

「オヤジ!!」

その際にマルコは海楼石の手錠をつけられ、黄猿さんにレーザーで撃ち抜かれた

「マルコ!!」

「余所見したろ！今！」

ジョズがマルコに意識を逸らすと青雉さんがジョズを凍らせる。

すると赤犬さんが右手をマグマに変えオヤジさんを貫いた。

「っ!!!」

ほんの数秒、迷ってる間に事態は悪化していった。

どうする？まずはエースの処刑を止めないと……!

そう思って霸王色を放とうとすると誰かが先に使った。

「やめろおおおお!!」

：ルフィさん！持ってたんだ。なら話は早い。

エースは彼らに任せて、マルコ達を…!!

わたしは急いでマルコのところへ行つた。

「マルコー！だいじょうぶ?!」

「ニアか。大丈夫だよ」

「うそー！きざるにうたれてだいじょうぶなわけない！わたしにはむちやするなっていうのになんでじぶんはむちやするの！」

そう言つてわたしは海楼石とマルコの怪我を拒絶した。

この力のせいでバケモノと罵られても、これで助けられるならいくらでも悪は受け入れよう。

「おいおい…、何だア？今のは。ニアちゃん、何をしたく…？」

黄猿さんはわたしがマルコに何かをしたのだと思つたのか問いかけてくる

その問いに対しマルコが顔を顰めた

「…っ…もういい、ニア。よく頑張つた。お前は下がれ」

「わたしは…じゃま？」

「ちがうっ！そう言うことじゃねえよい！」

「だいじょうぶ、ジヨズととーさんもたすけてくる」

「待てよいーニアー！」

マルコが腕を掴み止める。

黄猿さんはわたし達の会話が終わるのを待つてくれるわけもなく攻撃を繰り出してくる。それに気づいたマルコがわたしを庇う様に抱きしめ黄猿さんの攻撃を背で受けようとするが…そんなことさせるわけない

「きよぜつする。」

ポソつと眩くとマルコと黄猿さんの間にガラスの様な壁ができそれが光の球体を吸収すると消えた。

それを目の当たりにした黄猿さんは何が起きたのか分からずに啞然としていた。

「ーっ!?!」

「マルコ、だいじょうぶ。」

彼の手が緩んだところで拘束から抜け出しジヨズのところへと向かう。

”凍らされた”という”事実”を”否定”すると氷が消えた。

溶けたのではなく、消えたのだ。

そんな不可思議な状況を目の当たりにした青雫さんだが、わたしの仕業だということに気づくと睨みつけてくる。

「……ニア？……俺は確か……。……っ!!まさかお前っ!!馬鹿!海軍の前で何使ってるんだ!!」

氷が解け、すぐに覚醒したジヨズは状況を理解するとわたしの心配をする

「わたしはへいきー!」

そう言っつてこんどはオヤジさんのところへ行こうとするが青雫さんが両棘矛バルチザンを撃ちわたしを威嚇する。

それをかわし、青雫さんと向き合う

「おい、何した?ニアちゃん。今のはなんだ?」

「うるさい。じやまするならころすよ?」

早くオヤジさんのところに行きたいのにそれを阻止されて苛立ち口調が乱れる。

「……こりゃあ、まずいな(正直、ニアちゃんのが白ひげより何倍も厄介なんじゃない?)」

冷や汗をかいている青雫さんに銃を向ける

「いそいでるの。どいて」

覇気を纏わせ何発か撃つが彼はそれをかわす。

まあ簡単にはやられてくれないよね。

弓に持ち替え、矢を持たずに弦を引く。

「……?」

彼はわたしの行動を訝しげに見る。

イオンから学んだ。”見えない”って、怖いよね?

風を操り空気を集めて矢にするイメージをし、弦を離す。

もちろん空気だか見えるわけない。例えるならエアガンを人に向

けているものだ。

「そんざいししないもの」

空気で創られた矢は彼の右肩を貫通し血を流す。

自分に何が起きたのか分からず右肩を触りその手に血がついているのを確認すると驚愕の表情を浮かべた。

放心してる彼を無視してオヤジさんのところへ向かい怪我と病気を拒絶する。

胸に風穴が空いてたわけで、それが治ったことにより海軍側が騒ぎ出した。

「なんなんだ、あの子は!!さっきから…怪我を治しているのか?!」

「治すなんてレベルか!?あれ!!」

感じるのは、恐怖、畏怖。

まあ、当然といえば当然だ。けど、やっぱり痛い

今まで向けられたことのない感情だ

「ニア…。酷え面してるぜエ?辛いんならさがってなア。お前は十分よくやった。」

「だいじょうぶ、わたしはへいき」

「…大丈夫じゃねえ奴ほど大丈夫って言い張るんだよ、ニア。そんな酷え面で平気と言われても説得力ねえぜ」

「うん。でも、ひけないの。もう…あとには、ひけないんだ」

そう言ってサボたちを狙っている黄猿さんに矢を放つ。

そしてついに、サボとルフィさんが、エースを解放した。

「「火拳のエースが解放された!!」」

その叫びに安堵する。

あとはみんなが無事に帰るだけだ。もうちよつとだけ…あとちよつとだけ…耐えなくちや。

—ハンコックサイド—

軍艦と共にマリンスフォードに降ってきたわらわの愛しき人…。無事じゃったか、ルフィ!心配した!

さすがルフィじゃ!!

ルフィはこの戦争の序盤で突然現れた謎の少年少女と知り合いらしく話し始めた。

…その少女は誰じゃ、ルフィ！わらわというものがありながら…他の女と仲良くするとは…!!まさか浮気!?

あの娘はルフィのなんじゃ!!気になって仕方がない…!

しばらくするとルフィと謎の少年が共に走ってきた。

煙がルフィを襲おうとしたからとりあえず蹴飛ばした。

わらわの愛しき人に手を出すとは…殺してやろうか?この男

「ハンコック!!」

っ!!また、わらわの名を!!

「なっ…!ルフィお前、女帝と知り合いか?!」

「ああ!ハンコックのお陰でおれはここまで来れたんだ。感謝しても仕切れねえ」

そんな、感謝だなんて

わらわはわらわのしたい事をしただけじゃ…ポッ

「と、ところでルフィ。その男と共に来たあの少女は誰じゃ?」

「ん?ああ、ニアのことか?ニアは白ひげのおっさんの船のクルーらしくてな、迷子のあいつとシャボンディ諸島で会って、家族のところに返してやるって約束したんだ」

なんと!迷子とな!?

そんな子にまで力を貸してやるとはなんて優しいのじゃ!

ああ、さすがはルフィ!!

はっ!いかんいかん、感極まつてる場合ではない!

わらわは鍵を出しルフィに渡す

「ルフィ、兄の手錠の鍵じゃ」

「……………!!ハンコック!!」

「…お前、七武海だろ?いいのか?海賊に加担して」

なんと無礼な男よ。

こやつは何者じゃ?只者ではなさそうじゃが…

「わらわは何をしても許される…そうよ、わらわは美しいから!」

「……………そ、そうか。」

男が引きつった顔をしておるがわらわはルフィ以外どうでも良いのじゃ

するとルフィが抱きついてきた

な、な、なっ！ル、ルフィ！こんな周りの目がある所で大胆な！！

「ありがとう！恩にきるよ！！」

「よ、よいのじゃ！気にせず先を急ぐのじゃ、ルフィ！！」

そう言うルフィは男と共に先に行った。

わらわも戦おう！ルフィのために！！

ーサイドエンドー

第39話 壊心

―サボサイド―

ルファイが女帝から鍵を受け取り再びエースの元へと走り出す。海軍の作戦の一部だろう包囲網もニアの矢のお陰で碎けて無くなった。おいおい、なんて威力だ！敵に回したくねえな…。あいつが味方で良かったぜ

おれたちを止めるべく襲ってくる海兵どもを竜の鉤爪で蹴散らす。ルファイはイワンコフのテンションホルモンで動けてるだけらしいからもう限界を超えてる。だから出来るだけ温存しておいてほしい。ほんとは止めたいが何を言っても無駄なんだろうな。はあ、手のかかる弟だぜ

処刑台付近になるとイワンコフがイナズマを呼びイナズマがコンクリートを切ると橋ができた。

おれとルファイは一気に駆け上る

「ルファイー！ここは通さん！」

「どいてくれ！じいちゃん!!」

ルファイはガープを殴り飛ばし、処刑台の…エースの所まで辿り着いた

「ルファイ、サボ…」

「まっててくれ！鍵があるんだ！」

ルファイが鍵を取り出す。

「そんなものまで用意してたとはねえ…」

黄猿がレーザーを放とうとする。おれがルファイを庇うように立つとニアが黄猿に矢を放ちそれを止めた。

その隙にルファイがエースの手錠の鍵を外す。

海兵達がこっちに砲弾を撃ち処刑台ごと吹き飛ばそうとするがエースが炎の壁を作り、その砲弾が当たることはなかった。

処刑台が崩れ、おれたちは処刑台の下へと落ちる

「火拳のエースが解放された!!」

その叫びにおれたちはニヤリと笑った

ーサイドエンドー

海軍の包囲網を掻い潜ってエースたちの元へ向かう。

彼らの近くまでたどり着くとエースがわたしに気づいた。

「ニアっ!!」

すぐさまわたしを抱きしめ彼は生きてることを確かめるかのよう
に腕に力を込める。

「ニア、よかった…。ティーチが死んだって言ってたから…：てきつり
もう…：ごめんなっ！守ってやれなくて。信じてやらなくて。ごめん
な！」

「だいじょうぶ、わたしはだいじょうぶだよエース。だからかえろ？
わたしたちのいえに」

「ああ」

そう言っつてわたし達は来た道に戻る。

だが海兵たちは逃がさないと言わんばかりに道を塞いだ。

「4人の逃げ道を作れ！」

ハルタが叫び海賊たちが海兵を圧倒していく。

「みんな、どいてー」

わたしがそう叫ぶとオヤジさんのクルー達は一瞬で離れる。

わお。そんな素直に言うこと聞かれると信頼されてるのか怖がら
れるのかどっちか分からなくなるよ…

まあいいや。と、わたしは弓を構え矢を取り出し自分を中心に弧を
描くように矢尻を地面に擦り摩擦を起こして熱を持たせる。

さつき元帥さんに放ったのと同じようにありったけの覇気を込め、
ついでに嵐のような風も纏わせ放つ

物凄い音と風と共に直線上にいた人たちが全て吹き飛び見晴らし
が良くなった。

「おまつ！えげつなっ！」

「ひゃーっ！弓ってあんなつええのか！」

「ルフィ、あれはきつとニアにしかできないから」

褒めてるのか敵に同情してるのかどっち!?

いいからさつさと行こうよ!!

「はやくいくよ!!」

一喝すると3人は走り出す。

その後を追うと赤犬さんが呟いた。

「火拳を助けたら即撤退か?随分と腰抜けな奴らじやのう…。」

あからさまな挑発。

あなたは随分とお馬鹿さんですね。と、言いたくなっただけどやめておこう。

買わなくてもいい喧嘩は買わない。

今は逃げるのを優先させなくては。わたしの心が壊れる前に…

「腰抜け…?」

「エース。あんなあからさまなちようはつにのつちやダメだよ。わたしたちがこしぬけならそんなこしぬけにあなたをとりかえされたかいくんはただのまけいぬ。ほらよくいうでしょ?よわいいぬほどよくほえるって。」

「……………そ、そうだな」

「お前、ほんとに大丈夫か?」

「結構はつきり言うんだな、ニアは!」

2人が冷や汗をかきながらわたしを見る。

ルフィさんはニコニコしていた。

「誰が負け犬じゃ!小娘!!」

「だれもあなたなんていってないけど?じぶんがまけいぬだってみとめちゃったの?」

「このっ!小娘っ!!」

エースの腕を引っ張り止まっていた足を動かすとサボとルフィさんもついてくる。

しかし、赤犬さんは諦めずさらなる挑発をしてきた

「ふん。まあ仕方のない事か。船長の白ひげは時代の敗北者。そのクルーが腰抜けでも不思議はないのう」

「何……………?」

敗北者…ね。

「というか、『時代の敗北者』って何。

時代に勝ちとか負けとかあるの？ちよつと言ってる意味がわからないんだけど…。」

でもエースはそんな訳の分からない彼の挑発に乗り赤犬さんに食い下がる。

「おれを救ってくれた人を馬鹿にするんじゃないやねえ!!」

そう言っつて赤犬さんに殴りかかろうとするエースの手を掴み無理やり連れて行こうとするが彼は赤犬さんの方に向かおうとしていた。

「離せニア!この時代の名が白ひげなんだ!あいつはオヤジを馬鹿にしやがった!絶対に許さn:「パアン!」ーっ!!?」

エースが最後まで言う前に彼の胸ぐらを掴み自分の方に引き寄せて頬を思い切りはたく。

まさか殴られるとは思ってなかったのか彼は叩かれた頬を抑え驚いた顔をしてわたしを見た

「あかいぬがとーさんをバカにしたからなんなの!?それがここにとどまるりゆうになるっていうの?!ここまできてあなたになにかあったらみんなのおもいはどうなるの?!いい?!このせんそうはあなたのしよけいがもくてきななの!あなたがかいほうされたじてんでかいぐんのまけなんだよ!とーさんをバカにしようがあなたがあなたをバカにしようがかいぞくをバカにしようがしよせんまけいぬのとおぼえつてやつなの!わかった!」

「ーっ…。でも、おれ」

「でもかももないの!」

「水さすようで悪いんだが…かもはどこからでてきたんだ?」

サボがすかさずツツコミを入れる。

うん、わたしも言っつてて思ったよ。なんというか、言葉のノリというか…。」

「悪かった、ニア。…妹に説教されるなんておれもまだまだだな。」

「ニアも怒るんだな!」

「…まさかエースをはたくとは思わなかったが…。いい薬になったか?」

「はやくにげるよー」

すぐに談笑に入るんだから！このマイペース兄弟は!!

赤犬さんを無視して船に向かうと隊長ズと合流する。イオンが船員を誘導して傘下は先に逃したそう。

さすがミステリアスプチチートお兄様。

「エース！無事でよかった。あとはみんな帰るだけだ」

「悪かったな、苦労かけちゃって。」

「いや、おれが勝手な行動したんだ。みんなが気に病む必要はない」

それでも赤犬さんは諦めなかった。

「仲良しこよしの家族ごっこか。本当に可愛そうな奴らじゃのう…。特に小娘……。貴様、まさか自分が本当に愛されてると思っっちゃうるか？」

……。今、ここでそれをいうか。

多分過保護なお兄ちゃんズを見てわたしを留めた方が早いと思っただらうな。けど、思い通りにはさせない。

わたしは気にしないフリをして赤犬さんを無視してお兄ちゃんズに話しかける

「あとはわたしたちだけ？」

「…あ、ああ。そうだ。はやく船に乗ろう」

今の挑発をお兄ちゃんズが全員気にしていた。みんな心配の視線を向けてくるがわたしは首を小さく横に振る。

「…本当は気付いちよるんじゃない？自分の得体の知れなさを。銀髪にオッドアイなぞ普通はおらんじやろ。捨てられたといつちよったな。捨てられた事実だって本当は心のどこかで納得しちよったんじやありませんか？そんな見た目で差別されないほうがふし…「うるせえ！赤犬!!」……」

「エースっ！だめっ！」

赤犬の言葉にエースがとうとうキレてしまった。

また止めようと腕を伸ばすがその伸ばした腕をマルコが掴み、抱え込まれる。

その表情は怒りに満ちていた。

「マルコ！はなして！エースがつ！」

「…悪いな、ニア。今のは俺もかなり頭にきた。今のことに対して怒るエースを俺は止められねえ」

「でもっ！ひとマグマじゃ…マグマのがうえだよ!?わたしはいいの！だからエースを…」

「ぐあっ！」

「「エースっ!?!」」

だから言ったのに！

エースの『火』は赤犬さんの『マグマ』に焼かれた

そして赤犬さんがルフィさんに視線を移すと腕をマグマに変えルフィさんを襲う

「ルフィ!!」

「サボ！危ねえ！」

ルフィさんを庇うサボの前に立ったエース。

彼は赤犬さんに貫かれていた。

…え？エー…ス？

何が起きたのかわからなかった。いや、起きた事実を受け止められなかった。

エースは全身の力が抜けたように倒れる。それをルフィさんとサボが受け止める。

「エースっ！エース!!」

「ーっ！暴れるな、ニア！」

「やだっ！やだやだ！はなして!!」

「な、なんて力してやがんだ、こいつ！落ち着け、ニア!!」

暴れるわたしをマルコが抱え込むようにして抑えるがそれを振り切ってエースの元へと向かう。彼の内臓は焼かれていた。

「エー…ス？」

ふと、エースとの思い出が溢れ出す。

『呼び捨てにしてくれ！その方が親近感あるだろ？』

ニカッと笑って無邪気という。

『かつこいいところ見せたかったんだぞ？』

何隻もの船を沈めてから拗ねたようにわたしの頬をつついた

『ニア！遊ぼうぜ！』

外に出れない分わたしが退屈しないようにいつもなにかしら遊んでくれた

「だい、じょうぶ……だよ。」

……何も大丈夫なんかじゃない。

だってエースはもう虫の息じゃないか。

「すぐに……たすける、から。」

だめ。この力をここで使つてはいけない。

わかっている。頭ではわかっているけれど、それを制御できない。

震える指先をエースにむける。

その行動はほとんど無意識だった。別に指を指さなくても強い拒絶の心を持って起きた事実を否定すればいいのだからこの行動はいわば無意味。

だってその動作は隊長達に『力を使います』と教えてるようなものだから

「ニア！やめろ!!」

マルコが飛んできてわたしの手を掴み下げさせる。と、同時にもう片方の手で目を塞ぐ。

エースを見るな。と言わんばかりに……

「こんな……おれを……鬼の子と……呼ばれたおれを……愛してくれて……ありがとう……!」

マルコはしっかりと目を塞いでいるつもりだったみたいだが、指の隙間から見えてしまった。

エースが倒れるその瞬間を……

「ニアスっ!!!」

サボとルフィさんが悲鳴のような叫び声を上げる。
まさか……と、思った。

「やっ……やだあっ!! エースっ! しんだらいやあっ!!!」

……!!!

わたしっ。今……

「……あれ?ここは……。一体何が……?」

「エ、エース?!?!」

ルフィさんとサボが1度地面に倒れ伏した筈のエースが再び起き上がり、きよとんとしてる姿を見て驚きの声を上げた。腹部に空いたはずの風穴もしつかりと塞がっていた。

その光景を目の当たりにしたお兄ちゃんズは驚愕の表情を浮かべていた。わたしを拘束していたマルコは思わずというように手を離し2、3歩離れるとわたしを見下ろした。サボが振り返ってこっちに視線をむける。

ああ……。どうしよう……。やってしまった

1番やってはいけない事を……。やってしまった……!

「なんだ、赤犬に貫かれて倒れちまったから死んじまったのかと思っただ!!やっぱエースはすげえなあ!」

ルフィさんが頭の後ろで手を組み呑気に笑う。

どうやら、彼は気付いていないようだ。

エースは自分に何が起こったかわからないようで腹部を押さえて目を丸くしていた。

「おれは……。生きてる……。のか?」

〈へへ火拳のエースが生き返った!!!〉

今の光景を見ていた海兵達が揃って叫ぶ。

わたしは思わず数歩後退った。

体が震えるのがわかる。

恐怖が全身を駆け巡りわたしを支配した。

どうしよう……。捨てられる。

彼らに、捨てられてしまう……!

「お、おい。ニア?大丈夫か?顔が真っ青だぞ」

わたしが怯えてるのに気付いたエースがわたしの方に手を伸ばす

「こ、こないでっ!」

「……っ!」

「……あっ……」

思わずエースの手を避けてしまった。

エースがショックを受けたような表情を浮かべたのを見て後悔する

「あ、ご…ごめんなさ…っ」

「どうしたんだ、ニア？ 様子が…」

だが、それも一瞬でエースはわたしの様子が明らかにおかしいことに気づいた

「小娘エ…貴様何者じゃ？ 火拳を生き返らせたっちゆうんか？」

「今のは…能力なのかア？」

「おいおい…。ただのガキじゃねえとは思ってたが、何っ—力持つてやがんだ」

今のを彼も見えていたらしく、私を威嚇するように睨みつける

黄猿さんと青雉さんもこっちに来た

標的がわたしに変わったか…。なら好都合だ。

後悔してショックを受けてる場合じゃない。ここで稼げるだけ時間を稼いで彼らを逃そう。

そう思い、エース達から離れようと駆け出そうとした。

「ちよつと待て、ニア！ お前っ！ どこに行くつもりだ!! まさか囚になるとかいうんじゃねえだろうな?! んなこと言ったら縛りつけるぞ！」

わたしが走り出そうとしたのを察したサッチがそれよりも早くわたしを捕まえ拘束宣言をした

「まさか今ので俺たちがお前に恐怖したとでも？ そう思ってたの行動なら今すぐにでもお前を監禁して俺たちがどれだけお前を大事に思ってるか思い知らせてやってもいいんだぜ？」

イズウも合流するが…ヤンデレ!?

物凄いヤンデレ発言したよ、この人!!

「そうだね。イズウに賛成。今ので俺たちがニアを怖がると思った？ もし少しでもそう思ってたんならちよつとお仕置きが必要かな？」

ハルタまで?! そんな笑顔で恐ろしいこと言わないで!?

「疑ってた訳じゃないが実際目の当たりにすると言葉が出てこないものだ。驚きはしたが恐怖はしてないから俺たちに嫌われたなんて思うな。お前にそんな怯えた表情されると地味に傷つくぞ」

その顔ですごい繊細なんです、ビスタさん！

「大丈夫か？ニア…。悪かった。お前のいうこと聞いてエースをとめておけばこんなことにならずに済んだのにな。お前に余計な心配させたな。あの程度の事でお前を恐れて船から降したりしないから…そんな泣きそうにするなよい。」

わたしの恐怖を感じ取ったお兄ちゃんズが口々に言った。

違う、そんなんじゃない。いや、それもあるけど何より許せないのは怯えられたと怯えてエースの手を払ってしまった自分自身だ。

「ば、バケモノだ!!火拳は内臓を焼き尽くされてたんだぞ?!なのに何事もなかったかのように…!あのガキ、一体何しやがった!?!」

「回復なんてレベルじゃない!人を生き返らせただど?!そんな都合のいい力があつていいのか!?!」

「銀色の髪…黄金と空色のオツドアイ。おまけに得体の知れない能力…?!忌み子じゃないか!?!」

化け物…ばけもの…バケモノ。忌み子

あちらこちらでそんな言葉が聞こえてくる。あれはわたしに対する言葉だろうか。…いや、この状況ならそれ以外に考えられない。

こうなることはわかっていた。だから人前で使わないように気を付けていた

やってしまったものはしょうがないけれど、こんなにも心を締め付けられるような気持ちになるなんて思ってたなかった。

ドロドロとした暗い感情が湧き上がってくる

ー…もう…いいよね?…あいつら、殺しても。ー

「(ニアの目つきが変わった!?!こいつ、こんな憎しみに満ちたような顔するのか!)……っ!聞くな、ニア!!」

さつきまで縛り付けるか監禁するとか言ってたのにイゾウがわたしの顔を隠すように抱きしめ耳を塞ぐ。

なんだかんだ言って優しいんだ、みんな。

そうだ、気をしっかり持たないと…!

闇に心を飲まれちゃだめだ!

「今ニアを化け物って言った奴出てこい!一人残らずぶった斬ってや

る！」

「俺たちの妹を傷つける奴は神だろうがなんだろうが許さないよ」

サツチとハルタが剣を抜き海兵を蹴散らす

ほんとに優しいなあ。

「バケモノ……か。言い得て妙じゃなあ、小娘。白ひげ達もようそんな危険人物を側に置く気になったのう。頭がどうかしちよるんじゃないか？」

「赤犬！それ以上喋るな！ニアはニアだ！化け物なんかじゃねえ！」

エースが怒りをあらわにし、体が火に変わる。

火傷するかも知れないけどそんなことお構いなしに彼の背中に抱きつき止める。

彼は驚き、火を収めて首を後ろにむけようとする。

『だめ。怒っちゃだめ。』

そういう思いで彼の背中に額を当て首を横に振る

それを見た赤犬さんは『ふん』と鼻を鳴らした

「そんな小娘1匹に隊長が6人もついて守るとは……。白ひげ海賊団も堕ちたもんじゃのう！ガキ1匹に振り回されるとは……情けない」

そうだ。いつだってわたしの側に誰かがいた。

その事については何度も悩んだ。ここからでてった方がいいんじゃないかって思った時期もあった。けど、彼らはそれでもわたしを家族だって、遠慮するなって、もっと頼れって……言ってくれた

「それに……そんな得体の知れない力をよう放置したのう。それともその力が恐ろしくて、敵に回したくなくて波風立たんように何もしなかったのか？腰抜けども」

「俺たちがニアを恐れるわけないだろ！ニアのこと何も知らない奴が適当なこと言ってニアを傷つけるな！」

今度はハルタが怒る。本当に優しいなあ、お兄ちゃん達は。

わたしは幸せ者だよ、こんなにも愛されてる

なら守らないとね。誰に何を言われようが、彼らに嫌われようが、化け物と罵られようが……守るって決めたんだから守らなきや

「小娘、いい加減目を覚まさんか。その見た目に力……。初めから貴様

に居場所などありやせんのだ。白ひげも、隊長達も貴様の力を恐れて優しくしとただけじゃと早よう気付け。」

「ニア、俺たちの言葉と海軍の言葉。お前はどちらを信じる？ちなみに俺たちはお前を家族だと思ってる。例えお前が世界を滅ぼす力を持っていても俺たちがお前を見捨てることはない」

ビスタ…。

わかってるよ、大丈夫。

シスコンなお兄ちゃんズを疑うなんてブラコンのわたしにできるわけないよ。

でもね、ちよつと我慢の限界なんだ。

言葉ではいくらでも言えるけど実際に見たら彼らはどう思うだろうか。

ああ、でも…もう抑えきれない。

「貴様は少し足りとも愛されてなど…」そろそろだまれ。あかいぬ」
……っ?!?!?!

霸王色を覗かせながら赤犬を睨みつけ、殺気と覇気をぶつける。

「うるさいんだよ…おまえ。さつきらだまってたらいいたいこといってさあ…。ふふっ、ふふっ！あははははっ！ばけものなら…ばけものらしく、こわしてあげるよ！だからさ？まもってみなよ、あなたのかかげる”ぜったいてきなせいぎ”ってやつでさあ!!」

「ニア、ニア…?」

近くにいる隊長達がわたしの異変に気付いたのか恐る恐る名前を呼ぶ

ビシイイイイツツ!

「?!?!?!」

霸王色を全力で放つとわたしを中心に地面に蜘蛛の巣状のヒビが入り、海賊海軍共に驚愕する。

「は、霸王色?!貴様も持つてるのか!」

「ぼくは…ばけものなんでしょ?もっててもおかしくないとおもわない?」

センゴクの言葉に自虐っぽく返すとそこで我に返った長男が焦っ

たように指示を出した

「やつべー！おい！隊員は早く船に！！傘下はみんな無事に逃げたな…？イオン！おまえ近くにいたなら隊員を誘導しろ！！」

イオンが能力を使ってる最中なのかわからないけど彼らにイオンの姿を探す余裕がないからか誰に向かって喋るわけでもなくマルコがそう叫ぶ。

「エースの兄弟も先に行け！こいつは俺らの妹だ！俺たちでなんとかする！」

「そんなそいつ置いて逃げろって!?できるか！」

「おれもルフィに同意見だ。」

マルコの指示に従わないのはエースの兄弟だ。まあ、巻き込むようなことはしないから大丈夫だよ。

赤犬に向かって攻撃を仕掛けようとした時、耳障りな笑い声が響いた

「ゼハハハ！久しぶりだなア、オヤジ！それに海軍はざまあねえなあ！！なんてやられようだ！ニア！お前よく生きてたなあ！しかもその力、怪我を治すだけじゃねえのか！ゼハハハ！こつちこいよ、ニア！俺ならお前を可愛がってるぜ？」

「ニアチーチ!!!」

みんなが怒りを露わにする。

あの耳障りな笑い声、わたしも嫌いだ

「よおー！お前ら！久しぶりじゃねえか！オヤジも元気そうだ!!全部ニアのおかげか!!」

「ティーチ…。お前だけは息子とは呼べねえなあ」
うるさいなあ…。もう。

オヤジさんを裏切ったお前がとーさんをオヤジなんて呼ぶなよ

「なあ、ニア！お前俺から逃げた後、どこで何してたんだア？そんなに暗い目になっちゃって、人の悪意にでも触れたか？そうだよなあ！お前は綿に包まれるように優しい世界で育ったんだ！負の感情なんて知らねえよなあ！」

ーもう…。あいつ…。

「そんなバケモノみたいな力でも俺は構わねえぜ？俺たちの仲間になるってんなら歓迎してやる！ほんとは分かってたんだろ？エースは1度死んだ！それを生き返らせたんだ！言葉ではどうとでも言えるだろう。オヤジの船にもうお前の居場所なんてねえんだよ！」

「殺して……いいよね？」

「ゼハハハ！ゼハハハハ！気づけ、ニア！お前はオヤジや隊長達に愛されてなんていなかったんだ。見せかけだけの愛情に騙されてただけだぜ？だから俺んとこ来い、ニア」

「プツン……」

……わたしの中で何かが切れた。

顔を俯けてゆっくりとティーチの所へと歩いてゆく。

その行動にティーチがニヤリと笑いマルコ達が『まさか！』と焦る。

「ニア?! までよい！」

「行くな、ニア！裏切り者の言うこと信じることか!?!」

「……かくなる上は……ニアを……っ。やるしか……」

「だめっ！そんなの絶対ダメだ!!」

そんなに心配しなくてもわたしは寝返らないよ。

「ゼハハハ！ゼハハハハ！ようこそ、黒ひげ海賊団へ!! 歓迎する……」

「パアアン!!」

「!!?!?!」

ティーチに近づき、銃を抜いて頭めがけて撃つ。

だがティーチもその殺気に気づき、間一髪でかわした。

「……何のつもりだ？ニア」

自分の方に歩いてきたのに銃を抜いたわたしを訝しげに睨む

「なんのつもり、だって？おかしいこときくねえ。ぼく……おまえのなかまになるっていついつた？」

脇差しを抜きティーチの頸動脈目掛けて振り上げる。

彼は一步引いてそれをかわすと能力を使い、わたしの体は彼に引き寄せられ首を絞められる。

けど、この前とは違う。わたしは今既に拒絶の力で痛みも苦しみも全て否定しているから何も感じない。

「ゼハハハ！俺のどここねえんなら殺してやるよ、ニア。」

「そう。ならわたしのさいしよでさいごのわがまま……。きいてくれる？」

「ん？ゼハハハ！いいぜえ？聞いてやる！言ってみろ！」

わたしは銃をティーチの額に向け、引き金を引いた。

「しんでほしい、ティーチ。むざんに、ざんこくに…ちれ」

頭と胸に2発撃ち込んだ。

誰がみても生きてないだろう。彼の体から力が抜けわたしを落とす。

受け身をとって離れると彼は他に倒れ伏した。

「「船長!!」」

彼の仲間がそこで動き出す。わたしに殺意を向け攻撃を仕掛けてくるがもう遅い。

「あしもと、ちゆういしたほうがいいよ」

黒ひげ海賊団とやらがいた所の足元のコンクリートを拒絶で消すと彼らは海の底へと沈む。それを確認した後、元に戻した。

「さて…つと。じゃまはいなくなつたしつづきしよつか。あなたもころしてあげるね、あかいぬさん」

につこりと笑って告げると彼は一瞬だけ驚いた表情を浮かべた

ああ…ダメだ。

怒りに任せて暴れちやいけないのに…もう自分を止められない助けて、にいちゃ…

ーマルコサイドー

『あなたもころしてあげるね、あかいぬさん』

ティーチを含むやつ仲間を海の底へと沈めたあとニアが豹変した

につこりと笑って赤犬を見るその表情は狂気そのもの

顔は笑っているが目の奥が冷め切っていて一切の感情を感じるこ
とができなかった。

やっぱりもう限界だつたんだろうな…

赤犬の挑発を気にも留めて無いように振る舞っていたけれど、気にしていないフリをしていただけだったんだ。

…くそっ、もつと早く気づくべきだった…。嘘つくのは下手なくせしてこういうこと隠すのは上手なんだよな、こいつは

これは相当まずい。もしニアが暴れて我に返った時、その惨状を見たらどんな反応をするだろうか…。

止めねえと…。ニアにこんなことさせたらだめだ！

だが…どうやってとめる？下手に刺激したら逆に危ねえ気がする。

「ティーチの所に行かなかったのはいいが…ありや、相当ヤバいな」

「ニア、あの時よりもすぐく昏い目してる。あの子あんな顔するんだね…。」

「ニアは笑っててこそニアだ。止めるぞ。」

「まてイゾウ。下手に刺激すると俺たちも危ないぞ？」

「…待ってくれ。おれに任せてくれないか？」

エースが言う。こいつ、何か策があるのかよ？

「どうやって止める気だよい？」

「分からねえ。けど…あいつはおれを助けてくれた。あいつがいたからおれは変わった。…だからこそ、おれが止める」

「それは俺たちも同じだよ。みんなで止めるぞ」

こいつはティーチに攫われて、それでもここに帰ってきた

こいつがそれを選んだんだ。俺たちだってイオンが言ってたようにニアが窮屈してるんじゃないかって不安を抱えていた。

けど、ニアは俺たちのとこに戻ってきたんだ。

だったら止めねえとな

苦しい思いさせてごめん、ニア

すぐ助けてやるから待ってろい

ーサイドエンドー

第40話 終戦

―サカズキサイド―

な、んじゃ？このガキは…

途中で現れた黒ひげをいともたやすく海の底へと沈めた。

そしてわしの方を見て…

『あなたもころしてあげるね、あかいぬさん。』

そう乾いた笑顔で言った。その笑顔をわしは怖いと思った

…わしが恐怖を覚えた、じゃと!?

こんなガキがなんて殺気を出すんじゃ!!

こいつは…人間、なのか？その二色に光るオッドアイの目は狂気に満ちていて嘲笑うかのような昏く冷たい目をしていた。

何をしたらガキがこんな目をするようになるんじゃ…。じゃが、海賊は悪!

こいつが海賊である限りわしらはこいつを殺さにやならん。

ガキじやろうが容赦も手加減もせん！こやつは危険じゃけえ!! 始末する!!

―サイドエンド―

「ふふふつ…。みんなそんなにおびえて…どうしたの？こわい？ぼくがこわい??なら、とめてみなよ!」

ビシイイイイツツ!

地面に入っていた蜘蛛の巣状のヒビがさらに深くなり島に水が浸水する。

それでも周りにはしっかりと見えている。優先してやるべきは白ひげ海賊団を逃すまいと深追いしてくる海兵だ。

飛び上がり上空から持ったクナイをそいつら目掛けて投げる。

覇気を纏ってるから威力もある。頭や胸を刺し、運が悪ければ即死だろう

「大噴火アアッ!!」

怒号とも言える怒りのこもった叫びと共にマグマを飛ばす。

魔法陣のような巨大な円を宙に描きそれを通過するとマグマは瞬く間に凍りついた。

「ぜったいれいど」
アップリユート・ゼロ

凍りついたマグマに向かって指を鳴らすとヒビが入り跡形もなく砕け散った。

「な、何をしよった！小娘!!」

「あぶないなあ…。あなたとたたかっているのはぼくだよ？まわりをまきこむようなことしないでくれない？」

地面を勢いよく蹴り赤犬さんとの間合いを詰める。

彼は右手でマグマの拳を作り、わたしを迎え撃ったが…

「そのはんだん、まちがいだね」

彼の拳がギリギリ届かないところで飛び上がり宙を舞う。

「そのうで…もらうよ」

脇差には気を纏わせ彼の右腕を落とす。

「ぐぬう…。なんて奴じゃ。クザン、ボルサリーノ！手を貸せ！こやつは1人じゃ殺れん！」

「あらら！サカズキがそんなこと言うなんて珍しいじゃないの」

「サカズキの利き腕をそうも簡単に落とすとはねえく…。シャボンデイで見逃したのは失敗だったかなア？」

大将が3人、わたしの前に立つ。

…みんな大きいなあ。けど、大ききで勝負は決まらないよ

そこにお兄ちゃんズが合流する

「ニア！仲間の避難は終わった！あとは俺たちだけだ。戻るぞ！」

「さきにエースたちがもどりなよ。ぼくはもうすこしあしどめしてるから。」

「みんなで船に戻るんだろ?!お前も一緒だ！」

「たいしようさんにんまえにしてせをむけながらたたかうなんてきょうなことができるの?」

「それはっ…」

「ニアならできそうだけどね。でも、今のニアを残して俺たちだけで行けないよ。一緒に戻るんだ、それは譲れない」

「それに、だ。俺たちをさきに船に戻してお前は どうするんだよい。」
「ちゃんとかえるよ？ぼくのいえはあのふねだもん。……そう、だよ
ね？」

言った瞬間にティーチの言葉が蘇る

『もうオヤジの船にお前の居場所なんてねえんだよ！』

…あれはティーチの戯言…だよね？

「何度も言っちゃよるじやろ、小娘。貴様に！居場所など！ありやせん
のじゃ!!」

「…うるさい。おまえにきいてないんだよ」

マグマで腕を作り殴りかかってくる赤犬さんを浸水してる海水を
操り捕まえる。

そのまま球体の形にして閉じ込めた。

「つつ!!」

「それで、のうりよくはつかえない。こきゆうもできない。ふふふつ
…つぎは、どうする？」

「…えげつねえこと考えるな、ニアちゃん。だが、俺らもいること忘れ
るなよ！アイス^{ブロック}塊^{バルチザン}・両棘矛!!」

青雩さんが氷の矛を飛ばしてくる。

見聞色で躲すと両手に黄色っぽい白色の炎を纏わせる

「なーにそれっ！炎なの?!」

「そうおもうならくらって見たら？」

「俺に死ねって!」

青雩さんの驚きにそう返すと両手を体の前で突き合わせ火炎放射
のように青雩さんのすこし手前の地面発射させる

それは地面をえぐり爆発を起こした。

「うわっ!!えぐいな、ニアちゃん!!なんて火力だよ！火拳に劣らねえ
んじゃねえの?!」

「ひのあつかいならエースのほうがしようじゃない？」

「……ニア。今のはおれにもできないと思う。むしろどうやったか教
えてくれ」

「ひにはおんどがあるでしょ？おんどによっていろがかわるからおん

どをちようせつするイメージで……」

「この状況で解説を始めるなんて随分と余裕だねえ。天叢雲劍」あまのむらくも

黄猿さんが光の剣を出す。

…そうだ、いま戦争中だ。呑気に説明してる暇無いじゃん！マイペースが移った！

黄猿さんがこちらにくる。

ここにいとマルコたちも巻き込むかな？

なら……出来るだけ注意を逸らさないと！

「ニア!!」

走り出したわたしを止めようとマルコが手を伸ばすがその手は届かなかった。

「オー…、自分から向かってくるとは…どう言うつもりだい？」

彼の間合いまで入ると剣を振り下ろしてくる。

わたしは見聞色を使いそれをかわしたり脇差で受け流しながら背後を取った。

地面を蹴って飛び上がり弓を引く。

覇気を纏わせて首を狙い放つ

黄猿さんは体を反転させそれを避ける

弓は彼の首の横を通り過ぎうっすらと傷をつけた

「おーつとつと。そんなに簡単に背後を取ってくれるとはねえ。」

その攻防を見てた元帥が叫びながらこっちに来た

「大将を3人相手になんて娘だ!!だが、ここで貴様も始末する!海賊は逃しはしない!」

”海賊は逃しはしない”

…わたしの家族はみんな海賊だ。なぜなら海賊に拾われたのだから。

みんなわたしの大切な家族……。

ああ、そうか。みんな”誰か”の大切な人なんだ。

海賊だろうが海軍だろうが人と繋がりを持つてる限り誰かにとつてかけがえのない存在。

わたしが今まで殺してきた兵士も”誰か”の大切な人だったかも

しれない。

なんて事をしてしまったんだろう。

失いたく無いから、大切な人に生きてて欲しいから誰かの大切な人を殺したんだ。

弱肉強食と言えばそれまでだが、惨い話だ

「はっ…ははっ…。そっかあ…。ぼくってすごくひどいことしたんだね」

「ニア？どうした、急に」

「エースにいきててほしいから、みんなでぶじにかえりたいからたくさんたくさんころしたの。…けど、ぼくがころしてきたひとたちもだれかのたいせつなひとなんだ。…はははは。ばけものっていわれてもしようがないよねえ…」

「ニ…ニ…っ！！！！」

涙を流しながら乾いた笑みを浮かべるとみんなが驚きと心配の表情を向けてきた。気づいてしまった…。気付きたくなかった。そんな思いがぐるぐると駆け巡る。

もう終わったことだと無理やり気持ちを切り替えて赤犬さんの方に歩きながら、浸水した水を操り元帥さんと青雫さんと黄猿さんを捕まえ動きを封じた。

赤犬さんの水の球体を潰し飛散させる。その圧力で彼はもう満身創痍だ。

でも…だけど、この人だけでも封じないと…

「ぐっ…。小娘エ…。」

「もう、おわりにしようか。…これいじょうたたかってもおたがいにひがいがふえるだけだよ？」

脇差を抜き振り上げる。

するとお兄ちゃんズが止めに入った。

エースがわたしの後ろに立ち振り上げた腕を掴み、わたしが銃を抜かないようにハルタが反対の手を押さえた。マルコがわたしと赤犬さんの間に入る。

「やめろよい、ニア。もう…いいんだ。殺さなくていい」

マルコが優しく頭を撫でていう。
その優しさに屈しそうになった時…

「…冥狗!!」

力を抜き武器を下ろすと瀕死状態だった赤犬さんが反撃してきた。

「マルコー!」

「なっ!…:…ニアっ!!」

「……っ!」

マルコを横に押し飛ばすと赤犬さんの攻撃がわたしに向かってくる。

両手を重ね、掌でその攻撃を受ける

咄嗟に覇気と水を纏ったが完全には間に合わず掌から腕にかけて焼けていくのがわかった。

赤犬さんは最後の力だったのだろう。

その一撃を放った後に気絶した。

最後の最後に油断した…

…これ、下手したら体まで火傷してるかも

「ニアッ!!!」

あんなえげつない一撃を喰らって何とも無いような顔で立ってるわたしをみてお兄ちゃんズが焦り出した

「馬鹿!おまえまさかこの戦争中ずつと使ってたのか!?死ぬぞ?!」

「すぐに解け!もういい!お前はよく頑張った!これ以上傷を増やすな!」

そこにミホークさんが夜に手をかけながら歩いてきた。

「まさか…:…ここまでとはな。お前たち、なぜもつと早くニアを止めなかった?もう心も体もボロボロじゃないか。」

「ミホークさん…:、いいの、ぜんぶわたしがわるいの。だからいちやたちをせめないで。このちからも…:じぶんをせいぎよできずにつかったのもわたし。にいちやたちは…:なにもわるくないの。これいじょう、みんなをきずつけないで。やるならわたしがあいてになるよ」

「…:何もかもを自分のせいにする事で他のやつらを守るか。健気な

やつだ。お前、そんな性格でよく海賊をやっているな。安心しろ、お前とやり合うつもりはない。お前に免じてここは引く。だが覚えておけ白ひげ海賊団。……次、もし同じようなことがあってソレがまたそんな顔をするのであれば俺はそれを攫っていくぞ」

そう言うときミホークさんは夜から手を離し踵を返し歩いて行った。

…コレとかアレとかソレとかお前とか……

この人わたしの名前頑なに呼ばないよね

「フフッ！フフフフッ！なんかすげえのがあるじゃねえか！」

サングラスをかけたピンクの人が指をクイツと動かすと体の自由が効かなくなった。

見聞色で気配を探り、目を凝らすと細い糸のような物が見え、それがわたしの体に巻きついていった

「これは……いと？」

「っ！！フフッ！初見で見破るとはな！どうだ？ガキ、俺んどこくるか？白ひげの所に居場所があるか不安なんだろう？なら、俺がお前の居場所を作ってやる！」

わたしは首を横に振る

「いばしよくらいじぶんでつくる。ぼく、もうつかれたの。かまわないで」

体の周りに炎を纏うと糸が燃え、それがサングラスの人へと伝っていく。

彼は糸を切りわたしから距離を取った。

「フフフフッ！こりや面白い！お前…いつかものにしてやる。覚えてろ」

サングラスの人も戦場から去る準備をする。

それを元帥さんが止めるが海水に足止めされているため動けず叫ぶだけとなっていた。

「待て！鷹の目にドフラミンゴ！貴様ら一体どこへ行く!!」

「どこへ？フフフフッ！帰るんだよ。こりやもう海軍の負けだろう。火拳を解放されて、白ひげはさつきまでとは別人のように元気だ。詰んだだろ？」

「俺も同じだ。それに…ソレはまだ本気じゃない。そいつが本気を出せば島一つ沈めることなど容易だ。」

ちよつと買いかぶりすぎじゃない？ミホークさん。

そこまでの力はないと思うんだけど…。

異能：解いたら死んじやうかな？

痛覚の麻痺って本当に危ないんだよね。シヤンクスさんの修行の時によくわかった。

「ニア。あとは俺たちがなんとかするよ。お前の目が覚めた時に誰かいないなんてことは起こさない。だから、信じて…眠ってくれ。もう、お前が傷つくのを見たくない」

「にいちゃ…。ありがとう。だいすき、だよ」

微笑んでお礼を言うとうち自分にかけてた異能を解く。

お礼を言ったのはもう会えなくなるかもしれないから。

すると想像を絶する痛みと立っていられないくらいの吐き気に襲われた。

あ、これ死んだかも。

どこかデジャヴを感じた気がする。

…そうだ。わたしが前世でトラックに轢かれた時だ。

これ死んだなって思ったらもう死んでたっけ？

…：ははっ。変わったと思ったけど結局なにもかわってないんだな、わたし

「おや…：す、み」

さよならは言いたくなかったから力を振り絞ってそれだけ言うとうち全身の力が抜けるのがわかった。倒れたわたしを誰かが受け止め、温もりを感じながら意識を手放した。

ー白ひげサイドー

なんともまあ、めちやくちややつてくれたぜ。あの馬鹿娘は。

赤髪の鼻つたれが何か危惧してたが、まさかここまでやるとは思わなかったぜ…。

ティーチを容赦なく撃ち殺してその仲間を海の底に沈めると、ニア

はまるで人が変わったように乾いた笑みを浮かべ、おれは恐怖しか感じなかった。今まで見てきた：育ててきた無邪気なニアがどこかに消えたみたいで怖かった。

戦闘だつて数える程しかしてねえだろうし、こんな大きな戦争だつて初めてだろう。

なのに全てをかき混ぜるかのように物理的に引つ掻き回してくれたなあ、ニア。

お陰で助かったが：、まさかおれの病気まで治しちゃうとはなあ。

ニアがマグマ小僧に貫かれたおれの傷を拒絶した時、同時に呼吸が楽になり体が軽くなった。どう考えてもあいつの仕業だ

エースを助け出したあとエースがマグマ小僧の挑発に乗ったとき、まさか引つ叩くとはなあ！あいつも怒るんだな。あいつが本気で怒ったとこ見るのは初めてかもなあ

だが、それでも諦めずに挑発するマグマ小僧の挑発にエースが乗り、貫かれてしまった。が、ニアがそれを拒絶した。

『死んだ人間もその事実を拒絶すれば生き返る。』

まさか本当だったとは：。疑つてた訳じゃねえが実際に目の当たりにすると言葉がでてこねえもんだな。

それはそうとあと残つてんのはニアの力に捕まってるセンゴクと青雫と黄猿の若僧と七武海程度か。

だが、鷹の目は去つて行つちまつたし、ドフラミンゴもなにやら含みのある笑いをしながらどこかへ行つた。

：何か企んでやがるな。誰だろうとニアは渡さねえ。

ニア。お前の家はおれの船だ。

だから今回のこと気に病んでくれるなよ？おれたちはお前の味方だ。

おれも海軍の戦力を減らした後、息子たちが集まつてる所に行くと、ニアが倒れた。地に伏す前にニアの体を受け止め、抱き上げる。

「「オヤジ！！」」

「グラララ：。おめえら無事かア？」

まあ、無事だろうな。ニアは暴走してても周りは見えてた。

こいつが攻撃した兵士もおれ達を執拗に追ってきた奴らだけだ。あそこまで戦況が見えてたのはすげえと思うぜ。

おれはニアを片腕に抱えると 船に戻るぞ と言う。

イオンが能力をフル活用してくれたおかげで傘下は先に逃し、船員も無事避難できた。

追ってくるしつこい海兵は問答無用でズタズタにしてたな…。

…あいつ、本性出ると怖えんだよなあ。なんで、非戦闘員やってんだか。本人がそうしたいって言うからおれはそうさせてるだけであつてあいつは戦闘員としてもやってけると思う。なんたつてニアが来るより昔に2番隊隊長の候補に上がったくらいだからなあ、即断されたが…。

「さて…そいつはお前の船のクルーなのか?!白ひげ!!」

ニアが気絶したせい、海水の拘束から解かれていたセンゴクと青雉と黄猿。

海水を操って能力者捕まえるとか随分えぐいこと考えるなあ、こいつは

「ああ、そうだぜエ? あんま虐めないでやってくれねえか? こいつは優しいから全部真に受けて傷ついちゃうんだ。」

「なんの冗談だ!?! そんな力を持った奴がお前の船にいただど!?! いつからだ?!」

「さあなあ。知りたきや自分で調べてみなア! それよりもういいだろ。お前らの方は戦える奴のが少ねえし、この戦争、終わりにしねえか?」

おれがそういうとセンゴクは悔しそうな顔をするが正義感が強いだけあつて最後まで足掻こうとした

「我々は正義だ! 正義の名にかけて、海賊を逃すわけにはいかない!」

センゴクが巨大化しその拳を向けてくる

敵ながらあっぱれな奴だ。ニアを抱えてる逆の手で能力を使おうとした時、覇気を纏った円盤がセンゴクの腕を斬り裂き、牽制した。

「ぬうつ!?! チャクラムだど!?!」

センゴクは咄嗟に腕を引っ込め元の姿に戻る

「なかなか戻ってこないと思ったら元帥に足止めを食らってたとは…。」

「…」「二」「イオン?!?!」

グラララ…こいつは本当に気配が読めねえなあ!

イオンがおれの腕で寝てるニアを見るとその頬を触りホツとした顔をした。

「ニア…。無事で、よかった。」

さて。と、海軍と向き合うとイオンはいつもの柔らかい笑みを浮かべた。

「もう終わりにしましょう、元帥さん。これ以上戦っても無駄な犠牲者が増えるだけですよ?それとも意味のない死者を出してまで海賊を捕らえることに命をかけるのが海軍の正義なのですか?こちらにもう戦闘の意はありません。戦意のないものを追いかけて救える命を殺す事に意味がありますか?」

…痛いところつくよなあ、こいつ。

「貴様、まさか…。植物園の時にいた…」

「ふふつ。覚えてましたか、元帥さん。ニアもそうですよ。あなたにカスミソウをあげた子。」

「?!?その娘が?!?あのカスミソウの子だと?!?まさか、白ひげの船のクルーとは…」

「ニアに免じて見逃してくれませんか?この晴天の下で、あなたの殺気は痛すぎる」

……………相変わらず、何言ってるかわかんねえ奴だな。

「…はっ。」

センゴクもその周りも黙っちゃまったじゃねえか。

まあいい、今のうちに戻るか。

おれたちは呆けてる海軍を置いて船に戻りマリンプォードから逃げた。

ーサイドエンドー

白ひげ海賊団と海軍の大規模な戦争が終わった後、サボはルフィと

ジンベエと共に潜水艦で移動し、モビーの後を追った。

安全圏までつくとサボとルフィとジンベエは潜水艦を降り、モビー・デイツク号に乗る。

「ルフィ、お前強くなったな」

「にししっ！そんなことねえよ！全部ニアのおかげだ！」

「そう…か。そうだな。ニアのお陰か」

船に着くなりすぐにニアは医療室へ運ばれ手当てをした。

最後に喰らった赤犬の攻撃のせいかわい火傷を負っていたそう

マルコがイオンと船医と共にニアの手当てをすると甲板へと出てくる。

「体がかなり疲弊してたよ。それに赤犬の攻撃を喰らってた場所に酷い火傷がある。……あれだけの怪我であんな何事も無いような顔しやがって…。本当に恐ろしいな、あいつの異能は」

「……ニアのやつな、おれに向かってきた攻撃をほとんど代わって受けてくれたんだ。相殺もしてたけど相殺が間に合わなかったり死角からの攻撃とかは俺の代わりに…」

「…ルフィ。それは言うなってニアに言われてただろ。」

「で、でもよー！」

「どう言うことだ？」

食いついてきたエースをみてサボはため息をつき話し始める

「戦争中によ、あいつがおれらの側にいる時は出来るだけルフィに被弾させないようにおれが捌き切れなかった攻撃を全部ニアが受けてたんだ。」

「……っ!?なんだよそれ！じゃああいつ、ルフィの盾になってたってことか!?!」

「まあ、そう言うことだ。だから鷹の目と戦うって言い出した時、おれは無理やりルフィを先に連れてったんだ。どっちも危険だろうが、あいつなら1人の方が生存率は上がるだろう。」

「おれ、ずっとニアに守られてたんだ。…すまねえ、エース」

ルフィが申し訳なさそうに謝るがエースは「ルフィのせいじゃ無い。」と彼を許す

「気に病むな、ルフィ。ニアがそれが最善だと判断したんだろう」

「だかなあ…。もうちよつと何とかならねえか？なんであいつはいつも自分の体を盾に使うんだ？」

「癖だろうな。早く直させないと取り返しのつかない事になるかもしれないねえ」

イゾウの言葉に周りが沈黙し、空気が重くなる。

それを感じ取ったサボが無理やり話題を変えた。

「そ、そう言えばニアの奴、攫われて逃げてたらシャボンディ諸島に着いたとか言ってたが…ニアを攫ったやつってーのは戦争中にニアが沈めたあの黒ひげとやらか？」

「ああ。おれが制裁を下すつもりで船を飛び出したんだが敵わなかった。…おれが助けられなかったから…ニアはッ…」

「エース。お前のせいじゃねえ。ニアがティーチを警戒していたことを知りながら何の対策もしなかった…そして、お前を止められなかったおれの責任だ。自分を責めるな」

「だがオヤジ！おれがもつと早くティーチを見つけていれば…！」

「もう終わった話だよ、エース。ニアは無事に戻ってきた。お前も生きてる。それでいいじゃねえかよ」

「そう……だな。」

エースはマルコの言葉に納得し、深呼吸をするとサボに笑いかける。

「サボ、ニアを連れてきてくれてありがとうな。あーそうだサボ、お前今までどこでなにしてたんだ!!」

エースの問いにサボは苦笑いをしながら返した。

「悪いな、エース。おれは記憶を失ってて、ずっとお前たちのことを忘れていたんだ。だが、それをニアが戻してくれた。だからこうして助けに来れた。」

「記憶を…？…そう、だったのか」

「にっしっしーとにかく、生きてて嬉しいぞサボ！」

ルフィが屈託のない笑みでいう。

しかしサボは浮かぬ顔をしていた。

「それはそうと…大丈夫なのか？ニアの奴は」

「大丈夫…つて、どういうことだ？」

「おれは今、革命軍にいる。ニアはくまの奴に飛ばされて革命軍の基地に落ちてきた。そこで、エースの処刑のことを知ったんだ。革命軍が戦争に加担することはできないけどあまりにも必死なニアを見てドラゴンさんが情報をくれるなら力を貸すといった。」

サボがそこまで言うと、白ひげたちはニアが何をしたのかとサボの心配を悟った。

「ニアは簡単に自分の力のことを喋った。初めて会ったにも関わらずおれたちに簡単にあの拒絶の力とやらのことを話し、その証拠としておれの記憶を戻した。」

「じゃあ、革命軍はみんなニアの力を知ってるのか？」

「ああ、知っている。ドラゴンさんがニアに『お前を盾に白ひげに喧嘩を売ったらどうするつもりだったのか』と聞いた。そしたらニアは何て答えたと思う？」

「…なんて、答えたんだ？」

「自分のせいで白ひげ達に被害が出るなら、こんな首切り落とすに決まってる。つて言ったんだ。『何、当たり前のことを聞いているの？』とでも言いたげな顔で」

「そんなことを……」

「なぜあんなに自分を大事にしないんだ？」

白ひげも隊長も黙ってしまった。

きっと彼らも同じことを思っていたのだろう。

その静寂を破ったのは少女の声だった

「……………にいちゃ？」

甲板につながるドアからこっそりと顔を出すように恐る恐る隊長たちの方へと歩いていく。

「ニ、ニア!?目が覚めたの!?体は大丈夫?!」

「まだ寝ている。回復してないだろう？」

「で、ても…。その…………おきたらだれもいなくて…。わたし…おいていかれたかと…」

「……。」

少女が寂しがりだと言うことを思い出した彼らはまだ昏い目をしてる少女のところへ行き頭を撫でるのだった。

第41話 癒し姫のニア

気がつくくと真っ白な空間。

ああ、またここにきたのか…

『まーた来たんですか？ニアさん！あなたドM何ですか?!』

「やっほ。じしようてんしのめがみさん」

『自称天使の女神さん?!なんか言い方変わってません!?全く！せっかく転生させてあげたのになんでこうも死にかけるんですか?!』

「べつにたのんでないよ？それよりも、わたし…もうつかれちゃった。おわらせちゃダメかな？」

『だから!!そんな最短記録は更新しなくていいんです！はあ……。ニアさん、わたしがあなたを送り出す時、聞きましたよね？”なんでわたしを選んだの？”って』

「きいたね。すっごいごまかされたおぼえがあるけど」

「生前からあなたの人生を少しですが見てました。前々からなんか可愛そうな人だなーって思ってたからあなたの魂が輪廻の輪から外れた時に呼んだんです。それでここであなたの記憶を覗かせてもらったときに…哀れに思ったんです」

天使に同情されるって……

でもこの天使、見た目が幼女だから同情されても…って感じなんだけど

『知っていますか？ニアさん。苦しんで…もがいた魂はとっても綺麗な輝きを放つんですよ？人間は誰しもが輝けるはずなのに、つまらなイと思いつながら嫌な毎日に耐えて死して尚それをどうでもいいって思ってたあなたに生きることの楽しさを知って欲しかったんです。』
「たしかにこのせかいにきて、あのひとたちとであってすごいたのしいよ。でもね…それいじょうにくるしいの。じぶんよりもたいせつなひとができると…うしないたくないってきもちがおおきすぎて…くるしいの。じぶんなんてどうなってもいいからまもりたいてすごくおもう。」

『はい。凄くよく伝わってきます。でもね、ニアさん…。自分を犠牲

にして守っても誰も喜びませんよ？もしあなたが逆の立場だったらどうしますか？大切な兄達に庇われて彼らが生死の狭間を彷徨ったら…どう思いますか？』

「いやだ。きらわれてもいい、すてられてもいいからこのちからをつかってたすける。」

実際そうした。

他のことを考えてる余裕なんてなかったから…考えるより先に動いてしまったから…エースを生き返らせる形になった。

『彼らはあなたのようなちからを持ってないんです。あなたは彼の身に何が起きても全てを無かったことにできますが彼らはあなたの身に起きたことを受け入れるしかないんです。あなたがここで死んでしまつたら彼らはその事実を…認めるしか無いんですよ？』

………そうだ。

それはわたしが避けてきた問題だ。

わたしが死んだらみんなは悲しむかな？

「わたしがいなくなってもきつとかわらない。わたしがあのふねにのるまえのかれらに…もどるだけ。」

『…そう思いたいんでしょう？』

意識だけの世界だというのに涙が溢れてくる。

『わたくしはあなたを応援していますよ？だからもう少し頑張ってみてください。あなただって彼らに言いたいことが残ってるでしょう？大丈夫です、彼らなら受け止めてくれますよ。……ニアさん、自信をなくしているのでしょうか？心ない言葉を浴びせられて傷ついて、でもそれを伝えられなくてもどかしい思いをして…そんな自分に嫌気がさしてるんじゃないですか？』

「うん。わたしのいばしよは…かえるばしよはあのふねなんだっておもってひつしになつてみんなをさがしたのに、”はじめからおまえのいばしよなんてないんだ”っていわれて…だったらいままでのあののしかったおもいではなんなの？あれもわたしをあんしんさせるためのえんぎだったの？つておもつたら…わたしっ、なんでいままでがんばってきたんだ！もう…じぶんがわからない……」

ふと頭を撫でられ顔を上げると幼女がわたしの頭を撫でていた。
…：わたしと身長かわらないって…この自称天使何歳なんだ。
天使とか言ってるくらいだから人の型に嵌ってないんだろうけど
すると突然わたしの体が光り出した

『時間ですね。あなたの肉体が魂を呼んでいます。あなたはまだ死んではいけません。あなたなら大丈夫ですよ、なんと死にかけてもなんとかしてきたじゃないですか。ニアさん、遠慮しないでください。あなたは決して1人じゃありませんよ』

彼女が笑顔で手を振っている記憶を最後にどこかに引っ張られるような引力に身を任せた

…意識が戻るのを感じながら目を覚ます
起きたら誰もいなかった。

ここモビー・ディック号だね？

体を起こすと激痛が走る。そういえば赤犬さんの攻撃もろにくらったつけ…

うーん、何で生きてるんだろう？我ながら頑丈すぎる

ところで本当に誰もいないのかな？イオンがまた能力でお兄ちゃんズ隠してるのか？部屋を歩き回ってるけど本当に誰もいないっぽい

わたし、置いていかれたとかないよね??大丈夫だよね???

…落ち着いてあたりを見渡すと見覚えのある部屋。

医療室だ。…寝かされてたのかな。どうしよう、外行ってみるか。

あの戦争で普通に姿見せてたから今更隠してもって気がするから
パーカーはいいや

甲板に行くともんな集まってた。サボにルフィさんに…あの人は…
ジンベエさん、だっけ？

わたしが「にいちゃ」と呼ぶとみんなこちらを振り返る。

お兄ちゃんズの方に歩くと彼らもこっちにきて頭を撫でた。

するとルフィさんが唐突に倒れてしまった

「ルフィ?!」

「…イワンコフの能力が切れたか。エース、こいつはな極限のダメージを受けた状態にドーピングしまくって動けてただけなんだ。ほんとは限界を超えてる。いつ倒れてもおかしくない状態だったんだよ」

「何だよそれ！お前知ってて無茶させたのか!？」

「しようがねえだろ。こいつにそんなこと言っても無駄だ」

…サボの説明にエースが噛み付く。

もう今更だし、やっちゃうか。

ルフィさんの体のダメージと疲労を拒絶する。

倒れてすぐだったからかルフィさんは目を覚まし起き上がった

「あれ？おれ何で倒れてたんだ？」

自分の状況が理解できてないようで呆けた声をあげた

それを見たサボが言う。

「…ニア。お前なあ、いいのかよ。そんな簡単にその力使って」

「べつにいいよ。なんか…いまさらってかんじもするしさ。それにこんなちから…たすけるためにつかわなかったらなんのいみがあるの？それこそただのバケモノじゃないか。どうせそうよばれるならぼくはたすけたい。」

まだ立ち直れてないんだ。

サボは悪くないのに八つ当たりする様に強い口調で言ってしまった。

普段の態度とは違うわたしに何か思ったのか、隊長達が顔をしかめハルタが抱きついてきた。

「ごめんね、ニア。怖かったよね、辛かったよね、寂しかったよね。1人にしてごめんね、守れなくて…ごめんね」

ハルタの声は震えていた。

…心配かけたし悲しませたかな

謝るのはこっちの方だ

「ううん、わたしがわるいの。ごめんね。なかないで、ハルタ。サボもごめん。やつあたりした」

「いや、別にいい。それだけ傷付いたんだろう。」

少し間を開け、マルコが話を続ける。

「ティーチに攫われた後何があつたんだよい。」

「にげようとしたらかみのけをつかまれたからきりおとしてにげただ。それでしゃぼんだまのしまについた。」

わたしはシャボンディ諸島でのことを思い出す。

ただ街を歩いていただけで向けられた嫌悪

あれは本当に怖かった。みんな消してやりたいくらいの恐怖を感じた。

「しゃぼんだまのしまでね…ただまちをあるいてただけなのに、ぼとうされたんだ。きもちわるいつて、めのいろがちがうへんなこだつて…。わたし、なにもわるいことしてないのにあるいてただけで、そう…いわれたの」

「……………そうか」

「それで、うちゆうじんみたいなへんなふくをきたひとがいいおもちやをみつけたつていうかおしながらわたしにちかづいてきて…つかまえろつて…。こわかつ…た！」

「天竜人か。また厄介なのに目エつけられたな」

怖かったな。とイゾウがわたしの頭をなでる

わたしはそんなイゾウを見上げたあとあたりを見渡した。

マルコ、エース、ジヨズ、サツチ、ビスタ、ブラメンコ、ラクヨウ、ナミユール、ブランハイム、クリエル、キングデュー、ハルタ、アトモス、スピード・ジル、フォッサ、イゾウ…。

隊長はみんないる。

別の方を見るとルーカス、ロキアス、カルガン、シース、イオンも居た。

「…とーさんは？」

「グララララ…。ここにいるぜエ、ニア」

後ろからオヤジさんの声がした。

……………本当に、みんないる。

逃げきれたんだ。みんなで…帰つてこれたんだ。

ポロポロと涙が零れ落ちそれを慌てて拭った

「お前は涙もろい癖にいつも泣くのを我慢するな。なあ？ニア。…お

帰り。よく、帰ってきたな」

サツチの言葉にわたしの涙腺が切れた。

堰をきり我慢していた感情が一気に溢れ出す

わたしを抱きしめているハルタを抱きしめ返す。

「こ、こわかつ…た!!わたしっ…ひとのこころが…あんなにもこわいなんて、おもわなかった!!」

「…うん」

「ことばにしないこころが…つきささってぬけないの!いたくて…くるしくて…だれかにそばにいてほしかった!!わたしっ!ちつともつよくなてない!!ひとりじゃなにもできないくらいよわいの!ティーチがほしがってたのはわたしじゃなくて、このちから!てんりゆうびとがめをつけたのは、わたしのようし!なら、”わたし”はなんなの?!はじめからだれからもひつようとされてなかったの!?!じゃあ、なんでにいちやたちはわたしをひろってそだてたの!?!なんどもなんどもよんだのに、だれもきてくれなかった!!いらぬならはじめからそういつてよ!ひどいよ!にいちや!」

どう考えても酷いのはわたしだ。

ああ…傷つけた。

違う、こんなこと言いたいんじゃない。

「ぐすっ。…ごめん、にいちや。これるわけないのに…りふじんなこといった。」

ハルタから離れ、涙を拭う。

彼らに背を向け顔を俯けた。

「ティーチが欲しがっていたのは確かにお前じゃなくてお前の力だったかもしれない。だがな、あいつに攫われたニアを必死になって捜したのは俺たちだ。見つけられなくて悪かった。」

「ごめん。俺たちもつともしっかりしてりやお前にそんな怖い思いさせずに済んだだろう。」

彼らの顔を見るまいと俯けた顔を上げみんなを見る。

だれも彼も笑っていない。いつもなら優しい笑顔を向けてくれるのに、みんな険しい顔をしている。

もう、ぼくに向ける笑顔なんてないって事かな…

そう思うと乾いた笑みが溢れた。

「みんなはさ、ぼくが…こわい?」

「ああ、怖いな。」

「『マルコツ?!』」

マルコがハッキリ言うとはかの隊長や周りの隊員が焦った声を上げた。

ああ…ティーチの言う通り、もうここに居場所はないのかもしれない。

…ならここにいちやいけな。ぼくはこの船を降りるべきだ

「とーさん…にいちや。ぼく…」マルコ隊長、言葉が足りませんよ。」

この船を降りるよ。と、言おうとしたところでイオンが横槍をいれる

「……………もしかして伝わらなかつたかよい?」

「ええ。多分今ので貴方の言いたいことがわかったのはボクだけですよ?あとはオヤジさんかな?オヤジさんでも察せられなかつたのならニアは今ので確実に傷つきましたね。」

「うっ……。悪かつたニア。お前を否定した訳じゃねえんだ。だが、その前にお前さつき何を言いかけたんだ?」

「ボクの予想が正しければさつきの彼女の言葉の続きは聞かない方があなた方の為ですよ、マルコ隊長?」

イオンは気付いてた。
そういえばこの人の能力の中に……心を読むスキルがあつた気がする。

つてことは、わたしの思いは筒抜けか。

「ニア、たしかにボクは人の心を読むスキルを持つてるけどそれを仲間に使ったりしないよ?君は顔に出やすいからわかるだけ」

……ピンポイントで当ててきてるのにこれで使っていないってこの人強すぎるだろ!

「そうか。なら聞かねえよい。あのな、お前…自分で気づいてるか」

らねえけど”わたし”っていう時と”ぼく”っていう時があるんだよ。お前が自分のことを”ぼく”って言ってる時はその綺麗な目から光が消えた時だ。だから”ぼく”のお前が出てくる時は俺たちの知ってる無邪気で可愛いニアが消えちまったみたいで…恐エんだよ。もう、お前の笑顔が見れなくなる気がして…生きた心地がしないんだ”

…そんな細かい所によく気付いたなこの人…

「ふふっ。マルコ隊長はニアをよくみてますよね。そういうことだよ、ニア。ニアの口調が変わる時も君の一人称は”ぼく”なんだよ？気付いてた？」

わたしは首を横に振る。

「だろうね」とイオンが優しく笑う。

「ニアは怒った時に”ぼく”っていうみたいだけど、今、無意識のうちに出るってことはニアが相当傷ついた証拠。多分”わたし”を守るために”ぼく”が生まれたんだらうね。でも…大丈夫。もう、離さないから。危険な目に遭わせないからね、ニア…ここにいてよ。みんな君の帰りをずっと待ってたんだ。君が無事であることを願いながらずっと捜してたんだよ？」

「ほんとうに？」

「本当さ。なんならニアを探してる時の隊長たちのやりとりをここで実演してあげようか？」

「二」それはやめてくれ！イオン!!!「二」

そんなに必死になって止められるとなんか気になる。

わたしの思いを察したのかロキアスのいつもの悪ふざけの延長戦なのかロキアス達が動きはじめた

「くそっ！ティーチの奴！どこに逃げやがったよい！」(inロキアス)
「落ち着け、マルコ。焦ってもすぐに見つかるわけじゃない。エースの事もある。今は耐えるんだ」(inカルガン)

「長男が諭されてる…。マルコってさ、ほんっつとにニアに弱いよね？子ども好きなの？」(inルーカス)

「ハルタ、今のマルコを茶化すのはやめた方が…」(inシース)

「いや、茶化してるわけじゃないんだけど、ニアを育て始めるようになってからずっと思ってたんだ。ニアには妙に優しいじゃん？」（in ルーカス）

「まあ元々面倒見の良い方だからな、マルコは。」（in カルガン）

「お前ら！なんでそんなに呑気なんだよ！確かに焦っても仕方ねえとは思うが……あいつが居ねえと寂しいんだよ！」（in ロキアス）
「寂しいと死ぬってか!?うちの長男がウサギみたいなこと言ってるぞ！」（in シース）

「誰がウサギだよ！サッチ！表でろ！」（in ロキアス）

「：サッチってマルコ元気にさせるの上手だけど……」（in ルーカス）
「なぜ喧嘩に勃発させるのか謎だな」（in カルガン）

ー以上！ー

4人の実演にマルコとサッチが両手で顔を隠していた。

恥ずかしかつたのだろうか

ハルタとイズウは苦笑いをし、その表情から本当にそんなやりとりをしていたんだと思った。

「い、いや……。今のはな、」

「：改めていわれるとすげえしようもない事してたな、俺ら」

マルコ達が何か弁解しようとするがその姿がまたおかしかった。

「ふふっ……」

「！！！！」

「ふふっ……ふふっ……！しんぱいかけてごめんなさい。さがしてくれてありがとう。」

あまりにもおかしかったので思わず笑ってしまい、お礼を言うと三人衆とシースが笑顔で飛びついてきた。

「ニアッ!!やつと笑った!!今の！俺のおかげだよな!？」

「いや！お前の実演に乗った俺たちのおかげだな！」

「まさかシースまで便乗してくれるとは思わなかったがな」

「ニアに笑って欲しかったからな。また膝枕し………な、何でもない」

膝枕？ああ。七夕の時か。

そーいやシースに膝枕してもらったっけ？懐かしいなあ

「何だ、膝枕って。シース、お前ニアに膝枕してもらったのか?!」

「してもらったんじゃない!したんだよ!」

「「ずるいぞ!!」」

三人衆とシースがやいやいと騒ぎはじめた。

「ふふふっ、賑かだねえ。ニアがいなくなった時と大違いだ。ねえ、ニア?まだ自分が必要ないって思うかい?あの三馬鹿トリオがあんな楽しそうに喧嘩する様になったのもニアがここにきてからなんだよ?マルコ隊長は優しくなったし、ビスタ隊長とイズウ隊長は隊員の面倒を今まで以上に見る様になったね。ハルタ隊長も隊長として様になってきたし、全部ニアが関係してるんだよ?凄いやね」

三馬鹿トリオって何気に罵倒した?!

楽しそうに喧嘩ってト○とジエ○ーですか!?

「じゃあニア、とりあえず……大人しく縛られろ」

「!?!」

マルコがそう言ったと思ったらイズウがいつのまにか縄を取り出しわたしに巻きつけた。

「えっ!?!なに!!」

「いったろ?監禁して尋問するって」

「あと、エースがお前が死んだっていった時の俺たちの絶望感を教えてやるともな」

「それとニアの力のことについてもゆる〜っくり話そうか」

「ふふふっ。ニアは本当に人気者だね」

「イオン!?!これだいいじよぶなの?!にんきものとかそういうはなしじゃないよね!?!」

「いってらっしやい、ニア。」

「いや、たすけて?!」

オヤジさんも笑いながら隊長ズに連れて行かれるわたしを見送る。

…拜啓、俺様何様女神様

わたし、また近いうちにそちらに行くかもしれないです。その時はもう終わらせてください。

ーマルコサイドー

俺たちが甲板で話しているとニアが起きたらしく甲板に来た。

いつもならフードをつけてくるが、あの戦争で普通に顔を見せていたからもう良いと思ったのかそのまま歩いてきた。

あれだけボロボロだったのにもう歩けるとはさすがといふかなんというか。

まだ休んでいて欲しいからビスタが「まだ寝ている」というが「起きたら誰もいなかったから。おいていかれたかとおもった」と、言った。

早く休ませてやりたいけど、こいつを1人にしておけねえな。

俺がサッチに目配せするとサッチは頷きイゾウに耳打ちをする。

それからハルタ、ビスタ、そしてエースに伝わった。

エースがさりげなくイオンの後ろを通ってオヤジの隣に行く。

オヤジが俺をみて頷くと俺はニアに疑問を投げかけた。

「ティーチにさらわれた後、何があったんだよ」

「にげようとしたらかみのけをつかまれたからきりおとしてにげたんだ。それでしゃぼんだまのしまについた。」

しゃぼん玉の島…

シャボンディ諸島か。

「しゃぼんだまのしまでね…ただまちをあるいてただけなのに、ぼとうされたんだ。きもちわるいって、めのいろがちがうへんなこだって…。わたし、なにもわるいことしてないのにあるいてただけで、そう…いわれたの」

だろうなあ。実際そうなるだろうと俺たちも思っていた。

だから尚更心配だったんだ。サッチの話だとニアは寝巻きのまま飛び出してきたらしいから顔を隠せない。そんな状態で街中を歩くなんて良い晒し者だ。

「……………そうか」

俺はそう言うことしかできなかった。

はあ、ほんと…情けねえ兄貴だぜ、俺はよお…

「それで、うちゆうじんみたいなへんなふくをきたひとがいいおも

ちやをみつけたっていうかおしながらわたしにちかづいてきて…つかまえろつて…。こわかっ…た！」

宇宙人みたいな変な服…。

天竜人か。また厄介なものに見つかつたな。そりや追いかけてまわされるだろうな、ニアは可愛いから。

ニアが周りを見渡しみんないるのを確認するとポロポロと泣き始める。

そりや怖かつただろうなあ。いきなり知らない世界に1人放り出されてエースの処刑だったので戦場に来て、心ない言葉を浴びせられて…辛い思いさせたな。

サッチが「お帰り」と言うとき我慢の限界がきたのかニアが泣き叫んだ。

それは俺たちに対する『怒り』や『悲しみ』

「何度も呼んだのに誰もきれくれないなんて酷い」

「いらぬなら初めからそういつてよ」

…俺たちがお前を要らないなんて言うわけないだろう？きつとこいつも頭ではわかつてるんだ。けど心が追いつかないんだろうな。

こいつも本気でいつてるわけじゃないってわかつてはいるがそういわれたことに対して少なからず俺たちも傷ついた。

ニアが俺らを見上げると昏い目で自嘲する様に嗤う

「ぼくが…こわい？」

「ああ、怖いよ」

”今のニアは”と、心の中で付け足す。

ニアはもつと無邪気に笑うやつだ。そんな顔して欲しくない。

けど俺の含みはイオン以外に通じておらずニアを少なからず傷つけたと指摘された。

俺が弁解するとイオンがニアがいなくなった後のやりとりを教えあげようか？とニアに笑いかける。

あの時のことか?!あのサッチと俺がすげえしようもないことで喧嘩した時の…!

やめてくれ！といったがロキアス達が実演し出した。

すげえ恥ずかしいよい。

だが、それが面白かったみたいでニアはさつきとは違い可愛らしく、いつもの様な笑顔になった。

…タイミング的には今しかねえよい。

ニアを連行して強制的に休ませねえと、多分こいつ一生休まねえだろうよい

「じゃあニア…大人しく縛られろ」

俺が言うといゾウがニアの後ろから縄をくくりつける。

ニアは驚いていたがまだまだだ。

イオンが優しい笑顔でニアに手を振る。

俺達の行動に啞然とするニアを拘束し担ぎ上げると啞然としてる隊員を置いてニアを医療室へと運んだ。

ーサイドエンドー

「マルコー・やすんでほしいならそうっていつてよ!」

「こうでもしなきゃお前理由つけて休まねえだろい?俺は十分譲歩したぜ?」

どうやらわたしを休ませるために強制的にあそこから連れ出したみたいでした。

医療室に運ばれベッドに寝かしつけられるといゾウがロープを解く。

「そういうえばサボとルフィさんは?」

「エースの兄弟のことか?あいつらならサボとか言う方が弟とジンベエ連れて出かけてるよい。ニアが回復したら勝利の宴を開くから参加してけって言ったら買い出ししてくる!とか言っつて弟がおれも!ってついてったよい。」

元気か!

さつきまで戦場にいたのに、その元気はどこからやってくるんだ!!「それにしてもあのロキアス達の実演は傑作だったな!いやあ、あいつらよく覚えてたもんだ」

「やめてくれ、恥ずかしい(よい)」

「にいちや達はわたしがいると楽しい？」

ふと唐突に聞きたくなくなった。

マルコがベッドに座りわたしの方を見ると微笑を浮かべて頭を撫でる。

「ああ、楽しいよい。」

「そうだね。ニアが来てからみんなの意外な一面が見れてすつごく楽しくなったよ。1番意外だったのはマルコだけだね」

「うるせえよい」

「何を心配してるんだ？ニア」

そんなの決まってる。あの時のことだ。

みんな触れない様にしてきてくれてるんだろうけれど、1番気にしてるのはわたし自身で…1番本音を知りたくない相手がエースだ。

この部屋には、マルコ、エース、ビスタ、ハルタ、イズウがいるけど、エースの顔だけ見れない。どう思われてるのか怖くて、目を合わせることができない。

「……わたし、エースを」ムグツ

何が言いたいのか察したエースがすぐにわたしの口を手で塞いだ。

「いいんだ、ニア。気にするな…むしろ感謝してる。お前がそのことを1番気にしてるからこそ、さつきからおれのほう見ないんだろ？」

彼は気付いてた。

エースは両手でわたしの顔を挟むと自分の方に向ける。

「今後、その事でおれを避けたら許さねえぞ。いいな？」

「うん…」

そう言うのとエースは笑い頭を撫でた。

じゃあもう寝ろ。とみんながわたしを寝かそうとした時医療室のドアが乱暴に開いた

「たたたた隊長！大変だ！冥王が来た!!!しかも赤髪を連れて！」

「二二はあつ?!」

めいおう?誰、それ。

しかもシャンクスさんも一緒?…ってことは冥王って人も凄い人なのかな？

「ここか！ニア!!お前、大丈夫なのか?!怪我は！気分はどうだ!?おれの船に來ないか?!」

「どさくさに紛れて勧誘するな!!」

「…チツ、バレたか。」

「シャンクス、キャラが変わってるぞ」

「レイリーさんもニアの可愛さをわかったからこうなるって!」

レイリーさん?……って、

「しゃぼんだまのしまにいた…?」

「おつ、覚えていたか、お嬢さん。1番上のお兄ちゃんは青い炎の鳥になると聞いてまさかと思つたが本当に白ひげの船にいたとはな」

「おいおい、クルーが騒ぐから何事かと思つたら…何しに來た、アホンダラア。おれの船は休憩所じゃねえぞ。お宅訪問感覚でお前らみたいなのがホイホイくるな」

あ、オヤジさん。

お前らみたいなのがホイホイくるなって……もしかして知り合いなのかな?

冥王って言つてたよね

で、シャンクスさんがレイリーさんって呼んでるから相当すごい人だとすると……もしかしてオヤジさんと同じ世代のひとかな?

オヤジさんに物怖じしてないし、ライバルか何かだとしたら……うん。

今この瞬間を海軍の人がみたらびっくり仰天だね

わたしがレイリーさんを見ながら考え事をしてるとそれに気づいたのかサッチがこつそりと耳打ちする

「冥王は元ロジャー海賊団の副船長だ。ちなみに赤髪も昔そこに見習いとして乗つてたんだよ」

………それ、相当まずいんじゃない?喧嘩始まつたらこの船沈むかも

「白ひげ、いいところに来た。お前、あんな子どもを乗せてるのか?」

「話はそっちの小僧に聞いてんじゃないかねえのかア?」

「まあ、あまりよくわからないことがわかつただけだな。」

そう言うレイリーさんに対しシャンクスさんはばつの悪そうな顔をした。

多分わたしの力のことは話してないんだ。

彼に本当のことを言っていないから少なからず罪悪感を感じてるのかも知れない。

「ならそれでいいじゃねえか。ニアについて教える気はねえよ。わかったら帰りやがれ。」

「…火拳のエースは1度死んだ筈だ。お前も死にかけていただろう？ …あの嬢さんがそれをひっくり返したと言うのならあの子はこれから世界中から危険視されるぞ。今ならまだ間に合う…。逃してやるのが優しさってもものじゃないか？ 必要ならわたしも協力するぞ」

…あの人なりにわたしを心配してきてくれたのだろうか。
けど…余計お世話だ。

「わたしはこのみんながすきな。…とーさんといちやたちがわたしのなまえをよんでくれるかぎり、みんなについてくつてきめたの。だからね、よけいなこといってにいちやたちをこまらせないでくれるかな？」

にっこりと笑って言うレイリーさんは引きつった笑顔を浮かべた。

「おい、シャンクス。あの子は何者だ？ わたしが恐怖を感じたぞ」

「ニアを怒らせたら多分レイリーさんでも敵わないからそれ以上の介入はしないほうがいいですよ」

ヒソヒソと何か会話してるけど、聞こえてるし何気にひどいこと言われてる気がする。

「ん？ あ、いたいた！ エース！ お前の弟たちそろそろ帰ってくるってよ！ 出迎えてやれ！ ……って、赤髪に冥王!? なんでお前らここにいないの!？」

ロキアスがシャンクスさんとレイリーさんを見るなりそういうけど…むしろよくそんな態度取れると思う。わたしも人のこと言えないけど

「…ならおれは先に失礼する。今、ルフィに会うわけには行かないか

らな。」

「ん？わかった。またな、シャンクス」

シャンクスさんはわたしの方に来ると軽く頭を撫でる。そして耳元に顔を近づけると小声で言った

「無事で何よりだ、ニア。お前がティーチに攫われたと聞いた時、白ひげを殺してやろうかと思った。今度から何かあったら俺も頼れ、いつでも力になる」

「……どうしてちがうふねのひとなのにそこまでしてくれるの？」

「お前が可愛いからに決まってるだろう？」

何を今更、と彼は言うが……どんな理由だ。と思う。

シャンクスさんはわたしの髪をさらりと撫でると船を後にした。それと入れ替わるようにサボとルフィさんが戻ってくる。

すると、レイリーさんがルフィさんに修行をつけるという話をしたらしい。

ルフィさんもかなりボロボロになっていたけれどわたしが拒絶の力を使ったせいで体は回復していた。

だが、大事をとってしばらく様子を見てから修行をするらしい。

わたしの体が回復し宴が開かれるとエースとサボとルフィさんが騒ぎながら仲良くご飯を食べていた。

「にくー！ー！」

「おいおい、落ち着いて食べるよ。飯は逃げねえって！」

「はははっ！変わらねえな、ルフィは！」

その光景を微笑ましく見ながら遠くで静かに食べてるとイゾウとハルタが来る。

「どうしたんだ？こんな所で1人でよ」

「ほら、ニアも飲みなよ。楽しまなきや」

「わたしまだみせいねんだよ」

「大丈夫、それジュースだから」

そう言われたので渡されたグラスの飲み物をちびちびと飲む

「それで？何か考えていたのか？」

「ん？うーん。エースがうらやましいなあって」

「エースが？どうして？」

「あんなになかのいいきようだいがいるなんていいなあっておもってさ」

また一口飲む。だんだんとポカポカしてきた。これ何のジューズだろう？体を温める効果があるのか。お兄ちゃんのさりげない気遣いかな？

「お前：俺たちのこと兄弟だと思ってるのか？あんなに”にいちや”って慕ってくれてたのに」

「そういうことじゃなくてね、なんでいえばいいのかなあ…。ま、いつか。わたしにもだいいじななぞくがいるし…。まけてないもんね」

「大事な家族、か…。そう思ってくれてるなら俺たちも嬉しいな」

「とーぜんだよ。にいちやたちがわたしをみつけてくれなかったらわたしはもういききてないもん。かんしゃしかないよ」

「あの時ニアを見つけたのは本当に偶然だったけどね。サッチが気づかなかったら俺もスルーしてたかも知れなかったし…」

「ふふつ。じゃあ、わたしはうんがよかったんだね」

「俺たちはお前と出会えたことが『幸運』だな。」

「ありがとう、イゾウ。…。そういえば、イゾウとハルタはみんなのとかいかないの？」

「お前が1人で居たからなにか悩んでるんじゃないかと思って声をかけにきたんだ」

「…そっかあ。うれしいなあ…。じゃあもうすこしだけここにいてくれる？」

わたしはイゾウに寄りかかり体を預ける

なんか分からないけど唐突に甘えなくなった。

「……（ニアを酔わせよう作戦成功したぞハルタ。）」

「（後で場所変わってよ？イゾウ）」

2人が視線を交わし何やら目で会話をしていたけどお構いなしにイゾウに甘える。

色んなことがあったけど、それでもわたしはここに帰ってきてそれをみんな受け入れてくれた。

「ここだけの話だよ？ほんとね、わたしなんでもここからでいいこうとしたんだ。みんなのじかんとくさんうばってるしわたしがいるからみんなやりたいことできないんじゃないかっておもったの。…でもね、できなかつた。どうしても…みんなとはなれなかつたの。」

「…それでいいじゃないか。俺たちだってお前がいなくなった時、心に穴が開いた様な感覚に襲われた。お前も家族なんだから余計な心配は不要だ」

「うん。あのね？わたしがくじけずにここにもどってこれたのはハルタのおかげなんだよ？」

「俺の？」

「そう。ハルタからもらったこのチョーカーがあつたからなにがあつてもかえるんだ、つておもえたの。やつぱりこのひとたちすきだなあ。みんなあつたかい」

「……………」

これは紛れもないわたしの本音。

イズウの膝の上に座つて彼に体を預けながら彼らを見上げていうと2人はわたしを見て無言になった。

けど、どこか嬉しそうにしていた。

「(どうしようイズウ。こんな無防備なニアつてレアだよ。すつごい襲いたい)」

「(気持ち痛いほどわかるがそんなことしたら後でマルコに殺されるぞ。我慢しろ。)」

ハルタと目が合うと彼の方に行き今度はハルタの膝の上に座る。

「にいちゃたちはどうやってそんなにつよくなったの？」

「強くないよ。ただ強いつて思うならそれは強くいたいって思ってるから…かな？」

「ニアにはまだ難しいか？」

「…ううん。わかるよ、それ。ふふつ。にいちゃもわたしとおなじなんだね」

につこりと笑つていうとハルタとイズウが珍しく赤くなる。

照れたのかな？

「(イゾウ！どうしよう！かわいい！かわいいよ、ニアが！)」

「(今の笑顔を他の誰も見てなくて良かったな。この前みたいに失神者続出案件だぞ)」

そこにマルコがきた。

だんだんと眠たくなりわたしはうとうととする

「お前らこんな所でなにしてた？向こうでみんなと………てめえら……懲りてなかったのか」

マルコがわたしを見るなりそんなことを言った

「まーくんはおこりんぼだねえ。ほらにこっ！ってしよ！にこって！」

「ばっ!!ま…待て、ニアッ!!」

わたしはマルコに抱きつくとき彼を座らせ頬を人差し指で持ち上げる

一通り戯れて気が済むとマルコの胸に体を預け力を抜いた

急に『くたあ』となったわたしを彼が心配する。

「おい！ニアッ?!」

「ねむたいの。ねてもいい?」

「え?あ、ああ。わかったよい」

許可を貰うと目を瞑る。

優しい手つきで頭を撫でられる。

その温かさに心地よさを感じながらわたしは眠りについた。

それから数日、ニユース・クーが一枚の新聞を落ととしていった

「おい、エース！お前の弟またやらかしてるぞ！」

新聞を受け取るなり、ルーカスが言う

新聞にはマリソフォードでそぐわなない行動を起こすルフィさんの写真があった。

ヒラリ…

と、もう一枚、手配書が落ちる

「ニア！お前これ!!」

その手配書にはわたしが写っていた。

懸賞金、3億ベリー。DEATH or ALIVE

ー癒し姫，ニア，ー

…3億って何?!バカなの!?死ぬの!?

「…初期手配額が3億か…。つくづく型破りな奴だな、ニア」

「だがまあ…大将倒しちまったし、妥当じゃねえか?」

「…ちよつとまで、海軍は知らないがこいつ3つの時に3億3000万の賞金首倒してるよな?」

ロキアスとルーカスが言うのとカルガンが思い出したように言った。

「「そういえば…」」

ああ、そういうやそんな事もあったな（遠い目

「俺たちの修行や稽古に耐えて、赤髪と鷹の目に鍛えられて、赤犬を瀕死にして、マリソフオードを見事なまでにかき混ぜたな」

ビスタがそう言うときみんなが口を揃えて同じことを呟く

「「低くねえか?」」

いや、十分高いです!これ以上高くななくていい!

「グラララ!だがこうなつちまったらもうこそこそ顔隠す必要もねえな、ニア!」

それは間違いない。

けど、うん。

わたしは1人じゃないんだ。だから怖くない

「ふふふつ、そうだね!わたしもうなかないよ、だからひとりにならないでね!」

ーその後の彼らの行方は神のみぞ知るー

↳ episode AEON ↳

イオンside

こんにちは、ボクはイオン。
超人系”ビジビジの実”の能力者さ。

人の見える世界…見えているものを操る能力。

見えなくしたり、別のものを見せたり、人の”心の中”を見たり
……すごい能力だよねえ。

けど、そんなボクにも苦い思い出がある。

少し与太話に付き合ってくれるかな？

ボクはね、ガレザラ島っていう島の町外れで生まれたんだ。

薄紫色の髪と目で周りからは『気味が悪い』って遠巻きにされてい
てね…いつも1人だった。

ボクが生まれた時には父はすでにいなかった。

ボクには血の繋がった妹がいるんだけどその妹が生まれた時、母は
亡くなった。

だからボクは妹と肩を寄り添って細々と暮らしていた。

裕福ではなかったけどそれなりに幸せだった

でもある日…

「たがいま」

「あ、お兄ちゃん！お帰り」

「…今、なんて？」

「ん？あのね、村の人が言ってたの。紫色って”死の象徴”だって。
一緒にいたら魂取られちゃうって！でもわたしお兄ちゃんいないと
生活できないもの。だからわたしの魂食べないでね！」

「何を言っているんだい？ボクが一度でも君にそんな素振りを見せた
ことがあるかな？」

「今まではなくてもこれからあるかもしれないじゃん」

「…村の人に何を吹き込まれたか知らないけどボクはボクだよ。夕
飯作るね」

「……………そうやって優しいフリして安心させて魂を後でもっていく魂胆？」

「何が楽しくて妹に手をかけなきやダメなんだい？まあ…この家を出ていくのも、ボクを追い出すのも、君の好きにするといいよ。」

ボクは村人に『死神』というあだ名をつけられていた。

嫌だったけど、辛かったけど、妹のために頑張って働いていたんだ。けど、妹にまで侮蔑される様になりボクの居場所は……………生きてる意味は…無くなってしまった。

その日の夜、眠れなくて家を出る。

村から少し離れたところに海があり、その海岸で海を眺める

ふと視線を横に向けると崩壊した船と船から飛び出す様にして散らばる財宝の様なものがあった。

好奇心から物色してみると宝箱に目がいく。

箱を開けると中には変な模様の書かれた木の実が入っていた。

……………文献で読んだことがある。……………これは悪魔の実だ。

「なんの実だろう。」

悪魔の実という存在は知っていたが種類までは把握しきっていなかった。

ボクだつて男の子なんだ。好奇心には勝てない。

鼓動が早くなるのを感じながらその実をかじる

「……っうえっ。まっつず。不味いとは聞いてたけどここまで殺人的に不味いとは……………アカデミー賞並みだね。」

強がっては見たけど不味すぎて泣きそうだ。

体を見てみるけど特に異変はない。まあ、そのうち分かるかな？

ボクは空になった宝箱に散らばっている財宝を入れて家へと持ち帰った。

リビングに箱を置き自室へ行くと眠りにつく。

朝目が覚めると妹が先に起きていた。

「…なにこれ。」

「ああ、昨日の夜に「すっごい！お宝じゃん！」…話聞いて？」

妹が箱を開けて中身を確認すると目を輝かせる。

「お兄ちゃんが持つてきたのかな?」

「そうだ:」お兄ちゃん! あ、間違えた。死神さーん!」そんな大きな声出さなくても目の前にいるよ」

「あれ? お兄ちゃん、いないの?」

「ここにいるって」

ボクが妹の肩をトントンと叩くと『心底驚いた』という反応をする

「ーっひゃあっ!!……って、お兄ちゃん! いつからそこに!!」

「始めからいたよ。」

「嘘! さっきまで絶対居なかった!! やだ! 気持ち悪い!! やっぱお兄ちゃんは死神なの!」

「ーっ気持ち悪いー」

妹に面と向かって言われてしまいボクは心の底から傷ついた。

ドロドロした感情が湧き上がる。

「……この財宝は君の好きにするといい。: ボクはここを出ていくよ」

「え……? お兄……ちゃん……。わたしを1人にするの!」

「……ふっ……ふっ……。君はどこまでも勝手だね。ボクがどれだけ優しくしようが『死神』だと罵って: 我慢してれば今度は『気持ち悪い?』……死神と一緒だなんて御免だろ? その財宝はあげるからそれで許せ。ああ、でも少しはもらっっていくね?」

「いやっ……ごめん、待って! 出て行かないで!!」

財宝を少し自分の懐にしまうと出ていく旨を伝える。

すると、妹が縋り付いてくるがボクはその手を払った。

「……いい加減にしろよ。今まで散々ボクの心を傷つけてきたくせに、今更その甘えを許せて? ……なにを勘違いしてるか知らないけど、ボクはそこまでお人好しじゃない。」

震える彼女に冷たい言葉を放つて家を出た。

村の人に会ったがなにも言われなかった。

いつもならわざわざ走ってきて罵りにくるのに……。

……まさか、ボク: 周りに認識されていない?

出ていく宣言をしたけれどそれがどうしても知りたくて宿屋に向

かい何泊かする。

宿屋の女将さんになにも言われなかった。それどころかボクが
ることすら気付いていないみたいだった。

無銭で部屋を借りてしまったことに罪悪感を覚えるが、まあ…な
かったことにしよう。

「……は、ははっ。はははっ。なんだよ、これ……。これが、悪魔の
力の…。」

誰にも気付いてもらえないことを嘆くべきか、罵られなくなったこ
とを喜ぶべきか…。

それと同時に人の”声”が聞こえるようになった。

”あいつは汚い”

”あいつ、騙そう”

”死んじやえ、バーカ!”

「……なにつ、これっ……」

頭を抱えて座り込む。

人の心をのぞいているようだった。

ポロポロと涙が流れ、その悪意に吐き気がこみ上げる

「……うえっ。おええっ」

ボクはここにいちやいけない。

ここにいたら狂ってしまいそうだ。

ボクは逃げるようにして村を飛び出し、山を越えるために歩く

今、どこにいるか現在地すら分からなかったが道が続く限り歩き続
けた。

「はあ……はあ……」

家を飛び出してきたはいいけど、体力のないボクに山越えなんて無
謀だったのか息が上がる。

それでも気を振り絞って歩き続けるとようやく山を抜けた。

少し休憩するために木陰に入り水を飲む

すると商人かな?

人の会話が聞こえてきた

「……この先に街がある。今から襲うぞ」

「へい、お頭。」

「へへへっ。女、子どもは全部売り飛ばしてやる」

……山賊だった。

絡まれても面倒だし道を変えよう。

しばらく休み体力が回復するとまた歩き出す。

「きゃあああっ！」

「助けてっ!!」

叫び声が聞こえてくる。さっきの山賊達か。

襲うの早すぎない? どれだけせつかちな?

ボクはそれなりに戦えるけど、わざわざ助けに行くほどお人好しじゃないからね。ごめんね?

そんなことを思っていると今度は山賊達の悲鳴が聞こえた

「てめえら、誰のシマに手エ出してやがんだ? ああん?」

視線を向けるといかにも柄の悪そうな人たちが数人で山賊達を蹴散らしていた

「俺たち白ひげ海賊団の縄張りで好き勝手するたア: いい度胸じゃねえか!!」

白ひげ……? 聞いたことあるな。

面倒なことになりそうだ。さっさとここを離れよう。

そう思いまた方向転換すると誰かにぶつかってしまった
顔を上げるとチンピラの2人組が……

「つてえ……。悪りいな、前見てなk……。お前、何者だ?」

「え?」

『え?』じゃねえよ! お前、いきなり現れたか?! さっきまでここには誰もいなかっただろう!」

「……ずっとここにいましたよ」

初対面や目上の人には一応敬語で話すようにしている。

波風立てないためだ。

「嘘をつけ! お前みたいなのひよろいイケメンがいたら真っ先に山賊の標的になるだろう!」

「ひよろいイケメン?」

「おい、やめろ!! 一般人に手エ出さなつてオヤジに言われてんだろ!」
「いやっ! こいつ…何かあるぞ! オヤジの邪魔になるなら…」
「やめろつて! こいつが何したんだ! こいつに喧嘩売つてもなんのメリットもないだろう!」

詰め寄ってくるチンピラを宥めるチンピラ。

…海賊つていつてたよね。

ボク殺されるのかな?

………ただで殺されてたまるか。

「…そ、そうだな。すまん、突然現れたように見えて驚いたんだ。」

「つたく、すぐに喧嘩売る癖なおせよな…。君、悪かつ…!!」

ボクの殺気に気付いたのか彼らはボクから距離を取り警戒する。

すると彼らの後ろから格の違う人がやってきた。

「お前ら、何してんだ? そろそろ時間だよ! 船に戻れ!」

「マルコ隊長! でもっ、こいつが!」

「ああん? こいつつてどいつだ? 寝ぼけてんのか?」

「マルコ隊長、もしかしてこいつが見えてない…?!」

今しかない。

ボクは隠し持っていた千本を素早く目の前にいる敵の首目掛けて投げる。

それは首のツボを的確に刺し彼は倒れた

「……?!」

「てめえっ!! やりやがったな!」

「下がれ! …こいつ、どこから出てきやがったよ!」

「初めからいたんだよ!」

「能力者か…! しかも厄介な能力だよ!」

警戒してくる彼らが無表情でみる。

「ただでは…殺されませんよ?」

「…殺され…? …お前、こいつ挑発したのかよ!」

「俺じゃなくて、そいつが」

「チィ…面倒なやつに喧嘩ふっかけたな。だが、俺らの仲間をやってくれたんだ…。覚悟はできてんだらうなア?」

…仮死状態にただけだけど、話聞いてくれなさそうだしまあいいか

仮死状態っていつてもほかつといたら死ぬだろうしあながち間違いではないか。

「やられたらやり返すのが海賊というものでは…？ボクは海賊ではありませんが…、もう…うんざりなんですよ。敵意を向けられるのも、罵られるのも…！」

「（こいつ、訳ありか。…だが）手加減はしねえよ！」

チャクラムを取り出して投げる。

けどその人はそれを悠々と躲した。

「珍しい武器使うじゃねえか!!……………おらアっ！」

反撃してくるが彼の攻撃する場所がわかるからボクもかわす

彼の攻撃を軽々と躲すと驚いた表情を浮かべる

「お前……見聞色が使えんのか？」

「なんですか、それ」

「覇気をしらねえのか…。」

「よそ見すると危ないですよ？」

投げたチャクラムが返ってきて彼の頭に当たりそうになるが、しゃがんで躲す

「チィ、なかなかやるじゃねえかよい。おい、お前…そいつ連れて先戻ってろ」

「援軍を呼ばれては面倒です。逃しません」

もう1人にも千本を投げ気絶させる

「……っ!!…てめえ……許さねえ！」

彼は怒り本気で蹴りを繰り返してくる。その場を飛び退きチャクラムのリングを目の前で交差させ相手の足を嵌める

「なっ……………」

「捕まえました。これを引けば…………っ?!」

足を斬ろうとチャクラムを外に引くと彼の足は青い炎になり斬れることはなかった

「俺は動物系ソオン、トリトリの実の能力者。幻獣種…モデル不死鳥だ。俺

相手にここまでやるたア……中々の実力者だが……ここまでだよ！」

ボクが驚いた隙に懐に入り込まれ鳩尾を蹴られる。

壁に体を打ちつけると呼吸が出来なくなりその場に倒れ伏した。

けどそれで終わらずに彼はボクの襟を掴み持ち上げる

……相手は海賊だもんな……。そりゃこうなるか

「てめえにどんな事情があるかしらねえが……仲間を殺されたとなりやただじやすまねえぞ……」

「ゴホツ……殺すなら……殺してください。もう、疲れました。ただ一ついうなら……彼らは死んでませんよ」

「……は？」

「だから、彼らは死んでません。正しい処置をすればまだ息を吹き返します。仮死状態になっただけ」

「……お前、その処置ってーのできるのか？」

「そりゃ……これでも医療に携わってますからね」

「なら、あいつら起こしてくれるかよい？」

そう言われたからボクは彼らの首に刺さった千本を抜き血を吐かせる。

彼らは咳き込むと周りを見渡した

「あれっ!?ここは……?!俺は生きてるのか？」

「ーっ……いてて」

「じっとして」

「?!?!」

驚く彼らに近づき消毒をして首に包帯を巻く

「これで大丈夫です。」

「すげえ手際だ。……中々の逸材だな。お前……俺らとくるか？」

「え……」

「マルコ隊長!?!」

「なんで……?ボク今、彼らを……」

「こいつらが先に喧嘩ふっかけたんだろ?まあ、死んでないからいいよ」

「でも…」

「いいから来い！話はそれからだよ！」

腕を掴まれ立たされる。「ついてこい」と言われたからついていくことにした。

ここで抗つても不利だからね。

彼の後ろをついて行ってただけど…：船に着くなり彼が振り返るとボクがいなくなったと思つたらしい

「あれ？あいつどこ行つた？」

「この能力便利なのか面倒なのか…」

はあ。と、ため息をつきキョロキョロしている彼の背中を人差し指で小突く

すると彼は気づいたようだ。

「ーっ!?!…あつ、お前…。面倒な能力だな。コントロールできねえのか？」

「やり方が分からなくて…」

「仕方ねえな。力の使い方も教えてやる。とりあえずオヤジに会わせるからついてこい」

頷くと彼はボクに背を向けて歩き出す。それについていくと白いひげを生やした大きな人がいた

「オヤジ。話があるんだけどよ」

「グラララー！どうしたア、マルコ！」

「こいつ仲間にしたんだがいいか？」

彼が親指で後ろを指差すがオヤジって人にもボクが見えてないらしく険しい顔をした。

「マルコ、おれをからかってんのかア？それともストレスで頭がおかしくなったのか？」

「…：…オヤジにも見えないか。すげえ能力だな。というかオヤジ、何気に酷いこと言わなかったよ？」

「気にすんな！それより、おれにも見えないってなんだ？そこに透明になる能力者でもいるってんのか？」

「透明になるっていうか…どつちかっていうなら認識出来なくなる能

力…か？触れると見えるようになるらしいんだが…。おい！姿見せろよい！」

そう言われたから彼の肩に手を置く

と、オヤジと呼ばれた人が目を丸くしてから笑い出した。

「……!? グラララ…！面白エ能力だな。探すのが大変そうだが」

「ああ。あとこいつ、医療にも通じてるしそれなりに強えよい。」

「グラララ!! そりやまたすげえやつ見つけてきやがったな!! お前、名前はなんて言うんだ？」

「イオン…」

「イオンか！よし、おれの息子になれ!!」

「でも…ボクは…」

「さっきのことなら気にすんなよい。あいつらが悪いんだし、誰も死んでねえからいいんだ」

そう笑顔で言われた。

「息子って言われても…何すればいいんですか？ボク、略奪とかできませんよ？」

「グララ！グラララ!! んなことしなくていいんだよ！この船でおれの名を背負ってお前の好きなように生きろ！」

「…ボクの…好きなように…。好きなように…いきても、いいの？…もう、我慢しなくて…いいんですか？」

「……………（訳ありか、こいつ。）」

「訳ありって程でもありませんが…ただ、紫色は不吉な色だから…」

「…おれ、今言葉にしたか？」

「あつ……………」

「…そういや、さっきもおれの蹴りを軽々躲したよな？見聞色使ってねえのになんでわかるんだ？お前」

「悪魔の実を食べてから…時々声が聞こえるようになったんです。人の心の声が頭の中に流れ込んで…だからさっきあなたと戦ってた時も蹴る場所がわかったから、避けられたんです」

「………ん？お前の目エ、紅かったか？」

「え？いや、薄紫の筈です」

どうやら今、ボクの目は紅いらしい。

「今、力を使つてると仮定すると……お前が食べた悪魔の実はおそらく”ビジビジの実”だ。人の視覚に訴えかける能力だろうよい。お前の姿が見えなくなるのもそのせいだ。声が聞こえるようになったのはその能力の応用じゃねえか？」

「基礎も分からないのに……？」

「無意識なら分からないこともないよい。だが能力つてーのはコントロールできないと危ねえんだ。気いつけろよ」

ボクは彼の船に乗ることになったんだけど、そこでもやつぱり一人だった。

誰からも見てもらえなくて寂しかった。

甲板で膝を抱えて蹲つてると隊員がやってきたんだ

「なあ、あのイオンって新入り、紹介されてから一回も見たことねえんだけど、どこにいるか知ってるか？」

「いや、俺もあの日以来見かけてない。話しかけたいんだが……こうも見つからないとお手あげてもんだ」

「仲良くしたいんだけどなあ」

彼らがボクの話をしているのを聞いていると船が途端にとまった。

どうやら海軍の船と鉢合わせしたらしい。

総出で海軍と戦うが隊員たちは押されていた。

『助けないの？』

ー助けても罵られるだけー

『彼らは君と仲良くなりたいたんだよ？』

ーそんなの口だけではなんとでも言えるー

『また心を閉ざして1人になるの？』

ーそうしないと傷つくじゃないかー

『なら君はずっと1人のままだよ？』

ー孤独は……嫌だー

『なら、助けないと。』

ーボクに……できるかな？ー

『それは、やってみなきゃ。だって……』

『一步踏み出さなきや始まらない』

心の中で誰かと会話すると答えが出る

…そうだ、ボクだつて本当はみんなと仲良くなりた

これはボクの『本心』

ボクは剣を振り上げている兵士にチャクラムを投げる

「?!?!」

敵も味方も突然現れたボクに驚いていたがお構いなしに隠し持つていたクナイを投げる的確に喉を狙う

「なっ!なんだ貴様は!!」

「…素直に答えると思つているのならあなたは馬鹿ですね。」

チャクラムを投げ頸動脈を斬る。

数十分の攻防の後、ボクは勝利を手にした。

「ふう…。意外としぶとかったですね。みなさん、怪我は無いですか?」

振り返つてそういうとみんな目を丸くしてボクを見ていた。

「あ……えつと、」

注目されるのは慣れてないせいか内心で焦る。

不味かつたかな…?余計なことしたかな?

「……っすっげえ!!チャクラムつてあんな風に使うんだ!!かけえよ!お前!」

「助かったぜ!イオンだったよな?俺はカルガン、よろしくな!!」

「え?は、はい。イオン…です。」

「はははっ!敬語なんていらねえよ!俺はルーカスだ!」

「はいはい!俺、ロキアス!よろしくな、イーリオン!……つて、いたあっ!なんで殴るんだよ、マルコ隊長!」

「イオンだつてつてんだろい!助かったぜ、イオン。ありがとな」

「……………いえ。」

「どうした?」

「お礼なんて…初めて言われました」

目を逸らしてそういうとみんなに髪をわしやわしやとされた

「これからいくらでも言つてやるよ!だからこれからもよろしくな

！」

「……ありがとうございます……ごいます」

それからボクはだんだんと力をコントロールできるようになっていった。

隊員たちはタメでいいっていうから隊員は普通の口調で隊長は敬語で話すようにした。

「おーいイオン！ちよつと話があんだけだよ」

「こんにちは、マルコ隊長。なんででしょうか？」

ある昼下がり、マルコ隊長とイズウ隊長とビスタ隊長がボクのところにきた。

「お前、2番隊の隊長にならねえか？」

「……隊長……ですか？ボクが」

「ああ。ずつと欠番だったんだ。オヤジと話してたんだがイオンなら問題ないだろう？」

「問題大有りだと思えますよ？ボクに人を纏める力はありませんし……それにボクなんか隊長になったら2番隊がお行儀良くなりますよ？海賊がこんななばつかでいいんですか？」

「よくねえな」

「でしよう？申し訳ないですがお断りさせていただきます」

「ははははっ！断り方一つにしても丁寧だなお前！」

「仕方ねえな。無理強いさせるわけにはいかねえし……」

「ふふっ……ごめんさ……ん？」

「……ん？」

急に”声”が聞こえ、”見る”力を使う。

ボクは自身の能力で大きく分けて6つの使い方を見出した。

対象の人や物を”見えなくする”

人の心を”直接見る”

物を見てそれに対し”関係する人見つける”

対象にした物に”視線を集める”

自分が見えているものと”違う物を見せる”

そして今使っている”限定した物以外を透明にする”という力

簡単に言って透視能力だ。それで甲板を見るとシースが倒れてい

た
ボクは思わず走り出し、それに隊長たちが驚いてついてくる。

甲板に出ると沢山の人たちと倒れてるシースが：

「シース!?!」

ボクが駆け寄り彼を起こすと腹部から血が流れる

「ははっ!もう気づかれたのか!てめえらも死ね」

「……誰?」

「俺か?俺は懸賞金5億ベリ」百足のムカデだ。白ひげの首をとりにきた。」

彼が悠々とそういうとボクはだんだんといライラしてきた

「隊長、シースを頼みます。」

「イオン!?まさかお前1人でやるつもりか!」

「何人いると思ってるんだ!?俺たちに任せてお前がシースを……」

「ふっ…ふっ。ボクの仲間に手を出したんです。死んでも文句はないよな?」

「「イ、イオン?」」

次の瞬百足率いる百足海賊団は血飛沫を上げ全員倒れ伏した。

チャクラムを弧を描くように投げて一斉に斬っただけなんだけどもね。

「えっ、何が起きた!」

「…イオンってあんな強いのか!」

「あいつ怒らせるのはやめといた方がいいな」

隊長たちが口々に言うけど、うん。早くシースを手当てしてください

「隊長?シースを早く医療室に」

「あつ、はい」

にっこりと笑って言うマルコ隊長がシースを担ぎ船内へ走る

「笑顔ひとつでマルコに言うこと聞かせたぞ、あいつ」

「…とんだ伏兵がいたものだな。敵じゃなくてよかった……」

さて……。とボクが彼らに向き直る

「まだ生きてる人は居ますか？急所は外したから当たりどころが悪くなければ生きてますよね？動ける人は早く仲間連れて出てつもらえませんか？」

「「oooooooooo!!!はっはいい!!!」」

バタバタと逃げの準備をしている彼らにもう一つ雷を落とす

「ああ、あと百足ひやくあしのムカデって…頭痛が痛い。みたいな言い方でカツコ悪いので改名することをお勧めします」

そういうと百足海賊団の船長がボクに抗議する。

「俺がつけたわけじゃねえ!!」

「ふふっ、元気そうですね。…ああ、そういえばあなた…シースのお腹を刺したんですよね?…3倍返しでいいですか?その臓物抉り抜いてあげましょう」

「逃げるぞ!野郎ども!!こいつマジで危ねえ!!」

「「oooooooooo!!!」」

敵が蜘蛛の子を散らすように逃げていくと静寂が訪れる。

「…お前、ほんとになんで隊員やってんだ？」

「いや…うん。海賊らしいといえづらいぞ」

ビスタ隊長達がそう言う。

…別に何もおかしなことしてないけど

「イオン!…ああ、終わったのか。」

「おかえりなさい、マルコ隊長。シースの様子は？」

「大丈夫だよ。…つかお前、俺を使いやがったな？」

「ボクはお願いしただけですよ?」

「マルコ。こいつは怒らせちゃいけない部類の人間だ。」

「笑顔で物凄い毒を吐くぞ。」

そういうと彼らは笑った。

いつか抱いたドロドロした感情が溶けていくのがわかる。

…ああ、居心地がいいな。ここは

それから月日は流れ、ボクは戦闘員を辞めた。

きつかけは体力切れで倒れた時だ。

戦えというのならいつでも戦うという条件のもと前線から外してもらい裏方へと回る。

船に図書室を見つけ、あまり使われていないようだったから掃除をして本を読んでいたらとても静かで心地よい時間を過ごすことができた。

それからそこを気に入り、鑑賞用の花や香り豊かな物を置いて憩いの場とした。

「イオンー…って、また植物増えてねえかよい？ほとんど誰も使っていないからいいがお前の部屋みたいになってんで…」

「こんにはは、マルコ隊長。ここにくるのは珍しいですね。どうしたんですか？」

「ああ、お前は滅多にここから出ないと思つてな。だから紹介するぜ？新しい俺らの家族だ」

そういうとハルタ隊長が赤ん坊とも言える子どもをボクの前に出す

「……女の子…」

ボクは忘れかけていた妹のことを思い出す。

昔の記憶が蘇り目を伏せた。

「ニアって言うんだよ！可愛いでしょ？」

ハルタ隊長がそういうからチラツと横目で子どもを見る

よく見たら宝石のようだった。

銀色の髪に黄金と空色の瞳。雪のような白い肌…

「いあー！いえー！」

「……っ！！」

言葉ではなんて言っているかわからない。

けど、ボクには確かに”彼女の声”が聞こえた

「じゃあ他の人にも紹介してくるね」

そう言つて彼らは去つていった。

脈が早くなり顔が熱くなるのがわかる。

ポトリと水滴が手の甲に落ちる。…汗かと思つたが違った。

ああ、涙だ。…ボクは…嬉しかったんだ。

あんな、まだ生まれて間もないような子どもが…ボクを”兄”として見てくれたことが…

『ニアっていいですよ！お兄さん、綺麗ですね！』

彼女の”心”はそう言っていた。

…けど、勘違いだったら？

そう思うと怖かった。だからボクはしばらく図書室から出なかった

ある日彼女は大怪我をしたらしい。

一命を取り留め奇跡の生還を遂げると怪我が治るまでに言葉を覚えるんだとか。

だからボクにも協力してほしいとイゾウ隊長に言われた。

…けど、妹と仲良くできるかな？

あの子はあいつじゃないってわかってるけど…”妹”という存在はボクにとって恐怖でしかない

考え事をしてしていると図書室のドアが開いた。扉の向こうには彼女がいた

「あれ？ひと、いる。」

「ああ、あいつはイオンって言うんだ。かなり博識だから色んなこと知ってるんだぜ？」

カルガンとあの時の少女が一緒に図書室にきた。

…あの子…大きくなったね

「…イオンにいちや？…ふふっ」

「どうした？ニア」

彼女はボクを見ると可愛らしく笑う。

カルガンがそれを見て不思議そうな顔を浮かべた。

「おにいちゃん、きれい!!」

屈託のない笑顔でボクにそう言い放った

『ニアっていいですよ！お兄さん、綺麗ですね！』

あの時聞いた声に間違いはなかった

この子が…ボクの”妹”…

「ふふっ…ふふふっ！おいで、ニア。ボクとお勉強しようか」

ボクがそういうと彼女は花も綻ぶような笑顔をボクに向けた

「!!する!!にいちや!おしえる!」

「教えて。だよ?」

「おしえ、て!」

「そうそう。言葉の勉強もしようか」

「うん!」

…ニアが来てすごく楽しくなった。

ボクの…ボク達の可愛い可愛い大切な【妹】

白ひげ海賊団がボクの居場所

そして、ボクの家

ニアを膝の上に座らせ本を読むと興味深々というように一生懸命聞いてくれる。

そんな姿に頬が緩む

これが本当の…兄妹なのかな。

出会ってくれてありがとう…。

よろしくね、My sister。

…ボクの話はこんな所かな?

楽しめたかい?

え?血の繋がった方の妹はどうなったかって?

ふふっ…さあ、どうなっただろうね?

みんなの想像にお任せするよ。

おっと、もうこんな時間だ…。

じゃあボクはこれで

またお会いしましょう
| Au revoir |

* s i d e e n d *

その後の彼らの日常*ニア編*

ニアの手配書が世界中にばら撒かれた後の話。

彼女は自分の手配書と睨めっこをしていた

そんな彼女に話しかける青年

「どうしたんだ？ニア、そんなに自分の手配書見てよ」

「おはよ、エース。…えつとね……わたしのけんしようきんやつぱどうかんがえてもたかいよなあ、つておもって」

「いやいやいやいや、お前今までしてきたことちゃんと思ひ出してみろ。どう考えても低いだろ」

「そうかなあ。」

「まあでも何億だろうがニアはニアだろ？」

彼の言葉に彼女は一瞬きよとん。とするがすぐに微笑みに変わった

「……ふふつ、そうだね。」

「……っ……（あれ？なんか変わったか、こいつ？でもこれはこれでかわいい。）」

エースはニアの笑みに頬を赤らめる。

その光景を隊長達が陰からこっそりと見ていた

「…あいつ、あの戦争以来なんか変わったよな」

「ああ。あんな儂い笑顔で笑うことなんてなかったのに」

「あれはあれで破壊力がすごいけど…前の無邪気な笑顔も恋しいよね」

「少なからず心に後遺症が残ったんだろうな」

「俺たちがあいつに与えまいと遠ざけていた感情をあれだけの悪意と共にぶつけられたんだよ。あそこまで回復しただけよしとしよう」

コソコソと話しながら物陰でニアを見守る彼らの後ろにイオンが立つ

ニアを盗み見してる様子を見てどこか呆れたように声をかけた

「なにしてるんですか…隊長」

「お、イオン。ニアが自分の手配書と睨めっこしてたからその様子を

観察してるだけだ」

「声かけてあげましょうよ……つて、エース隊長がかけてたんですか」
エースとニアが話してるところを見るとイオンが納得し、彼らの方へと向かう

「エース隊長、ニア。なにしてるんです?」

「あ、イオン! ニアがな、手配書見てやっぱ額が高いつて不満げにしてんだよ」

エースの言葉にイオンがニアに視線を移し柔らかく笑う

「ふふつ。高いとダメなのかい?」

「ダメじゃないよ。あのね、ちよつとこわいの」

「どうして?」

「……………ううん、なんでもない。ところでイオンがここにくるのはめずらしいね」

明らかに話を変えようとしたニアに隊長達が反応し動き出す

彼らはどうやらニアの持っている恐怖の理由をどうしても知りたらしい。

情報は武器だ

知っていれば彼女を危険から守ることが出る。

彼らはもう2度と彼女に怖い思いをさせないと心に決めているのだ

「よう、ニア。そんな難しい顔してどうしたんだ?」

まるで今出てきたかのように声をかける隊長達だったがニアの見聞色を甘くみてはいけない。

彼女は彼らがいたことに気づいていた

「おはよ、にいちゃ。ずつとみてたみたいだけどなにかようだった?」

「あ、バレてた? 今日もニアは可愛いなーつて思ってただけだよ」

「そう? ありがとう」

「それで? なんで手配書なんて眺めてたんだ?」

「まあ…ちよつとね。」

「言えないことなのか?」

「また、しんぱいかけちゃうから。あのときじぶんのむりよくをおも

いしつたの。ひとりじゃなんにもできなかった。こわくてこわくて……うごくことさえできなかったの。だからちよつとはじりきでなんとかしなきゃ」

「1人じゃないんだから1人で頑張らなくていいんだ。もう2度とお前をあんな目に合わせなりしない。合わせないためにも……何に悩んでるのか教えてくれ」

そういうイゾウにニアは内心ずるいなあ……と思う

「……ほんとは、きんがくのもんだいじゃないの。あのせんそうのあとにはいしよがまわったってことはわたしがここにいるのもしられたことになるでしょ？まえよりもふねをおそつてくるかいぞくがふえたきもするし」

「そうだな。だが別にそんなこと気にしなくていいんだぞ？お前のせいじゃない」

「ううん、そうじゃなくてね……」

「……ああ。そういうことか。それは隊長達には言いづらいかもね」

ニアが口籠って隊長達から顔を逸らすとイオンが何かを察した。

彼がニアに耳打ちすると彼女は驚いた

「……ほんとにのうりよくつかってないの？イオンってすごいね、なんでわかるの？」

「ボクは、物心ついた頃から常に人の顔色窺って波風立てないように気をつけて生きてきたからね。表情から見抜くのは得意なんだよ」

「そっか。かいぞくなのにこんなんじゃないだめだよ。だからどうにかしなきゃって」

「無理をする必要はないと思うよ？イゾウ隊長も言ったようにニアは1人じゃないんだからね」

2人が会話をしていると隊長達が割り込んでくる

「おい、そろそろ俺たちにも教えてくれないか、イオン」

「ニアがいいならいいですけど……聞いて後悔しないですか？」

「俺たちが知ったら後悔する内容なのか？」

「もしかしたらショックを受けるかも知れないですね。」

「いいから教えろよい」

問い詰められイオンは1つ息をつくるとニアを見る
彼女は小さく頷きそれをみたイオンはニアが許可したと悟り、続けた

「まあ、ティーチに攫われてボクたちとはぐれたあの一件がニアの中でトラウマになってるってことですよ。襲ってくる海賊も含めてこの船の人以外に会うのが怖いみたいです」

「……」

理由を聞いた途端に彼らは表情を暗くした

マルコとサッチは贖罪の視線をニアに向け、ビスタとハルタとイゾウは何か耐えるように拳を握る

エースは「ごめんな」と言いながらニアの頭を撫でた

「えっと、ごめん。あんまりきにしないでくれるとうれしい。にいちやたちがいてくれたらそれでいいから」

彼女が頑なに言わなかったのは彼らが今感じている想いを抱いて欲しくなかったから。

それを悟った彼らは「妹に気を使わせた」と心の中で謝罪する

「あ、の。…なんでもないの。ごめんね？」

彼らを悩ませてしまったことに謝り、困ったような笑みを浮かべると彼女は逃げるように部屋に戻った。

くマルコサイドく

あの戦争以来ニアの雰囲気が変わった。

前までは太陽のように明るい感じだったが、今は月の様な静かで儂い雰囲気を出すようになった。

ビスタが「少なからず心に後遺症が残ったんだろう」という。

俺もそう思うよい。

だが、笑ってくれるようになっただけでもよしとしよう。

あれはあれで破壊力抜群な笑顔だしな

ニアが何かに悩んでいるようだったから近くに行って聞いてみた
が話してくれなかった。

イオンが何かを察し彼女に耳打ちすると「よくわかるね」と言った俺らが問い詰めるとイオンは一息ついて話し出す

「まあ、ティーチに攫われてボクたちとはぐれたあの一件がニアの中でトラウマになってるってことですよ。襲ってくる海賊も含めてこの船の人以外に会うのが怖いみたいです」

……ああ、そういうことかよい。

理由を聞いてあの時のことを悔やむとニアが慌てて両手を振る

「えっと、ぐめん。あんまりきにしないでくれるとうれしい。にいちやたちがいてくれたらそれでいいから」

あ、気を使わせちゃったみたいだ。

彼女は居た堪れなくなったのか困ったように笑うとその場をあとにし部屋に戻る

「…はあ。何やってんですか隊長。あんなあからさまに表情変えたらニアが遠慮するに決まってるでしょう」

ニアがいなくなったあと、イオンにため息をつかれた。

まあ、うん。こいつのいう通りだよ

「それよりニアとお出かけしていいですか？」

「何がどうしてそうなった」

人と会うのが怖いって言ってんのになんでわざわざ連れ出すような真似を…

「過保護なのも結構ですがあれ以来あの子甲板にも滅多に出ないでしょう？結構重症だと思っんですよね。あの子自身がなんとかしたいって言ってるんだから協力してあげるのが兄つてものでしょう」というのが建前でただボクがニアとお出かけしたいだけです」

「本音ダダ漏れだぞ、イオン」

「俺も行くよいい」

「「マルコ？」」

なるほどな。確かに甲板に出る回数でさえ減ったな。

誰かがつれださなきや自分から甲板に行くことも少なくなった

まだ早いかもしれないがいつかは克服しなきゃならねえ

多少荒っぽいかもしれないが今このタイミングで連れ出すのはあ

りかもな

こんなにもあつさり許可が出るなどと思わなかったのかイオンは目を丸くした。

「マルコ隊長大丈夫ですか？頭でも打ちました？いつもの過保護っぷりはどこいったんです？」

「何気に酷いな、お前。まあ手配書もまわってるしもう隠しておけねえからな。それにお前の気持ちはわからんでもない。」

「あ、まっつてくれ！ならおれも行きたい！」

「俺もいいか？」

俺が同行する旨を伝えるとエースとサツチがそういう。

「隊長が大勢船を開けるわけにはいかないからな。今回は譲ろう」

「次は俺たちだからな」

「仕方ないなあ。」

ビスタとイズウとハルタが譲ってくれ、俺とエースとサツチが同行することになった

「親バカならぬ兄バカですか、あなた方は…。ちよつと散歩するくらいですよ？」

「かまわねえよい」

「はあ、わかりました。じゃあニアを呼んできますね」

そう言つてイオンはニアの部屋へと向かった

くサイドエンドく

あーあ。気を使わせたなあ…

うちのミステリアスプーチートお兄様の察しが良すぎて誤魔化せない

あれで能力使つてないってあの人エスパーでしょ

ーコンコン

部屋の布団でゴロゴロしながら考え事しているとノックされる

ドアを開けるとイオンがいた

「どうしたの？」

「ちよつとお出かけしない？」

「おでかけ?どこに?」

「特には決めてないけど、次停船したところで一緒に散歩しようよ」

「……………うん。わかった」

「ふふっ、よかった。マルコ隊長の許可も取ってあるし、マルコ隊長とサッチ隊長とエース隊長も一緒だから安心してね」

わお。

イオンと隊長3人一緒って嚴重すぎでしょ。

準備をするために動きやすい服に着替えロビーに向かう

「お、ニア。準備万端だな。」

「うん」

「俺たちも一緒だから安心しろ!まあ念のためフードは付けておけ」

そう言われたのでパーカーを着る。

まあわたしも顔を出して外を歩く勇氣はない

オヤジさんに一言告げると船を出る。

近くに大きな街があったのでそこに行くことにした。

町の近くまで行き賑わいを見るとシャボンディ諸島のことを思い出す。

鼓動がはやくなるが怯えを悟られないように平静を保って彼らと歩調を合わせる。

だがイオンが街に入る前に止めた

「ストップ、隊長。」

「……………?」

3人が振り返ると不思議そうな顔をするがわたしを見ると心配そうな表情に変わる

どうやらわたしは震えているらしい

「ニア、落ち着いて。ゆっくり呼吸をして」

「だ、だいじょうぶ」

「全然大丈夫に見えないよ。ほら深呼吸して」

イオンがわたしを落ち着かせているとエースがしゃがみ抱きしめる

「ニア。おれたちがいる。お前に危害を加える奴はみんな燃やしてや

るから安心しろ」

いやそれ、逆に安心できない

深呼吸して落ち着くとエースに離してもらい彼の手を握る

「いこう」

「ああ。無理すんなよ、ニア」

気を取り直して街に入る。

店を見て周り市場を見学しながら街を歩くと声をかけられた

「あれ？お兄ちゃん？」

「……っ…アス、カ？」

「お兄ちゃんじゃん。久しぶり〜。なにしてんの？」

彼女を見た途端イオンの表情が変わった

「知り合いかよい、イオン」

「……ボクの、妹、です」

「!?!」

いつか聞いた覚えのある、イオンを傷つけてきたイオンの妹

「そっちのみんなはお友達？初めまして、イオンの妹のアスカです。

まあ、お兄ちゃんは薄情だからわたしを捨ててでてっちゃったけど。

友達なら選んだ方がいいよ？」

「アス…「おねえさん…」……ニア？」

ダメだ。

これは我慢できない。

「ん？わあ…小さい子ーわたし子ども好きなんだ。お兄ちゃんと一緒

にいたら魂食べられちゃうよ？お兄ちゃんは死神だからね」

イオンの妹さんは腰をかがめわたしの頭を撫でてそう言う。

けれどそんなことは気にも留めずに言い返す

「…なにをこんきよに、イオンをしにがみだつていうの？」

「紫色って死の象徴なんだよ？死を招く紫水晶の瞳。薄紫の髪…。ど

う考えても不気味でしょ、わたしは黒髪黒目なのに」

「そう。そんなのすこしもきにならないけどね。イオンがしにがみな

らそれでもいいよ、かれにはなんどもたすけられてるからね。たまし

いとるならむしろこっちからおねがいするよ」

「ええ!? 不思議な子だね。」

「イオンはたいせつななかぞくなの。だから、おなじ”いもうと”というたちばとして”あに”をきずつけるなら……ゆるさない」

フードの隙間から顔が見えるように彼女を睨みあげると「ひっ!」と小さな悲鳴をあげて逃げていった。

ふう……。よく手を出さなかった、わたし偉い!

「……ニア。ありがとう」

イオンが頭を撫でてくる。

彼を見上げるととても嬉しそうに微笑んでいた

「……イオンがあんなに嬉しそうにしてるとこ見るの初めてかもしれない
ねえよい」

「そうだな。」

誰だって罵られるのは辛い。

わたしは最近経験したばかりだからよりイオンの気持ちかわかる
わかるが故に彼女が許せなかった。

気を取り直して市場を歩いていると見知った顔の人と出会う

「にいちゃ、かいぐんてひまなのかな?」

「暇なんだろうなあ」

「お得意のサボりだろ?」

「おいおい、揃いも揃って酷いじゃないの」

目の前に現れたのは青雫だった

「なんかようか?」

「いや? たまたま見かけたからちよつかいかけにきただけだ」

「迷惑だ。」

「いいじゃないの。俺もう海軍やめてるし」

「え……?」

海軍を辞めてる?…なんで?

「…そういえばそんなニュースが報道されてたな。」

「あおきじさん、なんでやめたの?」

「もう青雫じゃないのよ。だから名前前で呼んで?」

「いやお前誰だよ。いい年して子どもに名前呼ばせるおねだりすん

な」

「いいじゃないの！些細な願い事聞いて頂戴よ」

「海軍じゃないなら尚更俺たちに構う理由はないだろ。」

「えー。ニアちゃんとお話ししたい」

「二だが断る！」

息ぴったりだな、お兄ちゃんズ

「相変わらず過保護だなあ…。まあでも、よかったじゃないの、ニアちゃん。ちゃんと家に帰れて」

「うん」

「にしても今回は随分と嚴重じゃないの。隊長が3人と…そっちの紫のやつは珍しい武器使う兄ちゃんか。」

「お久しぶりですね、青雩さん。あなたどうして海軍辞めたんですか？」

「まあ、負けたのよ。サカズキにね」

「…まけた？あなたが？」

「ん？そうよ。俺は氷、あいつはマグマ。能力の相性も悪かったしねえ」

青雩ことクザンさんがしみじみと言う。

けれどわたしは疑問で一杯だった

「なんで？」

「なんでって…なんでよ。どうしたの？ニアちゃん」

「こおりとマグマ…。たしかにクザンさんのがふりだけど…わたし、あかいぬさんのききうでをおとしたよ？なのにあなたがまけたの？」

「……………あー…」

「わたしでもあのひこのこうげきかわせて、こうげきがちよくげきしてもごたいまんぞくでいられるんだよ？それにくわえてあのひとをはんごろしくらいにしたよ。なのにとんどダメーヅをおつてなかつたあなたがあのひとにまけたの？」

「…いや、うん。あのな？お前さんが気づいたところは正しいんだけどよ、サカズキの攻撃を軽々かわして、あいつの利き腕を切り落とせて、攻撃をモロに喰らって生きてるお前がおかしいからな？正しい

んだけど全肯定できねえこの感じすっげえ不思議」

彼は頭を掻き呆れたようにそっくり、続ける

「元帥の座をかけて勝負したんだが戦ってる途中でニアちゃんの話になったのよ。それで俺がニアちゃんのこと知ってたのに言わなかったことに対して散々責められたんだけど、ニアちゃんの話してたら初めて会った時のこと思い出してよ…。戦ってること一瞬忘れて、その隙に重い一撃喰らっちゃったのよ」

「……ばかなの？」

「あらら！相変わらず俺には冷たいのね。まあそんな事もあり、海軍辞めたからこそ見えてくるもんもあるんじゃないかねえかとおもって身を引いたって訳よ」

あまりのアホな理由に思わずため息が漏れる

「あのひといつさいようしやしないかんじなのにたたかいたながらかんがえごとってじさつこういでしょ、よくしななかったね」

「なんだかんだいって優しいよな、お前って。向こうにも慈悲はあったみたいで見逃してくれたのよ」

でもそんなアホな負け方してるのに彼が五体満足なのは奇跡かもしれない

「まあ、ニアちゃんがあいつをあそこまで追い詰めてくれたおかげで俺もこの程度で済んだんだけどな。多少火傷はしたが」

親指で自分の胸をトントンと叩く

何故か誇らしげに胸を張るがちっとも誇れる事じゃないと思うのはわたしだけだろうか

「他に用がないなら俺たちは行くぞ？今日はみんな散歩してんだ。ニアに楽しませてやりたいからな」

「……お前さん等、あんな事があった後でそいつをこんな街中まで連れ出して、何考えてんだ？」

「やっぱり、だから近づいてきたんですね。はじめからその疑問をぶつけてくれればよかったのに」

エースの言葉にクザンさんが声色を変えるとイオンがすまし顔で返す。

どうやら彼なりにわたしのことを案じてくれていたらしい

「紫の兄ちゃんも察してたか。まあ、そういうことよ。そいつを一体どうしたいんだ？さつきからずっと火拳の手エ握ってるし、見つけてから観察してたが人が横を通るたびにビクついてる。人に対して恐怖心が宿ってるだろ？なのにこんなところに連れてきて…ちよつと酷いんじゃないの？」

「そうだな。おまえのいう通りだ。確かにまだ連れ出すにはちよつと早かったかもしれないねえ。だがニアにトラウマを残したままにするのも嫌なんだよ。すぐには克服できねえだろうが少しずつ慣れさせねえとまた籠の鳥だ。自由を求める海賊が自由に生きられないなんて皮肉な話があつてたまるかよ。」

クザンさんの言葉にサツチが微弱ながら殺気を漂わせて返す

理由を聞いて納得したのか彼はそれ以上何もいってこなかった。

戦闘の雰囲気もないしそれ以上は何も話さず歩き出すと何故か歩いてくる

「…なんでついてくるんだ、青雉」

「だから、もう青雉じゃないって。この町にいる間だけでいいから同行させて頂戴よ。」

「その心は？」

「俺もニアちゃんと遊びたい」

「帰れ!!」

大将だったとは思えないこの馴れ合いっぷり。

この人よく大将やってたな、ほんとに

「あらら、つれないなあ。いいじゃない、ちよつとくらい」

「はあ…ニアはどうしたい？」

我儘を言うクザンさんにエースが半ば折れる

「どつちでもいいよ。だだ…：…なにかしてきたらようしやしない」

「あの戦争でお前さんの恐ろしさは身にしてみわかったから何にもしないって！むしろ隊長3人とお前さんとセンゴクさんを止めた兄ちゃんを1人で相手するなんてサカズキに挑む以上の自殺行為だから!!」

なにやら必死になっているがそれ自身満々に言うセリフ？

「少しでも怪しい動きを見せたら溶かしてやる」

エースが体を変え、軽く脅すと元に戻る

クザンさんも同行することになり異様な光景になった

「散歩してるだけだからそんなに面白いもんじゃねえぞ」

「いやいや、白ひげの隊長たちがそんな小さい子連れて散歩ってだけで十分面白いから」

その後軽く市場を回り帰ろうと船の方に歩くとクザンが周りに人がいなくなるのを待っていたかのように話しかける

「なあ、ニアちゃん。いい加減教えてくれない？なんでニアちゃんは白ひげの船にいるんだ？」

「それをしつていみがあるの？」

「…意味はないが、知りたいんだ。赤髪と白ひげが擁護して鷹の目まで興味を持つてるんだぞ？気にならないわけねえだろ」

間違いない。

彼は知らないんだろうけどそこにレイリーさんも混ざったっぽいし、わたしの周りめちやくちやだね。うん

「かれらにひろわれたんだよ、わたし。まだじぶんのあしであるくこともできないくらいいちいさなときにすてられてたわたしをひろってそだててくれたんだ。だからわたしはかれらというの。いばしよをくれたかれらがなによりもたいせつだから」

「……そうか。あわよくば攫つていこうとおもっただけだなあ…。」

そんなにそいつらのこと大好きなら引き離せないじゃないの。」

安心したようにクザンさんは軽く微笑むと去っていった。

あの人なんだかんだで優しいよね

あんなにも海賊であるわたしの肩もつてたのによく海軍続けてたな

ある意味すごい

「俺たちも帰ろうか、ニア。今日は楽しかったか？」

「にいちやがそばにいたらなんでもたのしいよ」

「そりや嬉しいこと言ってくれるな。無理してないか？」

「してないよ?」

どうしたんだろうか、急に

「ふふっ、みんな責任を感じてたんだよ。ニア」

「せきにん?」

首を傾げているとイオンが優しく笑い、隊長ズに目配せをすると3人は困った顔をしたが続けた

「俺のせいでお前に怖い思いさせて挙げ句にはトラウマを植え付けた」

「おれが捕まったからお前は戦場までおれを助けに来た。だが、それでお前は心に酷い傷を負った」

「お前がティーチを警戒していたことは知ってたのに……あいつが不審な動きを見せ始めてから俺たちはあいつお前をなるべく会わせないように注意してたが、それでも心のどこかで仲間を裏切る訳がないと慢心していた。その結果、お前に散々な苦勞をかけた。……すまねえよい」

彼らはそれぞれ謝罪を口にするが謝らなければいけないのはわたしの方だし、それでも彼らはわたしを見捨てなかった。

それだけで十分だ

「ちがうよ。わたしがかってにとびだしてかってにつかまったんだ。にいちやたちはなにもわるくないの。それにね、こうしてまたここにいられる。…それだけでわたしはまんぞくなの。だからね、もういいの。わたしはそれでしあわせだよ」

そう言うとも風が吹きフードが取れる。

周りに他の誰も居なかったから被り直さずにそのまま歩き出し、彼らの前を歩く

「にいちやがそばにいるだけでわたしはげんきになれるの。だから、そのことはもうきにしないで。」

振り返って微笑むと隊長ズはわたしに近づきフードをかぶせ直した

「……………今の、どう思う?」

「ハルタとイズウが嫉妬するレベルだと思う。」

「お前……笑う時はもう少し周りに気を付けてくれよ。破壊力が半端ない」

「どういうこと!?!」

「ふふふふっ!はっ…ははは!!今度は別の意味で外に出せなくなりそうですね、隊長方」

「全くだ。」

周りに気を付けて笑えって何!?

よくわからなかったけどお兄ちゃんズが元気になったからそれでいいか。

どれだけ彼らに救われたか、どれだけ之恩が彼らにあるかきつと彼らは知らないだろうけどそれでいいんだ

言葉では表せないほど感謝している

これはわたしだけの特別な想い

これ以上にならないほど幸せです。

| M e r c i |
ありがとう